
東方妖魔伝/黄金錬成【Ars Magna】編/

車道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方妖魔伝／黄金練成【A r s M a g n a】編／

【Nコード】

N 2 5 1 5 R

【作者名】

車道

【あらすじ】

幻想郷が外界から隔離される遙か昔。

ビザンツ帝国の一角を治める領主であり異世界を生きた金髪の男と、強力無比な力を持った緑髪の魔女との間に1人の子供が生まれた。その子供は、両親の才能を受け継ぎその力ゆえに茨の道を進むこととなる。

そんな少し変り種な過去の東方世界を旅する物語。

~~~~~現在修正版を執筆中~~~~~

## 1話 生い立ちと旅立ち（前書き）

### 注意

この作品は『東方Project』の二次創作です。  
また『ジヨジヨの奇妙な冒険』のスタンドの能力が、少々絡んできます。

あくまで能力だけで、スタンド使いは出てきません。  
また『ジヨジヨ』以外にも、小説や漫画、ゲームの技や設定が出てくる恐れがあります。

（主に『ドラゴンクエスト』『とある魔術の禁書目録』<sup>インテックス</sup>等）  
この物語の流れは、東方の歴史および現実の歴史を織り交ぜて進みます。

ですが、歴史改変や矛盾が生まれる可能性があります。  
上記の内容を許可できる方はお読みください。

黄金錬成【Ars Magna】とは？  
アルス・マグナ

自分の思い通りに現実を歪める事が出来る魔術です。

黄金錬成編の最終目標はこの魔術を完成させることです。

## 1話 生い立ちと旅立ち

物心が付いた頃に何をしていたか覚えているだろうか。同年代の友とともに野を駆け遊び呆けていたのだろうか？それとも親に可愛がって貰っていたのだろうか？普通の子供なら、そんな日常の繰り返しであつただろう。

だが、私は違つた。その頃の私は、一人で本を読み耽つている事が多かった。別に根暗なわけでもなかったし、みんなが嫌いなわけでもなかった。その頃の私は本に書かれていることを再現できることがとても楽しかった。

だが、私の周りの大人は私の魔法を見て顔をしかめていた。よく考えたら当たり前なことだ。こんな5歳そこそこの子供が化け物じみた力を行使しているのだから。私の父が領主をしていなければ、すぐさま迫害を受けていたであろう。

~~~~~

それから数年の月日が流れた。私は10歳になった。その頃には母の残した魔道書を読みつくし、暇をもてあましていた。読む本が無くなつた私は、父の書齋に忍び込んだ。

私は驚愕した。そこにある本は、私の見たことの無い言語で書かれた本が沢山並んでいた。この時代のものとは思えない程美しい本、まるでるか上空から精巧に書き写されたかのような地図。見たことの無い道具の解説書。遙か未来の物語を描いたであろう、奇妙な書物。それはどれもこれも私の好奇心を擽るには、十分だった。

だがそれと同時に私は疑問に思った。なぜ、私の父はこんな物を持っているのか。父は未来を生きてきた人間だったのか？そんな事を考えていると、いつの間にか父が帰ってきていた。

「何をしている！！」

怒鳴られた。怒られた事が無いわけではないがこんなに強く怒鳴られたことはなかった。

「……ごめんなさい」

泣いてしまった。心が負の感情で埋め尽くされる。父は私のことを許してくれるのだろうか。

「まったく…今度からはちゃんと俺に言ってから入れよ？」

予想だになかった返事だった。許してくれないと思っていたからだ。

「……………許してくれるの？」

「お前がきちんと反省しているのならな」

父は普段どおりの優しい声で話していた。

「……ありがとう」

父に嫌われなくてよかった。そして自分はまだまだ子供なのがよくわかった。

「いい機会だ、この事はもう少しお前が大きくなってから話そうと思っただが……」

父はどこか緊張したような様子で、私に語りかけてきた。

「賢いお前なら信じてくれるだろうか…俺は、今から14世紀ほど科学技術が発展した世界からやってきた。理由は今でもわからん」

「……………は？」

一瞬、父は怪しい薬にでも手を出したのかと思った。そういえば、中毒性の激しい幻覚作用がある薬があると本で書いていたな。

だが私の父はそんなものに手を出すほどド低脳でもなければ、こんなつまらない冗談を言う人ではないことはよく知っている。

「冗談じゃ…ないんだよね？」

恐る恐る聞いてみる。

「ああ、この事を知っている奴はお前以外は居ないがな。俺は『日本』という国で暮らしていた普通の一般人だった。

……………と言えば間違いになるな。俺は普通の人より本が好きだった。漫画や小説、辞書とか専門書、宗教書。本は何でも好きだった。

この部屋にある本も俺がこっちに飛ばされた時に周りにあったものばかりだ」

父は真剣な表情で私を見つめてくる。聞いた事の無い国名や言葉が混ざっていたが、意味は大体理解できるので聞き流しておいた。

「じゃあ…父さんは未来人なの？」

父は首を横に振った。

「未来から来たといえば正解でもあるし間違いでもあるな。この世界は俺が生きてきた世界とよく似てはいた。

だが、色々とおかしいのだ。俺の世界の歴史とは食い違うことが所々あった。

1400年前の歴史など違って当然だと思っていたのだが、違った。この世界は俺の世界の伝承を書いた書物に近い歴史の歩み方をしているようだったのだ」

父は淡々と私に語りかけてきた。一通り聞いて大体のことは理解できた。父はこの世界とよく似た未来の世界からいつの間にか家ごと瞬間移動してしまったそうだ。その後は、自分の知識を活用しながらこの立場まで上り詰めたそうだ。

「お前は俺の言ったことを信じてくれるか？」

「…もちろん」

私が信じられる人は父しかない。その父が信じてくれと言っているのに、信じられない理由は無い。

「…そうか」

父はまるで子供のように無邪気に微笑んでいた。

~~~~~

その出来事があったから私は父からは様々な話を聞くようになった。大陸の大妖怪の話。見たことも聞いたことも無い動物の話。遠く離れた未知の国の話。父が長年生きてきた中で培ってきた体験を色々話してくれた。私が聞いてきた父の話は九死に一生なものが多い、

というか毎回死にそうになっている。そこで、私の中にひとつの疑問が生まれた。

「父さんって実は強いのか？」

「んいや、腕っ節はそりゃそこらのゴロツキ共よりは強いだろうが、俺は所詮凡人だぞ？俺はココの回転が少々速いだけさ。」

父は自分の頭を人差し指で小突きながら答えてくれた。

「でもいくら頭の回転が速くても…」

私は信じられなかった。いくら頭がよくても圧倒的な暴力の前では無意味なのだから。

「『ペンが剣よりも強し』という格言がある。時に言葉は暴力にも勝るのさ」

「……その格言は実は、国家に反乱を企てる輩をいつでも逮捕状や死刑執行命令にペンでサイン出来ると脅したのが本当の意味だと本に書いてたけど」

「いや、これは物の例えに近いものでな…俺には少々特殊な能力があるのさ」

「能力…？」

正直、意味が解らなかった。まるで父の持っている奇妙な書物の話をしていようだった。

「俺の能力は『話し合うことが出来る程度の能力』だ」

父は自信満々に教えてくれた。

「話し合う…？」

「文化や思想、種族や言語が違うどんな奴とも話し合うことが出来る。ただそれだけだ」

「…しょぼい」

素直にそう思った。戦闘向きじゃないし、話し合いに失敗したらどうなるかなんて目に見えているし。

「いや、しょぼいって…」

「もっとこう『力の向きを操作する程度の能力』とか『世界を支配する程度の能力』とかあるでしょ！」

「そんなこと言われても……それにその能力、俺の本の登場人物が使っていたやつだろ」

自分の本が子に悪影響を与えたのではないかと後悔した父であった。「だって父さんが話してくれた妖怪はみんなすごい能力ばかりだったしさ。」

『境界を操る程度の能力』や『密と疎を操る程度の能力』とか『歴史を創る程度の能力』と渡り合ってきたんだからもつとこうすごい能力だと……」

私は父のことを尊敬していた。私の中の父は絶対的な存在だった。父の話しを聞くとさらに父が強く思えた。だからこそシヨックだった。あまりにも弱い。弱すぎるのだ。もしかしたら頭の中で父の書物の主人公と父の姿を無意識に重ねあわしていたのかもしれない。

「お前は俺を正義の味方だとかヒーローのように思っているか？……まあ子供にとつて親はヒーローみたいなものか」

見事に凶星だった。それが恥ずかしくて少し顔を赤らめてしまった。「子供って……もう10歳んだけど」

「ハハハ、そうだな。もう10歳か……そろそろ話しても良い時期だな」

先ほどまで笑っていた父が急に真剣な表情になった。

「俺は思っただよ」

「……？」

「すべてが話し合いで終わるなら世界は平和であり続けられるのにとね。」

「でも……そんなことは……」  
無理に決まっている。人間の歴史が争いの上に積み重ねられてきたことはよく知っている。

「そうだ。それに世界はお前が思っている以上に腐っている。権力や金、領土ほしさに他国に攻め入り奪い取る。そしてそれは決して無くならない」

父の目は何処か悲しそうだった。何か思い入れがあるのだろう。



「だから俺は決めた。いつか戦争の無い楽園を作ろうと。だがその夢はいまだ程遠い」

「つまり私にその夢を託すってことなの？」

「まあそういうことになるな。俺が世界中を旅した理由のひとつはそのためでもある。」

私の能力ではどう足掻いてもそんなものを創ることは不可能だった。実現だけなら出来る。だが、維持することが出来ないのだ。

いくら交渉術に長けていても俺は人間だ。寿命がある。俺が死んだ後その国がどうなるかなど分かりきったことだ」

「いや…一応私も人間なだけだ」

「何もお前にそんな理想郷を作れとは言わんさ。俺の知り合いのスキマ妖怪が、妖怪の理想郷を作ろうとしていてな」

「妖怪の理想郷？」

「そうだ。妖怪は俺が生きていた未来の世界には存在しなかった。なのに今の時代は魑魅魍魎ちみせうりょうが蔓延っている。つまり…」

「妖怪はその間に滅びるってこと？」

「その通りだ。その昔、俺はそのスキマ妖怪とその事について話し合ったことがあってな。今頃孤軍奮闘しているだろうな」

「……妖怪の理想郷なら国の概念も無く人間も権力に縛られず自由に生きることが出来るってわけ？」

「相変わらずお前は察しがいいな。お前にはそのスキマ妖怪に会いに行つてほしい」

「……自分で行けばいいじゃん」

呆れながら答える。

「んなつ！？…ついに反抗期突入か」

「あのねえ…じゃあ聞くけどそのスキマ妖怪がどこにいるか分かる？」

長い沈黙が続く。

「………倭の国だ」

「遠すぎるから却下」

「ふむ…魔法の修行にもなると思ったのだがな」

なぜ私が修行の旅に行かなければならないのか。そんな途方もない旅に出るぐらいなら、家に籠って自分の技術を磨き上げているほうがましだ。

「修行つて…第一目的地に着くまでの食料とか色々問題があるでしょ？」

「ん？捨食の魔法があるから食べる必要なんてないだろ」

初めて聞く魔法だ。母の本にはそんなものは書かれてはいなかった。「そんな魔法、聞いたことが無いんだけど」

「ん？……そういえば」

父は自分の机の中から幾つかの本を取り出してきた。

「…これは魔道書？」

見るからに強力そうな魔道書がいくつも並べられてあった。

「ああ、みーちゃ……じゃなくてお前のお母さんから『この子が成長したら渡してくれ』と言われていてな」

「母さんから？」

私の母は魔法使いだったらしい。それは勿論知っている。私が生まれてすぐに死んだらしいことも。その母が私に…？

「あいつからの言付けでな。本当に危険な魔道書は隠しておいてくれと言われててな。」

通りで今まで属性魔法や浮遊魔法といった初級魔法が書かれた本しかなかったわけだ。

「この魔道書の中には、魔法使いという種族になるための魔法が書かれている」

「魔法使いつて職業じゃないの？」

「俺の居た世界なら職業だったらしいが、この世界の魔法使いは違う。魔法使いを魔法使いと至らしめる魔法が2つある。捨食の魔法と捨虫の魔法だ。」

「…老化を止めることが出来る魔法といったところなの？」

「そうだ。その魔法で体の原動力を魔力に切り替えることだ出来る」

「それはつまり…」

「人間を止めるということだ。しかし捨虫の魔法を覚えなければ完全な魔法使いにはならない。その2つの魔法を覚えるかどうかはもう少し生きてから決めるといい」

「はい」

そのとき私の心は揺れていた。私は母のような偉大な魔法使いになりたいと思っていた。だがそれと同時に父のように普通の人間として生きたいとも考えていた。

……話の流れを急に変えられた気がするが気にしないでおう。

~~~~~

それから更に年月が経ち、私は15歳になっていた。

「それじゃあ…行つてきます」

「体に気をつけるよ。怪しい奴には近寄るなよ。相手の力量はしっかりと見極めろよ」

父はいつにも増してオロオロしている。これを親馬鹿と言うのだからか？

「分かつてるつて。まったく父さんは心配性なんだから」

私はこの5年で様々な魔法を編み出した。中でも時間操作魔法を覚えられたのが大きかった。元は父の書物の中にあつたマンガと分類されている書物を参考にした。そのマンガでは時間を止めたり、戻したり、吹き飛ばしたり、加速させたりしていた。さすがに全世界の時間を操るほどの大魔法は使えないが、半径100mほどの時間を10秒ほどだが操ることが出来るようになった。色々と制限が掛かつてはいるが、逃げに徹するなら中々使える魔法だ。

「それじゃあ、気が向いたら帰ってくるからねー」

マルティナ コルテス

「ああ、頑張つてこいよ。『Martina Cortes』」

父の視線を背中に感じながら私はゆっくりと歩いていく。倭の国を

目指して。

西暦670年 春の出来事だった。

~~~~~

「……ねえ？貴方はなぜ私に傍観者で居てくれと頼んだのかしら？」  
金髪の髪をなびかせながら、男の傍らで1人の女性が語りかける。

「あの子の能力が強力過ぎるゆえだ。自身の力に耐え切れるだけの力量を持つてくれればいいが……」

傍らの女性と同じ髪の色を持つ男はまるで独り言のように淡々と返答している。

「ふふ…切ない希望ね。あなたが望むならあの子を教育してあげてもよろしくてよ？」

「寝言は寝て言え。お前は魔法を使うことは出来ないだろう？」

それにあの子に魔法を教えられるのは1人しかいないさ」

「それもそうですね、それでは…生きてるうちにまた会いましょうね」

「そうだな…また会おう。俺の友よ」

俺がそう告げると、金髪の女性は空中にパツクリ開いたスキマに落ちていった。

「それにしても『見聞きしたことを理解し引き出す程度の能力』か。マルティナがこの力を理解するのはいつになるのやら」

独り言を呟きながら男は自身の館へと帰っていった。

To Be Continued . . .

## 1話 生い立ちと旅立ち（後書き）

このたびは、この小説を読んでいただきありがとうございます。この後書きでは、主人公であるコルテスの魔法について解説いたします。

コルテスのは基本的な属性魔法のうち火、水、風の3つが今のところは使えます。

特に、火の魔法が得意な設定となっております。

火球を飛ばしたり、爆発を起こしたり、広範囲に炎をばら撒いたり。次に時間魔法についてです。

コルテスが扱える時間魔法は、

自分の周りの時を止める

任意の対象の時を戻す

自分の周りの時を飛ばす

任意の対象の時を加速させる

の4つとなっております。制御できる時間は作中で書いたとおり、10秒程度です。

この元ネタは、『ジョジョの奇妙な冒険』のボスたちが使っていたスタンドの能力です。

能力の細かい特徴は、後日作中でしょうと思っています。

誤字脱字や矛盾点、表現がおかしいところがあれば指摘していただけるとうれしいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

## 2話 狼男【ワーウルフ】（前書き）

読みやすいように改行を増やしてみました。

## 2話 狼男【ワーウルフ】

私が旅に出てから1週間がたった。私はフランク王国の国境を抜けて、突厥トウケツに辿り着いていた。現在の地理で説明すると、ロシアの南下の辺りになる。

旅を始めて間もないこともあり、苦勞することが多々あった。街中で空を飛んだら化け物扱いされて、弓で打ち落とされそうになったり、優しそうな男についていったら身包みを剥がされそうになったりと災難の連続だった。

どれもこれも私の注意不足のような気がするが、気にしてはいけない。

だが、上記のことなんて災難のうちに入らないことを現在進行形で思い知らされることとなる。

数刻程前の私は妖精や生りたての妖怪などといった、単純な魔法で捌ける敵にしか出会っていなかった。それ故、私は油断をしていた。

「妖怪って案外弱いのかもなー」

そんな独り言を呟きながら夜道を歩いていると、1人の男が空を見上げていた。

それに釣られ私も空を見上げてみると、綺麗な満月が浮かんでいた。

こんなに綺麗な月を見たのは久方ぶりだった。

しばらく月を見ていると、近くから狼の遠吠えが聞こえた。

……少し近すぎないか？私のそばには先ほどの男以外には誰も居なかったはず。

危険を早めに察知するために、生体反応を探知する魔法も常時使っているのだが、狼のような反応はない。反応があるのはあの男と私のみ。痺れを切らして私は話しかけてみることにする。

「あの…お聞きしたいことがあるのですが…」

だが返事は返ってこない。

「…おーい…聞こえていますかー？」

もしかしたら耳が聞こえないのかもしれない。仕方がないので近寄ろうとした瞬間…

男の体毛が急激に増えていく。顔の作りが人とは異なるものに変わっていく。

先ほどまでまったく感じなかった妖気が爆発的に増えていくのがわかる。

まさかこいつは

いつの間にか私は無意識に後ろへ下がっていた。

男の攻撃をかわしきれずに父譲りの金色の髪が何本か宙を舞う。

「まさか…ワーウルフだったのね…」

ワーウルフ、狼男とも言われている西洋の妖怪だ。

普段は人の姿をしているが、満月を見ると狼へと変身するという特徴を持っている。



私の2倍程度まで大きさが膨れ上がった先ほどの男は、私に殺気に向けてきている。もはや話し合える雰囲気など微塵もない。

私は腰に下げていた細身の剣を抜き目の前の敵に向けて構える。この剣は魔法の命中精度を上げる照準のような役割を果たしている。

私は魔力を練り上げ剣の先に火球を作り出し射出した。

「『メラミ』!!」

私は炎の魔法を得意としている。水や風といった他の属性魔法は精、少し大きめの氷塊や氷柱を作り出したりカマイタチっぽいのか作り出せないのだが、

炎の属性魔法の場合、爆発を起こしたり、火球を作り出したり、放射状に炎をばら撒いたりと色々出来る。

魔法の名前は父がつけてくれた。気に入ってはいるが何か裏がありそうなので今度会う機会があったら問い詰めておこう。

狼男は直撃ルートで放った火球をヒラリと身をかわして避けた。私の魔法の速度が遅いわけではなくあいつの移動速度が速いようだ。

「予想以上に俊敏ね…でも早いだけじゃどうにもならないよ?」

私は狼男の周りを取り囲むように炎を放った。狼男は身動きがうまく取れないようで周りを見回している。最後に爆発魔法でも打ち込めばチエックメイトだろう。

止めの魔法を撃とうとした瞬間、何の前触れも無く雨が降ってきた。

「雲ひとつ無かったのに…なんで雨が…?」

いきなり降って来た土砂降りの雨のせいで狼男を取り囲んでいた炎が消えてしまった。

更に急に炎が消えたせいで、大量の水蒸気が発生して視界が遮られてしまった。

「何でいきなりこんな土砂降りの雨が…？もしかあの狼男…」

考えられる可能性は絞られる。あの男が何らかの能力で雨を降らしたか、もしくはそのような能力を持った協力者がいたか…恐らく前者だろう。

協力者がいるなら私の探知魔法に引っかかっているはずだ。

とりあえず視界が開けるまで待つしか

刹那、私の背後から先ほどの狼男が飛び出してきた。長く鋭く伸びた狼男の牙が私の体を貫かんと迫っていた。

体を横にひねり致命傷を避けようとしたがすでに遅かった。様子見などせずに時間魔法を駆使して早急に殺すべきだったと後悔した。

狼男の牙は左肩を貫きそのまま私の体を押し倒した。口の中に血の味が広がる。

痛みで気を失いかけたが、ギリギリのところまで踏みとどまり渾身の魔力を込め…私の十八番を使った。

「『キング・クリムゾン！！』」

体内に込めた魔力を放出し、私以外の時間が消し去る。

肩に刺さった牙は体をすり抜け私は狼男の後ろに回りこむ。残っているありったけの魔力を込めて、爆発魔法を放つため意識を集中させる。

## 10秒経過

意識を取り戻した狼男は先ほどまで嘔み付いていた私の姿が消えていることに気がつき振り返るが、もう遅い。

「『イオラ』」

狼男を基点にして爆発が起こる。為す術も無く狼男は爆風に飲み込まれる。私の渾身の一撃だ。もし、この魔法に耐えられたら一巻の終わりだ。

だが、私も自分の魔法に自信を持っている。あんな狼風情に耐えられる技ではないと自負している。しかし数秒後、私のちんけなプライドは粉々に打ち碎かれることになる。

爆発によって舞い上がった土煙が収まり私は事実を思い知ることとなる。

「まさかそんなッ!？」

狼男は唸り声を出しつつこちらを睨み付けていた。自らの体を巨大な水球で包み込むことで爆発の衝撃を和らげたようだ。

さすがに無傷ではすまなかったようだ。が精精顔を少しやけどした程度のようなのだ。

そうか、この狼男の能力は『水を操る程度の能力』だったのか。だとしたら私は相性が絶望的に悪い。時間を止めて魔法を叩き込むには魔力が足りない。

空を飛んで逃げるのは…この狼男は相当すばやい。きっと追いつかれるだろう。

それに噛まれた肩からの出血が激しい。押し倒されたときに骨が何

本が折れたのも分かる。

これは…手詰まりか…？

いや、戦いは諦めたほうが負けだ。まだ可能性があるはずだ。考える私、考えるんだ。

そこで問題だ！ 残った魔力はメラ1発分程度。その程度の魔力でこの状況を打開する方法は？

3択 1つだけ選びなさい。

答え？ハンサムなコルテスは突如反撃のアイデアがひらめく。

答え？誰かがきて助けてくれる。

答え？何も出来ずに殺される。 現実是非情である。

私がマルをつけたいたいの答え？だが期待は出来ない…

数分前に探索魔法で周りを調べたときにはこの狼男と私以外に反応は無かった。

漫画や小説のヒーローのようにジャジャーと登場して『待ってました！』と

間一髪助けてくれるってわけにはいかないわね。

つまりこの場合の答えは…答え？ 答え？ 答え？

狼男はゆっくりと私の近くに寄ってくる。きっと私の魔法を警戒しているのだろうが、もはや私にこの狼男を倒す術は無い。

血が流れて意識が遠のく。こんな所で私の人生は終わってしまうのか。

狼男が私の喉元に噛み付こうと飛び掛ってくる。私は目を閉じ、手を握り締める。せめて…痛みも無く終わってほしい。

だが狼男はいつまで経っても噛み付いてこない。何かがおかしい。

私は目を開けるとそこには民族服を着た女性が立っていた。20代前半程度に見受けられる女性は、まるで紅蓮に燃え上がる炎のように真っ赤な髪をしていた。

その女性と狼男が睨み合っていた。勝負は一瞬だった。狼男が女性に飛び掛った瞬間

「崩山彩極砲!!」

虹色の気が狼男を包み込み吹き飛ばしていた。吹き飛ばされた狼男は大木にぶつかり動かなくなった。

狼男が倒れたのを確認すると、先ほどの女性が近寄ってきた。

「大丈夫ですかッ!!」

ハハッ…どうやら私はまだまだ死にそうに無いらしい。とりあえず今はゆっくり休みとしよう。

そこで私の意識は途絶えた。

~~~~~

「気を失っただけのようですが…手当てを施さなければなりませんね」

先ほどの女性はそう呟くと『気』を操り、目の前の少女に手当てを施す。

黒いローブに、天辺が尖った帽子。肩まで伸ばした金色の髪の毛。どうやら異国の者のようだ。

「……その方、隠れておらずに出て来てはどうですか？」

女性が虚空に向かって話しかけると、空間が裂け1人の女性が出てきた。

「あらあら、気がついていましたの？」

「気を読むのは得意ですからね…大妖怪『八雲 紫』がこんな辺鄙な場所で何をやっているのですか？」

赤髪の女性は拳を構えいつでも戦闘できるような態勢を維持している。

「私の名もかなり広まっているようね。貴女に大妖怪と呼ばれるのは光栄ですわ」

「……………貴女がついているのならなぜ助けなかったのですか？」

戦意がないと分かると赤髪の女性は、構えを解き楽な体勢を取り始めた。

「私は唯の傍観者。だから助けたりもしないし邪魔もしない」

「ならばなぜ私がこの場所に近寄るように挑発したのですか？」

私がこの場所に訪れた理由は、単純である。目の前で微笑んでる『八雲 紫』に殺気を向けられたからである。なのに戦意がないとは矛盾した話である。

「唯の気まぐれよ。私は傍観者だけど貴女は違うから利用させてもらっただけ」

「そうですか。貴女にとってこの娘は玩具の1つなのですね」

私は正直呆れていた。こんなつまらない理由で、殺気を向けられたなんて。

「否、それは違うわ。この子は私の目標を達成するために必要な鍵
よ」

八雲は微笑んでいた。

「ならば貴女が直々に助ければよかったのでは？貴女ならあんな中級妖怪なんて一捻りでしょうに」

「私はまだ姿を見せるわけにはいかないのです。ではまた会いましょう。虹龍小娘『紅 美鈴』」

再び紫は空間の裂け目へと消えていった。

「さて…この娘を安全なところに連れて行かなければ…」

そう呟くと美鈴は目の前で倒れている少女を両手で持ち上げ近くの村へと駆け出したのであった。

2話 狼男【ワーウルフ】（後書き）

今回の敵は狼男です。なぜ狼男かという点、突厥とつげつという国の伝説が関係しています。

この国には、狼から生まれた子がこの国を作ったという伝説があります。

だから狼男がいても不思議じゃないよねと思っただけの単純な考えです。

ちなみに狼男が月を見ると狼の姿になるという設定は、19世紀に書かれた小説が元ネタになっているらしいです。

次に、魔法の名前についてですが：オリジナルの名前をつけるより効果分かりやすいかなと思ったのでこうなりました。

問題がある場合は、差し障りの無いような単純な名前に置き換えま

す。そして時間魔法、これが今回の後書きの本題です。

この話で使用した『キング・クリムゾン』の元ネタは『ジョジョの奇妙な冒険』の敵キャラのスタンドです。

細かい設定があやふやになってきている能力でもありません。この小説では、以下のような自己解釈で行きたいと思っております。

時を吹き飛ばした場合、10秒程度の時間を誰にも認識されずに動ける。

時間が吹き飛んでいる間は、その周りに居る生き物の意識も消え去り無意識に行動する。

そのためこの技を受けたものは、時間が吹き飛んだと錯覚する。

例 ボールを自分の真上に投げたらいつの間にか地面に落ちていた。ただし、この技を使っている間はどんな物にも干渉することは出来ない。

そのため攻撃をすることは出来ないが、攻撃を受けることも無い。また身にまとうているモノや触っているモノ巻き込んで時間を飛ばす。

その時、生き物を掴んでいる場合は自由に運ぶことができるが、その生き物が時間を吹き飛んだことを理解することは出来ない。持っていたモノを1度手放すと時間を吹き飛ばしている間は、干渉することができない。

大まかな解釈は以上です。分かりにくいところがある場合、質問していただけるとお答えいたします。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

3話 能力【アビリティ】（前書き）

タイトルネタが無いので適当に・・・

3話 能力【アビリティ】

夢を見た。父と会ったことのない緑髪の女性が私の目の前で座っている。

何を話しているかは分からないが、2人は楽しそうに談笑しているようだ。

その様子をしばらく眺めていると2人がこちらに気がつき、近寄ってきた。

目の前の緑髪の女性は私に微笑みかけ何か言っている。

だが雑音が入りうまく聞き取れない。

どこか懐かしい感覚を感じつつ私は再び睡魔に襲われ意識を混濁させた。

~~~~~

目を覚ますと見知らぬ天井があった。

塗装も何もされておらず建てられてかなりの年数が経っているかのように見受けられる。

「……………痛ッ」

突如、左肩に痛みが走る。左肩を見ると包帯が巻かれていた。

誰かが手当てをしてくれたのだろうか？

記憶を呼び起こして何があったか思い出してみる。

たしか…狼男に襲われて…赤い髪の女性に助けられて…此処はあの女性の家なのだろうか？

探知魔法には何の反応も無い。では私を此処に連れてきた人はどこに行ったのだろうか。

寝台から起き上がるうとしたとき扉が開き、誰かが入ってきた。

「よかった…目が覚めたんですね」

そこには心配そうな顔をしながら胸を撫で下ろしている赤髪の女性…つまり私を助けてくれたと思われる人が立っていた。

「……………助けていただき、誠にありがとうございます」

とりあえず御礼の言葉を並べておく事にした。命の恩人なのだから御礼を言うのは当然のことである。

それに見知らぬ地で折角知り合ったのに相手の機嫌を損ねるわけには行かないしね。

「そんな畏まらなくてもいいですよ。私は当然のことをしたままですから」

謙虚だ…この人もの凄い謙虚だ。私が男だったら思わず惚れてしまいそうだった。

私もこんな事を自然に言えるような性格だったら、もっと素直になれるんだろうな。

「いえいえそんな…お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

質問した後これって自分から名乗りであるのが普通じゃないかと思  
がついたが、  
時間は元には戻らない…戻せるが今は無理。

「私の名は、姓が『紅』名を『美鈴』と言います。貴女の名前は？」

案の定、聞き返された。というか次の台詞がでてこない…なんて受  
け答えたらいいんだろう。

普通に名前を答えたら良いのか、それとも何か特技でもアピールし  
て…いや、滑ったら後が怖いし…

そんな事を考えていたせいで、質問に受け答えるのをすっかり忘れ  
ていた。

「……………どうかしましたか？」

「ッ！！……………わ、私の名前は、姓が『コルテス』名を『マルティ  
ナ』といいます。

コルテスと呼んでいただければ光栄です。美鈴さん」

またやってしまった。初めて会う人の前だと、どうもうまく会話を  
続けられない。

むしろ今まで正常に会話が続けていたほうが奇跡だ。

元々は、昔から家に籠っていたせいで殆ど人と話さなかった自分が  
悪いのだが、

今となっては後の祭りだ。

「呼び捨てで構いませんよ。コルテスは異国の方なんですか？」

どこまでも謙虚だ…これは将来苦労しそうなタイプだな。

「はい、東ローマ帝国から来ました」

「結構離れたところから来ているんですね」

「修行を兼ねて旅をしている最中でして…今回は油断をしてしまっ  
て…」

あの時の失敗を思い出し気持ちが沈んでしまう。

やはり実戦経験も無いのに飛び出した私が愚かだったのかな。

ああ…泣きたくなってきた。このまま父さんの所まで帰ってしまおうかな。

「命よりも大切なものはありませんよ？」

失敗してもその失敗を活かして次は同じ失敗をしない様になれば  
良いだけの事です」

そうだった、失敗したなら次はその失敗をしないように、また失敗  
したならその次は失敗しないように…。

探究心を忘れるな。そして失敗を恐れるな。と父さんは言っていた  
じゃないか。

「…そうですね!」

「元気になってくれて何よりです。…ところで怪我の様子はどうで  
すか?」

思い出したかのように傷口が傷んでくる。

「あー…結構痛むけど…そこに置いてある私の鞆を取ってくれませ  
んか?」

「これですか？」

私は美鈴から鞆を受け取ると一冊の本を取り出した。そして頭の中で魔法のイメージを固め、魔道書を媒体に回復魔法を詠唱した。

「『ベホイミ』」

体を青白い光が包み込み、体の怪我が治癒していく。

「!?!?..... コルテス、貴女は魔法使いだったのですか」

美鈴は驚きを隠しきれない様子でこちらを見ていた。というかあんなに魔法使いっぽい服装していたのに分からなかったのか。

「ええ... 美鈴に隠すつもりは無かったけど...

普通の人に魔法使いって教えたなら怖がられると思って...」

実際、私は友達と呼べるものも親しい仲間になった人も居ない。

自分の力を知って尚且つ、仲良くなってくれる人なんて居ないからだ。

「...私が普通の人...ですか？」

美鈴はキョトンとした様子でこちらを見ている。

「普通の人じゃないの？」

「いやいや、普通の人は拳から気を放出することは出来ませんよ?」

「それじゃあ妖怪…?」

今まで人型の妖怪に会ったことが無かったから分からなかった。

父の話しても妖怪の見た目までは話してくれた事など無かったからだ。

よって私の頭の中の妖怪は人の形をしていないものだという、イメージとして出来上がってしまった。

「まあ、そういうことになりますね」

「でも妖気がまったく出ていないんだけど…本当に妖怪なの?」

妖気を出さない妖怪なんて聞いたことも見たことも無い。

道中で見てきた雑魚妖怪も少しだけだが妖気があったしあるものが普通だ。

「それは私の能力で隠しているからですね」

「美鈴は能力を持っているの?」

この世には能力を持っている奴しかいないのか。羨ましい限りだ。

「ええ、私の能力は『気を使う程度の能力』、

文字通り『気』を扱うことができます。

この能力で私自身の妖気を操り探知できないレベルまで下げているのです」

「……………その能力って気づって名前がついていたら応用が利くの?」



私の中でまた1つ疑問が生まれた。

「何故そのようなことを聞くのですか？」

しばらくの沈黙の後、美鈴が口を開いた。

そして美鈴の雰囲気は若干変わった。

「さつきから私の探知魔法に引つかからないから不思議に思ってたね。

この魔法は生き物の気配を探知する魔法なの。

この魔法の探知を掻い潜るには自らの気配を完全に消すか、魔法で探知を妨害するかしか防ぐ方法がないから」

「なるほど…私を試していたというわけですか」

美鈴は私の瞳を見据えつつ先ほどより低めの声を出し話した。

「い、いえ…そういうわけではありません。

この魔法は自動で起動するように設定してあります。

私が目を覚ましたときにはすでに探知魔法が起動していました。だから試したわけではありません。本当です!!」

私も断固とした態度…とはいかず若干声を震わせつつ必死に弁明した。

「…嘘をついているようには見えませんか」

「は、はい!!」

美鈴の雰囲気はいつもの優しげな感じに戻って安心した。

「…良いでしょう。私の能力の片鱗を教えてください。」  
「要は言葉遊びのようなものと言えば分かりやすいでしょう。」

『気』と名のついたモノは大体操ることができるのがこの能力の真髄です」

「つまり天気とか空気もやろうと思ったら操れるってこと？」

「ちょっとそれは汎用性がありすぎるでしょ…」

「こういう能力を持っている妖怪がいわゆる大妖怪という存在になるのかな。」

「そうなりますね。他にも操れるものがありますが…」

「流石にそこまでは教えられませんね」

「これだけ聞いたら十分だよ。教えてくれてありがとう」

「どうもいたしまして。ところで私からも最後に1つ質問があるのですが」

「うん？」

「貴女の持っている『能力』は何ですか？」

「え？」

To Be Continued . . .

### 3話 能力【アビリティ】（後書き）

この小説の美鈴さんは自己解釈入りまくりの最強設定です。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

4話 内丹【チャクラ】（前書き）

ルビが無茶苦茶ですが気にしたら負けです。

#### 4話 内丹【チャクラ】

「貴女の持っている『能力』は何ですか？」

私はこの少女に出会ったときから疑問に思っていたことを聞くことにした。

「え？」

突然の思いがけない質問にコルテスは驚いた様子だった。

「コルテス…貴女は自身の能力を隠していますね？」

「…逆に聞くけど…どうして私に能力を隠していると思うの？」

コルテスはまるで理解していない様子だ。

どうやら能力を故意に隠しているわけでは無い様だ。

「貴女には少々理解出来ない部分があるからです。」

何故貴女は私の話している言語を理解できるのですか？

貴女の住んでいる国ではこの言葉は使われていないはずですよ」

「私は生まれつき知らない言語を理解することが出来るみたいで、私にとっては当たり前のことなので気にしては無かったんだけど…」

「ふむ…能力というモノは自然に理解できるものです。」

それは森羅万象のごとく当然のことです。

能力というモノは基本的に生まれた頃からあるのが普通なんです

が、  
技術を昇華させたり外的な理由により能力が生まれることも例外的にあります」

これは私が長年生きてきた中で培った知識の1つだ。

私の場合は気がついたときには当然のように今の能力を使っていた。風水をきわめて吉と凶の方角を見分けられるようになった妖怪を見たことがあるし、  
不老不死の薬を飲みそのまま月に行ってしまった嫦娥じやうがという女性を見たこともある。

「でも…それだと私が自身の能力を理解できない理由は…」

「理由はいずれにせよ貴女が能力を持っているのに変わりはありません。」

そうですね…私の目から客観的に見た感じだと貴女の能力は「見聞きしたことを理解する程度の能力」のようですね。

そう仮定したならば貴女が私の言葉を理解できているのもおかしくありません」

だが…どうも不に落ちない。何故、八雲はこの娘に固執するのか。魔法使いにとってうってつけの能力なのは分かるが、ただそれだけだ。

まだ半世紀も生きていないような生半可な魔法使いを使うのなら、私や他の便利な能力を持った大妖怪を起用した方が遥かに効率的だ。考えれば考えるほど謎は深まるばかりだ。

「私の能力…か」

コルテスは何か思いつめた様に呟いている。

きつと自分が能力を持っていることを知って驚いているのだろう。何故、自身の能力を自覚できないかは分からないがこれ以上の詮索は止めておこう。

「能力についてはある程度分かりましたし、これ以上貴女のことについて詮索するのは止めておきます。」

そろそろ昼時ですし何か食べにでも行きますか？」

「私は捨食の魔法を覚えているので食べる必要は無いんですが…」

たしか魔法使いは自身の魔力を糧に生きてしていると聞いたことがある。だが、食べ物を食べるのに意味が無いわけではない。栄養を取ることもできるし、失った体力や魔力も早く回復させられるだろう。

「食べなきゃ成長できませんよ？」

「美鈴に言われるといろんな意味で説得力が増すね…」

「……？さあ、早く行きましょう」

~~~~~

それから4日が経ち、私は旅を再会したのだが…

「で…なんで美鈴が着いてくるの!？」

「私はこう見えても暇してますから。」

それに元々放浪生活をしている身でしたからね。

ほら、旅は道連れ世は情けと言っじゃないですか」

楽しそうに笑いながら私の横を歩いている。

「ああ…なんでこうなったんだろ…」

そもそもこんなことになったのは美鈴に助けられた翌日の私の発言が影響しているのだろう。

私は、自分の能力のことを夜通し考えていた。この能力の可能性を確かめたかった。

そこで私は美鈴に気の扱い方や拳法の構えを見せてもらうことにした。

剣術は父からある程度教えてもらっていたので自身があっただが、格闘のほうは正直得意ではないからだ。

至近距離まで近寄られてしまっただけは範囲の大きな魔法は打てなくなる。

時間魔法は魔力の消費が激しいのが欠点だ。それは私の鍛錬しただけでどうにかなるだろう。

剣術で対処すればいい話だが、選択肢が多くて損はしないだろう。そこで先人の知恵を借りようというわけだ。

私の見立てだと美鈴は少なくとも1000年以上は生きている大妖怪だと思われる。

寝ているときも隙がなかったし普段の様子を見てもやはり隙は生まれなかった。

本気の妖気こそ見たことは無いが歴戦の戦士であることは一目瞭然だ。

今後も1人で旅を続けるのにそこそこ強い妖怪に対処できなくてはいつ死んでもおかしくない。

つまり能力で美鈴の気の扱い方を理解できるか試してついでに、あわよくば強くなってしまうおうというとても合理的な考え方だ。

それがまさかこんな予想外の展開に転ぶとは…

「では…気を出しますのでよく見ていてくださいね」

「はい」

私が返事をするると美鈴の拳から虹色の気が放出された。

「流石に見ただけでは出せないと思います。モノは試しです。拳に意識を集中させてみてください」

元より意識を集中させるのは慣れていて。魔法使いの基礎の基礎だからだ。

言われたとおり、拳に意識を集中させると…

「…出ましたね」

私の拳から黄色の気が放出されている。ありえん（笑）
美鈴はその様子を見ながら苦笑いしている。

「えと…はい…出ましたねえ…」

自分自身でもびっくりだよ…私の能力すげえ。
本当に見聞きしたことを理解出来るとは思わなかった。

「予想以上の習得速度ですね…これは教えがいがありますね」

そして3日3晩訓練を続けた結果、私は見事に気の扱い方と格闘術の基礎をマスターした。

気の力は肉体の強化に役立っている。私の扱う肉体強化魔法は性能はいいのだが持続時間が短いという欠点がある。

その欠点を補うため気と魔法を掛け合わせることにより継続時間を伸ばし維持するために消費する魔力を減らすことが出来た。だが気を体外に放出したり攻撃に転用するまでには至らなかった。基礎体力が無いやら体の鍛え方が足りないと言っていると美鈴は言っていたがそもそも魔法使いにそんな事を求めないでほしい。そんなこんなでお世話になった美鈴に別れを告げて村から出てきたのだが…

「どうしてこうなった…」

本当にどうしてこうなった…

私の一人旅の計画がいきなり終わってしてしまったではないか。

「どうしてそんなに嫌がるんですか？」

「嫌なわけではないけど…私は一人でゆっくり旅をしたいんです」

私の夢き想いを告げてみる。

「私は貴女に興味があったんですよ。だからついて来ているのです」

「興味…？」

「ええ、そうです」

「…美鈴ってやっぱり変わってるね」

「妖怪つてのはみんなこんなもんですよ？」

「そんなもんなんですかねえ…」

正直言つて美鈴は私の考えていた妖怪とはかなり違っていた。妖怪はもっと自己中心的で人間とは敵対しているものだと思つていたのだが、

普通にそこらの人と親しそうに喋ったりしている。

この地域は黒髪が多いからその髪の色だと目立ってしまうような気がするんだけどな……

まあ私も人のことは言えないか。むしろ私の方が怖がられているよ
うな気がする。

「ほらほら、もっとペースを上げていかないといつまで経つても倭国にたどり着けませんよ？」

「……………はあ」

思わずため息が出てしまった。

ほん めいりん が なかまに くわわったぞ。

~~~~~

「コルテスは寝ているようですね。

……………さて、貴女は何を考えているのですか？」

突如、空間が裂け八雲紫が出てくる。

「あら、私は将来有望な魔法使いの卵を見守っているだけですのよ」  
相変わらず遠まわしな言い方をするやつだ。

「……どうせあの娘を自分の駒として使おうとも思っているの  
でしょう?」

「どうでしょうねえ……どちらにしろあの子は私の思うとおりの働き  
をしてもらわなければ困るわ」

「コルテスは貴女をそこまでさせる価値があるってことなんですか  
?」

「貴女も体感したでしょう?彼女の無限の可能性を、  
あの子がいれば……妖怪達の運命を変えられるかもしれない……」

「そうですか……貴女は何を考えているかよく分からなくて相手をす  
るのが面倒くさいです」

「ふふ、いつまでも私に正体を教えてくれない貴女に言われたくな  
いですわ」

「私はしがない1人の妖怪ですよ?  
ただ他の妖怪たちよりも少しだけ長生きしているだけですよ」

「私よりも長く生きている妖怪はあまり居ないもの。  
それに、虹色の気を操る妖怪なんて私は生まれて此の方見たこと  
が無いのよ?」

「何が言いたいんですか」

愚問であることは理解しながらも聞き返す。

「貴女は私が思っているよりも強大な存在なのではないのかと思っ

ただけですわ」

「…私のことを買いかぶりすぎではありませんか？」

「何はともあれ今日はそろそろ帰ることにするわ。

何れまた会うことがあるでしょう。

そのときには無理やりにも協力してもらっけれどもね」

「…：…何度も言いますが、私は月の民と戦争する気はありませんので。

もっと他の方をあたった方が良いと思いますよ？」

「まだ時間はあるのよ。その時が来るまでゆっくり考えておきなさいな」

何時ものように突然開いた空間の裂け目に紫は飲み込まれ消えた。相変わらず食えない女だ。これだから胡散臭い奴は嫌いなんだ。

T o B e C o n t i n u e d . . .

#### 4話 内丹【チャクラ】（後書き）

コルテスの能力は今のところ基本的に技術の再現しか出来ませんが、  
ですが無意識に見聞きした能力を引き出して魔法を扱うときに補助  
として使っています。

また無意識にあらかじめ組んでおいた術式を引き出すことで魔法  
を詠唱無しで唱えられるのが強みです。

つまり魔法名は飾り（笑）です。実はそれっぽい文章を書くことが  
出来ないだけなんですけどね。

じゃあどうして時間魔法を使えるかとなると、見聞きしたことを  
引き出している』ということになります。

コルテスの父が持っていた、ジョジョの単行本の内容を魔術的に再  
現している、というのが正しいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

## 5話 魔術【ポッシビリティ】

魔法使いとは探求者だ。己の可能性を見出すために実験や研究を繰り返す。

その過程で生まれるものが魔法だ。そして完成された魔法を魔術と呼ぶ。

魔術といっても様々なものがある。例えば賢者の石【エリクサー】や不老不死の薬もその一種だ。

魔術とは魔法の到達点であるが故、比較的似通った所が出てくる。それは無から有を生み出す、つまり世界の法則を無視することができることだ。

そして私が目指している魔術は黄金錬成【アルス・マグナ】と呼ばれるものだ。

魔法の中では錬金術に分類される技なのだが、黄金錬成は普通の錬金術とは異なるものだ。

まず錬金術には、大まかな区切りとして2種類がある。

1つ目は薬品や物質を掛け合わせることで、様々な薬や物質を作り出すことだ。

これは一般的に知られている錬金術であり魔力を消費せずとも行使できる。

この技術を極めることで不老不死の薬すら作ることが可能だと言われているが、実際に製作することに成功した魔法使いは僅かしかないようだ。

そして2つ目が魔術的に知られている錬金術だ。

魔力を魔方阵に込めることで特定の物質を他の物質に作り変えることができるというものだ。

ヒイロカネや賢者の石などはこの錬金術を応用することで造られたモノだ。

無論、材質を変えるだけでなく形や密度を変えることも出来る。

その精度や純度を高めることが錬金術の目標である。

そしてその錬金術の到達点が黄金錬成である。

文字通り黄金を作り出すわけではない。私だってやろうと思えば白金やオリハルコンぐらいは作れる。

私の目指している黄金錬成とは世界法則を塗り替える魔術なのだ。頭の中から私の考えている物事を直接取り出すという言葉にしてみたら極々単純なものだ。

だがその行為を行うためには膨大な知識と魔力を消費してしまう。取り出したいものを完全に理解しなければ使用できない魔術なのに私自身の能力すら理解できない今の状態では程遠い話だが。

なぜ冒頭からこんな事を説明しているかというところ…

「なるほど、それがコルテスの夢なんですな」

「今のところは錬金術方面じゃなくて属性魔法や時間魔法のほうに力を入れてるけどいつかはこの魔法を実現させようと思ってるの」

「コルテスならきつと実現させることができますよ」

「実現できるといいけど…先は長いからねえ」

旅を始めて1年が経ち倭国までの道のりもずいぶんと縮まった。

残り半分といったところだろうか。

半分無理やりついて来た美鈴ともすっかり意気投合して今では友人のような関係になっている。

当初は1人旅がいいと考えていた私だが、やはり近くに誰かいてくれた方が楽しい。

最近では滅多に妖怪には襲われなくなり旅も楽に進む。

昔は妖怪の縄張りに入ってしまい襲い掛かられたことが多々あった



のだが、

その度に襲い掛かってきた妖怪たちを殲滅しているうちに何やら妖怪達の間で

『赤髪と金髪の2人組みの女には近寄るな』  
という噂が広まっているようだ。

その噂のおかげで襲われなくなったのはいいのだがその代わりに鍛えている属性魔法を試し打ちできなくて困っている。

元々攻撃用の魔法なので無機物に当てて練習するのは意味が無い。

美鈴は練習相手になってくれると言っているのだが友人に魔法を打つのは気が引ける。

最近では腕試しに襲い掛かってくる命知らずの妖怪がいるのでそいつらを実験台にすることで凌いでいるのだがそういう奴に限って弱い。

毎回『メラゾーマ』や『イオナズン』一発で倒せてしまうのでは練習にすらならない。

どうも最近物事の考え方が妖怪寄りになってきてしまっている。

妖怪を殺しても何も思わないし旅を始めてから随分と好戦的になってしまった。

一応魔法使いも妖怪なのだが自分の中では未だに割り切れていない。その影響もあり私は未だに捨虫の魔法を使わずにいる。

捨虫の魔法を使ってしまったら完全な化け物になってしまうような気がするからだ。

要は気の持ち方なのだろうが未だに決心がつかない。

「それじゃあ美鈴には何か夢はあるの？」

私は気持ちを切り替えるために美鈴に質問を試みることにした。

「私の夢ですか？そうですね………私はどこかに定住したいですね」

「定住…？」

美鈴の口からそんな言葉が出るとは思いもしなかった。

「私は妖怪ですが人を食べたり襲ったりすることを好んではいません。

以前は人里で暮らしていた時期もあったのですが、妖怪は人間の何十倍も長生きする生き物です。

歳をとらない私のことを恐れ、結局人里から追い出されてしまいました」

私は父さんがいたからそんなことは無かった。

怖がられることはあっても直接的なことは何もされなかった。

「でも妖怪達が集落を作っていたりするところもあるよね。

そこで他の妖怪達と一緒に暮らそうと思ったことは無いの？」

「この地方の妖怪たちは縄張り意識が非常に強いのです。

私のような怪しい妖怪を受け入れてくれるほど、妖怪たちもお人よしではありません」

「そうだったんだ…悪いこと聞いちゃったね」

まさか美鈴にこんな過去があるとは思わなかった。

「いえいえ、良いんですよ。私も自分の夢を喋ることですっきりしました」

「美鈴が気にしていないなら良いけど………ん？」

探知魔法に1つの気配が映し出される。  
距離は500メートルといったところか。

「どうしましたか?.....妖怪の気配がしますね。

それもかなり強い部類の妖怪のようです」

どうやら美鈴も気がついていていたようだ。

「そうみたい。こっちに近づいて来てるみたいだけどどうする?」

「そうですね。敵意があるかどうか見極めてみますか」

「つまり無視して様子を見ておけてこと?」

「そういうことですな」

その後も他愛も無い会話を続けつつ、こちらに近づいてくる妖怪を注意し続ける。

どうやら一定の距離を取りつつ私たちの後をつけて来ているようだ。

「ちょっと美鈴、あの妖怪近づいてこないんだけど」

小声で美鈴に話しかける。

「そうですねえ...こちらから近づきますか?」

「このままじゃ埒が明かないからね」

「そうと決まれば...その妖怪、出てきなさい」

美鈴が振り返り、木々に紛れつつついてきていた妖怪を睨みつける。

「わらわに気がつくとは…お主等やりおるな」

案外すんなり出てきた妖怪は、女性のようだった。

女の私から見ても美しいと思える美貌をしていたがどこか荒々しいものを感じた。

それだけなら絶世の美女なのだろうが、女性は狐の耳と九つの尻尾を生やしていた。

「九尾の狐…ですか？」

「白面金毛の者…と妖怪の仲間内では呼ばれていますね」

美鈴は知っていたようだ。いったい何年生きているのだろうか。

「顔には似合わず博識のようじゃのう」

目の前の狐は威圧的な態度で話を続けてくる。

「それ褒めているんですか？」

「さて、お主等に話があるのだが」

「私の質問は無視ですか…そうですか…」

美鈴がいじけてしまった。そういえば美鈴って無視されるの嫌いだったな。

「話とは何ですか？」

美鈴は役に立たないので代わりに会話に参加する。

「わらわの手駒とならんか？」

「はい？」

意気消沈していた美鈴すら思わず聞き返してしまった。  
出会っていきなり手駒になれってふざけているのか？

「感激のあまり言葉も出ないのかのう」

怒りを通り越してもはや呆れてきた。

妖怪って頭のどこかがずれた奴しか居ないのだろうか？

「いえ：あまりにも突拍子のないことを言われただけで呆然としていただけです」

美鈴、そこは素直に答えるところじゃないでしょ。

「わらわを馬鹿にしておるのか？」

ヤバイ、あからさまに不機嫌そうな顔してる。これは怒らせてしまったかもしれない。

「馬鹿にはしていませんが呆れてはいます。」

初めて会う相手に手駒になれば無いでしょう…」

うわあああああ！？おもいつきり挑発しちゃったよこの人。い

や人じゃないけども。

「ほーう…わらわを挑発するとは、命知らずじゃのう」

あああああああ！？向こうもやる気と殺気をムンムン出してるよ。

いくら好戦的になったとはいえこんな大妖怪を相手にしたくは無い。ここはどうにか穏便に済ませなければ…

「あの…白面さん…？」

「なんだ？」

「手駒になることは出来ませんが私達がお手伝い出来ることなら手伝いましょうか？」

「ふむ、目上の者への接し方がなっておるではないか」

嗚呼、今すぐにでも魔法を叩き込みたい。

だが、ここで戦闘を起こしてもいいことは何も無い。

この辺りには大きな町があったはずだ。

下手に戦闘を行って被害を出すわけにはいかない。

私はお尋ね者になる気はまだ無いからだ。

「コルテス、こんな奴の言うことなんて聞かなくていいですよ」

美鈴は少し黙ってなさい。というか黙っていてください。

「そこの赤髪は無視してくれれば結構です。」

それで白面さんのやりたいこととは何ですか？」

「そんな…コルテスまで冷たい態度を足らなくても…」  
再び意気消沈した美鈴はその場で座り込んでしまった。

「うむ、わらわの目的は国を滅ぼすことじゃ」

「はい、死ねばいいんじゃないですか？」

しまった口が滑った…

「ほう…わらわによほど殺されたいようじゃな」

うわあ…殺気が体中からにじみ出てますよ。

少し死ねと言っただけじゃないですか。

そんな怒らなくてもいいじゃないですか。

「その妖怪は昔『天竺<sup>インド</sup>』で大暴れしてこの地方に逃げてきたんですよ…」

美鈴………そういうことはもっと早く言おうよ。

そういう凶悪な妖怪なら私もこんな態度取らなかつたのに。

「そこまで知っておつたか、これは久々に遊べそうじゃのう」

ははは…もう開き直ろうか。うん、これは私の実験の一環だ。そういうことにしておこう。

「コルテス、戦闘準備をしてください」

あれ、美鈴さつきまで座り込んでたんじゃないの？  
こういつときは立ち直り早いね。

「分かったよ、はあ…」

私はそう呟くと腰に下げた剣を抜き構える。

「かかってくるがよい、哀れな妖怪共よ」

T o B e C o n t i n u e d . . .



## 5話 魔術【ポツシビリティ】（後書き）

元ネタ

黄金錬成【アルス・マグナ】とある魔術の禁書目録

賢者の石【エリクサー】 鋼の錬金術師

自分の中の魔法についての設定は色々な小説や漫画の知識が入り混じっています。

あとオリハルコンとヒビイロノカネは同一の金属らしいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

## 6話 白面金毛の者？

「かかってくるがよい、哀れな妖怪共よ」

妖弧は右腕を空に掲げると、辺りを漂っていた妖気が鬼火になり私  
たちを飲み込まんと迫ってきた。

私は瞬時に『スカラ』『マホカクタ』『ピオラ』『バイキルト』の  
魔法をそれぞれ自身の体にかけた。

効果は順に、物理攻撃防御、魔法妖術霊術攻撃反射、移動速度向上、  
筋力向上、といった効力を持っている。

「美鈴、作戦はどうする？」

「そうですねえ……あの鬼火が邪魔をして近寄れないのが厄介です  
ね」

「下手に広範囲魔法を放つたら町にまで被害が及ぶし…即死魔法は  
効きそうに無いし…」

妖弧の鬼火を『マホカクタ』で反射しつつ作戦を練ることにした。

「試作品のマジックアイテムでも試してみようかな」

私は背中に担いでいる槍を手に取り美鈴に見せる。

「その槍ですか…確かに名案かもしれませんがそれは最後の手段な  
ので取っておいた方が良いでしょう？」

「そつだよねえ……それじゃあとりあえず時間を止めて後ろに回りこんで魔法をぶち込むって作戦でいこうか」

「随分と適當ですね。まあ傍から見たら瞬間移動のようなものですから効果がある……と良いですね」

「んじゃあ美鈴、囹になってね」

「また私が囹ですか」

美鈴は若干不機嫌そうにこちらを見てくる。

私たちの間では美鈴が前衛、私が後衛と決まっている。

悪く言えば美鈴に囹になってもらっている間に私が魔法を練り上げ敵を粉碎しているのだ。

美鈴もそんな戦法はあまり取りたくないのだろう。美鈴は正々堂々と戦うタイプだ。

私もだまし討ちなんてことはしないのだが魔法使用の特性上接近戦は得意ではない。

そこで幻術や時間を操り後ろに回りこんで攻撃したりしているわけだ。

卑怯といえば卑怯かもしれないがこれも立派な戦術の一つだ。

「そつちの方が体が丈夫だし強いんだからさ」

実際今までに美鈴が怪我をしている姿を見たことが無い。

妖怪とは元来肉体を鍛えることなどしないものなのだが美鈴は毎日欠かさずトレーニングをしている。

きっとその差が美鈴の強さの秘密なのだろう。

「まあ良いですよ。これも貴女の実験の1つなんでしょう？」

なんだかんだで囿になってくれる美鈴さんマジ天使。後で御礼に甘味でも買ってあげよう。

「そつとも言つ」

「むづ…なぜ攻めてこんのじゃ!!」

先ほどから攻撃をしてこない私たちに痺れを切らしたのか妖弧が叫んできた。

妖弧は更に鬼火の密度を上げてきた。そろそろ反射魔法の限界が近いように展開している半透明の障壁にひび割れが入ってきたのが見える。

「それじゃ陽動お願いね」

「分かりました」

『マホカント』が解除された瞬間に私たちは二手に分かれた。

「二手に分かれたか…ならば未熟な者から始末するのでしょうか」

案の定、私のほうを狙ってきたか。それも予想済みではあるが…

「『星脈弾』」

美鈴が放った気が鬼火を打ち消しながら、妖弧に迫る。

「チツ!!」

妖弧は掲げていた腕を元に戻し妖気で障壁を作り気を防ぐ。だが、その一瞬に隙が生まれる。

「『キング・クリムゾン』」

1秒経過

鬼火をすり抜けて妖弧に接近する。

2秒経過

魔力を充填し魔法を放つ準備をする。

3秒経過

「『イオナズン』」

充填した爆破魔法を設置する。爆発までの時間は3秒に設定しておく。

4秒経過

自分が立っていた位置に戻る。

5秒経過

「『マヒャド』」

ダメ押しに巨大な氷塊を妖弧の頭上に設置しておく。これで上空に逃げることもかなわないだろう。

時が動きを取り戻し再び視界に色が戻る。

「こんな攻撃痛くも痒くも」

私の発動させた属性魔法が妖弧を襲う。

爆発による衝撃で氷塊が砕け散り破片が辺りを舞っている。

普通の妖怪ならこれで死んでいるだろう。  
だが相手は大妖怪『白面金毛の者』この程度で死ぬような相手ではないようだ。

「妖気が消えていませんね」

「あれで消し飛ばさないのか…」

まさか至近距離でのあの爆発に耐えられるとは思わなかった。  
着ている服は袖や裾が焼けただれてる様だが、大した怪我は負っていないようだ。

「フッフ…アハハ…ヒャハハハハ」

あ、なんかまずいスイッチが入ったな。  
妖気が更に強くなり肉眼でも確認できるほど濃度が増している。

「面白い、面白いな。まさか噂の2人組みがこれほどまでに強いとは思わなかった」

「ちょっと不味そうだね」

「そうですねえ」

何で美鈴はこんなに余裕があるんだろうか。

私は手が震えているというのに、その度胸を1割でいいから分けて欲しい。

ついでにその胸も分けて欲しい。

そんな場違いなことを考えていると妖弧が笑いながら語りかけてきた。

「クッククク……ますます気に入ったぞ。お前たちここで降参して私の手下のなるがよい」

「喋り方変わってますけど」

我ながら冷静なツッコミである。

「ん？………気にするでないぞよ」

「今更喋り方を直したところで手遅れですよ」

今日的美鈴はやけに挑発するなあ。

もしかしてこの妖弧と因縁があつたりするのかな？

「黙れッ！！」

妖弧は顔を赤くしながら腕を振るい妖気を飛ばしてくる。

飛んできた妖気は周りの木々を切り裂きながらこちらに飛んでくる。

「おお、危ない」

『ピオラ』で移動速度を上げておいたおかげで難なくかわすことができる。

美鈴は体に纏った気ですべて打ち消している。ほとんど妖気を出していないのによくやるなあ。

………何故、美鈴はほとんど妖気を出していないのだろうか？

これほど強力な相手に手を抜いて勝負するのは厳しいだろう。

それなのに美鈴はそこらへんの雑魚妖怪とやりあう時とさほど変わらない妖気しか出していない。

まあ、そんな事を気にしている暇などはないのだけれども。

「ヒヤハハハハハ、カットカットカットオー!!!」

段々と妖気による攻撃範囲が広がっている。

どうやら見境無しに攻撃しているようでこの近辺に暮らしている妖怪達まで何匹か切り裂かれている。

「ちよつとこれは不味くない？」

「このままでは町にまで被害が広がる恐れがありますね」

「はあ…どうやらこのマジックアイテムを使う破目になるとは、美鈴が本気を出して止めてくれたらいいのになあ」

「私はいつでも本気ですよ。」

それにこの戦いは貴女の実験なんでしょう？」

「全然本気出して無いくせに 『ザ・ワールド』」

世界の動きが止まる。

1秒経過

「退魔『スピア・オブ・ザ・ビースト』」

背中に担いでいた槍を抜き取り魔力を込める。

2秒経過

キイイイイインと槍が音を立て始める。

3秒経過



妖弧に向かって槍を投げつける。  
槍は妖弧に吸い寄せられるかのように飛んでいく。

#### 4秒経過

妖弧に突き刺さる寸前に、槍の速度が低下する。  
そして槍は妖弧の腹に刺さる直前で停止した。

そして再び世界に色が取り戻される。

「ヒヤッハアアアアアッ!？」

いきなり現れた槍を避けることもかなわず、妖弧の体に槍が突き刺さった。

「効果は抜群ですね。妖気を使えないようにする槍とは恐ろしいものです」

「これでも想定の半分以下の威力なだけだね」

この槍は、元々は妖怪を捕まえるために作った槍だ。  
原理としては魔力を込めることで槍全体に仕込んだ魔方陣を起動させることで、周囲の妖気を吸い取る機構を仕込んでいる。

そして吸収した妖気を魔力に変換して、魔方陣を維持するために使う。

つまり妖怪にこの槍を刺してしまえば、妖気を吸収して行動できないようにするわけである。

もちろん雑魚妖怪程度なら刺すだけで殺すことができるし、普通の  
大妖怪程度なら行動を押さえ込むことができる。

「クッ……体に力が入らないだと……」

槍を抜こうと妖弧が古今奮闘しているが、抜けるわけが無い。力を込めれば込めるほど槍に力を吸収されてしまうからだ。そのうち諦めたのか、地べたに座り込んでしまった。

「どうやら大人しくなったようね」

「そのようですねえ……………」  
『たまも玉藻 らん藍』、頭は冷えましたか？」

玉藻 藍という名前がこの妖弧の本名なのだろうか？

「なッ！？何故私の名前を知っている！！！」

「はあ…いくら力を浪費しているとはいえ気がつきませんか？」

「美鈴…その赤い髪…まさか『あま紅 みず美鈴』なのか!？」

「妖気を消していたから分からなかったのですか？  
万全な状態なら一目見ただけで分かるでしょうに」

「あの…2人は知り合いなの？」

正直まったく話についていけない。

「腐れ縁だ!!」

「腐れ縁ですね」

「腐れ縁ねえ……………」

大妖怪達には独自の交友関係でもあるのだろうか。

それとも強者たちは惹かれあうという運命でもあるのだろうか。  
私が居ることを忘れているかのように2人は言い争いを続けていた。  
話を聞いてみるとどうやら玉藻は天竺から逃げてきたときに殆ど力を  
浪費してしまっていたようで、力が回復するまで適当な妖怪に護  
衛をさせようとしていたようだ。  
あれで全力じゃないと思うと恐ろしいものだ。  
その後も言い争いを続けついに日が暮れてしまった。  
てか、獣の槍が刺さったままなのに元気だな。

「日が暮れてきたしさっさと宿に行こうよ」

「そうですね」

「おい！！私は無視か！！早くこの槍を抜け！！」

相変わらず騒がしい妖弧だ。

「そうだった。槍を忘れるところだった」

私は、魔方陣の機能を停止させ槍を抜き取る。

そして念のために回復魔法『ベホマ』をかけておいてやる。

「何故、傷を治した」

「勘違いしないでよ、貴重な研究資材を殺すのは勿体無いと思った  
だけなんだから」

「……………こいつ実は優しい奴なのか？」

「いえ、本心からそう思っていると思いますよ」

「変な奴だな」

「貴女に言われたくないんだけど…」

国を滅ぼそうとして楽しんでいるような奴にそんなことを言われたくない。

そんな事で人命を浪費させるなら研究材料として使った方が何倍もマシである。

なに？その考えもおかしいだつて？逆に考えるんだ「どうせ消える命なら技術の発展に使うべきだ」と考えるんだ。

刻々と夜が更けていく

To Be Continued . . .

## 6話 白面金毛の者？（後書き）

今日の元ネタ

『スカラ』 『マホカント』 『ピオラ』 『バイキルト』 『ドラゴンク  
エストの魔法

通り名『白面金毛の者』 〃 『潮ととら』の『白面の者』 + 『白面金  
毛九尾の狐』

退魔『スピア・オブ・ザ・ビースト』 〃 『潮ととら』に出てくる獣  
の槍

槍頭はヒヒロノカネ、柄は樹齢1000年を超える霊木で出来て  
いる。

見た目は獣の槍とそっくりだが能力はまったくの別物。

コルテスの父の蔵書の1冊に出てきた獣の槍を参考にされてはいる  
が、本来の目的は妖怪を殺すために創られた。

また妖気の吸収効率を設定することも出来る。今回は最大パワーで  
使用した模様。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

## 7話 不尽【インフィニティ】

玉藻に襲われてから3年が経ったが全然倭国に近づけていない。

だがこれには深い…あまり深くないが訳がある。

いくら逃げてても『玉藻 藍』がついて来るのだ。

この国の妖怪の一派に狙われているとかで1人にしないでくれと  
しつこく泣き喚いてくる。

どうやら九尾の狐の肉を食べると妖怪としての格が上がるとかとい  
う噂が流れているようだ。

他の妖怪を頼れと言うと

「お前たちが最後の希望なんだ。見捨てないでくれ」  
と泣きながら言われた。

大妖怪の癖に仲間とか知り合いとか居ないのだろうか？

美鈴が言うに大妖怪となると群れる必要が無くなる。

それは敵に襲われても返り討ちに出来るからだ。

つまり大妖怪には一匹狼が多いということらしい。

美鈴も私に出会うまでは1人で旅をしていたようだ。

今の玉藻は天竺から逃げてくるときに妖力を大半使ってしまったよ  
うで、そこらの中妖怪程度が束になって来られるだけでやられる可  
能性すらあるそうだ。

あまりにもしつこいので玉藻の妖気が回復するまでの間、居を構え  
る事にした。

都からある程度はなれた場所にある屋敷を私が作り出した金や銀で  
買い取り魔法や妖術的な改装を施し隠れ家にした。

玉藻と私の多重結界の効果は抜群で妖気の遮断率はほぼ100%だ  
った。

そこで玉藻が回復するまで私は魔法の研究を行うことにした。

研究内容は玉藻から（無理矢理）教えてもらった式神についてだ。

玉藻の能力は『式神を使う程度の能力』と言って言葉の通り式神を

自由に作り出せる。

式神とは倭国の陰陽道に通じるものらしく魔法における召還獣に近いものようだ。

召還獣と違ふところは人間も行使することができるとだ。実際には人間に近い何かだが召還獣は所詮獣しか出せない。

つまり式神に身の回りの世話をさせることも可能というわけだ。

まあ身の回りの世話なら使い魔を呼び出した方が何倍も手っ取り早いのだが。

式神の研究自体はすぐ終わったのでその後は錬金術についての研究をすることにした。

黄金錬成の研究のためだったが、美鈴から面白い話を聞いたのも研究をするきっかけとなった。

今から三千年以上前に嫦娥じやうがという女性が蓬莱の薬を飲み不老不死になったという話だ。

半信半疑ではあったが月に行ったと言う事は月に何者が住んでいてそこで暮らしているのだろうか。

美鈴自体は聞いた話だと言っではいたが実際に見たことがあるのだろうか。

話が鮮明すぎる。まるで目の前で見たかのような喋り方だった。

蓬莱の薬と賢者の石には共通点がある。

それは不尽の力を持っていることだ。

蓬莱の薬は飲むと永遠の命を得る。

永遠の命とは言い換えれば無限の生命力とも言える。

賢者の石は魔法使いの1つの到達点である。

魔法使い個人個人によって考えたが変わってくる。

賢者の石を魔法を補助する魔力増幅装置として考えている魔法使いもいれば、どんな怪我でも治すことの出来る万能薬と考えている魔法使いもいる。

賢者の石は特定の形を持たない。固体であり液体であり気体である。私の考える賢者の石とは黄金錬成を完成させる上での1つの部品で

しかない。

賢者の石自体ですら偉大な魔術である。それは分かっている。私が作れるかも分かりはしない。

だが無理だと思っただけは何も始まらない。私は独自に調べてみることにした。

結果的に作成方法は完成した。

だが私が求めているモノは賢者の石なんてものではなかった。むしろ悪魔の石と呼んだ方がしっくりくる。

必要なものは『穢れ無き360名以上の魂』である。穢れ無き魂には強い力が宿る。

こんな馬鹿げたものなど創れる訳が無い。穢れ無き魂なんてそんなにある訳が無いからだ。

穢れとは妖気のことである。この地上は妖気で溢れ返っている。その妖気をまったく浴びずに生きていくことなど不可能である。

聖人と呼ばれる類の人間なら魂に穢れは無いのだがそんなものがこの世に360人以上も居るはずが無い。

もしそれほどの聖人がいたとしてもそれだけでも聖人を殺したら間違いない。私はお尋ね者になる。

無論、魂を使わずに生成する賢者の石もあるにはある。

だがそれは唯の魔力増幅装置でしかない。いわば魔力の変換効率を高める道具だ。

100%の力を200%にすることは出来ても無から魔力を生み出すことは出来ない。

その事実を理解した私はすっかり意気消沈してしまった。

「元氣を出してくださいよ。きっとまだ方法がありますよ」

美鈴はそう言うが私に打開策は思い浮かばない。

無限に近い魔力を生み出すには賢者の石かそれと同じぐらいのエネ



ルギー補給源を確保しなければならない。

単純に自身の魔力を増幅させて黄金練成の起動は出来ても維持ができないからだ。

だが私はまだ19歳だ。魔法使いとしてまだまだ成長できるだろう。そうすればきつと解決法が思い浮かぶだろう。もっとポジティブに考えるべきだ。

「そうだね」

「無限の力が…心当たりがあるといえばあるんだが…」

先ほどまで黙りこくっていた玉藻が口を開いた。

「何か知ってるの？」

「倭国に不尽の力を持った女神がいると聞いたことがある。

たしか名を石長姫といったかな。そいつならお前に何か情報をくれるかもしれない」

「神の力が…」

正直そこまで頭が回っていなかった。

そもそも私は神なんて信仰していないし神がいるとは思っていないかった。

だが不尽の力を持った神か…：おあつらえ向きではないか。しかも目的地の倭国に居るとなれば好都合だ。

「よし…決めた。ちよつくら倭国に行ってくるね」

「いや私はまだ完全に回復していないんだが…」

「美鈴置いていくから面倒見てもらってね」

「1人で行くのですか？」

「元から一人旅の予定だったからね」

「そうですか。行かれる前に聞きたいのですが…」

「うん？」

「コルテスは何故倭国に向かっているのですか？」

そういえばまだ話していなかったな。

私の中では父さんからの頼みである『八雲 紫』への言付けは二の次で本心では本では分からない実際の世界を見たいという気持ちが大きかった。

だが私は十分に世界を見て回った。今のところは満足している。

倭国についたら『八雲 紫』に話をつけて石長姫についての情報を掴んだらすぐに帰ってこよう。

しばらく父さんに会えていないし2人を連れて里帰りってのもいいかもしれないな。

「私が倭国に向かっている目的は、『八雲 紫』に父さんの言付けを伝えるためのな」

「『八雲 紫』！？」

2人は同時に驚いた様子でこちらを見てくる。

『八雲 紫』とはそれほどまでに有名な妖怪なのだろうか。

「2人は八雲について知っているの？」

「八雲は妖怪の異端的な存在だ。

あいつは妖怪がいつか人間に押され始めて仕舞いには消滅すると唱えている」

「そこで八雲は1つの計画を立ち上げたのです」

「…計画？」

初耳だ。父さんからもそんなことは聞かされていない。

「『幻想月面戦争計画』と呼ばれているものだ」

「八雲は妖怪達の消滅は人間が技術力を持つことで恐れを失うからだと言っています。」

「そこで月の民の高度な技術力を奪い取り妖怪達に広め人間達が恐れを失わないようにする…という計画です。」

「そしてその戦争を実行に移すために強力な妖怪を根こそぎ勧誘をしているようだ。」

無論私も手伝えと言われたが生憎そんなことに興味は無いのでな」

「私もその計画に参加する気にはなりませんね。」

妖怪が滅び行くのも運命なら仕方ありません」

話を聞けば聞くほど噛み合わなくなってくる。

父さんは八雲は妖怪の理想郷を作ると言っていた。

だがこの2人の話を聞いているとどうも何かがおかしい。

理想郷を創る為に戦争を吹っかけるのだろうか。

ああ、そうか。

父さんと八雲紫は同じものを追い求めていつもりでどこかで食い違ったのだろう。

やはり人間と妖怪とは分かり合える生き物ではなかったということか。

「八雲が何を考えてるかは分かったよ。それじゃ行って来ます」

「行ってらっしゃい」「」

~~~~~

「なあ美鈴」

「どうしましたか？」

「あいつを行かしてよかったのか？」

「彼女の決めたことですからね」

「あいつは夢を追い求めすぎていると思わないか？」

「元来魔法使いとはそういう生き物ですよ」

「あいつは結果を求めすぎている。

そのうち過程や方法なんて無視してしまうかもしれないぞ」

「散々人間を殺めてきた、白面金毛の者『玉藻 藍』が言える事でしょうかね」

「お前だつて人のことは言えないだろう？虹龍小娘『紅美鈴』」

「私は人間を殺したことはありませんよ？」

「ククク…確かに人間は殺して無いよなあ」

「お互い自分の生き方に素直なだけでしょう」

「フフツ確かに言えてるな」

「それにしても貴女…丸くなりましたねえ」

「ッ!!」

To Be Continued . . .

7話 不尽【インフィニティ】（後書き）

今回も自分の魔法理論を語るだけ語った自己満足な話でした。後でまとめた話を書こうと思っています。

ちなみに作中の年代は西暦674年となっております。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

8話 日本【ジパンク】

『紅 美鈴』と『玉藻 藍』に別れを告げて1年が経った。この1年間は大したことが起きなかった。

海を渡るときにクラークンに襲われて船が沈みそうになったので『メラ』で焼き尽くしてやったぐらいだ。

私は妖気を吸って大きくなった蛸なんてどうでも良かったのだが、ここを航海する人間たちにとっては襲われていて困っていたそうだ。御礼をさせてくれとしつこかったので私は噂話を聞かせてもらうことにした。

八雲は強力な妖怪らしいので多少は噂が流れているだろう。そして噂話を聞いていると1つ面白い話があった。

「そういえば都にとても美しい女がいると聞いたな。

俺はそんな女よりも目の前にいる美人さんの方が気になるがなあ」

男は私の顔を疑り深く見つめてくる。

「褒めても何も出ないし私は普通の旅人だよ。

それでその別嬪^{べっぴん}さんがどうかしたの？」

「その美女は月から来た姫だって噂があつてな。

次の満月の日に月からお迎えが来るって話が広まっているのさ」

「月の姫…ねえ」

月には優れた技術力がある。不老不死の薬を飲んだ嫦娥^{じやうが}は月に昇った。そして月からの迎え。

なぜ不老不死の薬を飲んだ嫦娥は月に行く必要があつたのか。

そもそも月に行くなど人間には到底出来ない真似だ。
つまり自分から月に向かったのではなく月に連れて行かれたといっ
た方が正しいだろう。

では何故月に連れて行く必要があったのだろうか？

答えは単純だ。不老不死の薬は月のものだった。

何らかの理由で嫦娥がその薬を飲んでしまい殺すことも出来ないの
で月に軟禁しているのだろう。

なら月から迎え、いや連行される美女とは一体何者なのだろうか。
不老不死の薬を飲んだ人間かそれとも……

「どうしたんだ？何か考え込んでいるようだが」

「その別嬪さんに興味が湧いたわ。

どこに居るか知ってる？」

「たしか今は都に居を構えているそうだ。

だが帝が警備を固めていて近づけるかどうかは分からないぞ？」

「居場所が分かれば十分よ。

陸地が見えてきたようだしそろそろ降りることにするわ。

乗せてくれてありがとうね」

「は？降りるってここは海の上」

いつの間にか目の前から先ほどの女性が消えていた。
辺りを見回してもそれらしい人影は見当たらない。

「…消えた…だと」

男はただ呆然と立ち尽くしていた。

適当な牛車に魔法で姿を隠して同乗した私は都に潜り込んだ。流石この国の中心部と言うべきか、大きな屋敷が沢山建っている。何故か平屋が多く木材で建てられている住居が多いようだ。どうやら私の故郷と比べて建築技術はそれほど高くないようだ。

「それにしても黒髪しかないね…」

思わず独り言を呟いてしまうほど黒髪しかない。

私の故郷であるフランク王国と比べ黒髪が多いのは知っていたがあまりにも多すぎる。

これでは私の金髪は目立ちすぎてしまう。

しょうがなく私は姿くらましと消音の魔法を解除せずに維持する。

ちなみにこの魔法の対象は一定以下の霊気妖気魔力を持つ者にしか効かない。

探知魔法を使い調べる限り私の魔法を破るほどの実力者はいないようだ。

美鈴みたいに自身の力を隠していない場合の話だが…

「さて、噂の別嬪さんが住んでいるのはこの屋敷かな？」

それらしい屋敷には大量の兵士達が配備されていた。

数にして約50人といったところか。陰陽師も何人かいるようだ。

私は塀を飛び越え屋敷の中に忍び込んだ。

探知魔法で人の気配を探りつつ屋敷の中を進む。

襖ふすまと呼ばれる引き戸を引くとそこには1人の少女が座っていた。

その少女は軽く1メートルはありそうな艶つやのある黒髪をしている。

一目見て確かに美人といわれるだけあるなと思った。

どこか気品のある顔立ちには少々あどけなさが残ってはいるが美し

い。

そんな事を考えていると少女と目が合った。
偶然だろうと思って移動したら私の動きを目で追ってくる。

「……………もしかして私の姿見えてる？」

「ええ、ばつちりと」

~~~~~

私は考えていた。

どうやったら月からの迎えを退けることができるのだろうか。  
いくら考えても答えは思い浮かばなかった。

私なら『フェムトファイバー』の拘束も能力で解くことができる。  
だが拘束を解くことができるからといって何にもならない。

私を1回殺して目が覚める前に月に運んでしまうだけなのだから。  
嫦娥のように月の奥底で幽閉される生活なんて嫌だ。

私は自由になりたい。何者にも縛られずに生きたい。  
だがタイムリミットは刻々と近づいている。

もう私に残されている時間はもう無い。  
せめて翁達には迷惑をかけないように清く連れて行かれるのが私に  
出来る最善の策なのだろうか。

ふと顔を上げると見知らぬ女性が私のことを見つめていた。

腰まで伸びている髪は金色。まるで宝石のような青い瞳。

顔の作りは日本人とは違うようだ。大陸から来たのだろうか？

どこか不思議な雰囲気かもを醸し出しているが人形のような綺麗な顔だ。  
私とは違う大人の女性としての美しさを感じる。

頭には先が少し折れ曲がっている黒い三角帽子を被っている。

三日月と太陽をモチーフにしてあるであろう金色の飾りが左右につ

いている。

服もこの国のものとは違う作りをしている。

(青いワンピースを上黒いロングコート羽織っている)

腰には細身の剣を差しており背中には2メートルはありそうな槍を担いでいる。

華奢きしゃな女性には不釣り合いな装備だ。

この女性は一体どこから入り込んだのだろうか。この部屋は帝が派遣した兵士に守られていたはずだ。

新しい陰陽師かと思っただが靈気をまったく感じ取れない。

妖気も感じられない。感じ取れるのはよく分からない力だけだ。

そのまま凝視していると女性が私の周りを移動し始めた。

その様子を見つめると女性が突然口を開いた。

「……………もしかして私の姿見えてる？」

「ええ、ばつちりと」

むしろこの距離で見えない方がおかしいだろう。

「ですよー。貴女が月に連れ去られる予定の美女？」

「ええ、そうよ。私の名前は『蓬萊山ほうらいざん 輝夜かぐや』」

「私の名前は『Martina Cortes』」  
マルティナ コルテス

「やはり異国の人間のようなね。その異国の民が私に何の用かしら？」

もしかしたら帝が雇った用心棒なのだろうか。

「1つお聞きしたいことがあるのよ」

「私に聞きたいこと？」

藪から棒に何を言っているのだろうか。

「不老不死の薬のことについてです」

「……………なぜ貴女がそのようなことを知っているのかしら？」

コイツは一体何者だ。何故私が蓬莱の薬を飲んでいることを知っているんだ。

「私の憶測ですよ。」

貴女は不老不死の薬を飲んだため月の民に狙われていると予想しているのですが」

「確かに不老不死の薬、私達の間では蓬莱の薬と呼ばれているモノを飲んだ。

けれど貴女の憶測は外れているわ。私は蓬莱の薬を飲んで月から追放された。

どこかで幽閉されている誰かと一緒にしないでくれる？」

「なるほど、では何故月から追放された貴女を連れ帰しに来るのですか？」

「多分私が月から追放されるときに伝説級の秘宝を何個か持ち出してきたからでしょうね」

「伝説級の秘宝ねえ…それも気になるけど今は蓬莱の薬についてよ。」

「貴女には蓬萊の薬の原物、もしくは作成方法を教えて欲しい」

「そんなもん知らないわよ。私は能力を使って協力しただけだし。作り方なら永琳えいりんが知っていると思うけど」

「そう、なら貴女の能力を研究すれば蓬萊の薬を作れるってことね」

「貴女何を言っているの？」

後少ししたら月の使者が私を連れ去りに来るのよ。

私の能力を研究してる暇なんて　　」

急に外が騒がしくなる。コルテスが襖を開けると空に奇妙な乗り物が飛んでいた。

兵士達が矢を射るが見えない壁に弾かれて乗り物には届かない。

「あれが月の使者ね」

コルテスは腰の剣を引き抜き構える。

「貴女一体何をする気!?!」

輝夜が立ち上がりコルテスに近寄る。

「貴女が月に連れて行かれないきゃ私は貴女を好きにだけ研究できる。なら答えは単純明快。私が月の使者を殺せばいいってことでしょ?」

「貴女ごときにそんなことが出来ると思っているの!?!」

月の使いを乗せた乗り物は着々と近寄ってくる。

「出来る出来ないはやってみなければわからないものでしょうに。  
端から諦めて<sup>はな</sup>いるなんて希望のかけらも無いわね」

コルテスは不敵な笑みを浮かべながらこちらを見てくる。

この馬鹿は命が惜しくないのか。それともよっぽど勝てる自身があるのか。

「クツ…勝手にしなさい。この命知らずが」

屋敷の庭に奇妙な乗り物が着陸した。

中から10人ほどの人が降りてくる。

手には突撃銃が握られている。

「絶望するのはまだ早いつて教えてあげる。

過程は消え去り結果だけが残る

『キング・クリムゾン』

「！！」

世界からこの場が隔離される。

T o B e C o n t i n u e d . . .

## 8話 日本【ジパング】（後書き）

今回は特にネタも出て来ず平凡に終わりました。

現在のコルテスの年齢は20歳。

捨食の魔法（不老の魔法）は不使用です。

身長は160cmぐらいと思ってください。

ただし帽子を含める全長は200cmぐらいになります。

作中に出てくる細身の剣とは『レイピア』のことです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

## 9話 実験【モルモット】

俺はとある極秘任務を遂行するために地上へと降り立った。

任務の内容は二つある

一つ目は、罪人である『蓬萊山 輝夜』の身柄の確保および所持している恐れのある軍用兵器の奪還。

二つ目は、月の頭脳『八意 永琳』の抹殺。

表向きにはこの罪人確保の任務のリーダーは八意になっているが実際は違う。

俺はとある軍の上官から不穏分子である八意を始末するように命令されている。

八意は月の仕組みをほぼ一人で作り上げた天才だ。

だが彼女の手柄を己の物にしようとしている権力者は少なくない。

無論八意のことを慕っている連中も大勢いる。

特に綿月姉妹は八意の弟子のような存在だ。

もし月で八意を暗殺なんてしたらどうなるかは目に見えている。

そこで蓬萊山を利用することになった。

元々八意は蓬萊山の従者だった。

多少は蓬萊山に思い入れがあったのだろう。

我々が蓬萊山を月に回収する任務が立ち上げられた後、すぐさま八意は構成員に立候補してきた。

ククク…この任務が成功したら俺にもやっとチャンスが回ってくるぜ。

八意は船に残って様子を監視すると言ってきた。

どうせ後で殺すことになるんだ。

今はその短い余生を味わっているがいいさ。

俺は地上に着いたのを確認すると、傍らに置いてあった突撃銃を手に取り船から降り立った。

穢れた地上の民達が俺達に矢を構えている。



そんな下等な武器で我々に傷を付けられる訳が無い。屋敷に目をやると目標の蓬莱山と金髪の女がこちらを見ていた。何やら話し合いをしているようだがよく聞き取れない。しばらくすると腰の剣を抜きこちらに構えてきた。そんな剣で月の戦闘服を切れる訳が無いだろうに、無知とは悲しいものだ。

気がついたら俺は屋敷の目の前にいた。

20メートルほど距離があったはずなのにいつの間にか5メートルほどまでに近寄っていた。

何かがおかしい。何か違和感を感じる。この違和感は一切なんだ。だ。

……あの金髪の女は一体どこに消えたんだ？

俺は急いで後ろに振り返るとそこには奇妙な光景が広がっていた。

大量に居た地上の民が全員倒れているのだ。

だが俺の部下たちは誰一人として倒れていない。

それにしても先ほどから妙に周りが明るい。

何事かと思つて空を見上げるとそこには先ほどの女と『太陽』があった。

その太陽の下で剣を掲げている女は不吉な笑みを浮かべていた。

全身に寒気が走る。こいつはまずい。

「総員退避しろ！！今すぐ強化外骨格【パワー・ド・アーマー】を船から取つて  
」

「残念、時間切れだよ。『メラゾーマ』」

突如、周りが火の海となる。轟々（ごうごう）と激しく音を立てながら炎が何かを燃やし尽くしている。

考えるまでも無くこれが俺の部下だと分かった。

先ほどの一撃で三人が消し炭となった。  
ありえない。何がどうなっているのだ。

我々の戦闘服は摂氏500 程度なら楽々耐えうる素材で出来ているんだぞ。

穢れた地上の民が穢れ無き月の民である我々をこんなにもいとも容易く殺すことが出来る筈がない。

「月の民って言うから期待したんだけど、まさかその程度じゃないよね？」

「う、うわああああああ」

部下の一人が手に持っていた銃を乱射する。

だがその銃弾は見えない壁に阻まれ女には当たらない。

「それが『銃』なんだ。もっと威力があるものだと思ってたけど大したこと無いね」

「クソッ、化け物かコイツは！！」

「通常の武装じゃ分が悪い。船から強化外骨格を取ってこい」

部下の一人が武器を取りに船へと向かった。

「あの乗り物が月の船なのね。壊さないように気をつけないと」

「お前は何者だ！！何故我々を妨害する。これは蓬莱山の差し金か？」

「蓬莱山…？違う違う、私は貴方達の持ち物と知識を貰うだけ。」

「そのためには不要な実験動物は排除しないとね」

コイツ頭が逝かれているのか？地上の民が我々の技術を使いこなせる訳が無い。

とりあえず今は時間稼ぎをして部下に強化外骨格を用意させなければ……

「ならば我々を殺す必要は無いだろう。」

「そもそも生かしておかなければ肝心の知識すら引き出せないぞ？」

「今回の実験は生憎そんなに実験動物が必要ではないの。」

「無駄だから二度は言わないよ？」

「貴方達みたいな邪魔者は現世から『消えて』もらうッ！！」

……

「穢れた地上の民が月の民に勝てるかと本気で思っているのかッ！！」

「そんなやり取りをしていると強化外骨格を取りに行っていた部下が銀色の鎧のような物に乗って戻ってきた。」

「ただいま戻りました！！」

「よし、すぐに操縦を俺に代われ」

男は強化外骨格に乗り込み背中についていた筒状の物体をこちらに向けた。

「消し飛べ、穢れた化け物がア！！」

筒状の兵器が火を噴き砲弾が射出された。  
普通に考えたら避けられない速度で砲弾が迫ってくる。

「無駄無駄無駄 『ザ・ワールド』」

この時俺は自らの勝利を確信していた。

この無反動砲は月の装甲車ですら楽々壊すことが出来る威力がある。  
いくら化け物とはいえこの攻撃が直撃すればタダでは済まないだろう。

そう、当たり前さえすれば……

「…なん…だと？」

気がついたら強化外骨格が爆発していた。

クツ… 奴に殺される前に（読者に）言っておくツ！

俺は今やつ有能力をほんのちよっぴりだが体験した

い…いや… 体験したというよりは全く理解を超えていたのだが…

あ… ありのまま 今起こった事を（読者に）話すぞ！

『俺はやつに無反動砲を撃つたと思ったら撃つた筈の弾丸が帰ってきた』

な… 何を言っているのかわからないと思うが俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった… 催眠術だとか超スピードだとかそんな  
なちゃんなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わった…

こうして男は何も知らないまま意識を混濁させていった。

「ここまでする気は無かったんだけど、どうやらかなり強力な武器

だったようね」

何故男の強化外骨格が爆発したか。

タネは至<sup>いた</sup>って単純である。

時間を止めて弾頭の方向を入れ替えただけである。

無論この行為をこの場で認知できた者はこの場には二名しかいない。  
『ザ・ワールド』を使用したコルテス本人と『永遠と須臾を操る程度の能力』により零に等しい時間すら認知することの出来る蓬萊山輝夜のみである。

「さて、他に面白い兵器は無いの？」

まるで新しい玩具を探しているかのように見つめてくる女を目にした月の使者たちは…

「俺、無事に月に帰ることが出来たら結婚するんだ」

「嫌だ、死にたくない！」

「畏だ！これは畏だ！八意が僕を陥れるために仕組んだ畏だ！」

などと言った喚き声を上げている。

すっかり戦う気を失った月の使者たちは船に乗り込み逃げ出そうとするが、

「本当に残念だわ。貴方達には悪いけど　　ここでお終いなものよ」

船の中から銀髪の女性が出てくる。その手には弓と矢が握られている。

「「「なッ！！助ける、八意。いや助けてください！！」「」」

月の使者たちはもはや形振り構っていられなくなっているようだ。

「でも死ぬ前に私を殺そうとしていたことは謝ってもらわないと。ねえ、貴方達。とりあえずそこで跪きなさい」

八意は月の使者の言葉には耳を傾けてはいないようだ。

「助けてくれ、お願いだ!!」

「嫌だ、死にたくなーい!」

「何でもするからよオ!!」

もはやプライドの欠片も残っていないようで無様にも地面に頭を擦り付けて土下座している。

「あらあら、本当に跪くのね。」

でも、命乞いを私にしたところで意味は無いわよ?」

「「「えっ」「」」

八意は手に持っていた弓を構え矢を三本射る。

地面に這い蹲っていた三人はなす術も無く頭を射抜かれて絶命した。

「さてと、貴女のお相手は私がすればいいのかしら?」

コルテスに構えた弓をを向けつつ八意は殺気を出している。

「えッ…えーりん!!」

突如屋敷の中で外の様子を観戦していた輝夜が庭に飛び出してきた。そしてそのまま八意に抱きつく。

「おや姫様、お元気そうで何よりです」

抱きついてきた蓬萊山の頭を撫でつつも殺気を出すのを止めない。

「永琳、この人は敵じゃない」

「敵じゃない…ですか？ですが現に私達の同族を四人も殺しているじゃないですか」

「いや、貴女も三人殺したでしょうが」

コルテスが会話に口を挟む。

「どうやらこちらでも戦う気は無いようで魔法で現場の後処理をしているようだ。」

「あっという間に死体や壊れた兵器の残骸が消えていき見る見る元の華麗な屋敷の姿へと戻ってゆく。」

「凄い…一体何がどうなっているのかしらね」

蓬萊山が呆然とその様子を見ている。

「魔法で作り出した空間に放り込んでいるだけだよ。」

「後片付けが終わったら適幻術魔法と記憶操作を使って貴女が月に帰ったことにしておくから」

「貴女はなぜ姫様の面倒をそこまで見るのか理由が分からない」

「恩は売っておいた方がいいからね、それに私は貴方達二人には聞きたいことがあるから」

「聞きたいこと…?」

「そう、貴女が作り出したという『蓬萊の薬』の作成方法について  
ね」

T o B e C o n t i n u e d . . .



## 9話 実験【モルモット】（後書き）

今回の台詞ネタ

ダメギ 夜神月 バラライカ（ブラックラグーン）

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

## 10話 不死「ネバーダイ」

私は昔読んだ竹取物語の終盤の件をそっくりそのまま記憶操作で記憶に刷り込ませた。

ついでに今まで世話になった地上の民に口止め料として『蓬萊の薬』を置いていくことになった。

完全に証拠を隠滅した後は『八意 永琳』が乗ってきた船を使い手ごろな森林に身を隠すことにした。

「人払いの魔法をかけておいたから普通の人間や陰陽師は近寄れないわ」

「では話し合いを始める前に自己紹介でもしましょう。」

私の名前は八意永琳。月では月の頭脳と呼ばれていた」

「私の名前はマルティナ コルテス。大きな夢を抱いている魔法使いよ」

「その夢を実現するために私が作った蓬萊の薬が必要ってわけか」

「正確にはその薬の効力を知り夢を実現するために使えるなら利用させてもらうだけなんだけどね」

私の夢である黄金練成【アルス・マグナ】を実現するためにはいくつかの条件がある。

必要なものは『挫けぬ精神』である。

私の魔法の先にあるものこそが、魔術がさらに先に進むべき道なのである。

必要なものは『強靱な肉体』である。

膨大な魔力を制御できる肉体でなくてはならない。

膨大な魔力の干渉を受けたとしても滅びずに、死なない肉体でなければならぬ。

必要なものは『穢れ無き360名以上の魂』である。

穢れなき魂には、強い力があるからである。

必要なものは『14の材料』である。

私自身が忘れないように、この材料を私の魔道書に書き記しておく。

必要なものは『能力』である。

私がありとあらゆることを理解できる『能力』を持たなければならぬ。

自身の『能力』を理解した私は、360名の魂を集めて賢者の石を作成。

そのから『新しいもの』を生み出すであろう。

『生まれたもの』は目醒める。14の材料を吸収して……

『賢者の石』は更なる力を生み出し、黄金練成【アルス＝マグナ】は完成するだろう。

最後に必要なものは場所である。

月に降り立ち魔術を行うための下準備が必要だ……

いつか起こる「幻想月面戦争」の時を待て……それが『完成の時』であろう……

全てが完了したとき私は『神ならざる身にて天上の意思に辿りつくもの』となるだろう。

これが私が目指している夢の全貌だ。

無論、他の計画もあるが一番成功率が高いのはこの計画だ。

「貴女は永遠に死ねない苦しみを味わう気があるの？」

「永遠に死ねないか。私は死ねないのではなく死なないと考えるね。永遠に生きるのならそれは無限の可能性があり数多の出会いがあるということでしょう？」

「……………分かった。そこまで覚悟があるなら止めはしない。

作成方法は伝えられないけど効力なら教えられる。

そして貴女が望むなら蓬莱の薬を譲ってあげる。

この薬は文字通り不老不死になれる。

つまり体が時間の干渉を受けなくなるってことだ。

ついでに強靱な自己再生能力も得られるわ。

たとえ肉体が消え去っても魂が消えることは無くなり無から肉体を生成し復活することが出来る」

完璧だ。私が想定していた効力にぴったり当てはまる。

これならば円滑に私の計画を進めることが出来るだろう。

「理解したわ。その効力なら私の夢に利用することが出来そうね。

でもどうして私にその薬を譲ってくれるの？」

私は確かに月の使者を殺すのを手助けしたが八意の戦闘能力は私をはるかに凌駕していた。

彼女なら一人でもあの連中を片付けられたらう。

「貴女は私に似ているからな」

「似ている…？」

「私も昔は夢を追い求めていた時期があっただけ。今の貴女はその時の私にそっくりなの」

八意はどこか遠い昔のことを思い浮かべているようだった。

「職業も種族も生まれも違うけれど探求者という点では同じなのかもね」

「そうかもしれないわね」

八意が近くの戸棚を漁り一つの瓶を取り出してきた。

「この中に蓬莱の薬が入っている。」

煮るなり焼くなり好きにするといいわ」

瓶には透明な液体が入っていた。

今ここでこの薬を飲めば私は不老不死になるだろう。私が瓶に口を付けようとした時、八意が口を開いた。

「ただし、過程や方法を無視して結果だけを求めてはいけない。」

結果だけを求めてしまったら私のようになるわ」

私は手を止めた。

もし今この薬を飲み干してしまったら私は正真正銘の化け物になるだろう。

私の心は壊れかけている。

実際、月の使者を殺すときですら実験としか思わなかった。

それでも私のことを想ってくれている人がいる間は以前の私のまま

で過ごそう。

「八意さん、大切なことを思い出させてくれてありがとうございます」

「後輩に同じ道を進んで欲しくなかっただけよ。」

あと私のことは永琳でいいわ」

その後月の兵器や最先端の科学技術についてのレクチャーをうけた。

どれもこれもが役に立つものばかりで私の魔法に転用できそうなモノが沢山あった。

ちなみに輝夜はずっと寝ていた。

3日後

「頑張つてらっしゃい」

「また私の遊び相手になってよね。永琳だけじゃ暇なんだから」

「やらなければならぬことが片付いたら会いに来るよ。」

それじゃあ行ってくるね」

饑別の言葉を貰い私は富士山へと向かうことにした。

二人は月の民から逃げつつ生活するようだ。

いつか二人が定住できるような土地を見つけてあげるとしよう。

噂話によれば石長姫は富士山の頂上に住んでいるそうだ。

なんであんな高い山にわざわざ住んでいるかは分からないが物好きな神だ。

山を登り始めると何やら都からの使い達が登山をしているようだ。

そしてその集団のあとを一人の少女がつけている。

このまま進んでしまったら山頂でかち合ってしまっただろう。  
しょうがなく私は使い達と少女の後をつけることにした。

結局山頂に着くには一日かかった。

無駄に高いところに住みやがって…馬鹿と煙は高いところに昇るとは本当のようだ。

途中で尾行していた少女が疲れて倒れたのを見かねて使い達の一人の岩笠いはかさが助けていた。

その後打ち解けてともに山を登っていたが一体何の用があつて少女はあの集団をつけていたのだろうか。

物陰に身を潜めつつ様子を見てると何やら様子がおかしい。

岩笠が手に持っていた壺を燃やそうとすると木花咲耶姫コノハナノサクヤヒメという神が現れて止めると言い出した。

その後の話を聞いていると、どうやら壺の中身は永琳が残した蓬莱の薬のようだ。

そういえば竹取物語の終盤に不老不死の薬を富士山の頂上で燃やす描写があつたことを思い出した。

まさかその通りになるとは思わなかったがその後の流れが私の知っている竹取物語とはまるで違った。

どうやら岩笠は壺の中身を秘密にしていたようでその秘密を知つた部下を皆殺しにしてしまったのだ。

その後、岩笠と少女は壺を持って下山していった。

私も石長姫が富士の山に居ないことを知り下山していたとき事件が起こつた。

なんと休憩中の岩笠を少女が突き落としたのだ。

急いで飛び出し岩笠の様子を確認したが潰れたトマトのようになっていた。

これは即死だろう。振り返ると先ほどの少女が蓬莱の薬の飲もうとしている。

「ちょっと待って

」

だがもうすでに遅かった。

蓬莱の薬を飲み干した少女がのた打ち回っている。

蓬莱の薬の副作用で普通の人間が飲んだら激しい苦痛があると永琳が言っていたな

真っ黒な髪が白く染まってゆく。黒い瞳が赤く染まる。

「うわあああああああ」

「『ラリホー』!!!」

とっさに睡眠魔法を行使して少女を眠らせる。

これで苦痛からは逃れられるだろう。

だがこのままこの少女を放置するわけにも行かないしどうするか。そんなことを考えていると、私の背後に何者かの気配を感じた。

後ろを見ると奇妙なスキマが開いていた。

スキマの中には沢山の目がありとても気味が悪い。

しばらく固まっていると、突然スキマの中から一人の女性が飛び出してきた。

T o B e C o n t i n u e d . . .



10話 不死【ネバーダイ】（後書き）

段々脇道に逸れていつている感じがします。

もうちょっとギャグっぽい話を書きたいなあ。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

キャラ設定および魔法まとめ(仮) 4月29日更新(前書き)

新キャラまたは新しい魔法などが出たら更新いたします  
ネタバレが多いので気になる方は閲覧注意  
マルチナの見た目についてURLを更新しました。

## キャラ設定および魔法まとめ(仮) 4月29日更新

主人公

名 マルティナ  
Martina

姓 コルテス  
Cortes

性別 女

年齢 A.D.655年生まれ

捨虫の魔法を覚えたので外見は20歳の時からから変化無し  
(12話時)

種族 半人前の魔法使い(10話時)

『一人前の魔法使い』(12話時)

能力『見聞きしたことを理解し引き出す程度の能力』

未来から来た外来人の父とある魔法使いの母との間に出来た子供。母はマルティナを産んだ後すぐに死去した。ことになってはいるが真実は父と紫しか知らない。

その強大な能力を暴走させないように母と八雲紫がとある封印を施している。

封印は緩んできており『見聞きしたことを理解する程度の能力』が中途半端ではあるが働いている。

そのおかげで聞いたことの無い言語を理解し話したり低級の魔道書をいきなり読むことが出来る

幼少期から家に籠って本を読み漁る生活を続けていた。

その影響か人付き合いをあまり好まない性格になっている。

趣味が合うか興味が湧いた者としか付き合い合わないようだ。

魔法の研究の為なら自らの命すら惜しまず、簡単に他人の命すら弄ぶ一面を持っている。

性格はある程度は真面目だが、天然な一面がある(例 異性をまっ

たく気にしない)  
基本的にどんな相手にも敬語は使用しないが、目的がある場合は使用することもある  
極悪非道とまでは行かないが、目的のためなら卑劣なことも平気で行う  
友人や仲間に手を出したりまではしないが、羽目を外すとどうなるかは分からない

彼女の能力である『見聞きしたことを理解し引き出す程度の能力』とは実際に見たモノや本に書かれているモノを魔法で再現できる能力である。

ただし生命を作り出したり天災規模の現象を再現することは出来ない。

能力により魔法の情報を引き出しているため基本的に詠唱は必要ない。  
その代わり通常の魔法と比べ魔力の消費量が多くなっている欠点がある。

錬金術との応用である程度の大きさの無機物を作り出すことが可能。  
彼女の能力の真価は黄金アルス・マグナ錬成が完成したときに発揮されるであろう。

見たい目(18話)

『ゲニ子』(ゲーニッツがミッドナイトブリスで女性化した姿)

大体こんな感じ

<http://dic.pixiv.net/a/%E3%82%B2%E3%83%8B%E5%AD%90>

<http://matome.naver.jp/odai/2127442051783648801>

服の色は黒、頭に魔女を連想させる帽子を被っています。

帽子にはパチュリーや魅魔のような太陽と月を連想させる金色の飾りがついています。

髪の色は金、目の色は青、身長は165cm、スリーサイズは上から86・57・84、Eカップ

mugen動画を見ていたらピンと来た。

その姿は俺のイメージしているマルティナそのものだった。

何？魔法使いじゃなくて牧師じゃないか？気にするな、細かい事は投げ捨てる。

モブキャラ達

名 天魔てんま

姓 鈴科すずしな

性別 男：DAZE

年齢 約A・D・630年生まれ

種族 『鴉天狗』

能力 『ありとあらゆるものを入れ替える程度の能力』

生まれは日本。妖怪の山出身。

強力すぎる能力により恐れられた捨て子。

若くして自身の能力を使いこなし、中妖怪の中では天下無敵を誇っている。

もう50年程生きたら大妖怪に仲間入り出来る程の実力を持っている。

最近、自分の妖気の量に不満を持っている模様。

そのため、修行と称して日本各地を回り戦闘を繰り返している。

昔は鬼神に喧嘩を売って、ボコボコにされた事もあるとか。

無駄な殺生は行わない性格だが、相手が吐き気を催す邪悪や本気で殺しにかかってくる場合は容赦をしない。

マルティナの時は、紫に大虐殺を行った下衆げすと伝えられていたため戦闘を開始した。

何とか和解できたが、本人はマルティナが本当に大虐殺をしていた

事は知らない。

妖怪の上に立つ気質を持っており、カリスマの片鱗がすでに見え隠れしている。

能力で自身の性別を入れ替えている可能性があるが、可能性でしかない。

飛ぶ速度は妖怪の山の天狗の中でも最速。

彼の能力の『ありとあらゆるものを入れ替える程度の能力』は八雲紫の境界操作の相互交換に近い能力である。

向き、気温、性別、位置、硬度、意識、等といった殆どのものを入れ替えられる。

効果範囲は本人の目が届く辺りまで、継続時間は解除するまで続く。自身の体に関わる何かを入れ替えることに関しては、同時にいくつも入れ替えられるが、その他のものは同時に1つしか入れ替えられない。

常時展開しているため、『ザ・ワールド』や『ラリホー』などは効き目が無い。

『イオナズン』などの広範囲を一度になぎ払える魔法については入れ替えられないのだが、術者と入れ替わればいいだけなので、あまり効果的ではない。

元ネタ

『とある魔術の禁書目録』インデックスの登場人物の1人『一方通行』アクセラレイタ

見た目は髪が黒くなり目の色が茶色になっただけです。

喋り方は原作に忠実に書いています。

台詞を書いていて楽しいのですが、時間がかかるのが難点です。

性格は、原作の一方通行をかなりマイルドにしたものです。

原作では男か女かはつきりしていませんが、そこはこの小説も同じです。

名 アーカード Allucard  
姓 スカーレット Scarlet  
性別 男  
年齢 約B・C・2000年生まれ  
種族 『吸血鬼』  
能力 『命と同化する程度の能力』

生まれは魔界

吸血鬼の神祖の眷属として過ごしていたが、死んでしまったため暇になり地上へ出てきた。

人間に関心を持っており時折教会の者と争う事がある。

本人にとっては人の可能性を垣間見る事ができる充実した時間らしいが、人間からしたら地獄でしかない。

吸血鬼ではあるものの太陽は大嫌いなだけで特に体に害は無い。

流れる水は、本人曰く弱点でもなんでもない。

最早吸血鬼よりは、邪神と呼んだ方がいらいぐらいの存在。

魔界に暮らしていた頃は毎日のように殺し合いをしていたようだ。

別の魔界の神の神綺しんぎとも知り合いらしい。

彼の能力の『命と同化する程度の能力』はありとあらゆる生命を取り込む能力だ。

取り込んだ命は、自らの支配下に置くことで、下僕として操る事ができる。

他にも取り込んだ命をすべて開放することで亡者の河を作り出すことすら可能。

命のストックを1つ消費することで体を完全に再生することも可能。吸血鬼の能力と合わさることで無敵に近い存在になっている。

元ネタ

『HELLSING』の登場人物の1人『Alucard』  
ヘルシング アーカード

見た目は髪の色がレミアアと同じになって、背中に翼を生やしただけ  
です。

喋り方は原作再現…なのですがあんなにかっこいい台詞を再現し  
れてません。

性格は、原作通り傍若無人ですが戦闘狂の一面は抑えています。  
能力も原作基準で命のストックは340万程度はあります。  
原作のように髭を生やしたりロリになったりは出来ません。

魔法の数が増えてきたのでまとめ

特に名称を決めていない魔法もあります

右に行くほど威力が大きくなります

精霊魔法系

火焰魔法『メラ』 『メラミ』 『メラゾーマ』 『メラガイアー』 火炎  
弾を打ち出す魔法

爆発魔法『イオ』 『イオラ』 『イオナズン』 『イオグランデ』 爆発  
を起こす魔法

冷却魔法『ヒヤド』 『ヒヤダルコ』 『マヒヤド』 『マヒヤデドス』  
冷気を操る魔法

竜巻魔法『バギ』 『バギマ』 『バギクロス』 『バギムーチョ』 竜巻  
で相手を切り裂く魔法

極大消滅魔法『メドローア』 精霊魔法系最強の魔法の一つ、物理的  
な防御は不可能

精神操作魔法系

幻術魔法『マヌーサ』 対象に任意の幻覚を見せる



混乱魔法『メダパニ』対象の意識を混乱させる  
睡眠魔法『ラリホー』『ラリホーム』眠気を誘い意識を混濁させる、  
後者は範囲指定で眠らせられる  
覚醒魔法『ザメハ』対象の意識を覚醒させる、気絶や睡眠状態から  
回復させる

#### 身体強化系魔法

硬化魔法『スカラ』物理攻撃を防ぐ防御結界を生成する  
反射魔法『マホカント』魔力妖気靈気を帯びた攻撃を自動反射する  
加速魔法『ピオラ』飛行速度を上昇させる。およそ5倍程度、メイ  
ド・イン・ヘブンと合わせることで50倍まで加速可能  
筋力強化魔法『バイキルト』筋力を上昇させる  
回復魔法『ホイミ』『ベホイミ』『ベホマ』肉体を再構築して怪我  
を治す

『捨食の魔法』魔力を消費することで食事をしなくても生きていけるようになる

『捨虫の魔法』不老になることの出来る魔法。この魔法を覚えたら  
1人前の魔法使いになれる。10話時点では習得はしていない。1  
2話にて習得した模様。

#### 空間操作魔法系

停止魔法『ザ・ワールド』時間を止めれば何でも出来る

超越魔法『キング・クリムゾン』時間を飛ばして緊急回避

逆行魔法『バイツァ・ダスト』対象を1時間ほど前の状態に戻す

加速魔法『メイド・イン・ヘブン』対象の動きを10倍ほどに加速  
させる、『ピオラ』と合わせることで50倍まで加速可能

空間魔法『魅惑的な魔法空間』文字通り空間を作り出す魔法。大き  
さは4畳半程度、剣で空中を切ると隙間みたいなのが開き、そこか  
ら出入りする

## 錬金術系

- 『物質生成』 大気や地面を使い新たな物質を作る
- 『分子構成操作』 分子を組み替え性質を切り替える
- 『分子密度操作』 分子の密度を組み替え大きさを変更する
- 『瞬間錬金』リメン・マゲナ 鏃で傷つけた物を灼熱の黄金に変換する、1秒間に10回ほど連射可能

## 未分類の魔法

- 『認識阻害』デコグニション 格下の相手から認知されないようにする
- 『消音魔法』 音を外部に漏れないようにする魔法

## マジックアイテム

- 『レイピア』 普通の魔法使いが使う杖のような役割を果たしている
- 『獣の槍』 対妖怪用の槍、周囲の妖気を魔力に変換可能、瘴気や靈気にも対応する予定
- 『ロングコート』 防御魔法により耐久力強化、空間操作により収納空間を増量を施してある、最早出番はない
- 『蓬萊の薬』 所持しているだけで特に服用はしていない、月の民以外には必ず副作用がある

長い年月を活きたモノには強い力が宿る。

それは運であったり能力であったりと様々である。

『境界の境目』 紫のスキマを束ねる布切れ、あらゆる境界を安定化させる効力がある

『天魔の羽根』 天魔自身の能力を帯びており常識には囚われない力を秘めている

『不尽の煙』 石長姫の不尽の力が宿った煙

『神祖の骨』 神祖とはキリストの事、神を冒瀆する気満々のようだ

『伊吹の角』 かの有名な伊吹童子の角、密度を操る効力を持っている

『虹龍の鱗』 最高位の竜神の鱗、守護する龍脈が無く世界各地を転

々としている

『優曇華』 3千年に1度だけ咲くといわれている花

『死靈秘法』 別名ネクロノミコン、魂を操る秘術が記されている

『海竜の牙』 フロリダ半島の先端、大西洋にあるプエルトリコ、バミューダ諸島を結んだ三角形の海域に住む伝説の生き物の牙

『因幡の兎毛』 日本神話に出てくる因幡の白兎、長い年月を生きておりそれ相応の運を持つ

『ノアの方舟』 伝説の木材により建造された船

『空亡の髪』 空亡とは閻を司る大妖怪、はるか昔に天照大神と喧嘩をして敗れたらしい

『純粋な吸血鬼の血』 吸血鬼の神祖の血、現在は死去しており生きていない模様

『武神の御柱』 八坂神奈子の御柱、強力な神気と能力を宿している

魔術について

この小説では魔法とは魔術を作り出す過程で生まれた技ということになっております。

ゆえに魔術を使える魔法使いは魔術師と呼ばれます。

『賢者の石』 エリクサー魔法使い達のたどり着く到達点、どのような効果や形をしているかは定まっていない

『黄金錬成』 アルス・マゲナ術者の認識通りに世界を作り変える魔術、発動に成功したとき術者は神ならざる身にて天上の意思に辿りつくものとなるだろう

## 11話 死別【ピリプメント】（前書き）

岩笠さんが死んだことには一切触れていません。

マルティナは薄情者ではありませんが死んでしまったのならしょうがないと考えるポジティブな魔法使いです。

## 11話 死別【ビリーフメント】

虚空のスキマから女性が降りてきた。

スキマの両端にはリボンがついているがそれでも気味が悪いのに変わりはない。

私は記憶を漁りこんなことが出来る妖怪を探す。

ふと父さんが話していたスキマ妖怪のことを思い出す。

確かどこにでも現れる神出鬼没な女だと離していた。

案の定、目の前にいる女は日本に来たもう一つの目的である『八雲紫』本人だった。

「お忙しそうなところ悪いのだけれども、貴方に話したいことがあるのよ」

幸い目の前の白髪になってしまった少女の容態は安定したようだ。

私はコートの内側から莫<sup>1</sup>蔭を取り出しその上に寝かす。

そして目の前のいかにも胡散臭そうな女を睨みつける。

「あらあら、そんなに警戒しなくてもとって食べたりなんてしないわよ?」

説得力がまるで無い。

父さんからはよく注意して掛かるようにと言われていた。

言付けを話したらさっさとこの場所から離れることにしよう。

「実は父さんから言付けを預かっている」

「そのことならとっくに知っているわ」

今、八雲はなんと言った？

『そのことなら』とつくに知っていると言っていた。

よく考えたらおかしな話である。

神出鬼没なスキマ妖怪が日本にとどまっているなんてありえない。そもそも一箇所に定住する必要が無いからである。

ではなぜ父さんは私に八雲を探させる旅をさせたのだろうか。

……きつと私に外の世界を見させるため口実だったのだろうか。

元から父さんと八雲はグルだったのだ。

時折感じていた奇妙な視線は八雲が私の動きを監視していたからなのだろう。

夜中に美鈴が姿をくらましていたのは八雲と話でもしていたのか？だとしたら美鈴も八雲や父さんとグルだったのだろうか。

なぜ私はこんな単純なことに気が付けなかったのだろうか。

信頼できる父さんが嘘をつくとは思っていなかったからだろうか。

私の頭の中ではもはやどれが真でどれが嘘が分からなくなっていた。混乱している私に八雲が話しかけてきた。

「確かに貴女の父と私は協力してあなたを見守っていたわ。

『紅 美鈴』を呼び寄せたのも私だけれど旅を共にしていたのは彼女自身の判断ですわ。

特に疑う必要は無くてよ？」

相変わらず胡散臭い言葉遣いではあったがどこか安心した。

きつと美鈴が自分の意思と一緒に旅していたことを知れたからだろう。

この言葉が真実かは分からないが今はそういうことにしておこう。

「八雲さんが父の言付けを知っているのは分かりました。

それで私に話したいことは何でしょうか」

「貴女の父親が亡くなったわ」

「え？」

「今から386日前の深夜だったかしらね。」

貴女が日本に到着したら話をするように言われていたの。

忙しそうだったからこれでもタイミングを見計らって現れたのよ」

「…」

「そうそう、伝言を預かっているわ。」

『俺の死を気にせずに自由に生きる。つらいことがあれば八雲紫を

頼れ』

と言っていたわ」

「…」

「…元気を出しなさい。人はいつか死ぬものよ。」

あなたもそれはわかっていてるでしょう？」

「…嘘だ」

「嘘じゃないわ、ただ頑張りすぎたのよ。」

寿命を延ばす術は幾つかあったのだけれども彼は望んでいなかった。

彼は人間のまま逝ったわ」

上っ面では悲しそうに話しているがどうせ内心ではあざ笑っているのだらう。

『嗚呼、利用できる人間がまた一人減ってしまった』とかその程度なのだ。  
きつとそうだ。そうに違いない。そして次は私を利用するのだろう。  
こんな奴に利用されてたまるか。私が利用し返してやる。

「一つ………手伝ってもらいたいことがあるの」

「何かしら？」

『境界の境目』 『天魔の羽根』 『不尽の煙』 『神祖の骨』  
『伊吹の角』 『虹龍の鱗』 『優曇華』 『死靈秘法』 『海竜の牙』  
『因幡の兔毛』 『ノアの方舟』 『空亡の髪』 『純粋な吸血鬼の血』  
『武神の御柱』

この14の材料がある場所を教えてください」

「分かったわ、その代わりに交換条件があるのだけれども良いかしら  
？」

「『幻想月面戦争』に協力して欲しいんでしょう」

それ以外に考えられない。

「察しがいいようね、その通りよ。  
如何せん人員不足で困っていましたの」

何が察しがいいだ。この状況でそれ以外にやってほしいことがある  
訳が無い。

「それじゃあ決行日までにさっき言った材料の情報を集めておいて  
ね。」



もし決行日に揃っていないようなら私は月には行かないから」

「それでは今渡せる『境界の境目』を渡しておくわね」

八雲はスキマを開くとその両端に付いているリボンを一つ解いて渡してきた。

「このリボンには境界の境目を操作する力があるわ。  
私が長年使っていることで変質したのでしょね」

「どれじゃあ今後ともよろしくね。『八雲紫』」

「ええ、また会いましょうね。『マルティナ』  
私を呼びたかったら名前を呟くことね」

八雲は振り向くとすぐさまスキマに飲み込まれていった。  
つくづく便利な能力だなあ。何れは研究したいものだ。  
これが私と八雲紫との奇妙な出会いの始まりであった。

「う…ん…」

どうやら先ほどの少女が目を覚ましたようだ。

私はこの場を離れた方がいいのだろうか。

蓬莱の薬を服用したからといって私とあまり歳の離れていない少女だ。

せめて話だけでも聞いてあげようか。

「目が覚めたようね」

「ッ！！」

この辺りじゃ金髪は珍しいから怖がられて当たり前だ。とりあえず落ち着かせてあげた方がいいのだろうか。

「私は貴女を取って食べたなんてしないわ」

「ば、化け物！！」

化け物と自覚はあるがやはり直に言われると響くなあ。

私とあまり年齢差も無いというのに…まあこれが普通の反応なのだろう。

よく考えたら私に人間の知り合いって居ないような気がしてきた。

「別に化け物って呼んでもいいから動かないですよ」

「へ？」

私は時間を止めて服を脱がし肉体的な異常が無いか調べてみる。

そこ、『ザ・ワールド』の無駄無駄とか言わない。

服を脱がすときに暴れられたら困るから時間の止めただけだ。

もし異常があるようなら永琳に見せに行かなければならないからだ。いや、私にレスビアン的な趣味は無い。女の知り合いしか居ないが断じて無いから。

誰に向かっていつているのだろうか自分でも分からなくなつた。

「キヤアアアアアアア」

「はい、体毛と眼の色素が抜け落ちている以外に異常は無し…」と

「このツ！！服を返せ！！変態！！」

少女が辺りに落ちている石ころを投げってくる。

「はいはい、分かりましたよーっと」

化け物と言われた事は結構あるが変態は初めてだ。  
まだ同性なのだから別にいいだろうに。

「はあっ…はあっ…」

暴れ疲れたようで息が上がってしまったている。

この程度で息が上がるとかありえん（笑）

きつと良い所のお嬢様か何かだったのだろうか。

そりゃ私も領主の娘だったのだからお嬢様ではあるが…

「落ち着いた？」

「……………」

すっかり嫌われているなあ。

私自身も年上としか関係を持ったことが無いから年下や同年代の相手に対する接し方がよく分からないのがきつい。

しばらく口も利かずにじっとしていると突如ぐうと腹の音がなった。  
私は何も食べなくても生きていけるので十中八九この少女の腹の音だ。

「ッ!？」

突如なつてしまった腹の音に顔を真つ赤にする少女。腹が減つたのなら言ってくればよかったのになあ。

昔の私もこんな感じだったのかと思いつつコートのポケットを漁る。干し肉、赤ワイン、干し柿が出てきた。

普段から保存の利くものしか持ち歩いていないので当然といえば当然だが。

氷でグラスを作りワインを注ぎ手渡す。

ものめずらしそうな眼で見ている少女を見つづつワインに口をつける。たしか家から出るときに適当に見繕つたものだったはずだから結構値が張るはずだ。

まあワインなんて飲めたら変わらないかと思つているのでそんなことどうでもいいのだが。

「……………『ふじわらのもじゅう藤原妹紅』」

「それが貴女の名前？」

「……………はい」

「私の名前は『マルティナ コルテス』。マルティナでいいわ」

「えと…マルティナさん…」

「いや呼び捨てでいいよ。どうせあまり年も離れてないようだし」

「は、はい…」

その後干し肉と干し柿を食べ多少元気になったようだ。

鏡を見せたら髪が真っ白になっていることにものすごく驚いていたようだ。

私にとつては蓬莱の薬を服用してなお生きている妹紅の方が驚きだったのだが。

蓬莱の薬は月の民のために作られたものであり私ですら副作用に耐えられるかは分からないらしい。

そのリスクをどう減らすかが私の腕の見せ所だ。

妹紅の腹を満たしたので会話を再開することにする。

「それで…なんで『蓬莱の薬』を飲んだの？」

「私の父は蓬莱山輝夜という女に惚れていました」

「……………」

何がなんだか分からない…

なぜここで輝夜の話が出てくるのだろうか。

「輝夜は父に無理難題を吹っかけて弄びました。

その結果父は皆からの信用を失いました。

だから…せめてあの憎たらしい輝夜に復讐をしようと思った…」

なるほど、輝夜から話に聞いていた五人の貴族のうちの一人の娘か。そういえば私が記憶を操作して月に帰った事しておいたんだっとな。

「月に帰ってしまっていた、というわけね」

「そうです。

そこであいつが残した薬を奪って困らしてやるつもりで…」

これはどうしたらいいのだろうか。  
私が真実を教えたらきつと後を追いかけるだろう。  
だがいくら不老不死でも妖怪に立ち向かう力を妹紅は持っていない。  
どうするべきか…魔法を教えようにも肝心の魔力が無いようだし…  
私に妖術は扱えないし、これは一度美鈴と藍の助言を仰ぐしかないか。

「それでこの薬を飲んだってわけね」

「そうです…私はこれからどうしたらいいんでしょうか」

妹紅は俯き泣きそうになっていた。

「ついて来なさい」

「え？」

その真つ赤な瞳を見開きつつ妹紅は驚いていた。

「妹紅が一人前になるまで私が貴女の面倒を見る。

まあ4、5歳ぐらいしか離れてないけどよろしくね」

「はい!!」

私は始めて自分から友人を作った。  
きつと私は父さんを失った悲しみを紛らわしたかったのだろう。

T  
O  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

## 11話 死別【ピリブメント】（後書き）

もこたんが仲間になったぞ。

これからはパーティーメンバーが段々増える予定です。

マルティナのマントの中には4畳半部屋程度の空間が広がっており  
その中に『獣の槍』や魔道書を収納しています。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。



12話 反射【リフレクション】（前書き）

いろいろな意味でやりすぎた感が否めません

## 12話 反射【リフレクション】

私達は『八雲 紫』もとい『スキマ妖怪』から石長姫の居場所について情報を貰い目的地向かっていた。

妹紅は空を飛ぶことが出来ないので徒歩となったがたまにはゆっくり旅をするのも良いだろう。

ついでに妹紅も体力をつけることが出来るだろうし………蓬莱人って筋肉の量が増えたりするのだろうか？

腹は減るようだから基本的なところは変わらないのか。

いやでも不老なのだから成長もしないし筋肉も増えないのでは。

考えているときりが無いのでこの事は後でじっくり考えることにしておく。

そうそう、私は『捨虫の魔法』を会得することにした。

理由としては普通の人間としての寿命で私の魔術は完成しないからだ。

そして私のことを待っている人間がいなくなったからだ。

蓬莱の薬を飲んでしまえばそんな魔法使う必要なんて無いだろうが私は無謀な賭けをしたくは無い。

副作用が出る可能性を限りなく低くしない限り私は蓬莱の薬を服用はしない。

魔法においてもっとも深く関わってくるのは運だ。

長年生きた者や古くから存在する物はそれ相応の運が宿る。

今回の不尽の煙は無限に近い魔力をうまく操るための媒体にするために使う。

出来れば石長姫の力を奪う……借りることが出来るのならば苦労はないのだが神は気まぐれだ。

私は神をその身に降ろすことは出来ないしやろうとも思わない。

そこで確実な不尽の力の片鱗を備えている煙を利用することにした。どんなにケチな神でも1年中出している煙ぐらいはくれるだろう。

その様なことを考えながら妹紅の様子を横目で見つつ山頂を目指していたら1人の少年が飛び降りてきた。

少年は黒い短髪に黒い瞳：普通の日本人に近い顔立ちと背格好をしていた。

背中には大きく立派な漆黒の羽を携えていた。

どうやら天狗か何かのようだが私の記憶にある天狗とは着ている服がまるで違う。

囚人服のような横じま模様の服を着ていて時代錯誤もいいところである。

いや、私も人の事は言えないが妖怪は何かと変な服装を好むようだ。

「悪リイが、こっから先は一方通行だ。侵入は禁止つてなア！」

どうやらこの山は目の前にいる天狗の縄張りのようだ。  
だからといって目的を諦める私ではないのだが。

「ちよつと山頂に行くだけだからさ。通してくれても良いでしょ？」

「あアン？通らせるわけがねエだろうが！」

少年は私たちを睨み怖がらせようとしているのだろうが、正直大して怖くない。

まだ人型なだけマシだ。

これが人型ではないのなら私も多少怖がったりしただろう。

それに妖気の量もあまり多くない。

精精せいせい、中の中程度といった所だろう。

「ヒイ！！！」

一方、妹紅の方はというと滅茶苦茶怖がっている。  
こんなチンピラ風情のモヤシに怯えてちゃこの世界じゃ生きていけないぞ。

「はぁ……………ほら、こんなモヤシなんて無視していくよ」

「えっ、ちょっと引つ張らないでくださいよ」

妹紅の手を引つ張り山頂へ駆け出す。

こんな奴に一々（いちいち）構ってでは日が暮れてしまうっ。

「…………面白エじゃねエか。愉快に素敵にビビらせてやるよ」

一体何なんだ、怖がらすことで腹を満たす部類の妖怪なのか？  
妖気の流れが変わり何か仕掛けてこようとしているのが分かる。

「そおら、撃ち抜かれなア！！」

どうやら妖気を弾丸状に固め射出して来たようだ。

私は驚いた。こんな技を使う妖怪は殆ど存在しないからだ。

妖怪には向上心と言うものが人間と比べて無いに等しい。

自ら努力をする妖怪は私が知っている中では美鈴ぐらいだ。

妖怪には天敵があまり存在しないので努力をする必要が無い。

逆に人間は妖怪という天敵が存在する。

だから妖怪とは違い技術を発展させる。

その過程で生まれたのが陰陽道や内丹術などの戦闘術だ。

私も魔法使いなので妖怪に分類はされるのだが、魔法使いは精神構造が人間と近いのが影響するのか努力や技術向上を図るものが多い。  
むしろ努力しない魔法使いは魔法使いではないだろう。

話が逸れたがこの妖怪は少なくともそこらの大妖怪よりは頭が良い

はずだ。

自らの妖気を意識し少ない消費で効率よく相手を殲滅する方法を編み出した妖怪は少ない。

殆どの妖怪は身体能力か特殊能力に頼り力任せで戦う奴が多いからだ。

「その技をどうやって編み出したのか気になるね。私にも教えてくれない？」

あえて魔法を使わず身体能力で襲い掛かる弾幕を回避する。

『マホカント』を使えば避ける必要も無いのだが、私はあの妖怪の能力を見極めていない。

そんな相手に手の内を晒して良い事は無いからだ。

能力を持つていることを前提に考えているのには理由がある。

私自身の能力によって理解することが出来る範囲が増えたからだ。一目見ただけで相手がどのような能力を持っているか分かるわけではないが、能力を持っているか持っていないかぐらいは分かるようになった。

完全な魔法使いになったことにより多少能力を理解出来たのだから未だに自分の能力は『理解』出来ない。

月面戦争が勃発するまでには理解したいものだ。

「ナメてやがるなア。　よほど愉快的な死体オブリエになりてエと見える」

「生憎私はまだ死ぬわけにはいかないんでね」

私は妹紅を掴み上げ『バキ』で吹き飛ばした。

「ひゃあああああああ！？」

いくら死んでも生き返るとはいえ戦闘に巻き込むのは気が引ける。それに何かを守りながら戦うのはとても面倒くさい。随分手荒な逃がし方をさせてしまったので後で謝ることにしよう。

「お友達を逃がすなんて泣けてくるねエ。

逃がしたところで意味が無いのに健気なこって」

「意味が無いってどういうこと？」

「俺がここでオマエをぶち殺してアイツを食っちゃまってことだよオ！」

避ける隙間すら無いほど大量の妖気弾を撃ってくる。

殺される気は無いし妹紅は食べられてもすぐに復活するからそれは挑発にはならないのだが…

何れにせよ何か魔法を使わなければこの弾幕は凌ぎきれないようだ。私は仕方がなく先ほど使った『バギ』の上位魔法を唱えることにした。

「『バギマ』」

妖気弾を吹き飛ばしながら口の悪い天狗に竜巻が直撃したかのように見えた。

「ッ!？」

なんと私の撃った『バギマ』が跳ね返されたのだ。

「自慢の攻撃が効いてなくてエ驚いてンだろオ？」

私って考えていることが顔に出易いのだろうか。  
そういえば美鈴や永琳にも色々とからかわれたことがあったな。

「ご名答、これが貴方の能力ってわけね」

「まアそんな感じだア。どんな能力かは教えねエがなア」

天狗の優れた飛行能力を使い一気に距離をつめてきた。  
空中戦では勝ち目が無いだろう。

そこで私は森林へと逃げ込むことにした。  
森林の中なら木々が邪魔をして高速で飛ぶことは出来ないだろう。  
とりあえず隠密魔法を使い姿を隠すことにする。

このまま逃げることも出来るがあいつの能力がどんなものか気にな  
るし敵前逃亡は癪しゃくに障る。

「あはぎやはっ！鬼ごっここの次はかくれンぼですかア？」

天狗の挑発を無視しつつ私はあいつの能力を考える。

私の予想だとこの天狗の能力は『ありとあらゆる攻撃を反射する程  
度の能力』だと思われる。

そうになると自身の体の周りに見えない膜を張りその膜に触れると反  
射するようにしているのだろうか。

力の向きを操作できる能力の可能性も考慮したがそれなら妖気弾を  
使う必要があまり無い。

風の向きを操り相手を切り刻む方が手っ取り早いからだ。  
考えてばかりでは埒らちが明かない。

私は思い切って行動を起こすことにした。

「私はここにいるよ」

隠密魔法を解除し天狗の前に姿を現す。

「ついに逃げることを諦めたかよオだなア。

痛みを感じる時間すら与えずに殺してやるから感謝しろよオ」

「その台詞はこの攻撃を耐えてから言うことね」

「あアン？びびりすぎて頭が逝かれちゃったのかア？

さつきから突っ立ってるだけで何もしてねエじゃ

ッ！？」

突如、天狗がふらつき地べたに倒れこむ。

どうやら成功のようだ。

この天狗は私に見える攻撃しか抵抗できないと仮定して『ラリホー』  
を使ってみたところ見事魔法に掛かった。

私の魔法はほとんど詠唱する必要が無く魔法名に意味を持たせて発  
動するようにしている。

そのため奇襲や咄嗟とつぱの時に使用することが出来る実践的な魔法とも  
いえる。

このまま『獣の槍』を刺して動けないようにしようとした時、問題  
が起きた。

「てめエ、いったい何をしゃがったア！」

なんと天狗が目を覚ましたのだ。

「そんな…『ラリホー』が完全にはいったのに…」

確かに一度完全に眠りに落ちたように見えた。

……そのはずなのだが今は完璧に目を醒ましている。  
何が起こったのかさっぱり分からない。



「能力を使うのがもオ少し遅かったら気を失ってたかもしれねエが惜しかったなア。」

俺はこの通りピンピンしてるぜエ？さア、早く次の手を見せてみるよオ」

「クツ……………」

考えるんだ、何故コイツはここまで私を挑発してくるのかを。

私を挑発に乗らせ飛び込んできた隙を突こうとしているのだろうか。それとも私を怖がらせてこの山から追い出そうとしているのか。

絶対的な攻撃能力を持っているなら相手の動きを待つよりも攻撃を仕掛けた方が早い。

つまりアイツの能力はどちらかと言うと防御的な力なのだろう。

ならば向こうの能力が私の本気に耐えられるか試してやるうではないか。

「どおしたあ、ビビッて動けなくなっちゃまったのかあ？

ギャハハハハ……………は？」

「紅蓮の炎よ凍てつく氷と共に一つと生りて有から無へと転ぜよ」

私は普段はやらない魔法詠唱を行いながら握っている剣と槍を投げ捨てる。

右手には『メラゾーマ』、左手には『マヒヤド』を発動するため魔力を込める。

お互いの魔力のバランスがなるべく均等になるように細心の注意を払う。

「なんなんですかア、その技はア？」

矢を構えるかのような体勢を取りつつ二つの魔力を混合し新たな魔法を作り出す。

この魔法の前には如何なる強固な物質も意味を成さない。何故ならこの魔法に触れたものは文字通り消滅するからだ。

「極大消滅魔法『メドロア』」

矢を射るかのように溜め込んだ魔力を放出する。

その膨大な魔力を含んだ攻撃を打ち消す術はあまり無い。

この魔法と同等の力を持つ攻撃をぶつけて相殺させるか『マホカクタ』のような反射させる技を使うしかない。

無論反射させるにしても相当なエネルギーを消費しなければならぬだろう。

「く、は、面白えじゃねエかよオ！」

だがオマエは後一手足りなかつたよオだなア」

刹那、視界が赤く染まった

T o B e C o n t i n u e d . . .

## 12話 反射【リフレクション】（後書き）

今回の元ネタ

とある天狗「一方通行【アクセラレータ】（とある科学の超電磁砲  
&とある魔術の禁書目録）」

見た目は髪と目の色が黒くなった以外はまったく同じです。

極大消滅魔法『メドロア』（ダイの大冒険）

+と-のエネルギーを混ぜることにより生まれる無のエネルギーで  
攻撃する魔法

物理防御は意味を成さず妖術や魔法、霊術でしか防げない。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

### 13話 天魔の羽根

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけこきくかくけ  
けこかくけきかこけききくくききかきくくくけくかきくこけく  
けくきくきくきこきかかか  
！！」

朦朧とする意識の中、アイツの気味が悪い笑い声が響く。

不思議と体の痛みを感じないのは何でだろうか。

倒れた体を起こそうとした時に、何かがおかしいことに気がついた。  
両手を地面につけて立ち上がるうとしたのだが、バランスが取れず  
に倒れてしまった。

ふと右腕の感覚が無いことに気がつく。

恐る恐る視線を右腕の本来在るべき箇所に行くと

右肩から下が綺麗サツパリ無くなっていた。

「なによ…これ…」

反射される事は想定していた。

だがそれなら『マホカント』を即座に展開することが出来るぐらい  
の時間があったはずだ。

これは、反射なんて単純なものではない。

「何が起こったかわからないよオナ顔をしてるなア。

もっとつえエと思っていたがこの程度とは期待はずれもイイとこ  
ろだぜエ」

麻痺していた痛みが忘れていた頃に帰ってきた。

痛みに顔を歪めつつ何とか立ち上がる。

「はあ…はあ…はあ…」

幸いにも血は気の操作によりあまり流れていないようだが回復魔法を使わなければ不味い。

魔法を唱えるために剣を探すが見つからない。

「探してるのはコイツかア？」

天狗は足元に落ちていた私の剣を拾い上げこちらにチラつかせてくる。

何故アイツの足元に私の剣が落ちているんだ。

「なん…で、アンタの足元に…私の剣が…落ちて…いるの？」

私は最早抵抗する気も失い座り込んでしまった。

剣が無くても魔法を放つ事は出来るが少なくとも今の状況では無理だ。

痛みで集中することも出来ず、魔力も乱れてしまっている。

身体的にも精神的にも私は敗北を認めてしまっている。

「ああ？そオだなア…」

どオセオマエはここで死ぬんだし冥土の土産に俺の能力のカラクリを教えてやらア」

「…アンタの能力は…反射か何か…じゃない…の…？」

「惜しいなア、残念だがそれじゃあ0点だぜエ。

正解は『ありとあらゆるものを入れ替える程度の能力』でしたア

「！」

「入れ…替える…？」

痛みで思考がうまく回らない。

「オマエの竜巻を跳ね返したのは進行方向を入れ替えたからだア  
意識を失いそオになったときは自分の意識の状態を入れ替えて起  
き上がったんだよオ

そしてエ、さっきの攻撃はオマエと俺の位置を入れ替えたのさア  
俺もあんな化け物じみた攻撃に干渉する事はできねエからなア」

「なるほど…ね…」

私は自分の魔法を自分で食らってやられたって訳か。

「理解できたかなア？ギヤハハハハ！」

それじゃあ約束どおり愉快的死体<sup>オラジエ</sup>にしてやるぜエ」

今、八雲は私の様子を見ているのだろうか。

こんなことになるなら前に会った時に、私に何かがあったら妹紅の  
世話をしてくれと頼んでおけば良かったな。

「フフツ……やれるもんならやって見なさい！！」

最後の力を振り絞り立ち上がる。

せめて残った魔力をすべて込めて抵抗だけでもするとしよう。

その時だった。

「待って！！マルティナを殺さないで！！」

妹紅が私達の間割り込んできた。  
きつと『メドローア』の光が見えて私がどこにいるか分かったのだ  
ろう。

「妹紅…逃げて…」

「嫌だ…お願いだから死なないで…」

妹紅が私にしがみついていた。

まったく、折角逃がしたのにコレじゃあ元も子もないじゃないか。

まあ…最後に友人に会えてよかったのかもしれないな。

そんなことを考えつつ死の覚悟を決めていると、アイツが話しかけてきた。

「あのオ…お取り込み中悪いんですがア。

オマエ、『八雲 紫』じゃないのかア？」

「えっ」

「えっ」

ザ・ワールド！！場の流れは止まるッ！！。

10秒経過ア！！

「いや…私、八雲紫じゃないんだけど」

「あアン？この期に及んで命乞いですかア。

勝負に負けたんだからア諦めたらどオですかア」





「実はア昨日いきなり胡散臭い妖怪が現れて

『明日、大陸で100以上の妖怪の縄張りを潰してきた金髪の八雲紫と言う妖怪が来るから注意しなさい』

と言われて聞き返す暇も無く消えちまってなア。

念のため、見回っていたらオマエが来たって訳だ。

そっちが高圧的な態度を取ってきたから戦闘を始めちまったが…色々とすまなかつたなア」

地味に真実を伝えているところが気に入らないのだがそんなことを気にしている暇は無い。

一刻も早く私の体に処置を施さなければ命が危ない。

「妹紅…そこに落ちている…剣と槍を取ってきて…」

「う、うん!」

「それじゃあ…あなたには少し協力してもらおうよ」

「協力ウ？」

しょうがねエなア、俺の命を寄こせとかじゃなきゃ協力してやる

ぜエ」

「ほんの少しだけ…妖気を分けてもらっただけ…だよ…」

「持ってきたよ!」

「それじゃあ…アンタ…その槍をしっかりと握ってね」

「おう、いつでも始めくれてイイぜエ」

獣の槍がキイイイインと音を立て始める。  
天狗の妖気が魔力に変換され始める。

「くウツ……これは中々響くなア」

どうにか回復魔法一回分程度の魔力を補充することが出来た。  
私は左手に剣を強く握りしめ、自分の使える最大の回復魔法を唱えた。

「『ベホマ』」

体を青白い光が包み込み、完全に消滅していた右腕が再生を始める。  
骨、血管、筋肉と順番に直っていく様子は正直気味が悪い。

妹紅は目を両手で覆い隠して見えないようにしている。

天狗はまじまじとその様子を眺めている。  
お前はもうちょっと目を逸らすとかしてよ。てかしろよ。

どうにか体の怪我を修復することに成功したが流れた血まで作る余裕は無かった。

外傷さえ治ってしまえば後はどうにでもなるのでいいのだが、これでは今日中に石長姫に会うのは無理そうだ。

「一応、御礼は言っておくわ…協力してくれてありがとう」

「はン、礼を言われる義理なんて俺にはねエよ。

騙されたとはいえ、一人の女を傷つけちゃったんだからコレぐらいして当然だア。」

先ほどまで嬉々として殺し合いをしてきた奴の台詞とはとても思えないが、本来の性格はこんな感じなのだろうか。

口では悪ぶっていても、案外いい奴なのかもしれない。  
ただし敵にはもう二度と回したくは無い。

「それもそうね。」

それにしてもあのスキマ妖怪：今度会ったら覚えときなさいよ…」

今更になって八雲に対する怒りが湧いてきた。

利用しようにも掴みどころが無く逆に私が弄ばれているような気がしてならない。

そんな性格ではまともに交友関係を築けないと思うのは私だけだろうか。

「元気になって何よりだア。」

それじゃあ俺はとつとこの山を去ることにするぜエ」

「この山はアンタの縄張りじゃないの？」

「あア、俺は一箇所に定住せずに旅をしている妖怪だ。」

この山に居たのも偶然でちよつと休憩していただけンでなア」

「てつきりアンタの縄張りかと思ってたわ。」

…そうだ、これからも会う機会もあるかもしれないし名前を聞かせてくれない？」

「イイゼエ、俺の名前は『鈴科 天魔』ってんだア」

再びビンゴオ！！輝夜も月までブツ飛ぶこの衝撃！！

「……………アンタが天魔だったのね。」

やっぱりあのスキマ妖怪、分かかって嘘をついたのね」

「俺の名前を聞いたことがあるのかア？」

「私の父から昔聞いたことがあるの。」

見た目までは教えてもらってないからどんな奴かは分からなかったけどね。

ところで…もう一つだけお願いがあるんだけどアンタの羽を譲ってくれない？」

「別にイイがア…何に使うんだ？」

「こう見えても私は魔法使いでね。」

アンタの羽根を使って魔術を作ろうと思っているの」

「魔術かア、どんなのかはわからねエが完成したら見せてくれよオ」

天魔は羽根を数枚引き抜き私に手渡した。

「何時か見せれる機会があったら見せてあげるわ」

私は羽根を受け取ると劣化しないように専用の保存瓶にしまった。

そこで気がついたのだが妹紅が泣きじゃくっていた。

「良かった…マルティナが死ななくて良かった…」

私の事を心配してくれていたようだ。

まだ知り合って日が浅いというのに随分と懐いてくれているようで私も嬉しい。

だがそれと共に少し不安が残る。

妹紅の心は私達とは違い人間だ。

果たして妹紅はこれから無限に訪れるであろう友の死に耐え切れるのだろうか。

私が心配してもどうしようもならないことなのだがやはり心配だ。私のように、簡単に人を殺せるような奴にだけはなってほしくは無いものだ。

「それにしても…風呂に入りたいなあ…」

血塗れになった体を見つため息が出てしまう。

コートは高度な魔法術式を施してあるので自動で修復するが体までは綺麗にはならない。

「ねえ、この辺りに温泉とかって無い？」

「温泉かア、そオいえばこの山に住んでいる河童がこの辺りにあるっていったなア」

「あるのね！！じゃあ案内してよ」

「何で俺が案内しなくちゃならねエンだア。

「そんなもん飛んで探せば一発だろうがよオ」

「誰かさんのせいで空を飛ぶ魔力すら残ってないし妹紅は空を飛べないの。」

「ねえ…いいでしょう？」

瞳に涙を浮かべつつ上目遣いで頼み込む。

勿論、嘘泣きである。女とは便利な生き物だ。

利用できるものはきちんと利用しないと勿体無い。

「あーあーわかりましたよオ。

案内すればイインでしょう、案内すればア！！」

不幸な天狗は開き直り連れて行く事を承諾したようだ。

「それじゃあ早速向かおうか…あれ？」

体に力を入れるのだが腰が持ち上がらない。

「どうしたの？」

「どオしたんだア？」

「……………立ち上がれない」

「はア？」

「どうやら思いのほか重症だったようだね、アハハハハ」

まさかここまで体が弱っているとは思わなかった。

外傷を治しただけで体力までは直しきれなかったのか。

「笑い事じゃねエだろうがよオ。

オマエの連れなソてさつき泣き止んだばかりなのにまた泣きそオになつてるじゃねエか」

妹紅の目には涙が浮かんでいた。

ああもう私なんかを心配してくれなくてもいいのに…かわいいなあ、畜生。

「心配しなくても大丈夫だって。

ちょっと疲れてるだけだからすぐに良くなるよ」

「…本当?」

「うん、本当」

「…分かりました」

どうやら落ち着いたようだ。

だが立ち上がれないのは困った。

魔法で飛ぶことも出来ないし一体どうしたらいいのか。

そうだ、いい事を思いついた。

「ねえ、天魔」

「なんだア?」

「私を背負って運んでよ」

「いやその理屈はおかしいだろ。」

俺より連れの妹紅って奴に頼めよオ」

「妹紅は私の剣と槍を持つただけで精一杯なんだよねえ。」

それに天魔は妖怪なんだし私の一人や二人簡単に持ち上げられる  
でしょ?」

「それはそオだがア…」

オマエは女だろうがア、俺みたいな奴に体を触られて嫌だった  
りしないのか?」

「つまりアレね。女の体を触るのが怖くて背負えないわけか」

「そッ、そんなわけねエだろオ！」

顔を赤らめつつ否定してきた。

「じゃあ決まりね。早く背負いなさいよー」

「チッ…しっかりつかまってるよオ！」

私は天魔の背中にしがみついた。

普段よりも高くなった視界は新鮮だった。

それに翼が温かくてふわふわわわしていて気持ち良い。

こうしていると段々眠くなってくる。

「胸がおもいつきり当たってんだよオ、クソがア…」ボソッ

小声でぼそりと呟く天魔であった。

「何か言った？」

「何でもねエよオ！」

「マルティナも、もう少し気にした方がいいと思う…」

後ろから付いてきていた妹紅に良くわからない事を言われた。

「……………何を気をつけるの？」

寝ぼけながら聞き返すが、返事は帰ってこなかった。



T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
. . .

### 13話 天魔の羽根（後書き）

妹紅はヒロイン マルティナは天然 天魔はなんだかんだでイイ奴  
天魔さんをレギュラーにしようか悩んでまふ  
レギュラーだと強すぎて扱いづらそうです

## 14話 温泉「ホットスプリング」

「おい、その白髪。」

「2つほど確認したいことがあるんだがイイかア？」

「白髪じゃないです…いや、今は白髪が…」

「それはともかく私には藤原妹紅と言う名前があるんですよ」

私は怯えつつ天魔さんの後を付いて歩く。

先ほどからマルティナが動かないのは寝てしまったからなのだろうか？

それとも…あの天魔さんに何かされてしまったのだろうか。マルティナの剣と槍を両腕で担ぎつつ警戒しながら先を急ぐ。

「そんな警戒することはねエだろオ。」

別にオマエを食べる気なんてねエし襲ったりもしねエよ。

それで妹紅ちゃんよオ、コイツが何年妖怪をやっているか知ってるか？」

女性に年齢を尋ねるのはどうなのだろうか？

今は見た目通りの年齢だが長い年月を生きると言い辛くなったりしそうだ。

「年齢…ですか…？」

確か私と5歳しか違わないと言っていたので20歳ぐらいだと思います」

なぜか素直に答えてしまう私が悔しい。

これが凄みだとかカリスマと言う奴なのだろうか？

「20年かア……………コイツは将来大物になるぞオ」

「どういう意味ですか…?」

「アイツが放った最後の攻撃イ…アレは俺の能力でもかわしきれない一撃だった。

俺の全ての妖気を使ってもとても耐え切れ無かったって訳だア。だから位置を入れ替えて自爆を誘うなんて姑息な手を使ったア」

「つまり…?」

「まだわかんねエのか?」

位置を入れ替えてなけりや、俺は跡形も無く消し飛んでいったって訳だ」

「真っ向勝負だと負けていたって訳ですか?」

「そオいうことだ」

「もしかして天魔さんって大して強く無いんですか?」

「あんま調子に乗ってるよと殺やつちまうぞオ?」

急に振り返ってきた天魔さんに睨みつけられる。

私と外見的にはあまり変わらない年齢のようだがやはり過こしてきた年月が違うのだろう。

「ひっ」

私は情けない声を上げてしまう。  
不老不死になっても痛いのは怖いし死ぬのも怖い。  
いつかこんな感情にも慣れてしまう日が来てしまうのだろうか。

「ギャハハハハ、冗談に決まってるじゃねエかア。

オマエは見たところ普通の人間くさいが一体なんなんですかア？」

「私は……………ただの一般人です」

天魔さんは妙に鋭いところをついてくる。

私が不老不死なのを知ったら食料代わりに連れ去られてしまつかもしれない。

何しろ食べても永久に無くならない食料だ。

妖怪達の間では奪い合いになるだろう。

「何か隠してやがるな。

まあ今は聞かないでおいてやるさ。

さアて次の質問だア、コイツの姓を教えろ」

「何故ですか…？」

「さつきコイツが呟いていた『私の父から昔聞いたことがある』って話が気になつてなア。

俺は生まれてからまだ50年そこそこの妖怪で大陸の方にまで噂が流れているとは考えられねエ。

そして奇しくも俺には金髪の髪をした大陸出身の人間が知り合いに居てなア。

そいつの姓がコルテスって言うんだが…」

「……………マルティナの姓もコルテスですね」

天魔は前を向いていて顔色は窺うかがえないが驚いている様子だった。

「そオいうことだったのかア。

まさか子供まで作ってやがったとは驚きだぜエ。

どオやったらあんな目つきの悪い男からこんな娘が出来るかは分からんが……」

「そんなに目つきが悪かったんですか？」

天魔も十分目つきが悪いので人の事はいえないと思うのだが。

「あア、俺なんかとは比べ物にならねエぐらいに目つきが悪かった。あの巧みな話術と合わさればそこらの妖怪なら一発で戦う気なンて失うだろうなア……」

天魔が小刻みに震えているように見えるがきつと気のせいだろう。

……もしかしたら天魔も戦う気を失った妖怪の一匹なのだろうか。

「そ、そんなに凄かったんですか……逆に会ってみたいかも……」

私は少しマルティナのお父さんに興味が湧いた。

「会わない方が身のためだぜエ？

実際にあって見れば分かるだろうがアレと仲良くなれるのは余程の変わり者ぐらいだア」

「天魔も十分変わり者だと思っ……」

つい本音がポロリと漏れる。

「よほど愉快的死体オブリエになりてエと見える」

「ごめんなさい」

天魔さんの額に青筋が浮かんでいるのを確認した私は即座に謝罪の言葉を述べた。

~~~~~

「…あれ、もしかして寝ちゃった？」

辺りを見渡すと湯気が上がっている場所が目についた。どうやらいつの間にか寝てしまっていたようだ。

「もしかしなくても寝てたぜエ。」

ところでここまで運んでやった俺オレに労いの言葉も無いんですかねエ？」

天魔が横目でチラチラと見てくる。少しウザイが、一度殺されかけていることもありウザイだなんて口が裂けてもいえない。

「元はといえば八雲が悪いんだから私にそれを要求するのはおかしいと思うんだけどな」

「はア…まったく素直じゃねエなア。」

もオちよつと素直になつてもイイと思つぜエ？」

アンタこそお礼を言ってほしいのならもっとはっきりと口に出した

らしいものを…

「素直につてねえ…はあ…ありがと。」

はい、コレで良いでしょう？」

「こんなンじゃ、満足できねエゼ…」

天魔はまだ戯言を言っているようだ。

妖怪は皆、マイペースというか自己中心的というか…そんな奴しか居ないのだろうか？

「はいはい、さてと…」

私は温泉に入るために右袖が無くなってしまったロングコート脱ぐ。

汚れや傷程度なら自動で修復できるのだがこんなに大きな破損はしたこと今までに無い。

まあ直らないなら直らないで錬金術でも使い直すでしょう。

下に着ていたワンピースも案の定、血塗れになっている。

魔法で加工してあるのはロングコートだけで此方は普通の服なのだ。

「はあ…結構気に入っていたんだけどなあ」

私は着ていたワンピースを捲り上げ脱ぎ始めた。

「ンなツ！？服を脱ぐなら先に言いやがれエ！！」

「別に見られても減るもんじゃ無いし良いじゃない」

別に私は異性に裸を見られてもなんとも思わない。

「マルティナに男の知り合いって居る？」

私の横で腰掛けていた妹紅に問われた。

「男の知り合い？………そういえば居ないね」

今知り合ったばかりの天魔を加えると…父さんを含めて2人…？

「はあ…今度から男性には裸を見せない方がいいよ」

妹紅は呆れたようにため息を漏らした。

私が何か悪い事をしたのだろうか。

「どうして？」

「あんな感じになるから」

妹紅は人差し指を突き出しとある方向を指差していた。
指を差していた方を見ると

「ああアアアア！！なんなんですかア！！誘ってやがるんですかア！？」

そこには顔を真っ赤にして地面をのた打ち回っている天魔の姿があった。

「うわぁ…」

天魔の新たな一面を見てしまったマルティナであった。

~~~~~

「良い湯ですね」

「そうだねー」

なんだかんだで私達は温泉に浸かっている。

天魔はどうしたかって？

石長姫の所々に『不尽の煙』を貰いに行かせた。

どうせ私達が温泉に入っている間は暇になるので丁度良かっただろう。

天狗使いが荒いとか言われそうだが資源はトコトン使い尽くすのが私の主義だ。

「本当に良い湯ですわね」

背後から聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた

「そうですね」

「そうだねー」

温泉に浸かり身も心もリラックスしていた私と妹紅は最初は気にも留めなかった。

しばらくして私達以外に温泉に入っていた奴が居なかった事を思い出し振り返ると…

「あら、お久しぶり」

「……八雲…紫…？」

「そんな他人行儀に呼ばなくても良いでしょうに。ゆかりんと呼んでくれて結構よ？」

「呼ぶわけ無いでしょ！！この年増がア！！」

「あらあら、年増だなんて心外な。

私はこう見えても　　歳ですよ？」

八雲は若干小声で返答してきた。

ちなみに年齢はプライバシーの保護のため隠されています。少なくとも紀元前よりは前の生まれだから安心してね。

「4桁の時点で十分年増です。本当にありがとうございました」

「マルティナがとても数刻前まで死に掛けていたとは思えないよ…」

妹紅が心配そうに私のそばに寄ってくる。

心配しなくても私は黄金練成【アルス＝マグナ】を完成させるまでは死ぬ気が無いから。

「それは大変だったn」  
「アンタのおかげだよ！！バカ！！年増！！スキマ婆！！」

八雲に湯を思いっきり頭から被せる。

ついでに思いつく限りの悪口も添えておく。

自分でも悲しくなるくらいホキヤブラリの語彙の少なさだが気にしない。

「いや、だから年増じゃないし…婆じゃないし…」

八雲の見た目は私と同一年くらいに見えるし、どう見ても若々しい女性だ。

つまり私の言い放った幼稚な悪口は根も葉もないのだが……

「どうやら紫さん結構気にしているようですね」

先程、被せた湯のせいでよく分からないが若干涙目になっているよ  
うな気がする。

いや、大妖怪『八雲紫』がこの程度で泣く訳が無い……と思う。

「どうせシヨックを受けたふりでもしているんでしょう。」

それで……どうして八雲は天魔にあんな嘘を吹き込んだの？」

「……貴女の実力を見極めたかったのよ」

急に真面目な態度に切り替えた八雲だがやはり涙目のままだった。

「私の実力？」

「ええ……貴女が出した条件は14の材料の場所を教えるだけ。」

己の力だけで貴女が本当に目的を成し遂げられるか疑問に思った  
のよ」

「なるほど……それじゃあ天魔に敗北した私は実力不足って訳ね」

「そうとも限らないわ。」

貴女は何故天魔は貴女の『メドロア』を反射しなかったと思う  
？」

「反射するよりも私とアイツの位置を入れ替えた方が効率的だから？」

「ブツブツ、不正解です」

「…イラッ」

八雲の馬鹿にしたような態度に私は機嫌が更に悪くなった。もし魔力があるなら『イオナズン』をお見舞いしていただろう。

「正解は反射したくても反射できなかったからよ」

「反射できなかった…？」

でもアイツは私の『バギマ』を反射してたし出来ないはずg「貴女の魔力と天魔の妖気の量を比較すると貴女は天魔の2倍程度の力を持っているわ」

せめて最後まで言わせてください。

「…つまり単純な力では私が勝っていたってこと？」

「それにしても良い暇潰しになったわ」

(ご名答、流星はあのコルテスの娘といったところね)「

「本音と建前が入れ替わってるよ、年増妖怪さん。

一度、十億土を踏みやがりなさい」

「それは極楽浄土に行けと言ってるようなものじゃない!？」

段々と普段の胡散臭い態度が感じられなくなってきた。

コレが八雲の本性なのだろうか。  
いや…きつと腹の奥底でいともたやすく行われるえげつない行為を  
考えているのだろうか。

「どんな強力な能力にも欠点は付き物ですわ。

天満の能力は同時に1つの対象しか入れ替えられないのよ。

それにあまりに威力が高すぎる攻撃や遠すぎるのも駄目みたいね」

「俺の能力の弱点をにばらしてンじゃねエよ」

風を切るような音がしたかと思うと何時の間にか温泉の側の大岩に  
天魔が立っていた。

「あ、お帰り」

天魔の右手には、不尽の煙が入っていると思われる魔法瓶（文字通  
り魔法で中身を保存する瓶）が握られていた。

「「ぎゃあああああああ！！」」

2人の黄色い悲鳴が山に響き渡る。

妹紅はともかく何故、八雲まで騒ぐんだらうか。

「そんなに騒ぐことはねエだろ。

オマエたちの入浴姿を除こうとした訳じゃアねエンだし」

突如、天魔の頭上にスキマが開き中から大量の熱湯が流れ出た。

この温泉の源泉から直接流しているようで軽く80度はありそうだ。

「ぎゃあああああああ！？」

天魔は熱湯をもろに被り大岩から落っこちた。  
天魔の能力は無意識で反射する事は出来ないのか。  
なんだか強そうで使い勝手が悪そうな能力だ。  
むしろ八雲の能力が万能すぎるだけなのだろうが。

とりあえず全員温泉から出て、天魔の様子を見に行くことにする。  
私は魔法空間の中から適当な服を引きずり出して着る。  
その上に袖がすでに修復し終わったロングコートを羽織る。

「覗きはよろしくなくてよ?」

「天魔さんって…変人じゃなくて変態だったんですね…」

八雲と妹紅がジト目で天魔を睨みつけていた。  
コレが俗に言う『修羅場』なのだろうか。

「ちげエよ!!俺は変態でも変人でもねエ!!!」

「まあ…頑張つてね」

私は魔法空間の中に非難して一眠りすることにした。

「この裏切り者オオオオツ!!!」

これがやがて妖怪の山の長となる天魔との初めての出会いだった。

14話 温泉「ホットスプリング」(後書き)

今回のセリフ元ネタ

よほど愉快的な死体になりてえと見える〓垣根帝督(とある魔術の禁書目録)

全員仲良く、十億土を踏みやがれ〓松崎銀次(BLACK LA GOON)

こんなんじゃ…満足…できねえ…ぜ…

この裏切り者オオオツ!!〓鬼龍京介(遊戯王5D's)

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。



## 15話 白面金毛の者？

無事？に『不尽の煙』と『天魔の羽根』を入手できた私達は一旦、日本を出ることにした。

天魔は修行のためにと強い妖怪を探しに何処かへ行ってしまった。どこぞの戦鬪民族みたいな思考回路である。

まあアイツが簡単に死ぬとは思えないし、生きてたらいつか会えるだろう。

ちなみに温泉騒動の後、八雲に天魔が戦いを挑んでいたが一瞬で倒されていた。

流石の反転能力も境界操作には歯が立たなかったようだ。

日本で成す事はまだあるのだが、素材の中で比較的入手が容易いと考えていた天魔にすら歯が立たなかったのを反省し、万全を期するために日本を出ることに決めた。

魔法使いは準備さえ完璧に行えば負ける事はまず無い………と自負している。

空亡や因幡は髪や毛で済むので戦わなくても良さそうなのだが伊吹の角は別格である。

伊吹童子こと伊吹萃香の能力は私の魔術の完成には必要不可欠なのだがまずどこに居るか分からない。

八雲の情報待ちなのだがどうにも信用出来ないというか信用したくないのである。

そこで日本以外の材料から集めることにしたのだ。

美鈴ならば長い年月を生きているので多少なら知っているだろう。

西暦677年

美鈴や藍が居る屋敷にたどり着くのに2年も費やしてしまった。

理由は妹紅のための食料の確保や妖怪に襲われたからだ。

妹紅の食糧確保については人里で買えば済むのだが、金髪の白髪の2人組みは目立つことこの上ない。

妖怪に間違われて人里から追い出されることが度々あった。

私は人間ではないのでそこまで心が痛む事は無かったが、妹紅が悲しんでいる様子を見るのは辛かった。

蓬莱人は体の変化を拒絶するので髪を染めても意味は無かった。

更に妖怪達に私が帰ってきた話が広がり襲撃をされたのも響いた。

酷い時は人里で休息しているときに襲撃されることもあった。

実験と称して100以上の妖怪の縄張りをぶち壊してきた私が悪いのだがそれにしてもしつこい。

隠密魔法は私自身にしか使えないので妹紅の姿を隠すのは不可能。

妹紅は空を飛べないので空を飛んで追っ手を撒くのも不可能。

どう足掻いても絶望である。

結果的に魔法ですべて処理するのだが、それが悪循環となる。

妖怪倒す 仲間が仕返しに来る 処理する 仲間が（以下略）

結果的に妹紅が実戦経験を積むことが出来て良かった…のだろうか？

最初は逃げ回っていた妹紅も最近では度胸がついてきたようでも勇敢に戦っている。

刺す事に成功したら一撃必殺の『獣の槍』のお陰もあるがそれでも目覚しい成長である。

2年前は良い所のお嬢様だったが人は変わるものだ。

そして妹紅の体に少ないながら妖気が宿っているのが分かる。

数年もすれば妖術が使える様になるだろう。

「というわけで何はともあれ無事に帰って来れたよ」

「誰に言っているんですか？」

「たのもー」

そこにはあの頃と殆ど変わり無く屋敷が建っていた。

一つ変わったところと言えば、あの頃は無かった花畑がある所だろうか。

美鈴が作ったのだろうか？

本来この国には生えていないような花も混じっているのが少々気になる。

「無視ですか。」

私のツツコミを無視して冷静に地の文を進めるんですか」

ドタドタと誰かが走ってくる音がする。

「はあ…何で私が出ないと駄目なんだか」

何やら独り言が聞こえたかと思うと引き戸が開き金髪の女性が出て来た。

耳や尻尾は隠しているようだがその顔には見覚えがあった。

「ただいま、藍」

私の顔を見た藍は驚いたような、嬉しそうな顔をしていた。そして数秒たった後、藍は口を開いた。

「　　なんだ、生きてたのか」

「随分と素っ気無いねえ」

「てつきり死んだと思っていたからな。」

美鈴は買出しに行っているがすぐに帰ってくるだろう」

「ほーい」

どうやら美鈴も元気に暮らしているようで安心した。

「所で…お前の後ろで隠れている白髪は何者だ？」

「愛玩動物」

私はさらっと嘘を吐く。

「何だ、そうか」

藍も案外ノリが良いようで話を合わせてくる。

「何でそうなるんですか！！」

妹紅が必死に否定してくる。

妹紅をからかうのは楽しいがかわいそうなのでここでネタばらし。

「さっきのは冗談で…この子の名前は『藤原 妹紅』

私が日本に行っている間に知り合ったの」

「ほう…まあ立ち話は疲れるだろう。」

詳しい話は我が家の中で聞くとしよう」

藍は手招きをしつつ家の中へと入っていった。

「一応買ったのは私なんだけどね」

「お邪魔します」

私と妹紅は玄関を通り家の中へと上がる。

内装は私が出て行ったときと何ら変わりは無かった。

ただ、家の中に所狭しと植木鉢が置いており様々な花が植わっていた。

「いろんな花が植えてあるね」

中には本の中でしか見たことの無い花まで植えてあった。

「綺麗ですねえ…」

妹紅は目を輝かせつつ様々な花を見て回っていた。

女とは綺麗な物や可愛い物が好きな生き物だ。

私もそれは例外ではない。

「よくこんなにも多種多様な花を集めれたね」

「私が集めたわけではないのだがな」

確かに藍がこのような趣味を持っているとは思えない。

「それじゃあ美鈴が集めたの？」

「いや…美鈴も世話はしているが集めたわけではないな」

「この家には美鈴と藍以外には誰も住んでないのにそれはおかしいんじゃない？」

「……………誰も私達以外には誰も住んでいないとは言っていないぞ」  
少々申し訳なさそうに藍は答えた。

「どうということ？」

「まあ座ってくれ、話はそれからだ」

私達は居間に置かれていた4つの椅子の内、2つに腰掛けた。  
その後、向かい合うように藍が私の正面に腰掛けた。

「まずは私から話そう。

そちらの…妹紅と言ったか？

その人間については皆が揃ってから話してくれればいい」

「私にとって悪い話で無ければいいけど…嫌な予感しかしないんだ  
よねえ」

「マルティナが日本に向かってから1年ほど経った頃に事件は起こった」

1年程前

「これは…」

美鈴が縁側から空を眺めつつ唸っていた。  
彼女が考え事をしているのは珍しい。

「どうしたんだ？」

私は不審に思い何を考えているか聞いてみることにした。

「妖怪の気配がこの屋敷に近づいているようなんですよ」

「気のせいではないのか？」

「そうであれば嬉しいのですが…」

美鈴は険しそうな顔をしつつ空を見つめ続けていた。

「私の妖気もそれなりに回復したしそこまで恐れる必要があるのか？」

「『風見 幽香』と言う妖怪を知っていますか？」

噂だけなら聞いたことがある。

まだ500年も生きていない妖怪らしいがすでに並の大妖怪を超える妖気を持つ天才だそうだ。

妖怪達を見境無く殺し、一晩で屍の山を作り上げたと言う逸話まで残されている。

私と同等…とまでは言わないがそこそこ悪名が知られている。

「噂だけなら聞いたことがある。そこそこの知れた妖怪だな」

「今ここに向かっていている妖怪がその風見幽香なんですよ」

「何…だと…？」

何故、風見幽香がここに向かっているんだ」

「彼女は普通の妖怪を殺すのでは満足できなくなったよう最近は大妖怪に勝負を挑んでいるようなんですよ」

「風見幽香は私を殺しに此方に向かってきた居るといつわけか？」

「そういうことです」

まったく、この白面金毛の者『玉藻 藍』が舐められたものだ。

「……………美鈴、お前は私を過小評価していないか？」

私は確かに昔お前と戦い敗れた。

だが、力が回復しきっていないとはいえ一端の妖怪程度に負けるとは思わない」

「確かに貴女にに勝てる妖怪は殆ど居ません。

少なくともこの国の中では5本の指に入る強さでしょう。

それは全力の貴女と戦った私が保証します。

ですが…風見幽香の戦い方は普通ではありません」

「普通ではない？」

「ええ」

会話に割り込むように閃光が走った。

私達が外へ飛び出すとそこには一人の少女が空に立っていた。

外見は15、6程に見受けられる。

鮮やかな緑髪を携え、その瞳は夕日のように赤かった。



折りたたまれた傘からは膨大な妖気を放った跡が残されていた。

「ひとまず屋敷から離れますよ。」

あの一撃を何回も撃たれては結界が持ちません」

「分かった」

私達は近隣の森へと飛び出した。

その後を風見幽香が追いかけてくる。

「それにしても妖気遮断の結界を張っているのに何故ここが分かったんだ」

「……………」

美鈴は沈黙を続けている。

何か怪しい、絶対何か隠している。

「何故黙り込む。」

もしか何かいらぬ事をしたのでは無いだろうか？」

「……………実は3時間ほど前に風見幽香に偶然出会ったんですよ。」

本当に偶然ですよ、本当ですからね！！」

出来ればもっと早く出会った事を教えて欲しかった。

赤髪ですらかなり目立っているのだから、せめて能力を使って尾行されないようにして欲しいものだ。

「過ぎた事を気にしてもしようがない」

「さすが玉藻藍！」

私には言えない事を平然と言い切れるッ  
そこにシビれる！あこがれるウ！」

「反省している様子が見受けられないな」

「すみません、反省してまーす」

まったく反省していないのは目に見えて分かる。

コイツの脳に誠意の二文字は存在するのだろうか？

昔はもつとこう張り詰めた雰囲気をしていたのだが最近はまるで友人同士のような穏やかな感じになってしまった。

お陰で私のペースが乱されてばかりだ。

どこか憎めないのがコイツの良い所でもあるのだが、長く生きているのだから威厳の1つでも出して欲しい。

背後から妖気の塊が飛んできた。

どうやらいつまでも逃げている私達に痺れを切らしたのだろう。

「ねえ…貴女達はいつまで逃げるつもり？

早く私を満足させて頂戴よ」

「…誰に口を聞いているか分かっているのか？」

「勿論、白面金毛の者『玉藻 藍』と虹龍小娘『紅 美鈴』に決まってるじゃない。」

こんな極上の獲物を見つけられるなんて今日は運が良いわ」

500年ぼつちしか生きていないような妖怪が2000年は生きて  
いる私に戦いを挑むとはいい度胸だ。

美鈴が出る幕も無く私が終わらしてやろう。

「美鈴、お前は手を出すな。」

「この怖いもの知らずに真の絶望を教えてやる」

「……………殺さないでくださいよ」

どこか悲しげに美鈴は風見の顔を見つめていた。

「お前が温情をかけるとな。」

「昔の自分の姿と重ね合わせているのか？」

「……………」

美鈴は嘘をつくのがあまり上手くない。

答えたくない事を言われるとよく黙り込んでしまっ。

「殺すか殺さないかは私のさじ加減で決まる。」

「邪魔したければ邪魔すればいいさ」

美鈴は気持ちを操ることも出来る。

私は精神攻撃には耐性を持っているが、普通の妖怪は精神攻撃に脆い。

この戦いを止めさせることなんて容易いのだろう。  
あえて戦いを止めない理由は分からないが美鈴にも狙いがあるのだから

私は久しぶりに溜め込んでいた妖気をすべて解放した。  
全盛期の半分といったところだったが十分だろう。

小手調べに妖術で幻術を出してみることにする。

私の幻術は効かなかった。

幻覚自体は見ていたようだが、効果が無かった。

私の幻術は主に恐怖を促すモノだ。

死の恐怖を与えることにより、相手の精神をバラバラに引き裂いてやるのだ。

それなのに、まったく効果が無い。

考えられる理由としては、一つしかない。

風見幽香は『死』を恐れていない。

それならば死に恐怖することも無いだろう。

だが、生き物は必ず死の概念を恐れる。

恐れないのは死を超越した存在。

神や不死のような連中くらいだ。

風見幽香は狂っている。

コイツの生きている理由はきつと殺し合いを行うためだろう。

勝っても負けても殺し合いが出来たらそれでいい。

それだけを原動力に動いている殺戮兵器なのだろう。

だから死を恐れないのだ。

きつと殺し合いの中の過程を楽しんでいるのだ。

勝ち負けといった結果は気にしていない。

だから…ここまで…私を追い詰めれたのだろう。

「一国すら手玉に取った最強の妖獣もこの程度だったのね。

誰なら私を満足させてくれるのかしら」

私の返り血を浴び全身を真っ赤に染めた殺戮兵器は微笑んでいた。

この程度で私に勝ったつもりになっているとは、まったく哀れである。

「嗚呼、この姿をとるのは何時方ぶりか。

紂ちゆうを滅ぼした時だろうか。

それとも周を滅ぼした時だったか」

妖獣とは長い年月を生きた動物が妖気を帯び妖怪になったものである。

人の形を取っているのは、その方が人間を油断させやすいからだ。だから戦闘のときまで律儀に人の形を取る必要は無い。

「あらあら、天下の白面金毛の者が負け惜しみ？

期待はずれの雑魚は早く失せなさい」

風見は、傘を此方に向け妖気を貯め始めた。

膨大な量の妖気は傘の先端へと集まり、瞬く間に膨れ上がっていく。

「消え去りなさい『マスタースパーク』」

直線状に伸びた妖気の塊が私を飲み込まんと迫ってくる。

その妖気の塊を私は

「ッ!？」

九つに伸びた尾のうち的一本で風見ごと叩き落す。

木々をへし折りつつ風見は地面を滑走して行く。

「折角本気になったのだから…私を満足させてくれよ?」

空を覆いつくした私の体は人の姿のときの何十倍にも膨れ上がった。  
いた。

長く伸びた尾の長さは軽く100mはあるだろう。

白色に輝く毛を携えた私の姿は正に化け物と呼ぶに相応しいだろう。

「フフツ…アハハハハハ

そうよ、そう来なくっちゃ!!」

風見が狂ったように笑いながら私の方へ飛び掛ってくる。

そして2つの妖気がぶつかり合う

T o B e C o n t i n u e d . . .

## 15話 白面金毛の者？（後書き）

### 脳内実力表

永琳>紫||美鈴>空亡>藍>輝夜>萃香>幽香>天魔>マルチナ  
>妹紅

藍の本気モードの想像図は『白面の者』（潮とら）です。

地の文でよく分からない方は一度検索してみる事を推奨します。  
ただし、絶望したくない方は見ない方がいいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

16話 負けて生きる(前書き)

ルビの付け方を初めて知りました



## 16話 負けて生きる

9つの尾のうち、2つを槍と雷のように変化させ風見に振り下ろす。我の巨体から放たれる攻撃は並みの妖怪なら跡形も無く消し飛ぶものだろう。

それに合わせて数多の式を上空に配置し逃げ場を失わせる。

この戦法を取って以来、我は戦いにおいて負けたことはあまりない。我は集団戦を得意としている妖怪だ。

幻術で敵を惑わせつつその隙にすべてをなぎ払う、それが我の戦法だ。

ただ、この戦法には弱点がある。

単騎で幻覚が効かなく、更に強力な広範囲制圧技で式をなぎ払われしてしまうとどうしようもない。

以前、美鈴に同じ事をされて負けたのも今では懐かしい思い出だ。何故、今それを思い出しているかと言うと

「アハハハハハハハ」

背中から4本の羽根を生やした風見の妖気は先程の何倍にも膨れ上がっていた。

今の私の妖気の量を遥かに超えるほどにだ。

その瞳は狂気で染まっていた。

私のように生きる目的すら無くしかけている妖怪には無い感情。

唯一つの目的のためにすべてを捧げられる者しか持っていないであろう感情。

その昔、私と名を連ねていた妖怪の瞳と瓜二つだった。

妖気を光線のように放ち私の式を、次々となぎ払う。しかし、どれも私の体を傷つけるまでには及ばない。

勝負は思いのほか長引いた。

長期戦は私の十八番だ。

時折撃つてくる極太光線は尾でなぎ払い、接近してきたら大量の式で押し返す。

尾の1つを瘴気の塊に変え、ゆっくりと着実に風見の体力と妖気を奪う。

半日が経った頃、風見がついに妖気切れを起こし倒れた。

「つまらないな。」

折角本気を出したのにこれで終わりなのか」

私は人の姿に戻ると倒れたまま動かなくなった風見の前に降り立った。

私の言葉を聞いた途端、ボロ雑巾のようになった体を此方に傾け私の顔を睨みつけてきた。

「私は…まだ…死んでないわよ…」

その声は途切れ途切れで、耳を凝らさなければ聞き取れないものだった。

「お前は敗北したものは必ず死ぬものだと思っているようだな。」

確かにその考えも間違っていないかもしれないが、世界はそんなに単純には出来ていないのだよ」

私は風見の体を踏みつけながら高々と煽った。

「ぐッ…」

「死ぬことで全てが終わると思ったら大間違いだ。

何事も成した後には後始末が必要なようにお前が死んだ後は色々面倒ごとが増える」

私にまた要らぬ肩書きが増えるのは困る。

『白面金毛の者』だとか『厄災の根源』なんて大層な呼ばれ方をしているせいで、未だに多くの人間と妖怪から狙われる。

半分隠居生活を始めている私にとってこれほど邪魔なものはない。私のような古参妖怪は、もっとまったりと過ごしたいのだ。

死にたいのなら美鈴にでも殺してもらえばいいだろう。

アイツなら風見一人を殺しても肩書きが増えたりはしないだろう。

「何故…殺さないの…貴女程の大妖怪が…私に情けをかけるつもりで言うの…?」

風見は苦虫を噛み潰したような顔をしながら拳を握り締めていた。きっと勝負に負けたのに殺されないのを苛立っているのだろう。

「情け?何か勘違いをしているようだな。

お前にはこれから死ぬことよりも恐ろしいことを体験してもらっただけだ」

私が情けをかける訳がない。

本当に殺すと面倒なことになるから見逃してやるといつているだけだ。

ただで見逃すのもつまらないので適当に嘘をつき恐怖を与えようとしているだけに過ぎない。

「死ぬよりも…恐ろしい…?」

風見は理解できぬまま目を閉じ気を失った。  
さて、屋敷に帰るとするか。

私が飛び立ちしばらくすると美鈴が後を追いかけて来た。  
そういえばずっと姿が見えなかったが、私達の戦っている様子を遠くから観戦していたのだろうか？

私が美鈴の姿を確認すると両手に血塗れの何かを抱えているのが確認できた。

大きさは150から160cm程度のようだ。  
更に赤く染まった傘らしき物体も一緒に持っている。

どう見ても風見幽香です、本当にありがとうございました。

「なあ…何故拾ってきたんだ?」

「あのまま放置していて死んでしまったら貴女も困るでしょう?」

「いや…それはそうだが、それでも治療だけ施して置いていけばいいのでは…」

「早く帰って手当てをしましょうね」

笑顔が怖い。

狂気に染まった風見の笑みの何倍も美鈴の方が怖い。  
私は黙って美鈴に従うことにした。

その後、負けたのに生かさせている自分の事が憎くて夜な夜な枕を

涙で濡らした風見の姿があつたとか無かつたとか。

「そんな感じで幽香はこの家に住み着きましたとさ」

「美鈴が何を考えているか分からないことはよく分かった。そして今更だけど藍って日本の言葉も話せたんだね」

「私は秀才だからな」

秀才（笑）が効果音にキリツと付きそうな顔をしている。

「自分で自分の事を秀才と言つな」

「あの…一つお聞きしたいのですが…」

妹紅が縮こまりつつ体を震えさせていた。

「どうした？」

「ここに住んでいる皆さんは…人間を食べたりは…しませんよね？」

「食べると言つたら？」

藍が不敵な笑みをすると、鋭く尖った牙が口から覗く。まったく、初対面の相手を脅かすのは藍の悪い癖だ。

「……………」

妹紅は顔を真っ青にして今にも氣を失いそうになっている。

話を聞いただけでも私や天魔より遙かに強い妖怪が3匹住んでいるのだ。

我が身を心配しない奴のほうこそおかしい。

「最近人間よりも美味しい物が増えてきているから食べたりはしないぞ」

文中に『たまにしか』が抜けている辺りは藍なりの優しさなのだろうか。

「そ、それなら良いのですが…」

藍は美鈴が気まぐれに作った油揚げを大層気に入っている。

私が大量に持ち込んでいた本の中の一つに記させていたそれは、大豆を原料に作られた豆腐を加工した食材だ。

美鈴がその本を読んでいて偶々目に留まったようで作ったのだが、今思えばあれは運命だったのだろう。

早く妖気を回復させたいなら人を喰らえばいいのに油揚げを食べてばかりなのは困り者だ。

「それに私がマルティナの連れてきた友人を食べると思うか？」

「どうやら藍さんっていい妖怪なんですね」

妹紅は胸を撫で下ろした。

それにしてもいい妖怪ねえ…

少なくともこの屋敷に住んでいる者の中で、まともな奴は居ないよ  
うな気がするのだが………勿論、私も含めて。

「コイツの言う事を鵜呑みにしてたら生きていけないよ?」

「えっ」

「先程の言葉は本意だぞ？」

「何せマルティナは知り合いが少ないからな」

藍に言われたくないが、あながち否定できない。

私の知り合いは、美鈴、藍、永琳、輝夜、妹紅、八雲、天魔あれ、おかしいな。2桁も居ないとか悲しすぎるんだけど。

一応20年以上生きているのにこれは無いだろう。

「……………うるさいやい、どうせ私は根暗な魔法使いですよ」

帽子を深く被りなおし、顔色を伺われないようにする。

泣きそうな訳ではない。

目からお酒が流れたただけだ。

心の汗が流れたただけだ。

「そ、そんな気にすることは無いだろう。」

ほら、長年生きていたら知り合いも増えるぞ」

普段は適当にあしらってくる藍に心配されると更に傷つく。

妹紅がオロオロとどう慰めようか考えている姿が追い討ちをかける。

~~~~~

「ただいま戻りましたよー」

私は幽香と共に買い物から帰り、見慣れた屋敷の扉を開ける。

藍の気と懐かしい気が1つ、知らない気が1つ確認できる。

「……………めーりん？」

居間の椅子に腰掛けていた私の友人は涙目だった。

もう少しで、号泣に差し掛かる手前だ。

「どどどどうしたんですか!？」

何やらただ事ではないようだ。

何しろこの子が泣いている姿など数えるほどしか見た事が無いからだ。

「めーりんは……………私の友達だよね？」

「はい？」

藍と白髪の少女の話を統合すると、最初は知り合いの少なさを藍がからかったことから始まり、それを引き金に色々と溜め込んでいた悩みをぶちまけて仕舞いには泣き出してしまったようだ。

私はマルティナの気持ちを操りどうにか明るい方向に持って行く。数分もするといつもの落ち着きを取り戻したようだ。

「落ち着きましたか？」

「うん、もう大丈夫だよ。」

情けない姿を見せちゃったね」

眼を擦りながらマルティナが笑顔を作る。

「それで、そちらの方は何方ですか？」

「わ、私の名前は『藤原妹紅』と言います」

マルティナの隣で腰掛けていている白髪の少女は、かなり緊張しているようだ。

「よろしくお願ひしますね、妹紅さん」

私は緊張して凝り固まっていた妹紅の頭を撫でた。

人間のようなだが、僅かに妖気を感じる。

他者との関わりを嫌っているマルティナが連れてきたのだから、何か複雑な理由があるのだろうか、今は聞かないで置いてあげよう。

その様子を、見つめている人影が1つあった。

「それで、コイツが美鈴が話していたマルティナって奴？」

少し、不機嫌そうな顔をしているのは1年前にこの家の一員となった風見幽香だ。

最近はやくやく心を開いてくれたようで、以前のように突発的に戦闘を始める事は少なくなつた。

「ええ、そうですよ」

「想像していたのと違うんだけど。」

魔力が多いのは見て分かるんだけど、何と言つか…普通？」

「3日もすればそんなこと言えなくなりますよ」

「そんな誤解するような言い方しないでよ。私は常識人だよ？」

「「「どこが？」」」

美鈴、藍、妹紅の3人の声がほぼ同時に部屋の中を木霊こたまたました。

T o B e C o n t i n u e d . . .

16話 負けて生きる（後書き）

勝って生きるか負けて死ぬかの世界で生きていた幽香にとって負けて生きるのは死ぬよりも恐ろしいことだと思います。

幻想月面戦争終了までのシナリオは出来ているのにうまく文章に出来ない。

登場人物が増えると、台詞を考えるのが大変です。

文才の無さを切実に感じます。

先人の小説を読み、精進したいです。

そして念願のゆうかりんが登場。

最初は旅の途中でマルチメディア覚醒イベントとして出そうと思っていたのですが、強すぎで却下。

原作無視の展開が多いのはご愛嬌ですが、矛盾があったらぜひお教えください。

では引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

17話 風見幽香は平穩に暮らせない(前書き)

原作改変、オリ設定、上等状態です

これは東方の皮を被った何かです、はい

17話 風見幽香は平穩に暮らせない

殺し合いが生きがいになったのは何時からだろうか。
生き残るのに必死だった私は我武者羅がむしゃらに頑張った。

襲い掛かってくる人間も妖怪も殺しつくした。

最初の内は格下の雑魚に襲われ続けたが、100年が経ち200年
が経ち、襲われる事は殆ど無くなった。

平穩は訪れたが私の荒んだ心が平穩を望まなかった。

私の心は殺し合う事で流れる穢れた血でしか潤わなくなっていた。

未だに無敗を誇っていた私は、更なる潤いを求め更なる強者に戦いを挑んだ。

能力持ちと勝負をすることもあったが、たいした事は無かった。

暇を持て余していた私は、巷で噂になっている妖怪の話を聞いた。

妖怪の縄張りに僅か2人で乗り込み、荒らし回っている妖怪だそう
だ。

赤髪と金髪の2人組みと聞き私はふと2人の妖怪の名が頭に浮かんだ。

虹龍小娘 『ほん めいりん 紅 美鈴』

虹色の気を操り、妖怪とは桁の違う妖気を操るその姿は龍を髣髴ほっふつと
させたと言いつ残されている。

数多の妖怪を八つ裂きにし、今から千年以上前に何かを悟ったかの
ように姿をくりました大妖怪だそうだ。

その正体は龍だったとか、神の手下だったとかと色々言われてお
り、今では神格化すらされているらしい。

謎が多い妖怪で、実際にこの妖怪の姿を見た事がある者は、殆どい
ないそうだ。

白面金毛の者『玉藻 藍』

最強の妖獣と呼ばれている九尾の狐は恐ろしく強大な妖弧の姿をしているといわれている。

金色の髪をした絶世の美女に化け、その美貌のみで一國を傾け国の民を恐怖のどん底に陥れた逸話が残っている。

戦闘能力も並外れたもので、九つの尾を鬼火や雷、瘴気の塊へと変えどんな強靱な妖怪もなぎ払ったそうだ。

今から千年ほど前に周を荒らして以来、姿を見せなくなったそうだが、最近天竺の辺りでヒョッコリ姿を現し大暴れをした後、この国へと逃げ込んできたらしい。

この両者は殺し合いを行い、引き分けたと言われている。

その戦いを最後に、行方不明になったそうだ。

そして最近姿を現し逃げ込んできた妖弧に赤髪と金髪の二人組み。

狂気に染まりきっていた私は1つの結論に至った。

この2人は『紅 美鈴』と『玉藻 藍』であると。

この2人なら私を満足させてくれるのではないか？

そう思い立ってからの私の行動力は目覚ましいものだった。

妖怪達から（脅して）話を聞き、僅かに残された妖気を辿る。

3年が経ち、私はようやく奴らが潜伏しているであろう土地へとたどり着いた。

そこは都のすぐ近くだった。

上空から探索を続けていた私は、赤髪の女が目にと留まった。

妖気の欠片も出ていないが、立ち振る舞いからして手馴れであるのはよく分かる。

赤髪の女が人里から出るのを見計らって、私は十八番を撃った。

「『マスタースパーク』!!」

一直線に飛んでいった妖気の塊を、赤髪の女は片手で受け止めた。飛散した妖気は、近隣の森を焦がしつくす。不思議と笑みが漏れていた。

ついに捜し求めていた極上の化け物を見つける事ができたのだ。

逃げ出そうとする赤髪の女：いや、美鈴を追いかけていると突然気配が消えた。

辺りを探索し始めて3時間が経っただろうか。

所々違和感を感じる場所があるのに気がついた。

近づこうとしたら何時の間にか遠ざかっている。

大きさは丁度、屋敷が1つ入るぐらいの大きさだ。

『怪しいものはなぎ払え』

私の500年間の生活の中の教訓の1つだ。

ヒイロノカネで作られた枯れることの無い花傘を右手に持ち虚空に向かつて構える。

「さて鬼が出るか蛇が出るか、何も無かったら骨折り損だけど…」

1本に収束された妖気の塊は、何かに弾かれたように飛散した。

目を凝らすと薄っすらと、先ほどまでは影も形も無かった屋敷が顔を覗かせていた。

「フフフ…どうやら大当たりのようね」

『マスタースパーク』を放ってから5秒も経たずに、2人の人影が森の方へと飛び出していった。

私は美鈴と思われる女と九尾の尾を生やした女の後を追いかける。
このまま逃げる可能性も捨てきれないので、威嚇に何発か攻撃を放
つておく。

「ねえ…貴女達はいつまで逃げるつもり？

早く私を満足させて頂戴よ」

私は積もりに積もった狂気をギリギリ押さえつける。
こんな上物を一気に襲うのは勿体無い。

「…誰に口を聞いているか分かっているのか？」

分かっているに決まっているだろう。

くだらない御託を並べてないで早く殺し合いを始めたい。

「勿論、白面金毛の者『玉藻 藍』と虹龍小娘『紅 美鈴』に決ま
ってるじゃない。

こんな極上の獲物を見つけられるなんて今日は運が良いわ」

なにやらゴチャゴチャと話し合った後、九尾の方が出てきた。

どうやら最初に殺し合えるのは藍の方らしい。

藍は幻覚を使つて来た。

その幻覚は私の肉体を蝕み、腐らせるものや、生きたまま食われる
ような不快感を与えるものであったが、そんなもの効かない。

私は幻覚をもとめせず、妖気を放出し弾幕を放つ。

大量の妖気の弾の嵐に飲まれ、あっという間に目の前の大妖怪は傷
だらけになる。

「一国すら手玉に取った最強の妖獣もこの程度だったのね。
誰なら私を満足させてくれるのかしら」

私はあまりの呆気なさに落胆していた。

3年もの歳月をかけやっと見つけた相手がこの程度だったのだ。
あの攻撃を受け生きているのは素晴らしいが、生憎人形を痛めつけ
て楽しむ趣味は持っていない。

「嗚呼、この姿をとるのは何時方ぶりか。

紂ちゆうを滅ぼした時だろうか。

それとも周を滅ぼした時だったか」

なにやら意味深な台詞を吐いているが、言葉で現状は覆らない。

「あらあら、天下の白面金毛の者が負け惜しみ？

期待はずれの雑魚は早く失せなさい」

私はは、傘を藍に向け妖気を貯め始めた。

膨大な量の妖気は傘の先端へと集まり、瞬く間に膨れ上がっていく。

「消え去りなさい『マスタースパーク』」

直線状に伸びた妖気の塊が最強の妖獣を飲み込まんと迫る。

私の十八番を藍は

「ッ!？」

気がついたら私は倒れていた。

体の節々が悲鳴を上げる。

口の中に血の味が広がる。
立ち上がるとそこには正真正銘の化け物がいた。

「折角本気になったのだから…私を満足させてくれよ？」

「フフツ…アハハハハハ

そうよ、そう来なくっちゃ！！」

私が求めていたものはこれだ。

これならば、きっと私を満足させてくれるだろう。

私は隠していた妖気をすべて解放する。

背中から4本の羽根を出し、今まで出した事が無いであろう本気を
出す。

私は1度も勝負で負けた事が無い。

それは私が強いからだと思っていた。

しかし現実はず違った。

この世には私を超える化け物が大勢居る事を知った。

井の中の蛙大海を知らずとは正にこのことである。

「つまらないな。

せうかく折角本気を出したのにこれで終わりなのか」

屈辱的だった。

負ける事がここまで悔しいとは思わなかった。

もう殆ど動かない体を無理やり動かし、藍を睨みつける。

「私は…まだ…死んでないわよ…」

無様だろうが関係ない。

私が死んでいない限りまだ勝負は終わっていない。

私は敗北していないのだと心の中で言い聞かせる。

「お前は敗北したものは必ず死ぬものだと思っっているようだな。

確かにその考えも間違っではないかもしれないが、世界はそんなに単純には出来ていないのだよ」

動かぬ体に追い討ちをかけられる。

だが、踏みつけられた箇所は急所ではなく殺す気が無いのが分かる。

「ぐっ…」

情けない声が漏れる。

「死ぬことで全てが終わると思ったたら大間違いだ。

何事も成した後には後始末が必要なようにお前が死んだ後は色々面倒ごとが増える」

意味が分からない。

この世は生きるか死ぬかの世界。

私を生かしておく理由など存在しない。

「何故…殺さないの…貴女程の大妖怪が…私に情けをかけるとても言うの…?」

「情け?何か勘違いをしているようだな。

お前にはこれから死ぬことよりも恐ろしいことを体験してもらおう

だけだ」

「死ぬよりも…恐ろしい…？」

そこで私の意識は途絶えた

目を醒ますとそこは家の中だった。
体を見ると綺麗に治療が施されていた。

「ここは…いつたい…」

「目が覚めましたか？」

優しく微笑む女性、そこからは敵意の欠片も感じられない。
私が追いかけていたもう一人の大妖怪『紅 美鈴』だ。

「……………」

きつと何か裏があるに違いない。

藍は『死ぬことよりも恐ろしいこと』を体験するといっていた。
きっと私を奴隷のようにこき使う気なのだろう。

「噛まなくても良い物を持ってきましたか食べられますか？」

「……………」

信用はできないが、何か食べなければ何時まで経っても傷は良くな
らない。

仕方が無く私は従うことにした。

「お口に合いますか？」

今まで果実や穀物が肉しか食べたことの無かった私は調理された食事を食べたとき衝撃を隠しきれなかった。

この世にはこんなにも美味しい物があつたのかと。

私はとりあえず頷くことにした。

怪我が直つた暁あかつきには、今度こそ血祭りにあげてやる。

私は深く心に誓つた。

1週間後

私の体は全快に近いまでに回復した。

傷は少々痛むが、家の中を出歩くことまで出来るようになった。

「体の様子はどうですか？」

「……………ええ、おかげさまで大分良くなつたわ」

何故コイツはこんなに腰が低いのだろうか。

私の何倍も生きているのだから、もっと偉そうに喋ってもいいのに。私の体の様子をまるで自分のことのように心配してくる。

これが妖怪達に神格化されている紅美鈴なのか疑わしいぐらいである。

「まだ無茶は禁物ですよ？」

「……………分かつたわ」

怪我が治ったら血祭りにあげると決め込んでいたが、もう少し様子を見ることにする。

そうだ、この2人の能力を見極めてからでも遅くは無いだろう。無意識に先延ばししているような気がするが、気のせいだ。

その時はまだ、夕飯の時に早くも目標が達成できるとは思えなかった。

「美鈴、アレを取ってくれ」

アレで分かるなら言葉は要らないと思う。

「はい、どうぞ」

醤油を手渡す美鈴、何故アレで分かるのだ。

もしや美鈴は読心術でも使えるのだろうか？

「大妖怪になれば読心術も使えるようになるのかしらね」

冗談半分と言ったこの台詞が思いのほか良い線をいっているとは思わなかった。

「読心術とまではいきませんが、気持ちなら読み取れますよ？」

「は？」

「私の能力は『気を操る程度の能力』ですから」

「私は妖術全般や式を扱う程度しか出来ないのに、お前は卑怯だぞ」

「私は能力をあまり使っていないですし卑怯じゃないですよー」

「いや、お願いだからもつと能力を使ってくれ。」

人間や妖怪にこの場所がばれたら厄介なのだから」

この妖怪共は能力を隠したりしようとはしないのだろうか。
能力持ち同士の戦闘となれば、当然能力を知られていない方が有利となる。

私の能力は無いに等しいので、ばれても困らないが。

「そういえば幽香さんって能力持っているんですか？」

「そういえば訊きいていなかったな」

痛いところを突いてくる。

私はこの能力をあまり好んでいない。

花など育てても、戦闘には役に立たないからだ。

どうせならもつと戦闘に役立つ能力がほ欲しかったが、無いものを欲するほど私は落ちぶれていない。

「『花を操る程度の能力』よ」

「……………予想外ですね」

「そうだな」

2人はなぜか驚いたというよりは感心している。

「何よ、馬鹿にしてくれてもいいのよ？
こんな有つても無くても変わらない能力」

「いえいえ、私は貴女が能力とは関係無しにその力を持っていることに感心したんですよ」

「褒めても良いことなんか無いわよ。

私のような命を奪うことでしか生きがいを見出せない妖怪なんかが
」

私の話には藍が割り込んできた。

「それなら別の生きがいを作ればいいだけだ」

「別の…生きがい…？」

「折角そのような素敵な能力を持っているのですから花を育ててみてはどうですか？」

「私が花を…育てる…」

今まで考えもしなかった選択肢だ。

「善は急げと言いますし明日から試しましょう」

「え？ちよ、勝手に決めないで…」

そこにはもうすでに何の花を育てるか選び始めた美鈴と藍の姿があった。

それから毎日が充実していた。
以前の私が今の私を見たら驚きを通り越して爆笑し始めるだろう。
美鈴の友人のマルチナと言う魔法使いが置いていった、まるで本物のような花の絵が描かれている本を読みふけり、気に入った花を咲かせる生活を続けていた。
そこには狂気に取り付かれた私の姿は無かった。
何時の間にか私の心は平穏で潤っていた。

私は思う。

藍が言っていた『死ぬことよりも恐ろしいこと』とは負けて生きることだと。

敗北を味わう事は、敗北したことに気がつかず死んでいくことよりも恐ろしい事だ。

だが、それを乗り越え更なる高みに上る事で私は強くなれたと思う。少なくとも殺すことで生を実感していたあの頃よりは何倍もマシである。

この家で過ごし始めて半年が経ち私はあることに気がついた。
もしかしたら、美鈴が私の狂気を押さえつけてくれているのではないかと

よくよく考えたらおかしな話だ。

私は藍に敗れ、この家に来たときから戦闘を行いたくて堪らなくなつた事が無い。

今思えば美鈴が自身の能力を打ち明けたのも、私に気がつかせるためなのだろう。

だが、分からない。

美鈴が初対面の頭が狂った妖怪を助ける理由が無いのだ。

「ねえ、美鈴」

「どうしたのですか？」

「貴女はどうして私を助けたの？」

「気がついていたんですか」

「ええ、あそこまで露骨に誘導されてたら嫌でも気がつくわ。
態々能力を使ってまでして助ける価値が私にあったのかしら」

美鈴は困ったような顔をしながら答えた。

「……………貴女は似ていたんですよ」

「……？」

「昔の私にとっても良く似ていたんですよ」

「それってどういう　　「今のは忘れてください」

美鈴は私が1度も見たことの無い悲しげな表情をしていた。
私はそれ以上問い詰めるのをやめた。

これより先は私が立ち入って良い範囲ではないと思ったからだ。

その後も平穏な生活が続いた。

美鈴の過去については詮索しないことにした。

いつか、美鈴が自分から語ってくれるであろう。

今日は、美鈴と一緒に買い物に出かける。

なんだかんだで私は美鈴や藍の事を入っているのだろうか。生まれた頃から1人で生きてきた私は他者の優しさを受けた事が無かった。

もし私にも家族がいたらこうはなっていないかっただのかもしれない。

もう少し、もう少しだけ家族ごっこをしても良いかもしれない。

私は美鈴と手を繋ぎながら、微笑んでいた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

17話 風見幽香は平穩に暮らせない(後書き)

元ネタ

タイトル||吉良吉影は静かに暮らしたい(ジヨジヨの奇妙な冒険)

八雲家を超える何かを作られようとしています

家族構成

美鈴(推定4000歳)

藍(推定2000歳)

幽香(推定500歳)

妹紅(17歳)

マルティナ(22歳)

これに紫が混じったらものすごいことになりますね

日常編を何話か入れたら素材集めを再開したいです
仲間に誰を加えるかが悩みどころです

妹紅は確定ですが他に誰か追加しようか悩みます

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

18話 平凡な日常？（前書き）

ネタ話です

読み飛ばしても良い位ネタしかありません

設定変更でこの話からコートを着用していませんになりました。

具体的な見た目 <http://dic.pixiv.net/a/%E3%82%B2%E3%83%8B%E5%AD%90>
変更点は服の色が青から黒になった点と

頭に乗ってる黒い布をのけて魔法使いの帽子を乗せてだけです

目の色は青、髪の色は金、スリーサイズは上から86・57・84

18話 平凡な日常？

家に居候が増えました。

わ……私の隣に座っている妖怪は………

『風見幽香』かざみ ゆづかじゃあないのか……

たしか『究極加虐生物の肩書きを持っており』アルティマアドスチグレイチャー

ひとかすりしただけで致命傷になる『マスタースパーク』を
必殺技にしている……

射程距離内に入ったら……何秒もかからず

心臓や呼吸器系の神経組織を破壊し 生命活動を停止させる……
そいつが今……私の体を凝視している。

目線が怖い。値踏みされているような気がしてならない。

妹紅に助けを求めたら目を逸らされるし、美鈴と藍は不敵な笑みを
浮かべながらこちらを見ている。

何なんですか？

嫌がらせなんですか？

夢半ばで私の人生は終わるんですか？

た、確か風見幽香は強力な妖怪にしか手を出さないと言っていた。

私は生後22年しか経ってない、赤ん坊みたいなものだ。

まだまだ魔法の研究もし終わってないし、書ききれてない魔道書だ
って沢山ある。

こんな弱者に戦いを挑むはずが無い。うん、無い……と思うよ。

とりあえずこのままでは埒が明かないのでこちらから話を進める。

「何か言いたい事があるなら早く言ってくれない？」

我ながら口だけは無駄に達者だ。
その勝気な喋り口調のせいで野良妖怪の怒りを買いつけてきたので
自慢はできない。

「貴女あなた、その歳で中々強いらしいじゃない」

いやいやいやいやいや、買いかぶりすぎだ。
そもそもこの家にいる妖怪は全員私より強いじゃないか。
何で私に興味を示すの？馬鹿なの？戦闘狂なの？脳筋なの？

「私は平和主義だから戦闘は好きではないのだけれど」

とりあえず戦闘だけは回避しなければならぬ。
美鈴や藍がいるから殺されはしないだろうが痛いのは嫌だ。

「嘘ね」

はい、私の嘘はバツサリと切り捨てられました。
確かに研究の為に進んで戦闘を行うし、相手が戦う気なら容赦せ
ずに戦うのは事実だ。
ただし相手が私と同程度の實力もしくは私に仲間がいる場合に限る。
つまり明らかに私より強そうな奴とは戦いたくない臆病者なのであ
る。

「ど、どうして嘘だと思うの？」

つい同様している事が表面に出る。
相手は500年ほど生きている妖怪だ。
私とは比べ物にならないほどの人生経験は積んでいるだろう。
それは肝の据わり方や雰囲気現れる。

私は小心者とまではいかないが、動揺しやすい一面がある。
実際天魔と戦ったときは、動揺しまくりだった。

「貴女あなたが妖怪達の縄張りを滅ぼし回った話を美鈴から聞いているわ」

おいしいおいしい！？

美鈴さん、何あつさりと私の秘密を教えちゃっているの？

妹紅にもまだ教えてないのに…ほら、妹紅がめっちゃ動揺してるじゃない。

妹紅の生暖かい視線が心に直接攻撃ダイレクトアタックしてくる。

そりゃ研究の時は残虐非道になるけど、普段は温厚な性格だよ！？
少なくとも目の前にいる、数多の国を滅ぼした妖怪（玉藻 藍）と
一見境無く妖怪を殺してきた妖怪（風見 幽香）よりはまとも…だ
と思うよ！！

「それは事実だけれども、私は貴女あなたと違って無謀な戦いはしない主義なの」

切実な願いを漏らす。

普通に考えたら常識的な考えなのだが、目の前にいる頭のネジが緩みきった妖怪達にとっては非常識な考えだ。

そりゃあ、自分より強い妖怪より弱い妖怪の方が多し連中だからね。
無謀な戦い？何それ、美味しいのって感じだろう。

これで戦闘を回避できるとは思えないが、無理は承知だ。

「私は何も殺しあえとは言わないわよ？」

「はい？」

殺しあわない…？

そういえば美鈴達と関わって多少考え方が変わったと、幽香は言っていた。

「貴女、あなた面白い技を持っているらしいじゃない」

私が得意としているのは主に精霊魔法と空間操作魔法だ。

精霊魔法は『メドローア極大消滅魔法』や『イオナズン』などの戦闘に使う物が多い。

空間操作魔法は『ザ・ワールド』や『キング・クリムゾン』などの他の魔法と合わせて使う物が多い。

「もしかして『メドローア』の事を言っているの？」

風見の得意技は『マスタースパーク』だ。

それと同じほどの出力があるのは、今のところ『メドローア』位しかない。

美鈴達と別れるときは未完成だったが、日本に向かっていている途中に完成させた魔法の1つだ。

「それよそれ。」

その技が私の『マスタースパーク』と比べてどちらが上か確かめなかったのよね」

どうせ美鈴が教えたのだろう。

昔から私が質問した事は殆ど教えてくれたので、幽香にも同じように接していたのだろう。

そこが美鈴の良い所でもあり悪いところでもある。

「……………別にいいけど1つ条件をつけていい？」

タダで私の魔法を見せるのは面白くない。
そこで私は条件をつけることにした。

「何かしら」

「負けた方は勝った方の言う事を聞くつてのはどう?」

幽香の能力である『花を操る程度の能力』は私が欲しい材料の1つ
『優曇華』の花を咲かす事ができるだろう。

私にとっては好都合であり、想定外のことではあったがこれは利用
する価値が大いにある。

「別にいいわよ。最初からそのつもりだったし」

……最初からそのつもりだった?

突然、幽香が美鈴達と話し合いを始めた。
とても嫌な予感がする。

命の危険を感じたわけではないがそれよりも大切な何か危険に晒
されているような気がしてならない。

数分後、美鈴 藍 幽香の3名がガッツポーズをして話し合いは終
わった。

何故にガッツポーズ?

何を狙っているのだろうか。

「もう1つ追加で条件をつけるわよ」

「ええ」

「引き分けたら、お互いの言う事を聞くつてことでいいわね」

「分かったよ」

つまり3分の2の確立で私は『優曇華』の花を手に入れられるというわけだ。

美鈴達が何を考えているかは分からないが、いざとなったら逃げればいい。

逃げれるか非常に不安ではあるが大丈夫だろう………多分。

屋敷の外に出て結界を張る。

人間や妖怪に感じられないようにするためである。

この場所には、少なくとも数の人間や妖怪から狙われている妖怪が4人もいる。

ここに暮らしている事がばれたら厄介なので嚴重に張っておく。

「紅蓮の炎よ凍てつく氷と共に一つと生りて有から無へと転ぜよ」

この魔法独自の体勢を取り、私は魔力を両手に込める。

天魔と戦った時よりも幾分増した魔力を込め、何時でも射出できるようにする。

一方、幽香の方も傘を構え妖気を先端に集めてゆく。

あの体のどこからあんなに大量の妖気が出てくるのか不思議だ。

「極大消滅魔法『メドロア』！！」

「『マスタースパーク』！！」

2つの光がぶつかり合い双方とも消滅した。

「引き分け…？」

「そのようね」

正直死ぬかと思った。

藍の回想では尻尾で叩き落としたとか言っていたが、どうやったら叩き落とせるのか不思議だ。

まあ終わり良ければすべて良しだ。

「それじゃあ約束通り、私の言う事を聞いてもらっよ」

「いいわよ。」

でもその前に私達の言う事を聞いてもらっわよ」

「私達…？」

「詳しくは家に帰ってから教えるわ」

帰宅

「と言うわけで私の命令を聞いてもらっわよ」

そこには様々な服が広げられていた。

メイド服、中華服、セーラー服、その他諸々…

その昔、本に書いてあった服を錬金術で再現した物だ。

体中から冷や汗が出てくる。

「まさか私に着せ替え人形になれとか言わないよね？」

「あら、物分りがいいじゃない」

どうしてそうなる。

そもそもサイズ的にはみんな着られるはずだしおかしいよ、何これ、死にたくなってきたよ。

「いや、その、折角だけとお断り」

「うん、それ無理」

幽香に満面の笑みで断られた。

うわああああああああ

絶望した！自分の昔の行いに絶望した！

「……………」『ザ・ワールドうわらばッ!？』

時を止めて逃げようとしたら、美鈴と藍に押さえつけられた。

「貴女に足りない物、それは！情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！そして何よりも！速さが足りません!!」

「小便はすませたか？」

神様にお祈りは？

部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」

今、悟った。

私はチェスや将棋でいう『詰み』チエック・メイトにはまった。
すでにコートを脱がされ部屋のスミでガタガタ震えている私は、最
後の希望である妹紅に視線を送る。

「この服とか似合いそうですね」

そこにはウエディングドレスを手に取りつつ真顔でそんな事を言っ
ている妹紅の姿があった。

終わった。

私の最後の希望は潰つぶえた。

日が変わるまでその茶番は続きましたとき。

T o B e C o n t i n u e d . . .

18話 平凡な日常？（後書き）

元ネタ

3行目から10行目の件くたり「エリンコ・プッチ（ジョジョの奇妙な冒険）」

うん、それ無理「朝倉涼子（涼宮ハルヒの憂鬱）」

絶望した！自分の昔の行いに絶望した！「糸色望（さよなら絶望先生）」

うわらば「アミバ（北斗の拳）」

貴女に足りない物、それは！以下略「ストレイト・クーガー（スクライド）」

小便はすませたか？神様にお祈りは？以下略「ウォルター・C・ド

ルネーズ（HELLSING）」

チェスや将棋でいう「詰みチェック・メイト」にはまった「DIO（ジョジョの奇妙な冒険）」

ネタが分からない方にはつまらないかもしれませんが。

分かってもらえないかもしれませんが、ごめんなさい。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

19話 平穏な日常？（前書き）

後半はまったく平凡じゃありません

19話 平穏な日常？

AM 6:42

私は皆の朝食を作り始める。

魔法使いは睡眠をあまり必要としないので研究を行うには便利だ。疲れは着実に蓄積されるので、週に1度は睡眠をとらなければならぬがそれを差し引いても便利だ。

様々な魔法を同時に使用し、火を起こしたり調理器具を浮かばせながら本を読む。

同時詠唱と分割思考を鍛えるための訓練なのだが、どうにも口車に乗せられた感が否めない。

幽香や妹紅はともかく美鈴は料理を作れるのだからたまには手伝って欲しいものだ。

この屋敷に住んでいる連中は生まれがバラバラなせいで献立を考えるのがとても面倒だ。

美鈴の生まれは分からないが様々な土地を渡ってきたらしく、何でも美味しそうに食べてくれる。

藍は大陸の出身で皇帝の妃に化けたりしていた過去があり、無駄に舌が肥えている。

妹紅も、昔は良い所のお嬢様だったこともありやはり舌が肥えている。

厄介なことに大陸の料理は好み合わないようで日本食しか食べたくないと言いつつ始末だ。

更に論外なのが幽香だ。

彼女は私がどんな料理を作っても何かしらの文句を言ってくる。私を弄って楽しんでいるのだろうか、精神的に結構きつい。

時折泣きそうになっている私の顔を見たときに満面の笑みを浮かべる。

なんだかんだで食べ残したりする事は皆無なので、内心満足しているのだろう。

A M 7 : 0 2

私は魔法を使つて普通ならまだ作れない時間できょうきよ朝食を完成させる。

この時間に起きているのは、美鈴と幽香ぐらいだ。

美鈴は、毎日鍛錬を欠かさず行っている。

すでに極めつくしているであろう武術を更に高みに昇華させようとしている。

本当に美鈴は妖怪らしくない妖怪だ。

私知っている限りでは、人を襲って食べている姿を見た事が無い。それは妖怪としてどうなのか気になるが、深く言及しないでおこう。

幽香は自慢の花畑に水をやってる。

この国では咲かないような花もあるので見ていて楽しい。

研究に使えるような花を引き抜こうとしたら、鬼のような形相で睨まれたのは今でもはつきりと覚えている。

『優曇華』を貰えただけでも奇跡なので、あの花畑に手を出すのはやめておこう。

私は、寝ている藍と妹紅を起こしに向かう。

2人とも気持ち良さそうに寝ている。

こっちは日々魔法の研究と家事全般で疲れているというのに……
まあこの寝顔に免じて許してやるとしよう。

「『ザメハ』」

対象の意識を活性化させる魔法、つまり目覚まし魔法だ。

すつきり後腐れなく起きれると藍と妹紅から好評だ。

元は戦闘時において意識を失いそうなときに使う魔法のつもりで研究していたのだが、方向性を間違えてこうなった。
結果的に役に立っているしまあいい………のか？

A M 7 : 3 8

皆が食事を終えたので汚れのついた食器を洗う。

最近家事でしか魔法を使つてないような気がしてきた。

一応修行と言つ名目で幽香と半強制的に戦わされる事はあるのだが、逆に言えばそれ位でしか魔法を使わない。

私は家政婦ではなく魔法使いなんだぞ。

A M 9 : 2 4

妹紅は藍に妖術を教えてもらっている。

最初は渋々だったが最近では結構やる気が出てきたようだ。

美鈴も能力を使って妹紅の妖気や気力を底上げさせてあげている。

お陰で、何とか妖術も形になってきた。

まだあまり威力は出ないがある程度の妖術を使いこなせるまでに成長した。

特に鬼火は、中々出力が大きい。

私の『メラミ』と同等程度の威力を誇るほどだ。

私もそろそろ『メラゾーマ』よりも強力な火炎魔法を作ろうかと思う程に成長が目まぐるしい。

P M 12:14

私は魔法を使つて普通ならまだ作れない時間できょうきよ昼食を完成させる。

一応5人分の料理を作つてはいるが、私はあまり食べない。

捨食の魔法を使つているので食べる必要が無いからだ。

他の連中は、多分食べないと生きていけないだろう。

美鈴は私と旅をしていた頃1月ほど何も食べられなかった時期があったが、ピンピンしていたのでもしかしたらその程度は食べなくても大丈夫なのかもしれない。

227

家事全般に時間を割くのが勿体無いので最近わりと真面目に使い魔を呼び出そうか検討していたりする。

使い魔関連の本を読んでいると、どうやら使い魔は呼び出した魔法使いに近い性質を持った者が多いらしい。

私に似た悪魔………うん、止めておこう。

それにこれ以上住人が増えると養うのに苦労する。

私が錬金術を使えなければ、今頃どうなっていたかは想像がつく。

P M 14:09

紫が訪ねてきた。

コイツはスキマを開き音も立てず私の背後に近寄ってくるので、心臓に悪い。

私を驚かせて良い事がある訳がないのに……むしろ驚いた私の反応を見て楽しんでいるのかもしれない。最近胡散臭い態度をとることも少なくなってきたており、私も下の名前を呼ぶようになった。

今日も美鈴と藍を勧誘しに来たようだ。

いい加減諦めたらいいのにしつこい妖怪だ。

「マルティナ」

「んー？」

私は錬金術に使う釜の中身を必死にかき回している。

魔法でかき混ぜると余計な魔力まで入ってしまうので手作業でやっている。

「貴女あなたは何故命を懸けてまでこんな材料を集めようとしているから」

「完成させたい魔術に使うだけだよ」

あくまで白を切る。

アルス・マゲナ

黄金練成の事を知っているのは私自身と美鈴のみだ。

この魔術を完成させるには莫大な労力と犠牲がいる。

その犠牲は私自身すら及ぶことになる。

そんな事を話したら絶対に止められるだろう。

だから話さない。

話すのは、きつと月に向かう時だろう。

「またそうやって白を切るのね。」

「いつか必ず話してもらおうよ」

いつか話すさ。

それが最後の別れになるかもしれないが。

P M 16:51

妹紅達が修行を終えて戻ってきた。

美鈴は、幽香の花畑の世話を手伝いに行ったそうだ。

「マルティナが持っている本って変わってるよね」

「確かにそうだな」

私の書齋で2人は色んな本を読み漁っている。

文字こそは読めないだろうが絵が殆どを占めている本もあるので見ていて退屈はしないだろう。

私が持っている本の半分は父さんから旅の饞別に貰っていた物だ。

残りの半分は、顔も知らない母さんが残してくれたグリモワール魔法書だ。

さすが流石に『死霊秘法』の原本は無かったが、ヘブライ語版『ソロモンの鍵』の原本や『アルマンダル』の原本など常人が見たら発狂しそうな物がある。

一体どこから見繕ってきたのか分からないが母さんは相当の魔法使いだったのだろう。

「それは父さんが持っていた本で本人曰く未来の本なんだってさ」

「未来!?」

「未来といっても異世界らしいんだけどね」

「信じられない話だな」

「ま、その未来の本には魔力が宿っているわけでもないし、只の娯楽用の本が殆どだよ」

「ほえー」

「ねえ、この本貰っても良いかしら？」

何時の間にか紫が私の横に腰掛けている。

「駄目に決まってるでしょ」

時折、本の内容を読んであげたりするが、藍や妹紅には意味が分からない単語も多々あり説明するのが面倒だ。

紫は何故かスラスラと読んでいるのが気になる。

境界でも操って無理矢理読んでいるのだろうか？

まあ知識をつけるのも悪いことではない……いや、悪いこともあったか。

あの着せ替え事件から私は時々変な服を着させられる事が増えた。

確かに私は古典的な魔法使いの服を着ているわけではないが、だからといってメイド服は無いだらう。

何が好きで従者の格好をしなければならぬんだ。

美鈴とかが似合いそうなのだから着ればいいのに。

いつか美鈴がメイド服を着る破目はめになったら、絶対俊足で駆けつけてやる。

私は魔法を使って普通ならまだ作れない時間できょうきよ夕食を完成させる。

それにしても1日3食も食べるとは、贅沢な連中だ。

てか、何で紫がちやつかりと夕食を一緒に食べているんだ。

もしかして1人でいるのが寂しいのかな？

いや、無い…うん、ありえないだろう。

妹紅は成長しないにしろ、他の連中はまだまだ成長する気なのだろうか。

妖怪が老化するかは知らないが、少なくとも成長はするだろう。

実際、この前測ったら幽香の胸が1cmほど大きくなっていた。

美鈴や藍なんて4桁も生きているのにこんな見た目なのだからもしかしたら老化はしないのかもしれない。

そつえば紫は何歳なのだろうか。

聞いたらスキマ送りにされそうなので聞かないでおこう。

P M 20:33

この家には風呂がある。

上下水道を完備した21世紀の日本を基準にした風呂だ。

上下水道は紫のスキマ経由、お湯は私の魔法式によって自動的に温度まで調整してくれる。

シャワーやジャグジー機能まで搭載しているというよく分からない代物だ。

この屋敷には風呂らしき物はあったのだが、流石に5人+ が入るには狭かったので、作り直すことにした。

その時、私が気合を入れすぎたのだ。

参考になる書物の知識は頭に入っていたし、部品を錬金術で作り出し組み合わせるだけの簡単なお仕事だった。紫も悪乗りした結果、時代を10世紀以上先取りした風呂が完成したわけだ。

折角の広い湯船なので私達は一緒に入る事が多い。同時に入ってくれた方が、掃除をする身にとっては楽なのだ。

妹紅が自分の胸と皆の胸を見比べてため息をつく事があるのだが理由が分からない。

皆が言うには私はどこか抜けているらしい。現代風に言えば天然ボケと呼ばれているものだ。

どこが抜けているのか考えても分からないのでそのうちマルチナは考えるのをやめた。

P M 23:14

この時間になったら皆寝ていることが多い。妖怪って夜行性が多いのにこれで良いのだろうか？この家にいる妖怪達が変わるだけで世間一般の妖怪は夜行性だろうか…たぶん。

ふと庭を覗くと美鈴が鍛錬を行っている。その動きは洗練されつくしたもので、付け入る隙も無いものだった。そういえば美鈴は妖気を使わない。攻撃はすべて気で行い妖気そのものを使う事は無い。

美鈴の能力は『気を操る程度の能力』だ。

操るの度合いが分からないが、本人曰く気候や空気、終いには気持ちや生氣まで操れるらしい。
紫の『境界を操る程度の能力』と良い勝負が出来る位、万能な能力だ。

私は長年気になっていた事がある。

美鈴は一体何の妖怪なのだろうか？

九尾の狐の藍すら退けた実力から相当位の高い妖怪なのは検討がつく。

美鈴の肩書きの『虹』の文字は虹色の気を扱う所から来ているのだろう。

では、『龍』の文字はどこから来ているのだろうか。

幽香曰く、龍のごとく強大な妖気を放っていたことからついたと言っていた。

だが、強力な妖気を放っていただけで龍を連想するのには少し無理がある。

虹のイメージと合わさって龍と呼ばれているのと考えるのが妥当だろうか。

昔、父さんに『虹龍の伝説』と言う話を聞かされた事がある。

悲観的な内容の話で、九尾の狐を倒した所で話が終わってしまった事を覚えている。

父さんは、『虹龍の伝説』とはある妖怪から聞いた実際にあった話だと言っていた。

実際に虹龍の伝説は残っている。

私が必要としている材料の中にも『虹龍の鱗』があるのは父さんの

話を信じているからだ。

いや、虹龍は実在するだろう。

もし存在しないのなら、紫が何か言ってくるに決まっている。

父さんの話と藍が話していた話、さらに幽香の話統合する。

結論として行き着いたのは1つの可能性だった。

美鈴の正体は龍なのではないか？

ありえなくは無い話だが、おかしい点が幾つもある。

龍とは龍脈を守護しているのが普通だ。

そして龍が纏っている力は妖気ではなく神気だ。

竜神とも言われるとおり、龍は神の一種だ。

繰り返すようだが美鈴の能力は『気を操る程度の能力』だ。

無から有を作り出す事は流石さすがに出来ないが、神気を妖気や気に変換する事は出来るのではないか？

ここは本人に聞くべきなのだろうか。

それとも戦ったことのある藍に聞くべきなのだろうか。

何れにせよ、いつかは聞かなければならないことだ。

私は、庭に飛び出した。

「どうしたのですか？」

美鈴は、私が出てきたことに気がつき鍛錬をやめ、こちらを振り向いた。

「美鈴、1つ聞きたい事があるのだけどいい？」

「別に良いですが…なんですか？」

「美鈴の正体って

ドラゴン
龍神

なん

でしょ？」

「……………」

月光が私達を照らしていた。

T O B e C o n t i n u e d . . .

19話 平穏な日常？（後書き）

元ネタ

『分割思考』＝シオン・エルトナム・アトラシア（MELTY BLOOD）

文字通り思考を分割し、脳内に仮の人格を作り出す。

簡単に言えば脳内で沢山の自分と会議やチャットをしているようなもの。

そのお陰で超高速で思考していると思ってください、はい。

『どこが抜けているのか考えても分からないので

そのうちマルチナは考えるのをやめた』＝カーズ（ジヨジヨの奇妙な冒険）

この小説の『紅 美鈴』はCoolier^{クーリエ}にて投稿されている

にやお客様の『虹龍の夢、虹龍の未来』の『虹 美鈴』のイメージが強く反映されております。

私が美鈴のことを好きになった小説でもあるので読んだことの無い方はぜひお勧めします。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

20話 虹龍の鱗(前書き)

美鈴の過去話

どっにもつまく文章に出来てないです

20話 虹龍の鱗

沈黙が続く。

私が耐え切れずに喋ろうとした時、美鈴が口を開いた。

「昔、私は妖怪の集落にも人里にも暮らせないと行っていましたがね」

「……………うん」

「アレは嘘です。」

私の能力を良く知っている貴女あなたなら薄々感じていたでしょうが」

たしかに美鈴が本当に定住する気があるなら、能力を使ってそこに住んでいる者の気持ちを操れば済む話だ。

「私の能力なら妖怪の縄張りに馴染む事も人里で人間として暮らすことも簡単に出来ます。」

ではここで問題です」

「は？」

完全に不意打ちだ。

どうしてこちらが質問しているのに質問し返されるんだ。

質問文に対し質問文で答えるとテスト0点なの知ってたか？

……………よく考えたら学校なんてないしテストも無いよね。

「私が定住をせず旅を続けている理由は何でしょうか？」

美鈴の夢は定住することだといっていた。
それは紛れもない真実だろう。

その時の美鈴の表情は嘘をついているとはとても思えなかった。

「……………同じ土地に長くいられない理由があるから？」

分割思考で考えた結果、こうなった。

消去法なのだが、これ以外に理由を考えつかなかった。

「その通りです。」

マルティナは龍神をどの程度知っていますか？」

「龍脈を守護する神の一種って位…かな」

「では、守護する龍脈が無い龍神はどうなるでしょう」

「うーん」

そんなifの話をされても分からない。

私は確かに知識だけならかなり自信があるが、それは未来の本や魔法に関連することだけだ。

あまり神を信じていないし信仰もしていない私はそのような知識に疎い。

「龍神とは本来1つの場所に1匹しか居られない者なのよ」

何時の間にか紫が会話に参加していた。

いい加減空間魔法で立ち入り禁止にしてやろうかと思えてきた。

紫の能力はある程度解析を終えているので、スキマを開きにくくすること位はできるはずだ。

「八雲の言う通り、龍脈を守護する龍神は1匹です。そして守護する地域に他の龍神がやってきた場合、簡単に言うと縄張り争いが起こります」

「縄張り争い…?」

そんな妖怪じゃあるまいし、神同士が争うなんてありえる話なのだろうか。

「神同士でも争う事は多々ありますよ？」

主に信仰を奪うために、己の領土を増やすために、力を上げるために、

理由は様々ですが、昔から神同士の大战はありました」

「最近だと『諏訪大战』とかかしら。

大和の神が全国统一すると銘打って、進軍していたわね」

「神も人間と変わらないのね……………」

神も人間もそのあたりはあまり変わらないのか。

「私が生まれた地域には、龍脈が存在しませんでした。

『大漠』^{ゴビ砂漠}と呼ばれる恵みの全く無い土地です」

「でも龍神は龍脈と一緒に存在する者なんじゃないの？」

「その通りです。」

私は本来存生まれてはいけなかった存在なのでしょうね。異端の存在だった私に居場所はありませんでした」

「そんな…」

「人間からは妖怪だからと忌み嫌われ、妖怪からは襲われることしか無かった。

話し合おうとしても私の言う事を聞いてくれる者は居なかったのです」

「……………」

聞くに堪えない。

美鈴の過去は私の想像以上に酷かった。

「他者を頼ることも出来ず妖怪に襲われ続けられる生活を、数百年も繰り返していた私に限界が訪れました。

この条件に当てはまる方に心当たりがあるでしょう」

「……………幽香？」

「ええ、その通りです。

私は生きる目的も無くただ妖怪を殺すだけの存在になっていました」

「でも今の美鈴は狂気を宿しているようには見えませんよ」

「私が正気を取り戻す事件があったのです。

私が生まれて二千数百年が経った頃でしょうか。

襲い掛かってくる妖怪も殆ど居なくなり

私は当ても無く彷徨っていると、とある噂を耳にしました。

周の国を荒らしている妖弧がいると」

きつと藍の事だろう。

「無意識に私は周へと向かっていました。

そして藍の姿を見つけた瞬間、私は戦いを始めていました。

戦いは壮絶なもので決着までに3日3晩を要しました。

結局、藍の物量作戦に押し負けて引き分けになったのですが私は衝撃を受けました。

世の中にはこんなに強い妖怪が居るのだと。

その当時の私は本能のまま戦っており、能力や格闘術を使いこなせていなかったのです」

美鈴の本気の妖気はどれほどのものになるのだろうか。

本能だけで頭脳派の藍を退けるのだから、相当のものだったのだろう。

「私は始めて自分と対等な存在を見つけました。

そこからでしょうか、私の心に1つの変化が生まれたのです」

「向上心が生まれたのね」

「その通りです。

私は能力を使いこなすように努力を始めました。

それまでは戦闘でしか使わなかった能力を、戦闘以外でどのように使うか練習を始めたのです。

その次に行ったのが格闘術の習得です。

私は元々強靱な肉体を武器に戦っていました。

気を使うことで多少の遠距離戦はこなせますが、得意な近距離戦を磨くことにしました。

能力で妖気を靈気に変換し、人里に様々な格闘家から技術を教わりました。

そうした生活をしているうちに私の中の狂気は綺麗サツパリ無くなっていました」

私は、泣きそうになりつつ美鈴の話を聞いていた。

美鈴は私なんかより遥かに強い。

それは実力的な意味ではなく精神的な意味だ。

「その後は様々な地域を転々としていました。

同じ土地に留まっていたら能力を使い気配を消しても10年もすれば龍神にばれてしまいます。」

そのような生活をしている時に、マルティナ貴女に出会ったのです」

「……………私？」

「マルティナは私にとっても仲良く接してくれました。

私はそれまでそのような体験をした事が無かったのです。

貴女との旅はとても楽しかった。

今までの生活の中で一番充実していました。

これだけは八雲に感謝しなければいけませんね」

「あら、それはどうもいたしまして」

紫が、胡散臭く相槌を打っている。

私も美鈴の事は好きだ。

美鈴は友と呼べる存在がいなかった私に初めて出来た友人だ。

父さんが居なくなってしまった今、自分の事を一番親身に話せれるのは美鈴だ。

「美鈴の正体が龍神なのは分かったよ。
そこでお願いがあんだけど……」

「鱗が欲しいのでしょうか？」

「…うん」

どうやら美鈴には何もかもお見通しなようだ。

「そうですねえ…少々待っていて下さいね」

突如、膨大な妖力が美鈴から放出された。

こんなに大量の妖気は今までに見た事が無い。

美鈴の頭から鹿のような角が生える。

鱗を帯びた1m程の長さの尾が伸びる。

「はい、どうぞ」

美鈴は尾から鱗を1枚引き抜くと、私に手渡してくれた。

「うーん…」

「どうしましたか？」

「いや、龍つてもっと物凄いの想像してただけど案外普通だなんて」

「フフッ、マルティナらしいですね。」

貴女の思い描いている龍神の姿にもなれますが、そんなことしたらこの龍神にばれてしまいますからね。

これでもかなり力を抑えているんですよ」

「抑えてこれなのか。」

「私じゃ一生追いつけないかも……………」

「マルティナは努力家ですからきつと追いつけますよ」

「美鈴は優しいね。」

「よし、いつか目に物見せてあげる」

「期待させてもらいますね」

美鈴はいつものように微笑んでいた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

20話 虹龍の鱗（後書き）

殆ど台詞で地の文がありません

アルス・マゲナ
黄金練成編が終わったから外伝で書き直すと思います

まともに書いたら3話（約1万文字）超えそうなんですよね

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

21話 再開【リスタート】（前書き）

殆ど解説のみの繋ぎの話

展開に矛盾が生まれる事は発覚したので、萃香の説明を若干変更

21話 再開【リスタート】

西暦680年

妹紅の修行と自身の魔法の強化の為に大陸へ渡ってから3年が経過した。

妹紅は妖術の基礎をあらかた覚えて半人前ほどに成長した。

この速度で基礎を覚える事ができたのは3人の大妖怪のお陰だろう。

肝心の私はと言うと、まあそこそこ強化は出来たと思う。

精霊魔法は威力が1段階上の魔法を開発する事ができ、空間魔法も維持時間を増加させることが出来た。

『メラガイアー』『イオグランデ』『マヒヤデス』『バギムーチヨ』は、この3年で完成した理論上では最強の精霊魔法だ。

魔力変換効率をほぼ100%にすることで、今までとは比べ物にならない威力がでるようになった。

これにより今まで使っていた精霊魔法は役目が無くなった。

威力を変更する時にはいつも通りの精霊魔法の名前を使うことになるので、魔法使い以外から見たら代わり映えはしないだろう。

魔力も順調に増え、1日に『イオグランデ』を10発は撃てるようになった。

私の魔力の総量を分かりやすく数字で表すと500といったところだ。

『イオグランデ』を1発撃つのおおよそ50消費する。

しっかりとした詠唱を行うか補助で魔道書を使用すれば、多少消費量が減るかもしれないが、速度が出なくなる。

魔法は力も大切だが速度も重要だ。

妹紅の修行も終わったので、私は素材集めを再開することにする。紫からの情報はまだあまり集まっていけないが、美鈴からの情報を含めると半分位の場所は分かった。

『伊吹 萃香』

日本に住んでいる鬼の四天王の1人。最近妖怪の山に移住してきたらしい。

妖怪の山とは幻想郷に突如現れた、富士山よりも高い山のことだ

『空亡』

現在日本にいるが、日本出身の妖怪ではなく西洋出身らしい。あらゆる闇を司る妖怪で過去に一度、日本のあらゆる光を奪ったが天照大神に退治されてた。

『Arc card scarlet』

東ヨーロッパに領土を持っており、その土地を治めている吸血鬼。その昔、吸血鬼の神祖を殺してその血を所持しているらしい。

『八坂 神奈子』

諏訪大社に祭られているは風雨や農業を司る神。妖怪に対してどのように接してくるか分からないので用心しておきたい。

今のところ具体的に居場所が分かっているのはこの4人だ。

そのほかはおおよその見当はついていないが、はっきりとした場所は分からない。

まあ時間はたっぷりあるのだからゆっくり探すことにするかな。

「この屋敷ともお別れだね」

私にとっては第2の故郷といっても過言ではない家ともお別れである。

必要な魔道書は常に持ち歩いているし、錬金術に必要な釜も小型化に成功したので置いていく物は殆ど無い。

藍は、まだ完全に妖気が回復しきっていないのでこの家に残るそう
だ。

家事は式に任せるらしい、まったく便利な能力だ。

妖気が回復したら日本で暮らすそうだ。

確かに日本なら、白面金毛の者『玉藻たまも 藍らん』の名はあまり知られて
いないだろう。

幽香もこの屋敷を離れるそうだ。

すっかり花を育てることが生きがいになってしまったらしく、四季
の変化が激しい日本で色んな花を育てるらしい。

日本の妖怪達は大変だろうな。

大陸で名の知られた大妖怪を2人も迎え入れなくてはならないのだ
から。

そこは紫がどうにかするのだろうか、がんばってくれとしか言いよ
うが無い。

この屋敷は藍が去ったら紫に明け渡すつもりだ。

放置して朽ち果てさせるのは忍びないし、折角魔法で色々と細工を
してあるから有効活用して欲しい。

これだけ私の『黄金アルス・マギナ錬成』の完成の為に尽力して貰っているのだし、
正当な報酬だろう。

そして、美鈴は

「それじゃあ張り切って行きましょうか」

「美鈴さんがついて来てくれるのは心強いですね」

美鈴はこの土地に居られる時間制限タイムリミットが迫っていた。
妹紅の修行が順調に進んだお陰で何とか美鈴がここを去るまでに、
基礎を教わりきれた。

私は出来る限り安全に素材を確保したかった。

だが、中には戦闘を避けきれない場合も多々ある。

そこで美鈴についてきてもらうことにした。

美鈴の能力なら相手の殺気を押さえ込めますことで、話し合い位は出来る。

もし戦闘になったとしても、美鈴と一緒に居るだけで逃げ切れる確率がかなり上がる。

「とりあえず『ビザンツ帝国』に向かうことにするよ」

「はい」

「分かりました」

居場所が分かっている者が居て、尚且つここから一番近いのがビザンツ帝国だ。

相手は『アーカード・スカーレット』と言う名の吸血鬼だ。

吸血鬼は鬼の力と天狗の速度を併せ持ち、大量の悪魔を一声で召還する魔力に、頭以外なら全身の再生を一晩で出来る再生能力を全て併せ持つ最強の種族……らしい。

相手はその神祖すら殺したといわれている吸血鬼だ。

きつと美鈴や藍、紫クラスの実力を持っているだろう。

その代わり、日光に当たると灰になるとか、流れる水を越える事ができないといったような弱点を数多く持っている。

ただ、それらの弱点は本来の弱点を隠すための偽りの弱点だと私は認識している。

まあ、本来の弱点が分からないので意味は無いのだが。

無論、そのような強力な相手に真っ向勝負を挑む気はまったく無い。美鈴が本気を出せばいい勝負が出来るかもしれないが、今の美鈴はそんな事は望んでいないだろう。

そこで考えたのが、話し合いた。

まず、美鈴の能力で殺気やら戦う気を抑えてもらう。

その上で私が吸血鬼と契約をするのだ。

私の目的はあくまで黄金錬成アルス・マゲナの完成であり、その後の事は正直どうでもいい。

つまり等価交換になるわけだ。

相手の欲しがるものを渡し、神祖の血を貰う。

とてつもなく都合のいい話で、うまくいくかも怪しい。

所詮行き当たりばったりだが、失敗したら何か打開策を考えればいい。

最悪何か他の材料で穴埋めすれば良いだけの話だ。

穴埋めできる材料は魔界の神や天照大神の私物ぐらいしか無いので絶望的なのが玉に瑕だ。

今更うまくいくのか不安になってきたが、失敗は恐れずに出来るか
ぎりがんばろう。

真の失敗とは、開拓の心を忘れ困難に挑戦する事に、無縁のところ
にいる者たちの事をいうのだから。

T o B e C o n t i n u e d . . .

21話 再開【リスタート】（後書き）

元ネタ

アーカード

『Alucard scarlet』スカーレット 〓 アーカード（HELLSI

NG）

天魔と同じく最初から出そうと思っていたキャラの一人。

ワラキアと旦那アーカードとDIO様の3択だったのですが旦那になりました。

旦那の能力や容姿については次回以降にはつきりと書きます。

多分天魔と同じ位チート能力になります。

いや、だって旦那自体が元からチートだしね。

真の失敗とは、開拓の心を以下略〓ステイブン・ステイル（ジ
ヨジョの奇妙な冒険）

なんと6回しか台詞が出てきてません。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

22話 純粹な吸血鬼の血(前書き)

説明シーンはギャグ描写なので気にしないでください

(吸血鬼の)神祖の血 純粹な吸血鬼の血

22話 純粋な吸血鬼の血

西暦683年

「ようやく見つけたわけだけど…」

そこには深紅に染まった洋館が建っていた。
正に吸血鬼の館と呼ぶに相応しいでたちをしている。

「見張り番も居ませんし入っても良いのでしょうかね？」

「いや、勝手に入るのはどうかと思いますよ」

大胆な事を言っている美鈴に対して妹紅は常識的な事を言っている。
これほどの大きさの館だ。

門番の1人や2人いてもおかしくは無いだろう。

家主が吸血鬼なのでそんなもの必要なのだろうか。

「とりあえず入ってみようかな。」

相手が強者なら私達が来ているのに気がついていないだろうし」

「だから勝手に入るのは……………」

「それじゃあ行きますか」

美鈴は閉まっていた鉄製の門を押し開けると館の中に消えていった。
私もその後を追いかけて、館の中に入り込んだ。

「お、置いていかないでくださいよー」

くくく紅い屋敷の内部くくく

「西洋の屋敷ってこうなっているんですね」

なんだかんだで妹紅が一番楽しんでるような気がする。

私も一応用心はしているが、相手は長い年月を生きた吸血鬼だ。探知魔法を使っても生命反応を探知できないので、探索は美鈴頼みになってしまっ。

「使用人の1人も見つからないのはおかしいですね」

「これだけ大きな屋敷なら使用人が居ないのはおかしいよね」

しばらく探索を続けるが、結局使用人は見つからなかった。

「まったく見つかりませんね」

「そうだね、……………ん？」

ふと目をやるとそこには1匹の蝙蝠コウモリがいた。

どうやら開いていた窓から入ってきたようだ。

「成程なるほどそういうことですか」

「どうしましたか？美鈴さん」

「通りで探しても見つからないわけです。

今お帰りですか？」

「…？」

瞬間間に蝙蝠の数が増えたかと思うと、そこには1人の男性が立っていた。

真昼の月のような色をした長髪をしており年齢は20歳そこそこに見える。

赤いのロングコートと大きな帽子を被っており背中には吸血鬼を連想させる大きな羽を携えている。

「生憎、賊に出迎えられるような趣味は持っていないのだが」

「これは失礼しました。

貴方あなたがこの館の主の『A l u c a r d s c a r l e t』アーカード スカーレットですね

？」

美鈴と妹紅を後ろに下がらせる。

今回はあくまで交渉しに来たのだから、敵意が無い事を明らかにしておかなければならない。

「いかにもそうだが、魔法使いが私に何のようだ」

これが吸血鬼なのか。

睨まれるだけで体から嫌な汗が出ているのが分かる。
生まれながらにして強者である事を約束された種族。
その中でも最強の座に近いであろう相手だ。

拳を握り締めつつ、口を動かす。

「貴方の所有している『神祖の血』を譲り受けに来ました」

「我が友の血を譲り受けにだと？
それは冗談ジョークか何かか？」

赤く染まった瞳が私を睨みつけている。

相手はまだ何もしていないのに緊張する。

分割思考の半分が、緊張のあまり思考を停止している。

まだ交渉も始まっていないのだ。

もっとしっかりするんだ。

「勿論無償で貰おうとは思っていません」

「それでは其方そなたの報酬とは何なのだ。

私を満足させることの出来る条件を提示できるとでも思っているのか？」

「……………交渉は2人きりで行いましょう。」

要らぬ外野は下がらせます」

美鈴は気を読むことに長けている。

殺気や嫌な気を感じたらすぐに行動してもらおうよつには言っておいている。

「ついて来るがいい」

くくく客間くくく

連れて行かれたのは客間のようだ。

所狭しと並べられている調度品の中には国宝級の物が幾つか混ざっているのが分かる。

「それでは交渉を始めましょうか」

「その前に言いたい事がある」

「何ですか？」

「そのような堅苦しい態度を取らなくてもいい」

「……………それじゃあお言葉に甘えることにするわ。
いやーやっぱ真面目に話すのって疲れるよね」

「それで其方が提示する条件とは一体何なのだ」

「条件は貴方が自由に決めてくれたらいいよ」

「つまり貴様は私の眷属けんぞくになれと言われても首を縦に振るのだな」

「吸血鬼になる気は無いけどそれが条件なら呑むよ。
ただしその条件は私の魔術アルス・マギナが完成してからになるけど」

「我が友の血をその魔術の媒体に使うわけだな」

「流石さすが天下の吸血鬼様、要領がよくて助かるわ」

「ほざけ魔法使い、貴様のような未熟者が魔術を完成させられると
でも思っているのか」

「残念だけでもう理論は完成してるんだよね。
後は材料を集め終えるだけなんだ」

「ならばその理論とやらを聞かせてもらおうか」

「別にいいよ、教えたところで貴方には使えないから」

くくく 説明開始くくく

「知るがいい……………」 『アルス・マゲナ黄金練成』の能力は…まさに！ 『世界を支配する』能力だということをして！」

「なん…だと…」

「『キング・クリムゾン』！！」

私が説明したという『過程』は消し飛び説明し終えたという『結果』だけが残る！！」

くくく 説明終了くくく

「面白い！！こんなに面白いのは久しぶりだ。

こんな馬鹿げた魔術を実行しようとした魔法使いなんて聞いた事が無いぞ！！

良いだろう小娘、貴様のために我が友の血を分けてやるうではな
いか」

アーカードのテンションが何故か上がりまくっています。
零式を開放しそうな勢いです。

「そんな簡単に友達の血をあげてもいいの？」

「死んだ者の遺志など関係無い。

こんな体液を持っていたところで使い道は無いからな」

それでいいのか吸血鬼、仮にも友人の血だろうに。

「それで、貴方が望む条件は何なの？」

「貴様が叶えられそうで私が満足出来る条件か。」

「そうだな、これならば良いだろう」

「決まった？」

「喜べ、これほど良好な条件は無いぞ。」

「私が指定する条件は、貴様が私の下に仕えることだ」

「本当にその程度でいいの？」

「生憎、私の下に使えている魔法使いは1人も居ない。」

「何処かから見繕って来ようと思っていた」

「でも私はまだまだ未熟な魔法使いだよ？」

「魔力だつて貴方と比べたら天と地程の差があるし、期待に沿えるようには思えないけど」

「私は貴様の才能を見抜いただけだ。」

「それにその歳であれだけの魔術理論を構築できたのだから、少なくとも知識は普通の魔法使いとは比べ物にはならないだろう」

「そこまで言うなら良いけど、本格的に仕えるのは黄金練成が完成してから。」

「もしかしたら完成する前に死んじゃうかも知れないから、その時は紫にでも頼んで私の魔道書を寄贈させてもらおうね」

「貴様はあの『八雲 紫』と知り合いなのか」

「紫は随分と有名なんだね」

「私の所にも何度か勧誘しに来ていたからな。

領地の管理などで忙しく、相手にはしていなかったが」

紫も苦勞している事を改めて実感した。

もはや形振り変わらず勧誘してないか？

「それではよろしく願います、アーカード『Alucard』」

「ククク、よろしく頼むぞマルティナ『Martina』」

稀代の吸血鬼と魔法使いが同盟を組んだ瞬間だった。

To Be Continued...

22話 純粹な吸血鬼の血（後書き）

アーカードの旦那の見た目について

旦那の髪の色はレミリアと同じ青に近い色です

羽もレミリアの羽が大きくなったものだと思っていただければいいです

性格は変人、原作に近いですがあそこまで大暴れする機会は作中では無いかも知れません

能力については書く機会が無かったので次の話では書きます

どうも口調をうまく再現し切れていないような気がします

次はネウロとが出したいですね

能力は『魔界の道具を操る程度の能力』とか、そのまんまですね

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

23話 食事【ディナーパーティー】（前書き）

夜中に変なテンションで書きなぐった結果がこれだよ

い ジョジョネタ、プロント語成分が混ざっているので注意してください

23話 食事【ディナーパーティー】

「夜も更けてきたな。」

今日は泊まっていくといい」

「それはありがたいけどこの屋敷に使用人は居ないの？」

「確かにこれほど大きな屋敷なのに1人も居ないのはおかしいですね」

「使用人は居るぞ。」

今は遣う予定も無いから出してはいないが久々の客人だ。

盛大に持て成そうではないか」

アーカードが指をパチンと鳴らす。

何かが目の前を通り過ぎたかと思うとそこには従者が並んでいた。数はざっと100名ほどで綺麗に斜め45度のお辞儀をしていた。

「い、何時の間に現れたんですか!？」

「……………どうやら噂は真のようですね」

「何か知っているの、美鈴？」

「アーカードさんは殺した相手を使役する力を持っていると聞いた事があります」

「その通り、私の能力は『命と同化する程度の能力』だ。

この従者は私の能力で作りに出した木偶人形だ」

「命と同化する…?」

妹紅が頭の上にクエスチオンマークを浮かべている。

「どつやら頭脳がマヌケのようだな。」

貴様のような腐れ脳味噌でも理解できるように説明してやるっ」

「く、腐れ脳みそ!？」

「どつした、ド低脳の方が良かったか？」

「どつちも良くないですよ!！」

「まったく、2人で何漫才してるのよ」

「見てるほうからしたら楽しいんですけどねー」

「ではこのアルビノ少女の為に授業を始める^{レッスン}としよう。

私の能力は、殺した相手や身近で死んだ相手の命を吸収する能力だ」

「とてつもなくえげつないですね」

「そつだね」

実験で数多の妖怪の命を使ってきた私が言えた口ではないが、えげつないものはえげつない。

「吸収した者の命を私が命ずることで、開放して攻撃に転用する事

ができる。

更に私自身が死ぬ時に、吸収した命を1つ犠牲にすることにより、死を免れる事ができる」

つまり雑魚敵を1匹踏むごとに残機が1増える髭男マシオのようなものだ。残機の容量は無限で、更に殺す対象は虫けらでも畜生でもいいという超絶万能能力。

吸血鬼の力とチート能力が両方そなわり最強に見える。

「それって絶対死ぬ事が無いといっても過言ではないじゃないですか」

妹紅の持っている『老いることも死ぬこともない程度の能力』だって人の事は言えないと思う。

この世界が崩壊するまで、何があっても死ぬ事が無いのだから不死身の1点ならアーカーダにも勝っているだろうに。

268

「小娘、何事にも『絶対』の2文字は無いのだ。

可能性が千に一つか万に一つか、億か兆かそれとも京でもあれば、それは絶対ではない」

「そんなもんなんですかねえ」

「ここで納得しておかないときつと8ページに及ぶ無駄無駄ラッシュを喰らいますよ?」

「納得しておきます」

「さあ夜はこれからだ!!」

お楽しみはこれからだ!!

従者共、食事の用意をしてこい。

ハリー
早く！

ハリー ハリー
早く早く！！

ハリー ハリー ハリー
早く早く早く！！！！

それにしてもこの旦那ノリノリである。

「私達は客間で待つておくから準備ができたら呼んでね」

「従者に迎えに来させる」

アーカードは再び蝙蝠に姿を変え、何処かへ消えていった。吸血鬼は便利な特技を沢山持っていてうらやましいものだ。空間転移魔法を紫の能力を参考にして今度作ってみようかな。

『キング・クリムゾン』

料理を作る過程を消し去り、料理が完成した結果だけが残る！！

「ボスのお陰で待ち時間の描写がカットされました」

「誰に向かって喋っているの？」

「突っ込んではいけませんよ妹紅さん」

「さあ、心して食すがいい」

20人は同時に食事をする事ができそうなテーブルには、豪勢な料理が並んでいた。

その豪華な料理の中に具も何も入っていないスープがある事がとても気になる。

「いただきます」

美鈴と妹紅がスープに手をつけようとしている。

このスープ…とても嫌な予感がする。

これを飲んだら何かヤバイ事が起こる気がする。

そう炭酸飲料コラを飲んだらゲップが出るっていうくらい確実に何かが起こる予感がする。

「2人ともちよいと待って。

『イベルジャベリン断面への投擲』」

私は、分析魔法をこの未知のスープに施す。

何か怪しげな材料が入っていないか確かめるためだ。

牛スネ肉、骨付き鶏、タマネギ、ニンジン、セロリ

中略

タイム、ローリエ、卵白、黒粒コシヨウ、シエリー酒

「案外普通…なのかな？」

中略

牛の、豚の、馬の、人の、を、したもの

「はい、普通じゃありませんでした」

中略

秋の

中略

こゝ、男の、女の

「……………おいィ？」

中略

D H A、D H A、より した時の、への

中略

おいしくつくろつという情熱

には読者の方々が望む文字を入れてください。

「この料理を作ったのは誰よー!!」

私はテーブルに手を叩きつける。

「……………どうしたのだ。」

早く食べればいいだろう」

「こんなの食べられるわけ無いでしょ。
体に悪影響がありそうな雰囲気かプンプンするし」

「大丈夫だ、安心しろ。」

筋肉ムキムキマッチョマンになるだけだ」

「私達は女ですからマッチョガールですよ？」

「フハハハハハハ！！」

これは一本取られたな」

「突っ込む所そこじゃないでしょ！！」

絶対馬鹿でしょあんた達、ふざけるのも大概にしなさいよサル」

「……………」

妹紅がコンソメスープ（暫定）を見つめつつ真剣な眼差しをしている。

「妹紅も真剣に食べようか悩まないでよ！！」

「これ食べたら筋肉増えるかなと思って」

「増えたとしても筋肉ダルマになるのが関の山だから飲まないで」

「……………分かりました」

何故少し悲しそうな顔をするのよ。

絶対飲んだら後悔する事は確定的に明らかなのは分かっている。

混乱してきて言葉が支離滅裂になってきた。

「私の作った究極の料理『ドーピングコンソメスープ』の味はいかほどだったかな？」

そこにはコックのような服装をした男が立っていた。間違い無くこの料理を作った黒幕だろう。

「アンタね、こんな食べ物でも無い何かを作ったのは」

怒りが有頂天になった私は何時の間にか魔法を放つ準備をしていた。

「お気に召しませんでしたか？」

何なら『ドーピングクリームシチュー』もありm」

ゴシカアンは塵になった

マルティナが無意識のうちに発動していたのは『マヒヤド』の魔法であつた

(アーカードは)涙は流さなかつたが、無言の男の笑があつた
奇妙な空しさがあつた

『ゴシカアン・クシカツ』
リタイア
再起不能

「何やってんだろ私」

そこには『マヒヤド』で凍らされた拳銃、粉々に砕け散つたゴシカアンの姿があつた。

「まったく、貴様もひどい事をするな。」

アイツはたまに『DCS』を作る事があるが腕は確かだつた」

『DCS』とは『ドーピングコンソメスープ』の略称です。
覚えておくとこの先人生薔薇色になれるかもしれませぬ。

その割には微塵も悲しんでいませんけど。

むしろ先程の茶番を見て楽しんでいるようにすら見えますが。

「他には怪しいものは混ぜっておらぬから安心して食べるといい」

確かに他の料理はどれもこれも健全そうだ。

料理に健全という言葉を使うのは間違っではいるがとにかく健全そ
うだ。

私達はこうして奇妙な晩餐会を開始した。

T o B e C o n t i n u e d . . .

23話 食事【ディナーパーティー】（後書き）

元ネタ

腐れ脳みそ、ド低脳〓パンナコッタ・フーゴ（ジョジョの奇妙な冒険）

さあ夜はこれからだ！！以下略〓アーカード（HELLSING）

ボス〓ディアボロ（ジョジョの奇妙な冒険）

イビルジャベリン
断面への投擲〓ネウロ（魔人探偵脳噛ネウロ）

この料理を作ったのは誰だ〓海原雄山（美味しんぼ）

光と闇が両方そなわり最強に見える

サル

おいイ？

怒りが有頂天〓ブロントさん（ネトゲ実況@2ch掲示板）

ドーピングコンソメスープ

ドーピングクリームシチュー〓至郎田正影（魔人探偵脳噛ネウロ）

ワムウは風になった 以下略〓ジョセフ・ジョースター（ジョ

ジョの奇妙な冒険）

キャラクター紹介

『ゴシカアン・クシカツ』

魔界でスカウト（何時の間にか旦那に吸収）されたコック

所詮モブキャラ、今後の出番は無いに等しい

元ネタは至郎田正影^{しろたまさかげ}、見た目も服装も至郎田そのもの

名前の元ネタは至郎田がDCSを使用した時に出る擬音語

『ゴシカアン』と『クシカツ』をセットでググればよく分かります

旦那の能力は殆ど原作と同じ基準になります。

ストックの命には色々ネタ臭がプンプンするキャラが混じってる可能性は大いにあります

体が勝手にジヨジヨネタを使ってしまう

今度ボスの幻想入り小説を書いてしまおうか

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

24話 神祖の骨（前書き）

ヘルシングネタが盛りだくさんです

そしてキリスト教についての知識がほとんど無いせいで滅茶苦茶な展開に

今回の登場人物『ボニファティウス神父』の見た目はヘルシングのアンデルセン神父です

声はOVAバージョンを採用しているので若本さんで脳内再生してください

知らない方はあらかじめググっていただけるとありがたいです

24話 神祖の骨

西暦864年

フランク王国でローマ教会について調べた結果『神祖の骨』のありかが分かった。

キリストの骨は教皇が埋葬される墓地の奥深くに眠っている。しかしそこには強力な結界が張られており『神の加護』が無ければ入れないらしい。

一応紫に結界の解除を頼んではみたが、進入は不可能だった。妖怪の中でも結界に関してなら、紫の右に出るものは居ないと言っても過言ではない。

その紫が入れないといっているのだから、無理矢理進入するのは不可能だ。

この手の結界は核を潰さない限り、解除するのは無理だ。そして核は、勿論だが結界の中にある。

私は手詰まりになった。

『神の加護』を受けていない者が入る方法が1つだけある。

それは現役のローマ教皇が死去した時だ。

法王の遺体を運び込む間だけ、結界が解除される。

だが私は現役教皇が偶然死ぬのを待っているほど、気は長くない。

あまりゆっくりしていると、『幻想月面戦争』に乗り遅れる。

そんなことになっては、魔術の完成が遙かに遠のく。

元から、魔術の完成のためだけに私は生きているようなものだ。

それならば、やるべき事はただ1つ。

私の心に漆黒の意思が宿った。

丁度良くローマ教皇が代替わりするらしい。
教皇が変わった時には、色々と人事異動がある。
それに乗じて、私はローマ教会に修道女として紛れ込んだ。
ちなみに美鈴と妹紅はアーカードの屋敷に置いてきました。
2人は髪の色が目立つしそもそも西洋人じゃないからね。

西暦692年

潜伏し続けた私は、それなりの地位になった。
異教徒狩りと称して、妖怪と反乱を企てている人間を始末するだけ
の簡単な仕事だった。
魔法を使わなくとも、剣術と格闘術だけで事は済んだ。

そして私の計画通り、第82代　ローマ教皇ヨハネス5世は死去し
た。

死因は表向きには病死となつてはいるが、正しい死因は毒物による
他殺だ。

殺した犯人が、誰かは言わなくとも分かるだろうが説明はしておく。
ポツリヌストキシンと呼ばれる、私が読んできた本の中でもっとも
強力な毒素を使用した。

製造自体は錬金術により、分子構成を操作することで簡単に作れる。
この毒素は常人だと0.01mg摂取するだけで死に至る代物だ。
法王が寝ているときに『キング・クリムゾン』を使用して部屋に忍
び込み、寝息を立てている教皇の口にINした。

こうして私は、教皇の亡骸を運搬している部隊の後をつけている。
1つ想定外だったのは、ゴミ処理部隊の隊長の『ボニファティウス
神父』を引き連れていることだ。
この男は『ハラティン聖堂騎士』、『エンジェルダスト天使の塵』、『殺し屋』、『首切り判事』、『リ
ジエネレーター』等といった数多くの異名を持っている。
私はコイツと同僚だったので、お互いにどのような戦闘スタイルを
しているか良く知っているが、とても人間とは思えない戦闘能力を
保有している。

ボニファティウスの使う得物は大量の剣だ。
どこに隠し持っているのかは分からないが、その大量の剣で相手を
滅多刺しにする。

終いには聖書のページを護符のように利用し、結界を張ったり突然
の出現・撤収を行なったりと、魔法使いも真つ青な男だ。
まあ、本当の化け物には敵わないのだろうが。

「隊長、運搬終了しました！！」

「よろしい、それでは結界を解除するぞ」

ドツギヤ

乙

ンツツ！！（結界を

解除した効果音）

「それではページ、ジョーンズ、プラント、ボーンナム。
運搬作業を開始しろ」

「それにしても何でこう秘密裏に埋葬するんだろうな」

「噂だとゴミ処理部隊の副隊長が消えたことが関係してるらしいぜ」

「あの美人が居なくなっただって？
そりゃあ初耳だ、何時居なくなっただんだ」

「昨日から姿を見せなくなっただらしい。
住み込みで仕えていたらしいが、部屋の中はもぬけの殻だったそ
うだ」

「いやはや、緊張感が欠けているのだろうか。
まあ、一撃で済むのなら楽でいいけどさ。」

「『マジヤド』」

誰も聞いていないであろう魔法名を私は小声で呟く。

「下がれ、無能共」

「「「「は？」「「「「」

グシャッ

目にも止まらぬ速度で飛来した氷塊は、4人の男達を跡形も無く潰
した。
そこに残ったのは粉々に飛散した肉片と鋭い眼光をこちらに向けて
いる男だけだ。

「いやはや、流石は隊長。」

あの一撃をかわすとは中々やるね」

てつきりあれで済んだと思ったのに、案外しぶといものだ。

「何時から神の教えに背いた」

「生憎私は神様なんて信じて無くてね」

「ククク、通りでお前の言動には何処か違和感があったわけだ」

「それで1つ聞きたい事があるんだけど。」

「質問に答えてくれたら、特別にここから逃がしてあげる」

「私が命乞いをするでも思っているのか」

「『神祖の骨』はココにあるの？」

「確かにお前の求める物はココにある」

「へえ、律儀にも教えてくれるんだ」

「私は神ではなく神の力に仕えているからな」

神父は両手に剣を取り、それを十字に合わせ構える。

「どうせ安置しとくだけなんだから、くれてもいいのに」

私も腰に下げているレイピアを抜き取り、神父に向けて構える。

「我は神の代理人

神罰の地上代行者

我が使命は

我が神に逆らう愚者を

その肉の最後の一片までも絶滅すること

A m e n

エ`エエイ`イメン`ツツ！」

決め台詞を言い終えた神父は人間とは思えない脚力で私に詰め寄ってきた。

「残念だけど、まともにもやりあう気は無いよ。

『キング・クリムゾン』！！」

この空間の時間は、私の時間以外すべて吹き飛ぶ。

神父の攻撃は私が立っていた場所へと向かい、後ろにあった石像を粉微塵にしていた。

あんな攻撃貰ったら、痛いで済むレベルでは無いだろうな。

私は神父を放置して、私は墓地の地下へと潜った。

そこには『聖十字架』『聖釘』『聖槍』『聖骸布』『聖杯』といった聖遺物せいゐぶつの数々が陳列されていた。

「見事に聖遺物一式揃ってるのね」

だが、私はわき目も振らずに一番奥へと進む。

確かに聖遺物にも興味が無いわけではないが今は時間が無い。急がなければ、あの神父に追いつかれてしまう。

ついにそれらしき棺を発見した。

「これかな？」

石で出来た棺をこじ開けると中には見事な白骨死体があった。普通の人間から見たら少し光っている程度の人骨に見えるかもしれないが、これには恐ろしいほどの霊気が宿っている。光っているのは内包された霊気が溢れ出ているからだ。生きながらにして数々の奇跡を起こしたのは事実だったようだ。教会に裏切られた哀れな男の末路がここにあった。

「見つけたぞ、悪魔の手先！！」

「まだ仮契約だから悪魔の手先じゃないよ。

それにこれは自分の意思でやってることだしね」

せめてこの神父の本気の技を見てから葬るとしよう。

別に手を抜いているわけではない。

幽香や天魔のように戦闘を楽しんでいるわけでもない。

あくまでこれは実験であり研究なのだ。

それ以上でもそれ以下でも無い。

妹紅と出会ってからすっかり薄れていた感情だが、やはり魔法使いとしての本質は変わらないものだ。

「踊れ踊れ化物、地獄を見せるこの私に」

私は1つのマジックアイテムを取り出す。

黄金の鍔の形をしたそれには鎖を取り付けてある。

「何時までそんなことほざいていられるかな？」

『瞬間錬金』！！』

神父に向けてソレを射出する。

紙一重でかわされた瞬間錬金は地面に突き刺さった。

「どうした化物。」

そんな物が当たっても痛くも痒くも無いぞ」

「貴方あなたの目は節穴なのね。」

突き刺さった場所をよく見てみたら？」

「ッ!？」

突き刺さった地面を見た神父は驚きを隠せない様子だった。

そりゃそうだ。

突き刺さった地面が『灼熱の黄金』になっているのだから。

瞬間錬金はその鎌で傷つけた物を、灼熱の黄金に変換する魔法だ。錬金術を高速化する過程で生まれた偶然の産物だが、その戦闘能力は凄まじい。

1秒間に10回ほど連射する事ができ、防御を無視して圧倒できる性能を持っている。

普通の相手ならばの話ではあるが。

「面白い、面白いぞ化物フリークス!!」

そうだ、それでこそ私も本気を出せる」

突然、神父の姿が消えた。

「なッ!？」

どうやら私は神父をなめ過ぎていたようだ。

神父が何かの能力を持っていたのは分かっていた。だがその能力の正体がつかめないために、私は反撃のチャンスを与えた。

しかし今回はそれが裏目に出たようだ。

「ちょっと目を離したただけなのになあ」

腹の辺りがやけに暑い。

目線を腹部にやると、そこには1本の剣が突き刺さっていた。

今まで腕を吹き飛ばされたり、足を食いちぎられたり、拳句の果てには下半身が消失して死に掛けたことすらある私にとって、これしきのことは屁でもない。

いや、ごめん、やっぱり痛いものは痛いよ。

魔法使いは、普通の妖怪と比べると体の作りが貧弱だ。

それは私も例外では無い。

普段から魔法で防壁を張っているから攻撃自体は通りにくいし、自動回復魔法『リジエネ』を使用しているので、大量出血も起こさない。

蓬莱の薬を飲めば死なくなるので、アーカードのように攻撃をわざと受けながら、相手に近づくなんて変態じみたことも出来るかもしれない。

流石に私はマゾじゃないのでそんな事はやらないのだが。

「腕とか足をちょん切ってくれたのなら、剣を抜かなくても済むのにめんどくさい事をするね」

私は、突き刺さった剣を引き抜く。

その後即座に『ベホイミ』で回復。
なんということでしょう、傷跡も無く完全に完治したではありませんか。

「さあて、次はどんな手品を見せてくれるの？」

「ほざいている、マルティナ・コルテス

貴様には、死んだことを後悔する時間をも…与えんツ！」

音も立てず体に短剣が突き刺さる。

「ちいッ！！」

私は『アタックカクタ』を使い、魔法防御壁を展開する。

アタックカクタに触れた物理攻撃はそっくりそのまま反射され相手に向かう。

天魔の入れ替える能力を参考に作り出した魔法だ。

「その程度の姑息な手で私の攻撃を避けれるとも思ったのか！」

肩に短剣が突き刺さる。

やはり飛来してくる剣が目視できない。

私の動体視力で追えないほどの速度で剣を投げているのなら、体を貫通しているはず。

ならば、この攻撃の正体は

「最早これまでか。

お前でも私を満足させてはくれなかった」

腕に肩に足に腹に体のあらゆる箇所短剣や剣が突き刺さっている。数は10近くであろうか。

「くっ……くっ ハアー ハアー ハア

わ、私は何回襲われるんだ!?

次はど……どこから……いつ 襲ってくるんだ!?

私は! 私はッ! 私のそばに近寄るなあ ツ!!

「恐怖のあまり我を失ったか。

すぐに楽にしてやるから安心しろ、化物」

ザクリと何かを切り裂いた音が、部屋の中に響いた。

「……………」

「……………クッ!?!」

剣を構えていたはずの腕が消えている。

それと同時に目の前で座り込んでいた女の姿も消えていた。

「折角チャンスあげたのに、一発芸なんてつまらない真似をするから」

「何故だ!!」

何故お前は傷1つ負っていないんだ!!」

「貴方が攻撃していたのは私じゃないからね」

「何ッ!?!」

「私は魔法使いなのを忘れてない？」

「まさか先ほど私が攻撃していたのは……………」

そこには短剣と剣が突き刺さった甲冑が転がっていた。

タネは簡単だ。

私はあらかじめ瞬間錬金を放ったときに、マヌーサ幻覚魔法を使っていた。つまりあの時から神父は、私の支配下にあつた訳だ。

実験には失敗の可能性も少なからずある。

それを減らすのもまた魔法使いの理念の1つだ。

私は伊達や酔狂で魔法使いをやっているわけではない。

この様子を騎士や鬼が見たら卑怯だとか汚いと言っだろう。

繰り返すがこれは戦闘ではなく実験だ。

実験に正々堂々なんて言葉は必要無い。

「ククク…ハハハ…クハハハハハハハハハ！」

「興もそがれたし私は帰るね。」

一応質問には答えてくれたから逃がしてあげるよ。

片腕が無かったら満足に戦闘も行えないでしょう？」

墓地を後にしようとした時、神父が声を上げた。

「それがどうした魔法使いバケモノ

まだ腕が無くなつただけじゃねえか能書き垂れてねえで来いよ。

かかって来い ハリ早く！早く！ハリ！」

「何で？」

貴方の能力が『瞬間移動する事ができる程度の能力』なのはとっくに理解してる。

片腕を失った人間がまともに戦闘できないのも知ってる。

それなのに私と戦いたいなんて自殺志願者か何かなの？」

「そうか…ならば人間でなければいいのだな」

神父はヨロヨロと立ち上がると、聖遺物が陳列してある辺りへと歩いていった。

「まさか…」

聖遺物の中には身体能力を強化する物がある。

その名を『奇跡の残り香 エレナの聖釘』

神の力を身に宿し神の玩具になるとされている。

使えば超人的な身体能力と回復力を得るといわれている物の1つだ。

『石仮面』 『人魚の肉』 『九尾の狐の肉』 『おちみず変若水』 『アムリタ』

『蓬萊の薬』 『ネクター』 などの一種だ。

「私は人間をやめるぞ！化物オーーーーーッ！！」

神父が己の心臓に聖釘を突き刺そうとする。

だがそれが突き刺さる事は無かった。

「『ザ・ワールド』」

この空間に存在するすべての物質は動きを止め停止する。

私は手に取った聖釘を奪うと、彼の剣を1本投げつける。

突き刺さる直前で動きを止めた剣は、時間が動き出せば体を貫くだろう。

どうして私は脳天に剣を投げなかったのだろうか？

殺したくなかったからか？

否、そんなはずはない。

私は数多の妖怪を殺してきたではないか。

人も妖怪も悪魔も虫も動物だって1つの命にしか過ぎない。

命あるものはいつか死ぬ運命にある。

例外もあるが、世界はそのような法則の上で成り立っている。

分割思考は疑問で埋め尽くされていた。

そして1つの結論にたどり着いた。

「私はまだ人間の心を捨て切れてないのかもしれない」

私は足早に墓地を去った。

翌日、消えた『神祖の骨』を探すために捜索隊が組まれた。

その中には、ボニファティウス神父の姿もあったそうだ。

その後私はやはり殺しておくべきだったと後悔することになった。

当たり前といえば当たり前だが、私はローマ正教から最重要指名手配をされてしまったからだ。

きっとボニファティウスがばらしたのだろう、見事に実名まで公開されている。

何故偽名を使わなかったかって？

戸籍やら色々と審査が必要だったからめんどくさくなってそのまま自分のを使っちゃいました。

この女やはり天然か。by 作者

理由は見事に伏せられているのが、十中八九『神祖の骨』を欠片残

らず盗み出したからだろう。

私を見つけたところで、魔術を完成させてしまったら返せないのに
ご苦労なことだ。

ちなみに懸賞金は現在の日本円に直すと8億円ぐらいだった。

神祖の骨ってこの程度の価値なのかと思ってしまった私でした。

これが私の史上最悪の魔法使いとしての名が広がり始めた初めての
事件となった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

24話 神祖の骨（後書き）

元ネタ

ヨハネス5世〓実在の人物

ボニファティウス〓実在の人物

『パラディン聖堂騎士』 『エンジェルタスト天使の塵』 『殺し屋』 『首切り判事』 『リジエネレ
ーター』 〓アンデルセンの異名

ページ、ジョーンズ、プラント、ボーンナム〓ジョジョの奇妙な冒
険に出てくる雑魚敵

神ではなく神の力に仕えている〓アンデルセンのセリフ

我は神の代理人

神罰の地上代行者

我が使命は

我が神に逆らう愚者を

その肉の最後の一片までも絶滅すること
エイメン
Amen〓アンデルセンのセリフ

踊れ踊れ化物、地獄を見せるこの私に〓アンデルセンのセリフ

リメン瞬間錬金〓とある魔術のインデックス禁書目録の登場人物のアウレオールの錬金術

リジエネ〓ファイナルファンタジーの魔法、効果はリジエネ？と同
じ位

貴様には、死んだことを後悔する時間をも…与えんツ！

くっ…… くっ ハアー ハアー ハア 以下略〓ディアボ

ロ（ジョジョの奇妙な冒険）

それがどうした吸血鬼バケモノ

まだ腕が無くなったただけじゃねえか能書き垂れてねえで来いよ。

かかって来い 早く！早く！〓アンデルセンのセリフ

〓奇跡の残り香 エレナの聖釘〓 〓ヘルシングに出てくる道具

〓石仮面〓 〓ジョジョの奇妙な冒険に出てくる道具、被ると吸血鬼アルティメットキングか究極生命体になる

俺は人間をやめるぞ！ジョジョオー……ッ！！〓ディオ（ジョジョの奇妙な冒険）

神父のセリフとボスのセリフを使いたくてこんな話になりました。なんと強引ですが、ご都合主義だししょうがないです、ごめんなさい。

神父には再登場の機会を与えたいな。

神父の能力は文字通り体に触れたものと自分自身をワープさせる能力です。

有効範囲は無限、自分の見たことのある座標になら好きなだけワープできます。

ただし距離が離れるほどタイムラグがあるという裏設定。使われる日は多分来ない。

いい感じにマルティナの考え方がぶっ壊れてきました。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

25話 ノアの方舟

ヤハウエ神は地上に増えた人々が悪を行っているのを見て、これを洪水で滅ぼすと『神と共に歩んだ正しい人』であったノアに告げ、ノアに箱舟の建設を命じた。

ノアとその家族8人は一生懸命働いた。

その間、ノアは伝道して、大洪水が来ることを前もって人々に知らせたが、耳を傾ける者はいなかった。

箱舟はゴフェルの木でつくられ、三階建てで内部に小部屋が多く設けられていた。

箱舟の内と外は木のヤニで塗られた。

ノアは箱舟を完成させると、家族とその妻子、すべての動物のつがいを箱舟に乗せた。

洪水は40日40夜続き、地上に生きていたものを滅ぼしつくした。水は150日の間、地上で勢いを失わなかった。その後、箱舟はアラト山の上にとまった。

40日のあと、ノアは鴉を放ったが、とまるどころがなく帰ってきた。

さらに鳩を放したが、同じように戻ってきた。

7日後、もう一度鳩を放すと、鳩はオリブの葉をくわえて船に戻ってきた。

さらに7日たって鳩を放すと、鳩はもう戻ってこなかった。

ノアは水が引いたことを知り、家族と動物たちと共に箱舟を出た。

そこに祭壇を築いて、焼き尽くす献げ物を神に捧げた。

神はこれに対して、ノアとその息子たちを祝福し、ノアとその息子たちと後の子孫たち、そして地上の全ての肉なるものに対し、全て

の生きとし生ける物を絶滅させてしまうような大洪水は、決して起こさない事を契約した。

神はその契約の証として、空に虹をかけた。

旧約聖書『創世記』に書かれているノアの方舟についての一説だ。

この大洪水は紀元前3000年頃に起こったそうだ。

これほどの大洪水が起こったのなら、美鈴や紫が知っているはずだ。こういったことなら、紫のほうだ詳しいだろう。

何せスキマを使って世界の彼方此方を転々としていたのだから。

「ねえ紫」

「何かしら」

妙に紫の様子が不機嫌だ。

何かあったのだろうか？

「どうしてそんなに不機嫌なの？」

「どうしてって決まってるじゃない。

貴女あなたが教皇の暗殺と『神祖の骨』を盗み出したお陰で指名手配されたからよ。

まったくこれじゃあ貴女の父と母に顔向けできないじゃない」

「……………」

紫の口からこんな台詞が出るとは思っても見なかった。

てっきり紫は父さんの事を微塵も気にしていないのだと思っていたからだ。

私と紫の仲は決して悪くは無い。
多少胡散臭いが孤独を嫌い、他者の為に働き、己の夢の為に全てを
投げ出す。

私よりもよっぽど人間らしい思考をしている。
はぐらかされたり、何か隠している素振りを見せる事があるが、そ
れは私も同じなので気にしない。

だが、決して友人にはなれない。
なれるのはあくまで近所に住んでいる住人といった関係までだ。
それだけは確定的に明らかだ。

紫の行動には悪意が無い。

全ての行動は自分の為ではなく他者の為に行っている。
それは幻想幻想郷の楽園を完成させる為に生きているからだ。

私とは正反対の存在だ。

私は自分の為に他者を利用している。
それは究極アルスマグナの魔術を完成させるために生きているからだ。

光と闇、正義と悪、表と裏、天と地、私と紫は決して交わらない存
在。

だからこそ私は必要以上に紫に踏み寄らない。踏め込めない。

「どうしたのかしら？」

黙りこむなんて貴方らしくないわよ」

「少し考え事をしていただけだよ。

話を戻すけど1つ聞きたい事があるの。

今から3700年ほど前に大洪水がおきなかった？」

「確かにそんな事があつたような無かつたような。」

……………あ、思い出した。

私が冬眠から目を醒ましたときだつたかしら。

オスマン帝国の辺りで神が暴れていたことがあつたのよ。

その神のお陰で、辺り一面海みたいになつてたわ」

「その時、船か何かが流れていなかった？」

「流れていたわね、人間が軽く50人は乗れそうな大きさのが。

確かアララト山に上陸してそのままだつたはずよ」

「分かつた」

やはりノアの方舟は実在した。

だとすれば話は早い。

私はすぐに準備をして、アララト山へと旅立つた。

「寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い」

妹紅がガタガタと震えている。

一応鬼火を出してはいるが、大して効果はなさそうだ。

「気温を操つてはいるのですが、温度が低すぎてあまり効果がないようですね」

「だから一緒に来ない方がいいって言ったのに」

「どどどどうして2人は平気なんですか。」

美鈴さんは半袖だし、マルティナは脚が丸見えなのに…」

「私は妖怪ですから」

「体温操作の魔法は自分にしか使えないから」

「うーうーうー、あんまりだ…あんまりだアアアア！」

ただ今の季節は冬。

気温は-25度、防寒具をつけていなければ即凍死だ。

「あれ、なんだかあまり寒くなくなってきたような。」

むしろ暖かくなってきました」

「私は特に何もしていませんよ？」

「低体温症の症状だね。」

神のご加護が、あらんことを…」

「いや、勝手に殺さないでよ!？」

3時間経過

「スー…スー…スー…」

「寝ないでください!!」

死んでしまいますよ!!」

「うーん…後10分…」

「妹紅さん、しっかりしてくださいいい!!」

「妹紅は死なないから関係ないでしょ」

「その理屈はおかしいと思いますよ!？」

「この真下に『ノアの方舟』があるね」

「はいはいスルーですかそうですか」

「拗ねてないで離れてよ。」

「巻き添えは食らいたくないでしょ?」

「りょーかい」

雪の積もった地面に、剣を突き立てる。

突き刺さった剣に魔力を込めつつ詠唱を始める用意を始める。

このランクの魔法になると詠唱破棄は厳しい。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

『イノケンティウス 魔女狩りの王』!!!」

目の前に炎で出来た巨人が姿を現す。

巨人といつても大きさは3m程度だがこれで十分だ。
摂氏3000度を誇る魔女狩りの王は、周りの雪をもの凄い勢いで溶かしていく。

魔女である私がこんな名前の魔法を使うのは皮肉かもしれないが、気にはしてない。

10分もたつとそこには巨大な木の船が姿を見せた。

長さ300キュビト、幅50キュビト、高さ30キュビトを誇るそれは最早、船ではなく建造物を連想させる大きさだ。

(メートル法に直すと長133.5m、幅22.2m、高13.3m)

「これは凄いですね」

「暖かい…」

どうやら妹紅が復活リザレクションしたようだ。

魔女狩りの王の傍により、両手をかざしている。

一応あれは摂氏3000度の炎で出来ているんだけど、暖かいを通り越して発火したりしないのだろうか不安だ。

「私が欲しいのはこの船に使われている材木なんだよね」

『ゴフェルの木』と呼ばれている聖書の中にしか出てこない材木。

ヤハウエ神の命令で作られたこの船には神の加護が宿っている。

単純に古くから存在することも合わさり、これほどの木材はあまり存在しないだろう。

船底に使われている板を何枚かベリベリと剥がし、魔法空間に収納

する。

「用事も無くなつたし下山しよ」「うわあああああ!?!」「」

「どうしましたか!?!」

そこには元気に火の玉になつた妹紅の姿があつた。

「「……………」」

数分後、もこたんが消し炭になりました。

申し訳なさそうに魔女狩りの王がこちらを見ている。

実にシユールな光景です。

こうして私は無事に『ノアの方舟』を入手しましたとき。

T o B e C o n t i n u e d . . .

25話 ノアの方舟（後書き）

特に盛り上がる所の無い話ですいません

後書きを書いている最中にレティを出せばよかったと後悔

今回の元ネタ紹介はお休みです

理由はたいしたネタが出てきてないからです

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

26話 海竜の牙（前書き）

ヒヤッハー、我慢できねえ

1日2回更新するぜー

妹紅のキャラ崩壊が激しいので注意してください

26話 海竜の牙

フロリダ半島の先端と、大西洋にあるプエルトリコ、バミューダ諸島を結んだ三角形の海域。

その海域を人々は『バミューダトライアングル』と呼んでいる。

その海域に侵入した船舶は、何の形跡も残さずにこの世から姿を消す。

人々からは魔界の入り口があるだとか、妖怪の住処になっていると噂され恐れられている。

そこに住むといわれる、伝説の海竜を探しに来たのだが……

「どうしてこうなった」

行き当たりばったり過ぎて泣けてきた。

「もう死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない……」

「妹紅さんは死にたくても死ねないでしょう」

甲板の隅で座り込み、死にたくないを連呼する妹紅。

航海中に妹紅は2回ほど餓死しているからだ。

この船はかれこれ2週間も魔の海域で立ち往生している。

風が吹かなくては、帆船は前進しない。

オマケに半ば固体と化した海水のせいで、このままでは風が吹いても動かなくなる恐れがある。

「この船は魔法で作った船なんですよね。」

「どうにかならないんですか？」

「無茶言わないでよ。」

『アドリア海の女王』はあくまで帆船を模した魔法なだけで、船自体に原動力がついているわけじゃないんだから」

解説

『アドリア海の女王』

融点を変化させた氷で作成した帆船で、一応の自動操縦機能は備えている。

更に魔弾を射出する砲門を左右に8つずつ設置している。

残念なことに原動力の作成は時間不足で行っていない。

出典』とある魔術の禁書目録^{インテックス}』

禁書目録大好きです、すいません

こんな危険な海域に私達を運んでくれる船がいなかったため、苦肉の策で作った。

金はあるのだが船員が集まらないし、私達は船の操縦が出来ないのでしょうがなかったんです。

「こんな無風地帯があるとは思ってなかったんだよ。しょうがないじゃない」

「これだから知識しか無い人は駄目なんですよ。百聞は一見にしかずって言葉を知っていますか？」

「うるさいうるさいうるさい」

「2人とも喧嘩しないでよ。」

そんなことより私の食料問題の方が……」

「死んでも蘇るからいいんじゃない？」

2人の声が重なる。

「ひどいッ!？」

この前、燃えた時も助けてくれなかったし、最近私の扱い酷くないですか!?!」

妹紅が、体から鬼火を出しつつ叫ぶ。

その姿は正に不死鳥フェニックスと呼ぶに相応しい。

ただしそういうのは時と場合による

「いやだって水の魔法は苦手だしさ。」

凍らす事は出来るけど結局死ぬのなら関係なくない？」

私はあくまで結果論を言う。

「熱気も操れることをすっかり忘れていました」

美鈴はあくまでとぼける。

「あんまりだあああああ!?!」

こんなやり取りを3日は続けていて、正直私も参ってきている。

美鈴の能力で天気を操って嵐にする作戦も思いついたが、海と陸とは勝手が違うらしい。

正直頼りにならない。

もう諦めて飛んで引く張る作戦に出ようかとすら思い始めている。

「それにしても…まさかサルガッソ海にまで来ちゃうとは思わなかったよ…」

カルガッソ海とはメキシコ湾流、北大西洋海流、カナリア海流、大西洋赤道海流に囲まれた海域だ。

上記の4つの海流の影響で浮遊物が集まり、海面が半ば固体と化した半液体状になっている。

ココに流れ着いた船は、幽霊船となり彷徨い続けるとまで言われている。

もしかしたら『バミューダトライアングル』の伝説はカルガッソ海が黒幕なのか？

しかしそれだと遭難した船舶が跡形も無く消えるのはおかしい。疑問は解決することなく頭の片隅に追いやられる。

「ああ……………お腹すいた……………魚でもいいから……………ん？」

「何か見つけたの？」

「さっき海面が動きませんでした？」

「……………とてつもなく大きな気配を感じますね」

「伝説の海竜のお出ましかな？」

海面がゆらゆらと動き出す。

そして海面が盛り上がり、巨大な生物が顔を出した。

「これが…海竜…？」

「なんていうか…」

「とってもグロテスクですね」

その見た目は海蛇やナマコに似たような姿をしていた。私達の乗っている帆船を軽く飲み込める大きさはある。数字にしてみたら1kmぐらいといったところか。

「あれ…食べられるかな…」

「もし食べられるとしても私は食べたくないですね」

みんなもう少し危機感を持ってください。

妹紅は空腹で思考回路が麻痺してて、美鈴は元から思考回路が麻痺してる。

つまり挟み撃ちの形になるわけだ。

「はあ…それじゃあいつちよぶつ飛ばしますか」

紅蓮の炎よ凍てつく氷と共に一つと生りて有から無へと転ぜよ」

魔力を両手に、狙いは腹部、用途は放出、数は一つで十二分、音を超える速度にて放出を開始せよ

「極大消滅魔法『メドロア』!!」

青白い光は目の前の『伝説の海竜』に向かい一直線に伸びる。私の撃てる最大級の魔法だ。

この魔法ならどんなに硬い相手でも貫通できる…はずだった。

海竜へと一直線に伸びた『メドロア』は、まるで見えない壁にぶつかったかのように飛散した。

「やっぱり一筋縄ではいかないね」

表には出さないが実際はかなりショックを受けてます。

まだアーカードや紫に防がれるのなら「相手の方が何枚も上手だな」で済むのだが、相手は気味の悪い海蛇の化物だ。相手を見た目で判断するのは良くないが、それでもこれに負けたと思つとプライドがバラバラに引き裂かれた。

「そうですね。」

見たところ妖気の障壁を作っているようです。

その障壁に阻まれたのでしょうか」

「お腹減った」

「障壁が邪魔だとしても、私にはアレを破る方法は無いんだけど」

「お腹減った」

「私が一撃入れましょうか？」

「お腹減った」

「美鈴は遠距離戦が苦手だと言ってたじゃない」

「お腹減った」

「遠距離戦は苦手ですが遠距離攻撃が出来ないわけではありません」

よ？」

「お腹減った」

「お腹減った」

「お腹減った」

「……………」

「おなk」「うるさい気が散る」「……………」

「うる……………」

突如、妹紅が大粒の涙をこぼし始めた。

「あつ…………ごめん…………ほら泣かないでよ」

つい強く言い過ぎてしまった。

泣かせるつもりは無かったのに……………私もいつもらしくないな。

『アドリア海の女王』を維持するのに常時魔力を使っているのだから参ってきているのだろうか。

「こらマルティナ、妹紅さんを泣かせたら駄目でしょうっ？」

「いや、あんたも同罪でしょうが。」

あーほら、もう怒らないから泣き止んでよ」

座り込んで泣きじゃくってる妹紅の頭を撫でて泣き止ませる。

「落ち着いた？」

「……………うん」

「これにて一件落着ですね」

「そつだねー」

何か忘れていているような気がする。
日が陰り、辺りが薄暗くなる。

「……………ん？」

ふと船首に目をやると、そこには口が私達を飲み込まんと迫っていた。

「……………うーん」

「目を醒ましたか？」

「あれ？妹紅は？」

美鈴が指を差すとそこには

〈お腹減った

〉 (^ o ^)
〉

—

(^ o ^) /
(^ o ^) / 〈お腹減った

「そつだマルティナ」

「何？」

「貴女が出せる最大出力の防御魔法を使わないと、巻き添えを食らいますので気をつけてください」

そう言い放つと美鈴は独特な構えをとった。

腰を深く落とし、両手を正面に構え、大量の気が体から溢れだす。

その気は、妖気でも靈気でも7色の気でもない。

何処か神々しく、敬ってしまいそうな気を出している。

私は、この気に見覚えがある。

これは…そう…『神祖の骨』を盗みに入ったときに見つけた、せい遺物が纏ぶつっていた気だ。

これは神の持つている独特な気だ。

人間達が神気と呼んでいるものだろう。

うまく使いこなせば世界を創ることすら適かなうとさえ言われている、超高密度の圧縮エネルギーみたいなものだ。

「ハアアアアアアアアアアア」

圧縮圧縮神気を圧縮。

手と手の間の空間に神気が圧縮されていく。

「妹紅、私の傍に来て！！」

妹紅を引き寄せると、私は『マホカクタ』を発動し体を包み込む。それを何重にも繰り返し、強固な防御壁を生成する。

「『ドル・オーラ竜闘気砲』」

凄まじい衝撃が体を震えさす。

幽香の『マスタースパーク』などは、比べ物にならないほどの威力だ。

「ッ!？」

海竜が声にもならない悲鳴を上げながら息絶えてゆく。

「結果的に牙は残ったからいいけど」

海上には、私達の乗っている帆船以外は存在しなくなっていた。

唯一残っていたのは、あの化物の頭部だけだった。

一歩間違えば、この牙までアレに飲み込まれて消滅していたかもしれない。

「本当にすいません!!」

何しろ最後に撃つたのが500年前でしたから力加減が出来なかつたんです」

「……………」

「まあ、皆無事だったから良しとしようかな」

終わりよければすべて良し、ンッンン名言だねこれは。

「……………」

「私の一撃で大気の流れが変わったようですし、これで船も動き始めるでしょう」

「……………」

「そうだね。」

妹紅、もうちよっとの辛抱で美味しい物が食べられるよ」

「……………」

「妹紅？」

「妹紅さん？」

「……………」

「「し、死んでる

「「

『ふじわらのせいら
藤原妹紅』

リタイア
再起不能

ちなみに10分後、復活しました。

To Be Continued . . .

26話 海竜の牙（後書き）

今回の敵『伝説の海竜』さんのイメージは『うしおととら』に出てくる『あやかし』と呼ばれる妖怪です

飲み込んだ船の魂を集めて、吸収する旦那みたいな力を持っています

『アドリア海の女王』については本文で解説しているので省きます

『ドル・オーラ竜闘気砲』ドル・オーラ Ⅱダイの大冒険に出てくる呪文の1つ 『ドル・オーラ竜闘気砲呪文』
です

その威力は半島を跡形も無く消し飛ばすほどです
構えは有名なかめはめ波に近い構え方をします

もこたんの扱いがひどくてごめんなさい

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

27話 武神の御柱

東の果ての地。

日の本ひのもとに位置することから『日本』と呼ばれるこの国には無数の神が存在する。

八百万ややおよその神々と呼ばれているが、本当に八百万も神がいるのではなく、それぐらい数が多いので、そう言われているだけだ。

実際は名前の無い神も無数にいたので、それも含めたら八百万を越すだろう。

私はこの国の人間よりも数が多いのもどうかと思うが、深く考えてもどうにもならないので気にはしていない。

私達は八百万の神の1人であり、武神と呼ばれている神の住む神社に向かっている。

丹後国（現在の京都）に建っているとの情報を紫から聞きつけたので、海を渡って日本まで戻ってきた。

あの航海（26話）の時から、日本に向かうつもりだったのだが、予想外に時間がかかった。

あの航海はまさに地獄だった。

妹紅が鬼火をばら撒き始めて、船が分解しそうになったこともあった。

私の魔力が尽きかけて、船が浸水し始めたこともあった。

美鈴が能天気シユエタに昼寝シユエタしているので、怒りを込めて『獣の槍』を突き刺したこともあった。

今更冷静に考えると、私達は地球を半周はしている。

凄いのか凄くないのかは分からないが1つ言える事はある。

私が無鉄砲で計画性の無い行動を起こす大馬鹿野郎だということだ。

……自分で考えてアレだけど、悲しくなってきた。

迷いながら進んでいたのもあって日本に到着するのにかなり時間がかかってしまった。

途中でよく分からない原住民に絡まれたり、海賊に襲われたり、海を荒らす妖怪を退治したりしていたからだろう。

特に大変だったのが食糧問題だ。

美鈴は妖怪じゃないから食べなくても良さそうなので放置。

私は捨食の魔法があるので、食べなくても結構平気。

妹紅は食べないと餓死してしまう。

死なないから大丈夫だと思っていたら事件が起こった。

あの時の妹紅は今まで見てきた妖怪達の中で一番怖かった。腹が減りすぎた妹紅に私が食べられてしまった。

妹紅に押さえつけられた私は、逃げることも出来ずに食された。

無論食料的な意味だが、生きながら食べられるのは痛さよりも絶望の方が大きかった。

『ベホマ』があるので外傷はどうでもいいが心の傷は癒えない。

3日ほど自室に閉じこもりガタガタと震えていた私でした。

ちなみに妹紅はその事をまったく覚えていませんでした。

知らぬが仏なので教えこそはしなかったが、それからは小まめに港に寄るようになった。

こうして何とか無事に日本到着。

八坂神社にたどり着き、辺りを散策していた。

「これが神社ですか。」

妹紅さんは神社を見た事があるんですよね？」

「私もこんなに大きい神社には来た事は無いよ」

「ここはどうかやらかなり強い神が祭られているようだね。」

その力を目当てに来たんだから強くなくちゃ困るけど……………」

ふと神社の屋根に目をやると、少女が腰掛けていた。
年齢は10ほどだろうか。

目玉が2つ付いている趣味の悪い帽子を被り、口笛を吹いている。

「あれは……」

少女からは奇妙な気が漏れていた。

美鈴が纏っていた気に近い…そう、神気を纏っていた。

「そんなところの上っていたら危ないよー」

妹紅が注意すると、こちらに気が付いたのか飛び降りてきた。
飛び降りた後フワフワと浮かびながら私達の前に降り立った。

「貴女がここに祭られている神ですか」

目を細めつつ美鈴が、八坂の神（仮）に話しかける。

「そうでもあるし、そうでもないね」

こちらを見上げつつ、はぐらかす様に答える八坂の神（仮）。

威厳を出そうとがんばっているのかも知れないが、生憎威厳のいの
文字すら見えてこない。

「もしかして…ひよっとして…貴女が『八坂やさか 神奈子かなこ』なの…?」
もしコイツが八坂の神だとしたら、幻滅ではすまない。
見た目で判断するのは良くないが、幼女は無いでしょ、幼女は。

「違うよ。」

私の名前は『洩矢もじや 諏訪子すわこ』」

「良かった…八坂の神じゃなかった…」

「あーうー?」

「あつ、えーと…私の名前はマルティナ・コルテス。
こっちの白いのが藤原妹紅で赤いのは紅美鈴っていいいます」

「よ、よろしくお願いします…!」

妹紅は見事に緊張してしまっている。

神に会うのは初めてだからかな?

一応美鈴も神の分類には入るだろうけど、神らしくないし神気も出していない。

そもそも神としてではなく友達として見ているだろうから、今更神と言ってもなんとも思わないだろう。

「よろしくお願いしますね」

美鈴は何時も通り適当に馴れ馴れしく挨拶している。

アンタはもう少し敬ったり、緊張しなさい。

相手は一応神様なんだし…よく考えたらコイツも神様だった。

「それでこの神社に何か用事があって来たの？」

「ええ、この神社に祭られている八坂神奈子様を訪ねに来たのですが」

「神奈子なら奥でふんぞり返ってると思うよ」

「分かりました。」

「それでは失礼させていただきます」

境内から離れ、神社の中に入ろうとした時、美鈴に引き止められた。

「1つ聞きたい事があるのですがお聞きしてもいいですか？」

「んー？別にいいよー」

「諏訪大戦で敗れた神がこんな所で何をやっているのですか？」

「ッ！？」

「……………どうやら貴女、見た目に似合わず結構長生きしているようだね」

「まあそこそこ長生きはしていますが、まだまだですよ。」

私の同族にはもっと長生きしているのが沢山居ますから」

軽く4000歳は超えているのに長生きじゃない？

一般的にそれを長生きと言います。」

「それでどうしてそんなこと聞くのかな？」

周りから何時の間にか参拝客が消えていた。その代わりに、黒くてうねうねした奇妙な物体や蛇の様な奴らが私達を取り囲んでいた。

「な、なにこれ…?」

妹紅が、人差し指で突こうとしている。

「ミシヤグジだね。」

触れると祟られるから気をつけた方がいいよ」

ココに来る前に下調べをしておいてよかった。

万が一何かあったときのためにこの辺りの神について調べておいたのだ。

「た、祟られるッ!?!」

伸ばしていた腕を引つ込めた妹紅は私の腕にしがみついてきた。

「私と美鈴がついてるから怖がらなくても大丈夫。」

それに妹紅も大分強くなったしこんな低級な奴らに祟られる事は無いよ」

「う、うん」

「いやはや、そんなに攻撃的にならなくてもいいでしょう?」

私は諏訪大戦の真相を聞きたいだけです。

実際に見たことは無くて、とある知り合いから聞いただけなので戦が終わった後、何があったか知らないのですよ」

「……………貴女についても話してくれるなら、教えてあげる」

「私みたいな貧弱一般妖怪にはたいした秘密はありませんよ？」

「齢4000を超える妖怪が普通なわけ無いでしょ？」

「さあ、ついて来て」

ミシャグジ達が森林へと消えていった。

神社の扉を開け、私達は神の居城へと乗り込んだ。

「……………」

そこには、背後に巨大な注連縄を背負った女性が座っていた。
目をつぶり微動だにしない。

瞑想か何かをしているのだろうか？

「貴女が八坂神奈子様ですか？」

「……………」

「喋りませんね」

「そうですね」

「おーい、神奈子？」

「すう…すう…すう…」

「なっ!?!? 座ったままの姿勢! 注連縄を背負ってあんな睡眠を、何者!?!?」

毎回毎回美鈴は反応がでかい。
もしかしてつつこんで欲しいのかな?

それにしてもどうやら八坂の神は仮眠中らしい。
神って寝る事あるんだね。

「私は立つたまま寝られますよ」

「それは自慢にはならないと思います」

くだらないことで張り合おうとする美鈴に突っ込みを入れる妹紅。
さすが私達の中では一番常識人なだけはある。

「起きてよ神奈子。」

「お客さんが来てるよ」

八坂の神の両肩を掴み、グラグラと揺らす諏訪子。

同じ神のはずなのに外見年齢の差から、まるで親子のようにすら見える。

「ん〜…何、もう晩御飯の時間?」

「だからお客さんが来てるの!?!」

「へ?」

それなら早く教えてよ!?!?

ああ、私の威厳が見る見る減っていく…」

「元から威厳なんて無いくせに」

「その容姿のせいで初対面の相手は誰も神だと思ってくれなくせに」

「「イラッ」」

どうして喧嘩が勃発しそうになっているんだ。

2人の中にバチバチと火花が散っているよ。

これが神々のにらみ合いなのか!?

「ほらほら、2人とも落ち着いてくださいよ」

「「チッ」」

美鈴、ナイスフォロー。

流石『氣を操る程度の能力』を持っているだけはある。

見事に場の空気を良い方向に持って行ってくれた。

「すまない。

見苦しいところを見せてしまったな」

「それでも最近は仲が良くなってきたほうなんだよ」

これで仲がいいのなら昔はどれだけ酷かったんだ。

「それで貴女が八坂神奈子様ですか？」

「ああ、そうだ。」

お前達は全員人間ではないようだが、妖怪が私に何のようだ？」

「こっちの白髪の子は一応人間ですよ」

「だが妖気を纏っているぞ？」

「えーと…色々あって、死ねなくなったんで修行をしていたら身につきました」

「それは凄いな」

諏訪子が妹紅をまじまじと眺めつつ褒めている。

神奈子よりもいくらか友好的な接し方をしているのは、そういう性格だからだろうか？

「お褒めの言葉有難く頂戴いたしましたしゅ……………うう」

あ、噛んだ。

顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。

相変わらず妹紅は緊張しやすい。

そして初々しくて可愛い。

とても私と5歳違いとは思えない。

「あーうー大丈夫？」

「は、はい…大丈夫です…」

「それでここに来た用事なんですが、御柱をいただけませんか？」

「別に良いが、何に使うんだ？」

「ちょっとした魔法を作るのに使うんですよ」

「魔法？」

「西洋に伝わっている陰陽術のようなものだと思っていただけだ
いいですよ」

「道理でお前の体に見たことの無い力が流れているわけだ」

「そういうわけです」

「ふむ…お前名前は何と言っ」

「マルティナ・コルテスと言います」

「マルティナだな、覚えてたぞ。」

「御柱をくれてやる代わりに、お前の知っている別の国の事を話
てくれないか？」

「お安い御用ですよ」

「アーカードの時と比べたら明らかに軽い条件だ。」

「よし、それでは何でも話してくれ」

「私の語りは朝まで続くのであった。」

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
. . .

27話 武神の御柱（後書き）

元ネタ

なっ！？ 座ったままの姿勢！ 膝だけであんな跳躍を、何者！？

「ジョナサン・ジョースター（ジョジョの奇妙な冒険）」

集めるスピードが上がりまくりんぐ

基本的に戦闘をしない話は、終わるのが早くなりがち

あまり重い話は最近書いていませんが『空亡』もといルーミアの話から少し重くなるかも

残り材料『伊吹の角』『因幡の兔毛』『空亡の髪』『死霊秘法』

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

28話 苦惱【サフリング】

結局私達は八坂神社に3日ほど居座ることになった。

理由は、美鈴と諏訪子がすっかり意気投合してしまったからだ。

お互いあまり神らしくないので、息が合ったのだろう。

日本神話の土着神と大陸の龍神なので神としては異質の両者なのに不思議なものだ。

妹紅はすっかりこの場の雰囲気馴染み、緊張はしなくなっていた。あまつさえ「神様って人間みたいですね」とまで言い出す始末だ。

ある意味その考えはあっていると思う。

なぜなら私は神と呼ばれる者達は私達とあまり変わらないと思っ
ているからだ。

人間や妖怪とは生まれ方が違うだけで、結局の所は同じようなもの
だ。

人間は生氣、妖怪は妖氣、神は神氣を生きる力としている。

人間や妖怪が食料を食べるように、神は信仰を食べ生きている。

つまるところ基本的な行動は皆あまり変わらない。

肉体の構造や能力、強さは違えど心は人間のそれに近い物がある。

無論個体差はあるし、中には凶暴な者もいるだろうが、それは人間
や妖怪やも同じだ。

だとしたら私はどうだろうか。

私の体には魔力が流れている。

上記の者達とはまったく異なる力が流れている。

元は人間だったがそれは50年以上前の話だ。

魔法使いになってからどうも物事の考え方がおかしくなってきたい
るような気がする。

父さんが死んだときも悲しみはそれほど浮かんでこなかった。すでに妖怪を殺すのに躊躇しないようにもなっている。そのうち人間を殺すのにも躊躇しなくなるのだろうか？

月からの使者は実験動物モルモットを殺すように何も感じず殺した。

それなのにボニファティウス神父を殺せなかったのは、私に残った僅かな人間の心がそうさせたのか？

月の民は人間のような姿形をしているが、人間とは似て非なる存在だ。

打って変わってあの神父は化物のような力を持つてはいたが、私と同じビザンツ帝国出身の普通の人間だ。

すべての命は同等だ。

私は命を過大評価も過小評価もしたつもりは無い。

それなのにどうして私はあんな判断を下したんだ。まったく見当がつかない。

時折私はとある衝動に駆られる事がある。

龍神の肉体の構造を研究したい。

不老不死の人間は、肉体が完全に消失したら、どの程度の時間で復活するのか計測したい。

藍の肉には本当に肉体を強化させる作用があるのか実験したい。

他に同じ種族の妖怪が存在しない、一人一種族の妖怪達の肉体構造を分析したい。

みんなは仲間であり友人であり家族だ。

頭では分かっているつもりだ。

それなのにそんな考えが心の奥底から浮かんでくる。

この世のすべてを理解したい、解析したい、分析したい、実験したい、研究したい。
魔力が増えるたびに、能力を使いこなせるようになってくるたびに、いらぬ考えが頭をよぎる。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ。
これは超えてはいけない一線なんだ。
それなのに私は

そんな事を考えていたら、神奈子に話しかけられた。

「どうした。」

何か悩み事でもあるのか？」

「悩み事と言えるほどでは無いんだけどね。」

「……………私の心に情が存在するのか悩んでただけだよ」

「お前は妹紅と言う少女を助けたのだろう。」

それが情といわれるモノなのではないのか？」

「その当時は確かにあったかもしれないけど今は違う。」

ふとした拍子に私がみんなを傷つけてしまう可能性が頭をよぎる。
今はまだ踏みとどまっていられるけど、それも何時まで持つか分からないからどうしようかと悩んでいるの」

「美鈴は気を操る能力を持っていると言っていた。」

その能力があれば狂気を取り払ってもらうことも出来るのではないか？」

「残念だけど、これは狂気による影響じゃないよ」

「狂気では無いだど？」

神奈子が首をかしげる。

「これは私の能力の影響だと思う。」

完全に覚醒しきっていないけど私の能力は『見聞きしたものを理解する程度の能力』なんだよね。

自分の魔力が増えるたびに、能力も強化されていくのが分かる。きつとこれが私の本性なんだと思うんだ。

だからこれは美鈴にもどうにもならないんだよ」

私はおどけて見せて、心配されないようにする。

「そうか………どうして私に打ち明けたんだ？」

「美鈴や妹紅に話しちゃうと心配されちゃうからね。」

それにもう少ししたら2人とは別れて1人で旅をしようと思っ
ているから」

「2人を傷つけないようにするためか」

「そういうこと。」

それじゃ夜も更けてきたし寝るね」

苦し紛れの作り笑いをすると私は部屋の中へと戻った。

「……………ゆっくり休むといいぞ」

すっかり夜も更け、誰も居なくなつた境内に神奈子の声が響いた。

翌日

結局私は美鈴と別れることにした。もう私と妹紅は十分に強くなったからと、言い訳をして足早に八坂神社を後にした。

未練が無いと言えは嘘にはなるが、しょうがないことだ。もう少ししたら、妹紅とも別れなければならないな。

うまく踏ん切りがついて良かった。

美鈴も私達以外に知り合いが出来て、さびしい思いもしなくなるだろう。

すっかり悲観的になってしまったな。

私はもつとポジティブでいないとね。

八坂神社

「美鈴、どうしてあの娘についていけないの？」

諏訪子が美鈴の膝の上に座り、話しかけている。

「あの子が決めたことです。」

私が茶々を入れるつもりはありませんからね」

「お前それで良いのか？」

正面に神奈子が座り、美鈴の顔を真剣な表情で睨みつける。

「……………私はまだマルティナを救っていませんからね。」

当然心残りがありますよ」

「あーっ………」

「今からでも追いかけたら間に合うと思うぞ」

「彼女の事は紫さんが見守っていますから大丈夫ですよ」

「あのスキマ妖怪が？」

「それは初耳だね」

「貴女達もマルティナに施された封印には気がついていきますよね」

「ああ、あんなに強力な封印は中々お目にかかれないな」

「アレは紫さんと彼女の母親である『魅魔』さんが施した物です」

「魅魔だと？」

「もしかマルティナはあの男の娘なのか！？」

「そういえば何処と無く、雰囲気似てたね」

「おや、貴女達も知り合いましたか」

「あの2人組みは、良い意味でも悪い意味でも世話になったからね」

「まったくだ。」

私を口喧嘩で泣かせる奴なんて、コイツか諏訪子あの男ぐらいだからな」

2人とも苦笑いしつつ、楽しそうに話していた。

「その2人はもうこの世には居ないのだけれどもね」

空中に裂け目が現れ、中から毎度おなじみみんなのアイドル『ゆかりん』が姿を現した。

「アイドルって歳ではないでしょうに」

「あーうー（笑）」

「いい歳して恥ずかしくは無いのか？」

まったくもって正論である。

「いや ちょっと 私が口に出したわけじゃないでしょ!？」

おいこら 地の文 あまりふざけているとスキマ送りにするわよ
!?!」

###地の文はスキマ送りにされました###

「それにしてもあの2人が死んだとは……………」

「死んでも地獄から蘇ってきそうだね」

「魅魔は怨霊になって元気に魔界で過ごしているわよ?」

「マジですか」

「マジよ」

「コルテスの方は閻魔を説得して、死神として暮らしているらしいわね」

「マジなの？」

「マジよ」

「それマルティナは知っているんですか？」

「本人達から伝えるなって言われてるから教えてないわね」

「実の親がいない私が言えた義理ではありませんが、親としてどうなんですかね。」

自分の娘の行く末を気にしたりはしないのでしょうか？」

「マルティナの様子はちゃんと毎月伝えに言っているわ。」

あの2人はああ見えて心配性なのよね。」

魅魔は魔界の神の下で働いているから会いに行く事ができないけど、とても会いたがっていたわよ」

「あーうー、死神と怨霊の夫婦って矛盾しているよね」

「確かにな」

「話を戻しますが、あの結界は何時まで持つのですか」

「持つて後300年ぐらいかしらね。」

私が予想していたよりも成長が早いから、もしかしたらそれより早く解除される可能性も十分あるわ」

「ふむ…そうですね。」

『幻想月面戦争』が勃発するまでに解除される可能性は大いにありますね」

美鈴が険しそうな表情を浮かべる。

「解除されたら何か都合の悪い事があるの？」

未だに美鈴の膝の上に腰掛けている諏訪子が頭上に『？』を浮かべている。

「都合の悪い事は無いけれど、未だにマルティナが何を企んでいるかが分からないのよね。」

彼女が月に行きたいのは、月の科学技術を見たいからなのは、分かるのだけれどもねえ……………」

美鈴の代わりに紫が諏訪子の質問に答える。

「紫、何故マルティナが『ネクロノミコン死霊秘法』を欲しがっているか分かる？」

「懐かしいわね。」

貴女がそんな喋り方をするなんて」

「今は真剣に話しているんだ。」

私の質問に答える」

「そうカリカリしなくてもいいでしょうに。」

ネクロノミコンは文字通り魂を操る秘法、いわば禁忌とも言える代物ね。」

きつと何か魂を利用して、何か実験を行うつもりなのはわかるけ

れど、それ以上は分からないわ。

生憎私は魔法についてあまり詳しくないのよ」

「……………そうですか。」

それでは魅魔さんぐらいの魔法使いに聞かなければ真相は分からないということですか」

「そういうことになるわね。」

ネクロノミコンは確か魅魔が所持していたはずだけど、あの子が欲しがっていると伝えたら、会いにくればくれてやるって言ってたわね」

「そうですか。」

ですが魔界への入り口なんて普通は開いていませんよ？」

「私が送ってあげることも出来るのだけど、あの子はそれを望んでいないのよね。」

自分の足で世界中を周り、知識を深めたいらしいから。

そのうち自力で魔界への入り口を開くかも知れないわよ？」

「ありえないとは言いきれないところが恐ろしいですね。」

彼女は規格外の存在ですから」

「稀代の魔法使いと異世界人との間に生まれた子供なのよ？
普通に育つわけが無いじゃない」

「そうですね。」

ですが彼女は何か悩みを抱えているようでした。

結局私達には打ち明けてもらいませんでしたが……………」

「……………」

神奈子が浮かない顔をする。

「どうしたの神奈子？」

「もしかして何か知っているのかしら」

「昨晚のことだ」

それから神奈子は昨晚マルティナに相談された話を打ち明けた。

「心配をかけたくないから私達には打ち明けなかったのですか。もっと私達を頼ってくれても良かったのに……………紫さんの能力でどうにかならないんですか？」

「どうにかなったとしてもそれはもうマルティナでは無いわ。こうなる事を恐れて、封印を施したのだけれども、どうやら予想以上に緩んでいるようね。

結界を強化するには彼女の力がつき過ぎて難しいし、結局のところ彼女が自力でどうにかするしかないわ」

「そうですか……………」

マルティナ、どうかがんばってください」

美鈴は誰にも聞こえないほど小さな声でぼそりと呟いた。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
. . .

28話 苦悩【サFRINGE】（後書き）

元ネタ

お前それで良いのか？＝フロントさん（ネットゲ実況@2ch掲示板）

なんとマルティナの母さんは魅魔さまでした

それらしい伏線は散々書いてきたので皆さん分かっているとは思っています

似ている箇所がない？

帽子の飾りは魅魔さまの帽子の模様をイメージしてます

逆に言えばそれぐらいですね

父さんの名は多分一生出てきません。

今は黒装束を着て、腰に刀を下げてがんばって死神の仕事をしているでしょう

マルティナの性格がぶれている様な気がしてならない

違和感とかあったら感想をくれると助かります

基本的に真面目だけど何処か抜けてる天然

常に緩い雰囲気醸し出しているがやるときはやる

そんな感じの性格です

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

29話 妖怪の山

この国には幻想郷と呼ばれる土地がある。

幻想郷には妖怪が多く住み着き、ここに迷い込んだら最後、妖怪に喰われてしまうとして恐れられていたため、普通の人間は幻想郷には近づこうとはしなかった。

一応、物好きな人間や妖怪退治を生業としている人間が里を作り、暮らしているところもあるそうだ。

私自身は行った事が無いのだが、どうやら最近鬼が住み着いたらしい。

鬼、天狗、河童、覚りなどといった日本古来の妖怪達が組織を組み住んでいるらしい。

その妖怪達が住んでいる場所が『妖怪の山』と呼ばれている山だ。この妖怪の山、実のところ紫が作り出した幻想の山らしい。

妖怪達の理想郷を作る実験の一環として、自らの能力を余すところ無く使い、幻想の存在だった日本一高かった頃の八ヶ岳を、出来る限り再現したそうだ。

紫は地形すら操る事ができるのかと感心してしまった。

この場所は紫の第2プランを実行するための場所に指定されているらしく、妖怪のために様々な立地条件が整っているらしい。だからこれほど妖怪達が集まっているのだろう。

「やっぱり誰か見張ってますよ〜」

妹紅が不安そうに周りを見渡しつつ、オロオロしている。

「それは分かってるって。」

ここの妖怪達は大陸の妖怪よりも縄張り意識が強いから、十中八

九襲われるだろうし覚悟は決めておいた方がいいよ」

「うう……………」

誰かに見張られているのは分かる。

それは分かるのだが、振り返り姿を確認しようとする、すぐに隠れてしまい姿を見る事ができない。

再び歩き始めると、姿を現し後ろをつけてくる。

正直気味が悪くなってきた。

鬼に出会うまで戦闘を始めるつもりは無かったのだが、面倒くさくなってきた。

音を立てずに殺してしまえば誰にもばれないだろうし殺^ちってしまおうか。

ガサツ

草むらから何かが出てくる音がした。

「……………子供？」

そこには10歳そこそこの少女が、こちらを睨みつけていた。

薄紫の髪はヘアバンドで固定しており、フリルの多くついた、ゆったりとした服装をしている。

胸部の辺りには、複数のコードで繋がれている目のような物体が取り付けられており、その第3の目が私を凝視している。

「アンタが」

「その通り、私が貴女方を先刻から尾行していた者です。

敵意は無いので、その手に持っている剣を下ろしてくれませんか

「？」

「……？」

妹紅が首をかしげる。

「『何故喋り終えてないのに、こちらの言おうとした事を理解しているの？』ですか。

それは私が『心を読む程度の能力』を持っているからです」

「まさか」

心を読む妖怪には心当たりがある。

こんなのが沢山いるとしたら、とてつもなく厄介だ。

「貴女の思っている通り、私の種族は『悟り』です。

ああ、この山にはまともな悟りは私しかいないので安心してくだ
さい」

「はあ、面倒くさい奴に見つかっちゃったな」

心を読む程度の能力はとても厄介だ。

どうやらこちらの名前が分かかっていない様なので、読めるのはあく
まで表層意識だけのようだ。

これはさっさと逃げて行方を晦ましてしまった方がいいかな？

「その考えは的中していますが、逃げようと思っても無駄ですよ。

大天狗さん達がここに向かっていきますからね」

天狗の飛行速度は私達と比べると遥かに早い。

嗚呼、これは一旦諦めてた方がいいのかな。

「諦めてつかまった方がいらぬ怪我もせず済みますし、其方としても穏便に済みます。」

「さあ、降参してください」

「ま、マルティナ……………」

妹紅は人間だ。

ここで天狗達に捕らえられたら、食料として一生、利用されるかもしれない。

それは避けなくてはならない。

犠牲になるのは私で十分だ。

あくまでここに来た理由は私のためなのだから。

「しょうがないなあ……………悟り妖怪。

少し眠ってもらおうよ」

「悪あがきは止めた方が
なッ!？」

私は目にも止まらぬ速さでに剣を抜き取り魔法を放つ。

「『ラリホー』!！」

思考を読み取った時にはすでに眠りに落ちただろう。

さて、貴女^{悟り}はもうちよっと私の役に立ってもらおうよ。

悟りを担ぎ上げ、『獣の槍』を首下に突きつけると、瞬く間にやってきた天狗達に、その様子を見せつけながら脅し文句を言い放つ。

「コイツがどうなってもいいの？
分かったら早く鬼のところ以案内しなさい！！」

我ながら小物臭い台詞だが、案外効いた様で天狗達は動きをピタリと止めた。

悟りは希少な種族なので、それなりに高い地位にいたのだろうか。

「マルティナ、これ完全に悪役がやることだと思っよ」

「妹紅、貴女は1つ忘れていている事がある」

「？」

「私は悪人なんだよ。」

だからこんなことも平気で行えるの」

妹紅と私は本来、共にいてはならない。

正義の反対はまた別の正義と言った人間がいるがそれは大義名分を掲げている場合のみだ。

私は大義なんて掲げてはいない。

あくまで自己満足のために、善からぬことに手を出している。

だからこそ未だに理解できていない妹紅に、少々厳しく言い聞かせておく。

これで私の事を少しは嫌いになってくれればいいんだけどね。

その方がお互い傷つかなくてすむのだから。

「……………」

無言で頷いた妹紅と共に私達は、妖怪の山の頂上へと向かう。

その頃、山の反対側では

「あはぎやはっ！おいこらどオした大天狗。

まさかこの程度で終わりなんて言わねエだろうなア？」

細身の体には似合わない巨大な黒翼を携えた少年は、歪んだ笑いを浮かべていた。

「この大天狗が1人、木原きはら権現ごんげんがこんなヒヨッコに負けるだどッ
！？」

大天狗は片翼を失い全身は傷まみれ、正に満身創痍だった。

「あアン？オマエ、俺の事を知らなかったのか。

今日は気分がイイから特別に聞かせておいてやる。

俺の名前は『天魔』だ。

その鳥頭にすっかり刻ンでおくんだな、ギャハハハハハ」

「天魔だとッ！？」

そんな…馬鹿な…どうしてこの山にやって来た！！」

大天狗は目を見開き、驚きを隠しきれない様子だった。

「そりゃあ決まっテンだろオが。

この山には鬼の四天王が居座ッてるンだろオ？

そいつらと死合いに来たンだよ」

「天狗が鬼に敵うはずがねえだろ、諦めろ」

「俺は生憎戦いもせずに諦める馬鹿じゃねェンでな。」

あの野郎には敵^{鬼神}わなかつたがアイツの下についている三下共^{鬼神}にまで敵わないとは思えねエぜ」

「あーそうかいそうかい、なら勝手にしやがれってんだ」

「生きてたらまた会おうぜエ。」

木イイ原くウウウウウウン!!」

天魔は山頂に向かい、目にも止まらぬ速度で飛び立っていった。そこに残されたのは、土埃だけだった。

「……………噂通りの戦闘狂だったなあ。」

天狗の中にもあんなに強い奴が居たなんて思いもしなかつたぜ。アイツならもしかしたら、あの鬼共をぶっ飛ばせるかもしれねえな」

2つの思惑が交差するとき、戦いは始まる。

T o B e C o n t i n u e d . . .

29話 妖怪の山（後書き）

元ネタ

木イイイ原くウウウウウウン！！一方通行（とある魔術の禁書目録）

うん、木イイイ原くウウウウウウンって言わせたかったんだけど

ちよいと真面目な話が増えてきました

ギャグも書きたいしほのぼのとした日常も書きたいのだけれども、何時の間にかこんな感じになってしまう

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

30話 鬼は外、福も外

山頂

「……………」

紐で手足を拘束された悟りは、恨みの念を込めつつマルティナを睨み付ける。

「睨んだところでどうにもならないよ？」

「貴女の心に情はないのですか」

「情はあるよ？」

モルモット
実験動物に与える情は無いけどねえ」

マルティナの口元が歪み笑顔を作る。

このような時と場合でないのならば、美しいとも言えるだろう。

だが、その瞳に宿るものはただ1つ。

激しく燃え滾る、漆黒の意思のみだ。

「貴女はこの少女の気持ちを理解しようとはしないのですか…！」

この娘はッ！！貴女のそのような姿を見て悲しんでいるのですよ

ッ…！！」

それでも悟りは叫んだ。

少女の心を代弁した。

この女の中に眠っている、情に訴えかけた。

「ねえ、自分の置かれた立場を理解してる？」

その訴えも無駄に終わった。

悟りの頬に槍を押し当てられる。

浅く切れた頬からは血が流れ出る。

「クツ……………」

「別に貴女を研究してもいいんだよ。

理解したのなら、しばらく黙ってなさい」

マルティナが鬼の住む屋敷の扉に手をかけようとした時

「待つて」

私はマルティナの腕を掴んだ

「…どうして？」

「ここまでする必要は無いでしょ…お願いだからもう止めて…」

私は心の奥底から願った

お願いだから止めてくれと

だがその返事は非情だった

「止めるって何を止めるの？」

妹紅だって今までに何匹も妖怪を殺してきたじゃない。

それなのに今更、止めては無いでしょう？」

「それは…相手から襲い掛かってきたからだし…」

「確かにそうかもしれないね。

でも傍から見たらどう思われるのかな。

襲われたという過程よりも殺したという結果の方が私は重要だと思っ
思うなあ。

襲われたから殺したってのは言い訳にしかないんじゃない？」

「それだとしても…それだとしても…」

私は泣きそうになりながら、反論するための言葉を探す
その時だった。

ザクッ

「……………？」

ポタリと血液が飛び散る。

地面に見慣れた物が転がっている。

ああ、そうか、これは私の右手か、

痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイ

「ああああああああ」

「私達の命は実に軽い。

まるで菓子かしの包み紙よ。

ワタシも、コイツこいつもね」

頭の中が真っ白に染まる。

辺り一面真っ赤に染まり、血の匂いが広がる。

「どっ…して…？」

「藤原妹紅、貴女には一言言っておく。
何を考えてのことかは知れないけど
お前は私と同じ道を歩むべきじゃない」

「うう…ああ…」

意識が朦朧とする
起きないと

マルティナを説得しないと
それなのに体が動かない
どうして…マルティナ

「……………達者だね」

妹紅の体が青白い光を帯び始め、瞬く間に姿が消え去った。

「まさか初めての空間^{ルトラ}転移魔法の被験者が、妹紅になるとは思わなかったよ」

「貴方は…悲しい人ですね」

悟りがうつむき、悲しそうな目で私を見てくる。
私の心を覗いたのだろうか。

「あれぐらいしないと妹紅は私の事を嫌ってくれないだろうからね。
まあ妹紅からのお願いだし、鬼達を殺したりはしないつもりだから安心してね」

半殺しにはするつもりだけどね、と心の中で訂正を入れておく。

「それなのに、角はもぎ取るんですか」

「それが目的なんだからしょうがないじゃん」

私は悟り妖怪の縄を解き開放する。

「さあ、早く逃げないと巻き添えを食らうよ」

急に空が明るくなった。

何が起こったのかと空を見上げるとそこには、弾幕が広がっていた。

「なっ!?!」

「私が一番出会いたくない奴に出会っちゃったようね」

「鬼は外福は内ってかア？」

ととと出てこねエと潰れちまうぞオ!!!」

その様子は正に雨と言っても過言ではないだろう。

空を埋め尽くした弾幕が、すべてを破壊するために、押し寄せる。

弾幕が屋敷に当たる瞬間、その弾幕がすべて霧になったかのように飛散した。

「ほオ、やはり噂どおりだな。

オマエが鬼の四天王の1人、『伊吹^{いぶき}萃香^{すいか}』かア？」

屋敷の周りを漂っていた霧が集まり、人の姿を成していく。完全に姿を現したソレは10歳そこそこの少女のようだった。薄い茶色の長髪を先でまとめており、真紅の瞳をしている。そこまでならただの美少女で終わるのだが、その頭の左右からは身長には不釣り合いなほど長く伸びた角が二本生えている。服装は白のノースリーブに紫のロングスカートを着用しており、頭に赤の大きなリボンをつけ、左の角にも青のリボンを巻いている。

「そういう貴方は、巷で噂になっている『鈴科 天魔』だね？」

「天下の鬼共にまで名を知られているとは、俺も有名になったものだな。」

それじゃあとつとと楽しい楽しい殺し合いを始めよオゼエ!!!」

「いいよ、受けて立ってあげる!!!」

膨大な妖気と妖気がぶつかり合い、空気が震える。

「あーあ、始まっちゃった。」

ま、これも好都合といえれば好都合かな」

私のことなんて露知らずに戦闘を開始してしまった。つまり私の事は眼中に無いのだろう。

これは好都合、いやはや私はつくづく運のいい女だ。私は剣を取り出し、魔法を唱える準備を始める。

「『イオグランデ』」

「!!!?」

空が、明るくなる。

先程の弾幕の雨とは比べ物にならないほどにだ。

爆風により砂や木の葉が宙を舞い、屋敷がキシキシときしんでいる。

「俺らの戦いにちよっかい出したのは一体どのどいつだア!!」

「今の攻撃は結構痛かったよ」

2人は服や髪が多少焦げてはいたが、怪我自体はあまり無いようだった。

「あらら、やっぱりたいしてダメージを受けてはいないようだね」

両方葬れるチャンスだったのにしくじったかな。

他の鬼の四天王が帰ってくる前に、決着をつけようと急ぎすぎちゃったか。

「てめエ…マルティナか。」

どおしてこんなところに居やがる」

「貴方と同じくそのチビ鬼に用事があったてここまでやってきたの」

「チビじゃないよ」

私には伊吹萃香って名前があるんだよ」

「そうだったね。」

それで1つお願いがあるんだけど」

「ん〜?」

「私に倒されてくれないかな？」

ありつたけの殺気を込めて、鬼を睨みつける。

「おいおい、コイツは俺の獲物だぜエ？」

戦いたいなら後日ゆっくり戦うんだな」

「残念だけど……………」

空間をこじ開け、獣の槍を取り出す。

「私は貴方のように正々堂々と戦うつもりは無いから」

「あアン？何を言ってるやが」

「『ザ・ワールド』」

世界が灰色に染まってゆく。

To Be Continued . . .

30話 鬼は外、福も外（後書き）

元ネタ

菓子の包み紙のくだり「バラライカ（BLACK LAGOON）」

記念すべき30話なのに暗い、暗いよ

最初のほうの作風と比べたら、おかしくなってますよね
でも魔法使いつてこんなもんだと思ってます

赤ん坊を連れ去って魔法を行う際の材料にしたりするらしいですし
魔理沙やパチエ、アリスは黒魔術系を利用しているイメージはあまり無いのでそんな性格ではないと思います

マルティナが妹紅と別れた理由は2つ

妹紅が一人前になったから

そしてこれ以上自分の欲求を抑えられる自信が無かったから
文章力が無いせいで理解しにくかったかもしれませんが

ちなみに名前は出てきてませんが悟り妖怪は『古明地さとり』^{いせこ}です
結局名前を出すタイミングが無かったので、後書きに書きました

そして更新ペースが落ちると思われま

す
どうにもネタが不足してきたのもありますが、もう少し話を煮詰め
ようと考えているからです。

そしてとある魔術の禁書目録と東方のクロス小説を書きたいからで
もあつたりしてね

妄想だけで終わり方とか思いついてないのですがね
最低でも1週間に1話は更新します

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

31話 伊吹の角

「あアン？何を言ってるやが」

「幻世『げんせザ・ワールド』」

世界が灰色に染まってゆく。

雲は流れる事を忘れたように動きを止め、鬼は思考を停止したかのように動きを止める。

たった今からこの空間は魔法使いの支配下に置かれた。

ただ1人の天狗を除いて、、

マルティナが伊吹に向かって槍を振りかぶって投げる。

天魔の飛行速度よりも速く飛来するソレを、回避する手段は今の伊吹に存在しない。

槍は徐々に減速し、終いには伊吹に突き刺さる寸前で動きを止め静止した。

「何かがおかしい・・・どおして伊吹は槍を避けようとしねエんだ？」

その様子を俺は冷静に分析していた。

取り乱すことも無く、冬のナマズのようにマルティナの様子を伺う。

「やっぱり天魔は動けるんだ。」

やっぱりだとオ？

俺と戦ったときマルティナはこんな魔法を使つてこなかった。

と言うことは・・・俺とやりあった時コイツは手を抜いてやがった

のか？

「マルティナア！！

てめエ、何をしやがった！！」

マルティナが何をしたかは分からんが、とりあえず伊吹に迫っているあの槍をどオにかするかア。

理由は分からんがアイツは身動きとれねエよオだしな。

あの槍の威力は実際に妖気を吸い取られた俺が一番よく分かってる。アレを喰らったら、流石の伊吹でもただではすまねエだろう。

俺が弾幕を作り出すと、マルティナも細身の剣を構え戦闘態勢に入った。

「答えは伊吹を始末したら教えてあげる
へブン」

來世^{らいせ}「メイド・イン・

魔法を唱え終えたマルティナが姿を消した。

姿を消して感じ取れなくする魔法か何かを使いやがったのかア？

俺との戦いするときも少しの間だけだが、気配を完璧に消したことがあった。

それと同じ魔法なのか・・・？

この時俺は油断していたのかもしれないエ。

マルティナが俺よりも早く動けると思えなかったから、姿を消したと思ひ込んだんだが、それが間違いだったようだ。

「何だとオ！？」

腕を後ろから何かに貫かれた感覚が走る。

左腕を見ると奇妙な文字が掘り込まれた細身の剣が突き刺さっていた。

「遅いよ。」

背後から聞き覚えのある女の声が出た。

何故……どうしてマルティナが俺の後ろに回りこんでいるんだア！？

能力を展開して力の向きを入れ替え、剣を強制的に引き抜く。

「俺の背後に回りこむとは、中々やるじゃねエか。」

俺は強がるが内心驚きを隠しきれなかった。

俺の背後に回りこむ事が出来た妖怪は少ない。

天狗の種族自体が、飛行速度に重点を置かれているからだア。

その中でもトップクラスの速度を誇る俺が、純粋な移動速度で負ける事は無かった。

俺の背後に回りこめたのは、八雲紫やあの神父のような瞬間移動を行える奴しか居なかった。

魔法でどオにかしたとはいえ、俺を超える飛行速度をコイツが出せるとは……面白くなってきたじゃねエか。

「褒めてくれてありがとう。」

ところで伊吹は放置しておいていいのかな？」

マルティナが不敵な笑みを浮かべる。

「なツ！？

しまったア！！」

コイツ、端から俺の注意を削ぐつもりで腕に剣を突き刺したのか。俺は急いで伊吹の居る場所に向かう。

「一手遅かったね。」

「そして時は動き出す。」

世界は再び動きを取り戻す。

静止していた槍もまた、本来の動きを取り戻し動き始める。クソツ、間に合わねエ。

「伊吹イイイ、避けるオオオ!!!」

俺は腕の痛みを忘れ、大声で叫んだ。

「・・・え?」

だがその声が届いたときにはすでに遅かった。

何かが突き刺さる音が聞こえた

何かが地面に落ちる音が聞こえた

何かが降り立つ音が聞こえた

「効果はそこそこといった所だね。」

槍に妖気を吸収され飛ぶことも敵わないのだろう。

伊吹は地面にひれ伏し、倒れこんでいる。

俺の中の何かが切れたような感覚がした。

「クソツたれがア!!!」

よくも俺達の勝負に横槍を入れやがったな。

いくらオマエでも容赦はしねエぞオ。」

体中から妖気が溢れ出しているのが分かる。

俺は今怒っているのだろう。

俺の戦いの規則を破った、目の前の糞ッたれの女に対して。

「容赦はしない？」

矢張り天魔は優しいね。」

「俺が優しいだとオ？」

「寝言は寝て言っただな。」

「他の四天王が帰ってくる前に、決着を付けさせてもらおうよ。」

「付けれるモンなら付けて見やがれ。」

それよりも早く愉快な死体にしてやるよオ！！」

俺の能力は最強だ。

無敵では無いが、それでも正面对決で負ける事は殆ど無い。

もし負けるとしたら、相手は俺と同じ最強の力を持つ相手か、無敵の力を持つ相手だけだ。

「紅蓮の炎よ凍てつく氷と共に一つと生りて有から無へと転ぜよ」

妖気とも霊気とも異なる力が、辺りに充満し始める。

もしかして俺が破った技を、もう一度使うつもりなのか？

確かに威力が上がっていることは目に見えて分かる。

だが、威力が上がっただけでは俺には勝てない。

お互いの立ち位置を入れ替えてしまえば済む話だからだ。

「面白エ、オマエがこの50年でどれほど成長したか確認してやらア!!!」

「極大消滅魔法『メドロア』」

轟トウゴウと音を立て、魔力の塊が天魔に迫る。

その速度はとても避けられるものでは無かった。
自...身...の...能...力...を...使...わ...な...け...れ...ば...の...話...だ...が...

「この程度、能力を使えば簡単に」

「必然『キング・クリムゾン』」

どんな魔法を使っても俺に影響を与えることは出来ねエ。

俺の体に影響する動作はすべて入れ替え無かったことにするからだ。
さアて、とつとと位置を入れ替えて終わらせるか。

入れ替えようとした瞬間、マルティナが何か呟いた気がした。

「相手に影響を与えるだけが、魔法じゃないんだよ？」

離れていたため何を言ったかは聞こえなかったが、何を言ったかは
大体予想ができる。

「ガハツ!?!」

俺は魔法を喰らっていた。

能力は発動させたはずだ。

確かにアイツと俺の位置を入れ替えようと思った。

それなのに入れ替わらずに、俺は無様に落ちていく。

地面に体が叩きつけられる。

嗚呼、畜生、こんなに痛エのは何時いつ振りだったかア…

「まだ生きてる？」

生きてるなら手当て位はしてあげるよ。」

マルティナが俺の傍らに降りてきた。

先ほどとは打って変わって、俺の様子を心配しているのは目に見えて分かる。

まったく戦闘中のあの表情は、何処に消えちまったんだか。

「ケツ…どの口がそんな事をほざくんだア？」

マルティナ 天魔悪党が悪党を助けて何の得があるってんだか。」

俺の言葉を無視してコイツは、俺の怪我の手当てを始めやがった。

「借りを返したただだよ」

すました顔でマルティナは黙々と手当てを続ける。

「勝手にしやがれ。」

「……………そういえばあの連れの白髪はどこに行った？」

俺がコイツと始めてあったときには一緒にいたのを覚えている。

アイツは自分のことを一般人だと言っていたが、普通の人間とは雰囲気きふが異なっていた。

それにこの2人はとても仲が良さそだった。

何処かの茂みに隠れているのなら、助けておいた方がイイだろう。

「妹紅は私に愛想を尽かして逃げ出しちゃったよ」

嘘だろうなア。

俺と目を合わせよオしねエ。

コイツはきつと面と向かって言えないような事を仕出かしたんだろ
う。

それか何か隠し事をしているのか…付き合いが短い俺にはこの位し
かわからねエな。

「愛想を尽かしたかア。」

嘘をつくならもつとちゃんとした嘘をつくんだな」

「何はともあれ結果的には、私の下を離れたんだから変わらないで
しよ？」

手当てを終えたマルティナが伊吹の傍に寄って行く。

槍が突き刺さっているにも関わらず、伊吹の腹部からは少しも血液
が漏れていない。

「何をするつもりだア？」

俺の問い掛けをを無視し、マルティナが聞いた事の無い言葉を喋り
始めた。

「灰は灰に

AshToAsh

塵は塵に

DustToDust

吸血殺しの紅十字

Spare.E.I.S.B.I.L.E.X.O.O.O.S

マルティナが手に持っていた剣に炎が宿る。

離れた場所で横たわっている俺ですら、その熱気が感じ取れるほど

激しく燃え上がっている。
その剣が振りかざされ

「ッ!？」

切り落とされた角が転がった。

その角はマルティナに拾い上げられ、虚空に現れた裂け目に収納された。

俺はただその様子を呆然と眺めるしか出来なかった。

怪我のせいもあるが、マルティナの瞳を見てしまったからかもしれねエな。

光の無いその瞳に映るのは、俺とは比べ物にならないほどの覚悟だった。

いつか見せてくれると言っていた究極の魔術。

それはこれほど必死にならなければ、完成させられないモノなのか？

「目的も果たしたしこんな場所からは、とつとオサラバさせてもらうよ。」

角を片方失った伊吹から槍を抜き取ったマルティナは、足早に妖怪の山を去ろうとした。

「待ちやがれ。」

「てめエはまだ俺を倒したカラクリを話してねエぞ。」

伊吹のことも若干心配だが、角が切れた位で鬼は死なないから大丈夫だろう。

たぶんがつくから不安だが大丈夫だ、何せコイツは山の四天王だからなア。

……理由になってませんね。

「簡単に説明すると伊吹が動けなくなったのは、この空間の時間を止めたからだよ。」

「どうやら貴方はm能力のお陰で効かなかったようだけどね。」

「後ろに回りこめたのは、魔法で私の時間の流れを速めたからだよ。」

「魔法ってのは何でもありませんよ。」

「まったく魔法使いつてのは2度と相手にしたくねエな。」

「オマエが『メドロア』を撃つたときに俺の能力が効かなかった理由が分からねエぞ。」

「『キング・クリムゾン』は私の周囲から時間と空間を消し去る魔法なの。」

「当然貴方には効果が無い魔法だけど、この魔法の効果対象は貴方だけでは無い。」

「私自身の時間と空間を消し去ることも可能ってこと。」

「時間が吹き飛ばされた場合、効果を受けた者はありとあらゆる現象を受け付けなくなる。」

「つまりあの時貴方は、私の幻影に能力を発動させていたって訳ね。」

「成程ねエ、俺の能力を逆手に取ったって訳か。」

「俺の予想通り大物になりやがったなア。」

「私よりも圧倒的に強い妖怪バケモノなんて大量にいるよ。」

「マルティナは虚空を見つめつつ、誰かを思い出しているようだった。」

その表情はとても寂しそうで、悲しそうだっただ。

「それもそオだなア。」

ま、俺もてめエなんかに負けないよオに精進させてもらうぜ」

俺はあえて何も言わなかった。

アイツが自分から捨ててきたのなら、俺が口出しする資格はねエ。

まったく…俺も何時からこんなにイイ奴になっちまったんだかなア。

「そうだ。」

1つ忠告しておくけれど、紫が計画している『幻想月面戦争』に、貴方は参加しないでね。」

真剣な表情でマルティナは俺を見つめている。

その言葉には、偽りの欠片も含まれてはいないだろう。

「……………何故だア？」

いきなりこの女は何を言い出すんだ。

俺を心配しているからか？

俺の能力は防御に徹したら、それこそ最強に近い能力だ。

不意打ちさえされなければ、攻撃を喰らう事は殆ど無い。

それなのに俺を心配する理由が俺には分からねエ。

「幻想月面戦争は妖怪の為の戦争であり、私の夢を叶える為の晴れ舞台でもあるの。」

……………紫もどうせ見てるのでしょうか？

ついでだから話を聞いていくといいよ。

私は月に行き、賢者の石を精製するために禁忌を行う。

私は究極の魔術アルス・マクナを作り上げ、魔法そのものを新たな境地に

押し上げる。

私は神ならざる身にて天上の意思に辿りつくものと成る。」

「はつきり言うぞオ。」

オマエ、ついに脳味噌が腐ったのか？」

「私は、新世界の神になる！…言わせないでよ恥ずかしい。人が夢を語ったのにその感想は酷いと思うよ。」

呆れたようにマルティナが答える。

ノリ突っ込みをするほど時間に余裕があるのだろうか？

「だってよオ、てめエは神になりたいって言ってるよオなもんだぜ。」

「マルティナが言いたいののは、神の力にも匹敵するほどの魔術を作り上げるということですね。」

俺の背後から誰かの声が聞こえた。

十中八九、八雲紫だろう。

ドイツもコイツも俺の背後を取るのが趣味なんですかねエ。

「何処から湧き出てきた。」

「このスキマ婆がア」

「だから私は婆じゃないと、何回言えば気が済むのかしらねえ。境界操作でバラバラに引き裂いてあげてもよろしくてよ？」

「ごめんなさい。」

冗談抜きでバラバラにされそオなので謝っておく。
似たよオな能力を持っているコイツに対して、勝ち目なんて万が一にも無い。

正に体験者は語る、と言うわけだ。

「もしも黄金練成アルス・マゲナが失敗したら…最悪月が消し飛ぶ可能性もあるの。それに巻き込みたくないってのが『幻想月面戦争』に参加しないで欲しい理由かな。」

傷つけないから、参加するな…かア。

「俺のことを優シイと言っておきながら、てめエも十分優シイ優等生じゃねエか。」

「…貴方はあの場で私を殺す事が出来た。それなのに殺さずに見逃した貴方への、恩返しみたいなものだと思ってくれたら嬉しいかな。」

「はいはいそオですかア。」

優等生のマルティナちゃんちゃんは義理人情に溢れてますねエ。」

「それほどでもない。」

今のうちに天魔に会えて良かったよ。

お陰で完全に踏ん切りが付きそうだからね。」

マルティナの表情が暗くなる。

その様子を見て紫が心配そうにしている。

「マルティナ…貴女は本当にそれでいいの？」

今ならまだ引き返せるかも知れないのに。」

「残念だけど私はもう

「力業『大江山嵐』!!!」

マルティナの体が宙を舞い、大木に叩きつけられた。

「なアツ!?!」

「マルティナツ!?!」

突然のことで、俺も紫も反応できなかった。

殴り飛ばされたマルティナが、口から血を流しつつ声を出した。

「かはツ…貴女が…山の四天王の1人…ほしくま ゆうぎ星熊勇儀…ね。」

腰まで伸びている長い金髪に、額から真っ直ぐ伸びる一本の赤い角。その紅い瞳は、倒れている伊吹に向けられている。

「その通り。」

お前達は私の友を傷つけた。

それ相応の罰は受けてもらうぞ。」

チイツ…満身創意な今の状況でアイツと殺り合うのは敵しいなア。あまり頼りたくはねエが、八雲に頼んで逃がしてもらうか。

「ククク、アハハハハハ。」

貴女の大切なお友達を傷つけたのはこの私だよ。

ほら、戦利品の角もしっかりとココにあるしね。」

虚空の裂け目から取り出された角。

紛れも無く伊吹萃香の角そのものだ。

あの馬鹿がア…俺達が襲われねエ様にわざと挑発しやがったな。

「貴様が萃香を襲ったのか!!」

「この馬鹿がその天狗と、試合をしていた所を横から仕留めたんだよ。」

隙だらけで滅茶苦茶弱かったね。

こんなのが山の四天王だと思うと、笑いがこみ上げてくるよ。」

「貴様ア、余程死に急ぎたいようだな!!」

「おお、怖い怖い。」

別に此処でお前を倒してしまってもいいけど、楽しみは最後まで取っておくことにするよ。」

マルティナが剣を杖代わりに立ち上がる。

強がってはいるが、どオ見ても立ち上がるのがやっとみてエだな。

「生かしては返さんぞ。」

四天王奥儀『三步必殺』!!」

星熊が拳を構え、独自の体勢フォームをとる。

そして目にも止まらぬ速度でマルティナに飛び掛る。

「力パワーも大切だけど速スピードさも重要なんだよ？」

『ルーラ』!!」

マルティナの体が光に包まれ、消え去った。

虚空を切った星熊の拳が地面に当たると、周りの木々が消し飛ばす。まともに喰らってたら、粉々じゃ済まなかっただろオなア。

「クソツ、萃香、しつかりしろオ!!」

星熊が伊吹を持ち上げブンブンと振り回す。

どオ考えても、倒れている友人にすることではありませんね。

「はあ…あの子が何処に行ったのか見当もつかないわ」

俺の横で自慢のスキマに腰掛けている、八雲紫年増妖怪がため息をついた。

「てめエの能力で監視していたンじゃねエのか？」

「まさか空間移動まで出来るとは思っていなかったのよ。

もし行き倒れたりした日には…あの子の親から殺されちゃうわ。」

「便利なよオで不便利な能力ですねエ。」

「ソレは貴方も同じでしょうに。」

後、その地の文は見逃さないわよ?」

しまったアアアアア!!」

てつきりスルーしているから平気だと思っ た俺が浅はかでしたアアア。

「御免なの！御免なんだよ御免なんです三段活用！」

「三段活用したとしても許さないわよ?」

「ギヤアアアアアア……………」

天魔の意識が遠のいていく。

とある竹林

「あの鬼がア…」

体の節々が痛くて堪らないじゃないの。」

油断していた私の自業自得…なのだが勝手に口から愚痴が漏れる。何はともあれ無事？に『伊吹の角』が手に入り、結果的には良かった。

とりあえず体に『ベホマ』をかけて、一休みしよう。

この竹林はどうも人々を惑わす効果があるようだし、人間に襲われて身包みを剥がされました、といった展開にはならないだろう。

伊吹の命までは殺^とっていないので、妖怪の山の連中が搜索しに来ることもない…と思う。

「それにしても…疲れたな…少しだけ寝ようかな…」

妹紅とは二度と会わないだろう。

そう思うと…目から何かが流れ落ちた。

別れは皆平等に訪れる。

私も慣れなくてはならないな。

こうして私は眠りに落ちていく。

To Be Continued . . .

31話 伊吹の角（後書き）

元ネタ

幻世『ザ・ワールド』 十六夜咲夜（東方Project）

冬のナマズのように 二ジョジョの奇妙な冒険

必然『キング・クリムゾン』 鬼巫女（mugen）

ASHTOASH 灰は灰に 二ステイル・マグヌス（とある魔術の禁書目録）

新世界の神になる！ 二夜神月^{やがみらいと}（デスノート）

今回初登場のメイド・イン・ヘブン

設定上でしか無かったけど出番がやってきました

効果はマルティナの速度をかなり早くしただけです

ピオラと被ってる？ 気にしないでください

これくらいしか天魔を倒す方法を思いつかなかった

そして一番大変だったのは萃香の萃の字が変換できなかった事です

何で変換できないんだろうね、不思議でたまりません

残り材料『因幡の白毛』 『空亡の髪』 『ネクロノミコン』

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください

32話 因幡の白兔

『因幡の白兔』

昔々、あるところに1匹の白兔がいました。

その兔は他の者を騙すのが趣味だったそうで、相手が不幸にならない程度の嘘をついていたそうです。

ある日、白兔は河を渡るために和邇ワニに、嘘をつきました。

「和邇さん、和邇さん。」

「何だ？」

「貴方はこの辺りの和邇の総大将をしているそうですね。」

「そつだ。」

「配下の和邇は何匹位いるか知っていますか？」

「知らないな。」

「では私は何匹いるか調べてあげますよ。」

この河の対岸まで一列に並んでください。

その上を歩いて、何匹いるか調べてあげます。」

「分かった。」

この和邇は、この辺りの和邇のリーダーでした。

呼びかけるとすぐさま100匹余りの和邇たちが河を埋め尽くしました。

「それでは調べますね。」

白兔は、和邇たちの背を飛び移り、あっという間に対岸にたどり着きました。

「何匹いるか分かったか？」

「丁度、百匹いましたよ。」

「それにしても助かりました。」

「・・・何が助かったんだ？」

「貴方たちのお頭くぶが弱いおかげで、簡単に河を渡れましたよ。」

白兔は頭は良かったのですが、少々口が悪かったです。

「つまりお前は儂わを騙したのだな。」

「そ、それでは私はこれにて失礼します。」

逃げようとした白兔の行く手を和邇が阻みました。

「儂をだました事を後悔するがいい。」

「えっ・・・。」

白兔は和邇に毛をひん剥かれてしまいましたとき。

これは日本神話『因幡の白兔』の冒頭の話だ。
その後は意地悪な八十神やそがみに騙されて、更に状態を悪化させて、その様子を見かねた大穴牟遲オオナムチ（後の大国主オオクニヌシ）に助けられた話として残っている。

私は竹林で寝ていた。

魔力を大幅に浪費していたのもあるし、精神的にも参っていたのだろっ。

いくら分割思考で多少の融通が利くとしても、辛いものはやはり辛い。

目を醒ました私の目の前には、4つの耳があった。

兔の頭についている耳を彷彿ほうふつとさせる耳が2つ

人間や人型の妖怪には基本的についている耳が2つ

私の脳内は好奇心と疑問の2つで埋め尽くされた。

主に体の作りと耳が4つある意味についてなので、割愛させていた
だが、私はその2つについて考えていて、しばらく固まっていた。

「・・・大丈夫？」

固まって動かなくなった私に、痺れを切らした4つ耳が喋り出した。

「ひゃう!？」

未確認生物UMAに突然話しかけられて、私は変な声を出してしまった。

「ひゃう・・・？」

UMAが首を傾げる。

よく見たら10歳そこそこの少女じゃないか。

兎のような耳を2つぶら下げて、首には人参をあしらったネックレスをぶら下げている。

薄いピンク色の洋服を着用しており、髪は黒で日本人風だった。

妖怪の服装は人間とは、違う物が多いので気にはしない。

「あ、あははは・・・気にしないでいいよ。というか気にしないでね。」

「はあ・・・貴方は此処で何をしていたのかしら？」

少女は、私の横に座り話しかけてきた。

「えーと・・・泊まる場所が無いから寝てただけだよ。」

合っていると言えばあつてはいるが、本当のことは伝えない。

伝える必要が無いし、そもそも私は他者と関わりを余り持ちたくない。

結果的に真実を織り交ぜた嘘を話すことになった。

「本当かしらね・・・貴女は日本出身の妖怪には見えないけど、何者なの？」

「別に貴女が知る必要は無いし・・・」

妖怪兎の話をつっぱねる。

会話をする必要も無いのだが、このままこの場を去っては、紫に会

えなくなる可能性がある。

『ルーラ』で空間移動を行ったため紫は私の居場所を見失っているだろう。

今は身動きをとらずに、じっとしておいた方が得策だ。

「別に教えてくれてもいいんじゃない？」

それに貴女のことを放って置けないわ。」

「私なんかに関わらないですよ。」

関わったところでいいことなんて無いし。」

「私の目から見たら、貴女はとつても不幸に見えるわね。」

生きとし生きるものは、幸福を掴まなければならぬのよ？」

不意を突かれて、私はまたもや驚く。

すぐさま崩れた表情を戻し、無表情に戻すが内心落ち着かずじいた。

「私が不幸ね。」

どうしてそう思うのかな。」

「能力のおかげ・・・と、言えば満足してくれるかしら。」

能力・・・？

この妖怪兔の能力は、不幸に係する能力なのだろうか。

「満足できないわね。」

貴女は一体何者なの？」

「ただの悪戯好きな妖怪よ。」

妖怪の中では最も長生きだけどね。」

長生きな妖獣・・・兎・・・悪戯好き・・・まさか

「貴女・・・『因幡の白兎』なの!？」

「おや、知っていたの。」

「案外博識なようね。」

「いやいやいやいや、あの話って今から140万年以上前の話なんだよ。」

「何でそんな若い姿なのさ。」

「もっとヨボヨボになったりしたりしないの!？」

「健康に良い食生活をしていたら、こうなってたからね。」

「まるで意味が分からない・・・。」

私は頭を抱えてのた打ち回る。

食生活をきちんとすれば、不老にすらなれるというのか。

使いこなすためには命を失う可能性すらあった『捨虫の魔法』と同じ効果を得られるなんて・・・考えれば考えるほど頭が痛くなってきた。

「あのく本当に貴女、大丈夫？」

心配そうに、白兎が私の顔を覗き込んできた。

「大丈夫だよ・・・うん・・・非常識な奴は過去にも散々見てきたつもりだし・・・。」

私自身も常識的ではないのだが、周りの妖怪共と比べたらまだまだ常識を持っているつもりだ。

魔法使いを馬鹿にしているとしか、思えない話はもう忘れよう。

「大丈夫ならいいけれど・・・此処で待っていたら、紫がやって来るわよ。」

「・・・へ？」

「どうしてそんなに呆れているのかしら？」

「いや、だって紫からは貴女が此処にいることなんて聞かされてないよ。」

「私が此処にいるのではなく、私が此処に来たのよ。」

「貴女を探すように、紫にお願いされたからね。」

「確かに貴女的能力なら、適当に歩いただけで、私を見つけられるかもしれないけどさ。」

目の前の白兔『因幡 てる』の能力はある意味、無敵の能力だ。最強では無い。あくまで無敵だ。

『生き物を幸運にする程度の能力』のおかげで、彼女自身には死ぬほどの不幸は降り注がない。完全に不幸なことが起こらないわけでは無いが、少量の不幸は幸運への糧になるらしい。

「それで、私に用があるんでしょう？」

「ええ、貴女の幸運を分けてくれたら嬉しいのだけれど・・・」

「いいよ」

「即答!？」

「前々から紫に聞かされていたのよ。」

生憎、白毛は無いけれど代わりにこれを持っておくといいわよ」

因幡の小さな手には、『お守り』のような物が握られていた。

「これは・・・?」

「私の能力をありつたけ詰め込んだ物よ。」

それを開封したら、1時間の間だけだけれど、世界で一番幸運になれるわ。」

自信満々に胸を突き出し、ふんぞり返っている。

幼女体型なので、胸なんてものは僅かにしか存在しないが、そこには突っ込まない。

「それはありがたい。」

時間制限が1時間なのは厳しいけれど、とても助かるよ。」

「それで私に見返りは無いのかしら?」

やはり予想はしていたが、無償とは行かないようだ。

はあ、とため息をつきながら私は答える。

「見返りねえ・・・私の体はすでに所有者が決まってるからあげられないけど、それ以外なら何でもあげるよ。」

「か、体って私は別にそんな趣味は無いわよ!!」

因幡が、顔を赤らめている。

「そんな趣味・・・？」

私が言いたいののは、物なら貴金属でも宝石でも何でもあげられるという意味で、言ったただけど。」

因幡は何か勘違いをしているのだろうか？

「そ、それなら今はたいした物は必要無いから要らないわよ。

元から私は根無し草のように日本を渡り歩いているから。

欲しい物ができたら、紫から話をつけてもらうことにするわ。」

今は持ち合わせが無かったので、正直助かった。

作れるものといえば、上記のような物しか無かったからだ。

「それなら良いけれど・・・出来たら『幻想月面戦争』よりも前に欲しい物を作ってね。」

「どうしてかしら？」

「私が死んだら、貴女の要求に答えられないでしょう。」

因幡が口元を緩ませて笑い始めた。

「フッフ・・・貴女が死ぬですって？」

私が渡した幸運を甘く見てるわね。

そのお守りは、私が10万年余り身に付けていた物よ。

力を解放していないにせよ、多少の効力は働くわ。」

「その言葉が、嘘じゃなかったら良いんだけどね。」

「生憎私は相手が不幸になる嘘はつかないわ。」

「和邇に襲われて反省でもしたの？」

「そんなところね。」

トラウマだから、あの時の話は止めてくれないかしら。」

「あーごめんね。」

そんなつもりで行った訳じゃないんだよ。」

ムスツとした因幡に侘びを入れておく。

「あらあら、2人とも随分と仲が良くなったわね。」

聞き覚えのある声が背後からする。

紫は人の後ろを取るのが好きなのだろうか？

「紫って背後を取るのが好きなのかしら。」

どうやら因幡も同じ事を考えていたようだ。

「む、それは聞き捨てなら無いわね。」

私は貴方たちの姿を、後ろから眺めていただけであって……」

「世間はそれを追跡者と呼ぶと思うよ。」

「す、ストーリーなんて人聞きの悪い・・・むしろ私は貴女の保護者代わりであってね、心配だから様子を見ていただけで・・・」

「へえ、紫ってそんな一面があつたんだ」

「あ、いや、さっきのは嘘なのよ!!」

「この世で一番の嘘吐きである私から見ると、どう見てもさっきのは本音だつたわね。」

「ッ~~~~~!!」

紫は顔を真つ赤にしながら、スキマの中に隠れてしまった。

普段から余り素直にならない紫の本音を聞いて、少し楽しかったな。妖怪の賢者だとか呼ばれているけど、内面は見た目通りの年頃の女性だ。

むしろ私の方が枯れているかもしれないな。

そういえば天魔とか、妖怪の山の様子を聞けなかったな。

何はともあれ、因幡の白兔に出会えたし、必要な素材は後2つだ。

『ネクロノミコン』と『空亡の髪』

この2つはどうにも長丁場になりそうだ。

『神祖の骨』の時の二の舞にはなりたくないんだけどね。

素材が全て揃うまでに、全てを終わらせておかないと。

32話 因幡の白兔（後書き）

どうにもインスピレーションが湧かなくて執筆が進まなかったYO！更新が遅くなってごめんなさい。

誰も読んでいないとは思いますが、ちまちまと進めていきます。

どうにも書くキャラの喋り方が皆同じになりそうで怖い。

元から個性があるキャラを書いているはずなのに不思議！

早く月に行かせたいのですが、中々展開が進まない；

魅魔、ルーミア、幽々子、ぬえ、白蓮、等々…出したいキャラはたくさんいます。

50話までに黄金練成編が終わるといいなあ。

第2期の構成もあらかた出来ていますが、今年は色々忙しいのでエターナらないように、気をつけていきたいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

33話 魔法の森

『グリモワール grimoire』とはフランス語で、呪文集を意味する言葉だ。平たく言えば、魔道書、奥義書、秘伝書と呼ばれているものだ。

魔道書は様々な形で偽装されており、料理のレシピや日記にしか見えないようなものから、才能が無い者が目を通すと精神が汚染され、廃人になってしまうものまで様々だ。

有名所だと、悪魔を呼び出すための術が記された『Lesser Key of Solomon』《ソロモンの小さな鍵》、『Le Grand Grimoire』《大奥義書》や、天使の召還術が記された『アラマンタル Almandal』、『Buch Abramelin』《アブラメリンの書》、『ネクロノミコン Necronomicon』等がある。

私も幾つかは所持しているが、未だに全ての内容を理解出来ていない。

それだけ魔道を極めるのは容易では無い。

私自身の独学では、いくら頑張ったところで限界がある。だからこそ先人の知恵を借りる必要がある。

私が得意としている魔法は、五大元素を使う魔法、空間魔法、そして錬金術だ。

五大元素の内、私が見えるのは『風』『火』『水』の3つに限られる。

残り2つの『地』『空』は、どうにも上手くいかないので諦めた。そもそも五大元素を全て使える奴なんて数えるほどしか、いないらしいので気にはしていない。

空間魔法は『ザ・ワールド 時間停止』や『ルラ 長距離瞬間移動』等の、自身の周りの空間に干渉する魔法だ。

『ザ・ワールド』や『キング・クリムゾン』は魔術に限りなく近いが、効果範囲や維持時間の問題で魔法止まりになっている。

『バイツァ・ダスト』や『メイド・イン・ヘブン』に至っては、魔術にまで発展したら、世界に何らかの影響を与えそうなのであえて研究していない。

黄金錬成を完成させた後に、研究を再開するかもしれない。

私が一番得意としているのが錬金術だ。

どういうわけか分からないが、一度本物のヒロノカネを見ただけで、錬成に成功してしまつた事があるほどだ。

本来ヒロノカネは、特定の材料を集めてこなければ作れないのだが・・・適当な鉄屑で作れてしまつた。

私は今まで一度も魔法使いに出会つた事が無いので、それが普通なのか異常なのかは分からないが、多分異常なのだろう。

魔法使いは家に籠る輩が多くて、家の外にはほとんど出ない。

私が旅の途中に魔法使いを見かけなかったのは、そのせいだろう。

今度暇があつたら魔法使いの名門『ノーレッジ家』にでも忍び込んで話でも聞いて来ようかな。

・・・よくよく考えたらお尋ね者になつてゐるから、話なんて聞く前に八つ裂きにされるかな。

私のせいで魔法使いの評判に、かなりの影響があつたらしいし八つ裂きだけではすまないかも。

うん、今の私は現在を生きているんだ、過去なんて気にしないでいいや。

妹紅辺りが居たら、「駄目に決まつてるでしょ!!」って突っ込んでくれるんだろうなあ。

そんな感じで自己解析をしながら、研究を続けていたら50年が経

過した。

50年とは早いもので、研究をしていたらあつという間に過ぎてしまった。

その間、私は幻想郷の森の奥底に家を構えていた。

家と呼ぶには申し訳ない程のボロ小屋だったが、雨風を凌げればよかったので、大して問題は無かった。

そしてついにとある魔法が完成した。

「やった・・・やった・・・苦節50年の成果がついに実った・・・」

何しろ参考に出来る魔道書が殆ど無くて、とっつっても苦労した。研究していた魔法は『空間魔法』効果は単純に特定の場所に転移する入り口を作るだけだ。

その転移先が問題だったわけだが

「あら、ようやく完成させたようね。

くだらないプライドなんて捨てて、私に頼めば、一発で送ってあげたのよ？」

紫色の洋服を身に纏った美女、八雲紫が私の傍で胡散臭く笑っている。

なんだかストーカーを通り越して、保護者のようにすらなってきた。

彼女自身も暇なのだろうか、それとも知り合いが余り居ないのか、何れにせよいい加減構ってほしくないものだ。

まあ・・・良い暇潰しにはなるのだけれどね。

「どうせいつか研究するつもりだったんだからいいでしょ。」

プライドが無いと言えば嘘になる。

私は他人の手を借りるのは好きでは無い。

要らぬ借りを作ると、そこから関係が生まれてしまうからだ。

我ながら歪んでいるとは思うが、自己保身に走った結果こうなってしまうた。

実際この50年であつた人物は、時々押しかけてくる紫か、妖怪の山で天狗のまとめ役をさせられている天魔だけだ。

「まったく貴女は何時までたつても意地っ張りね。

貴女の両親に似たのかしらねえ。」

若干呆れたように微笑みつつ紫は、傘をクルクルと回している。

森の一角を完全に更地にして、そこに50年かけて作り上げた魔法術式を書き込む。

魔法をまったく知らない者から見たら、よく分からない複雑な模様だと思ふだろうが、この模様には全てに意味が込められている。

天候、時間、季節、星座の状況、運、そういつた要素が全て揃ったとき、完全に発動できる。

魔法とは面倒で、キチンとした手順を踏まなければ、発動はおろか下手をしたらよからぬ事態が発生する可能性すらある。

逆に考えれば、正しい手順さえ行えば絶対失敗しないのが、良い所なのだが、残念なことに『運』の要素まではどうしようもない。

結局は不安定要素をある程度含んだまま開始するが、失敗したときはそのときだ。

失敗を恐れていては、何も始まらないのだから。

そしてこの精神を魔法以外に生かせない私は大馬鹿者だな。

「さてと・・・後は魔力を注ぐだけだね。」

錬金術で作りに出した特別な製法の液体で書かれた魔方陣は、不気味な紫色の光を出している。

液体自体に込められた魔力や、製造の時に使った材料の影響だ。

その魔方陣の中心に、長年使っている剣を突き立て、詠唱を開始する。

「朽ち果てし大気 of 精霊よ 永遠なる呪いの深淵に転落せる精霊よ
地獄の犬よ

永遠なる呪いの深淵に転落せる精霊よ

悪魔の怨霊の大群のただ中に 雄々しく立てる我を見よ

エロイムエツサイム エロイムエツサイム

イン ゲ トウ イ ゲ シ サン ミム タ チュ

天地万物を混乱に陥れている地獄の魔物よ 陰気なる住みかを立ち去りて 三途の川の此方へ来たれ

エロイムエツサイム エロイムエツサイム 我は求め訴えたり」

辺りが紫色の霧に包まれたかと思うと、地面に歪が生まれ直径10mほどの大穴が開いた。

詠唱自体は手元にある魔道書『Le Grand Grimoir e《大奥義書》』の一説、悪魔の召還術式を利用している。

召還術式本体はほぼ別物になっており、唱えたところで悪魔の1匹

も呼び出す事は出来ない。

その代わりに、本来なら閉じた後閉まってしまう魔界への入り口を、維持し閉じないようにしている。

「どうやら成功したけど・・・これはやりすぎたみたい・・・」

成功したのは良かったが、どうにも様子がおかしい。

魔界の入り口から流れ出ているのは、十中八九魔界の『瘴気』だ。多少の瘴気が流れ出るのは覚悟していたのだが、この量は多すぎる。この辺り一体の森を覆いこむほどの、瘴気があふれ出ている。

「ねえ、マルティナ。

貴女これは少しやりすぎたんじゃない？」

紫に肩を掴まれた。

怒ってるよ、絶対怒ってるよ。

「け、計画通り！！」

とりあえず嘘をつく。

「嘘おっしやい。」

一瞬で看破されました。

焦ると表情に出る自分が憎たらしいよ。

「ほ、ほら、これだけ瘴気があふれ出ていたら、普通の生物は近寄れないし、魔界の入り口を隠せていいでしょ？」

私はここまで計算して瘴気を溢れさせたんだよ。」

我ながら僅か2秒でよくこんなに言い訳を考えられたものだ。こらそこ、分割思考の無駄遣いとか言わない。

「それならこの辺り一体だけでよかったわよね。

この森一体に瘴気をばら撒く必要は無いんじゃない？」

正論である。

最早、ぐうの音も出ない。

「ごめんなさい。」

素直に頭を下げる。

いくら素直にならない私でも、切羽詰ったときは素直になる。

私の知り合いの中で決して怒らせてはいけない奴が3人いる。

『紅美鈴』『風見幽香』そして『八雲紫』だ。

今までに3人とも怒らせた事があるのだが、結果は悲惨だった。

その内容を語っていたら日が暮れるので語らないが、少なくとも生き地獄を見るような目にはあっている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紫は黙っている。

私は下を見ながら、次に何をされるか考えながら震えている。

傍から見たら、私と余り変わらない年齢の女性におびえている様に見えるが、そんな生易しいものではない。

例えるなら、蛇に睨まれた蛙のようなものだ。

「はあ・・・別にいいわよ。」

ただし、今度こんな事をしでかしたら、覚悟しておくことね。」

口元は微笑んでるけど、目が笑ってないよ、紫さん。

「はい・・・」

「それじゃあ、気をつけて行ってらっしゃいな。
魔界には変な輩が多いから、気をつけるのよ。」

「うん。」

帽子を深く被り直し、穴に飛び込む準備をする。

「以前に説明したとは思うけど、魔界に着いたら『魅魔^{みま}』という魔法使いを訪ねなさい。」

緑色の髪をした、青を基調とした洋服を着ているからすぐ分かるわ。」

「分かってるって。」

「それじゃあ行ってきます。」

私は瘴気の渦巻く穴に向かって身を投げ込んだ。

底の見えない穴は、何処までも続いている。

一体どれくらいの長さがあるのだろうか。

分からないことだらけだったが、何故か恐怖や不安といった感情は浮かんでこなかった。

それはきつと『魅魔』という名の魔法使いに会えるからだろう。

紫に話だけは聞かされているが、とてつもなく凄い魔法使いだそう
だ。

だが、それだけなのだろうか。

私は何か重大な嘘に気がついていないのかもしれない。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
. . .

33話 魔法の森（後書き）

魔法の森が瘴気に包まれている理由を自己解釈。

魔術詠唱の件は、悪魔くんの元ネタですね。

本来は悪魔やらを呼び出す魔術の詠唱なのですが、かつこいいので使わせてもらいました。

自分でもこれ位の詠唱を思いつきたいですわ。

次回からは魔界編に突入します

旧作キャラである『魅魔』が出てくるので分からない方が結構いるかもしれせん。

もしかしたら、エリス、くるみ、サリエル達を出す可能性もあります。

更にもしかしたら、とあるオリキャラを出す可能性もあります。オリキャラといっても元ネタ付きなので、正確には良く似た別人です。

ついでに何時の間にかお気に入りか50近くになっていました。

こんな駄作をお気に入り登録していただきありがとうございます。よく分からない点や悪い点があれば、感想にお書きください。

出来る限り反省して、次回に活かしたいと思います。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

34話 魔界突入

私は今この世に数多と存在する異世界の1つに、足を踏み入れている。

その世界は『魔界』と呼ばれている。

この呼ばれ方は魔力が支配する世界から来ているようだ。

実際、魔界は魔力を多く含んだ瘴気に包まれており、魔法使いの魔力を上昇させたり、魔法の威力を増やしたりする。

私も例外では無く、魔力の上昇を感じられているし、試しに放った

『メラガイアー』は変換効率が157%に達していた。

100%を超えている理由は、空気中の魔力を吸収しているからだろう。

まあ、最初のうちは良かった。

見たことの無い魔界の生物を実験したり、見慣れない植物を収集したりと楽しめていた。

今思うとあの時の私が、どれほど能天気だったのかがよく分かる。

数週間が経過して、何かおかしいことに気がついた。

魔界には悪魔や魔法使い、魔族や魔人が住んでいるらしい。

それなのに私は未だに誰一人として出会ってないし、野生の動植物以外は何も発見できていない。

魔界の文化レベルは、地上と同等程度らしいのだ。

それならば、畑や建物の1つや2つ、せめて道ぐらいいはあってもおかしくは無いはずだ。

それなのに、道はおろか人工物の1つも見つけれられない。

魔界の広さは測定不能だ。

何故なら魔界は創造神である神綺シンキが存在し続ける限り、土地が無限

に広がり続けるといふ、ふざけた法則があるからだ。
確かに私が暮らしている地球は、無限に広がり続ける世界宇宙に浮かぶ
ゴミ粒の1つなのだが・・・土地を無限に広げる必要は無い？
領土が限りなく無限に等しいという事は、その土地の殆どは未開拓
地となる。

つまりのところ私は迷子になっている。

誰か私を助けてくれませんか？

誰も答えてくれない問いを、心の中で呟きつつ私は探索を続ける。

「広すぎるのも問題だよねえ・・・」

磁場が無いから、方位磁石は使い物にならないし、そもそも地図
が無いから使えても意味が無いし、あゝもう、誰か出てきなさいよ
！！」

傍らに生えていたどす黒い色をした大木を、自らの鬱憤を晴らすた
めに叩き切った。

メキメキと音を立てながら倒れる大木は、あっという間に倒れ大き
な音を立てた。

「はぁ・・・これなら紫に着いて来てもらえばよかったかな。

いや、私も子供じゃないんだし、1人でどうにか打開出来るはず
・・・」

その時だった。

探知魔法に魔力の反応が現れた。

「騒がしいぞ、クマムシ。

騒ぐのなら我が輩から離れて騒げ。」

背後から威圧的な台詞を言い放たれた。

周囲に気配は無かったはずなのだが、何時の間に現れたのだろうか。

「誰がクマムシよ。」

私をそんな下等生物と一緒にしないでくれる？」

振り返るとそこには、1人の成人男性と思わしき人物が立っていた。背の高さは190程度、髪は黒に金髪が入り混じった独特な色をしている。

髪の前には三角形の髪飾りが、いくつも付けられている。

そして背中に漆黒と純白の羽が生えている。

「貴様のような弱者は、食物連鎖の最下位に位置しているのだ。」

クマムシと呼ばれるだけ、ありがたいと思え。

それともゾウリムシの方が好みだったか？」

「散々言ってくれるじゃないの。」

アンタはそれだけ自分の力に自信があるんでしょうねえ。」

剣を構えて、目の前の生意気な男の首下に突きつける。

「我が輩にそんな態度をとって良いのか？」

貴様が我が輩の機嫌を損ねたら、永久に魔界を彷徨う破目になるぞ。」

「えっ」

確かにこの男の言っている事は正論だ。

この男が私を無視してこの場を去ってしまったら、下手したら永久に魔界から出られないかもしれない。

それだけは勘弁して欲しい。
私は男の首元から剣を下げ、腰に差した。

「・・・分かったよ。
無礼な態度をとって御免なさい。」

「分かればいい。
特別に我が輩が貴様の望む場所まで連れて行ってやろう。」

「ほ、本当？」

高圧的な態度のわりにはに、案外良い奴なの・・・かな？

「その代わりといっっては何だが、聞いて欲しい頼みがある。」

「・・・等価交換ってやつね。」

「我が輩は今現在とても困っているのだ。
その悩みを解決してくれるのなら、我が輩はお前を好きな場所に
送り届けてやろう。」

「内容によるけど、私に叶えられることならいいよ。」

「フム、良い返事だ。
さて、我が輩が貴様に頼みたい事とは非常に単純であり難関だ。
それはだな」

「はあ！？」

「それで、その桃色の扉は何？」

そこには2mほどの大きさの扉が立っていた。

桃色に塗装された扉には、禍々しい装飾品や動物の臓器を連想させる物体が、取り付けられている。

正直言つて、気持ち悪い。

「地上では人肉色の事を桃色と呼ぶのだな。」

「いや、人肉色って……。」

「魔界には桃なんて存在しないからこうなったのだ。」

「人間も存在しないと思うけど。」

「この扉は『地獄777ツ能力』^{道具}の1つ『卑屈な勝手口』^{イビルゲート}だ。

地上以外なら何処にでも移動できる優れものだが、1つ欠点がある。」

華麗に無視されたよ。

もういいし、気にしないし……

「それでその扉の欠点って何？」

「我が輩以外が使うと、扉に食われてしまい一生、亜空間を彷徨う破目になる。」

「いやいやいや、何でそんなものを勧めるのさ。」

「貴様が驚き泣き叫ぶ姿を見たかったからだ。」

この悪魔、1回死んだ方がいいのでは無いか？

「うん、天性のサディストだね。」

「我が輩にとってソレは褒め言葉だ。」

満面の笑みで答えないで欲しい。

どうして私はこんな色物達としか知り合えないのだろうか。

「はぁ………もっとマトモな道具は無いの？」

「それならば、コレはどうだ？」

『道具地獄7ツ兵器 イビルファイヤー 飛んで虫に入る火』

取り出されたソレは、スズメバチなどの様々な虫を合成させたような姿をしていた。

どうやらコレを背中に取り付けて飛ぶようだが

「あのだ。」

「どうしたのだ。」

「コレどう見ても一人乗りだよね？」

「気にするな。」

「気にするよ。」

「貴様は文句しか言えないのか。」

懐から縄を取り出しつつ、悪魔は呟く。

「ちょっと待って、その縄で私をどうするつもり？」

「無論、貴様を結んで引つ張るに決まっている。」

そんな単純な事すら分からないほどの思考力しか無いのなら、死んだ方がマシだぞ。」

「その理屈はおかしいって。」

「黙れ、貴様は我が輩の言つとおりにしていければ良いのだ。」

魔界随一の頭脳を持ったこの我が輩のな。」

腰の辺りに縄が結び付けられた瞬間

「いや、だから、待って、やめt」

体が中を舞った。

「体が干切れるかと思った・・・」

魔法で肉体強化をしていなければ、今頃私は挽肉ミンチになっていただろう。

「フム、案外丈夫なのだな。」

「アンタ・・・本当に悪魔ね。」

「こんな我が輩も昔は天使をやっていた事があったのだが。」

「寝言は寝て言うものよ。」

私がそんな冗談を信じるはず無いじゃない。」

「本当に貴様は頭脳がマヌケだな。」

「信じて欲しいのなら、論より証拠を持ってきなさいよ。」

「我が輩が貴様に目をつけた理由の1つは、貴様が隠し持っている魔道書の一冊『ソロモンの小さな鍵』が関係しているのだからな。」

「なッ!？」

完全に外界から隔離していたはずなのに、どうして存在を認知したんだ。

「ククク、貴様は考えている事が顔に出やすいようだな。

我が輩には貴様の考えている事が、手に取るように分かるぞ。」

「う、うるさいやい。

そもそもアンタは『ソロモンの小さな鍵』と何の関係があるのさ。

「

「その魔道書には我が輩の召還法が載っているからな。」

「この本に載っている悪魔は、遙か昔『ソロモン王』が使役した、72柱の悪魔しか載ってない筈だよ。

それなのにアンタなんか・・・」

「つくづく貴様は頭脳がマヌケだな。

我が輩の名は『アスタロスAstaroth』

ソロモン72柱の1人にして、大公爵の位を所有している。」

「アスタ・・・ロス・・・？」

「本当・・・なの？」

「先ほどから我が輩は真実しか述べていないぞ。」

「あ、アハハハ・・・」

最早苦笑いしか出てこない。

『アスタロスAstaroth』とは『ルシファーLucifer』や『ベルゼBeelzebub』

u b』と名を列ねる悪魔だ。

私が魔界に来る際に参考にした『大奥義書』にも、書かれていたほど有名で、自ら墮天した天使とも言われている。

彼の事が記載されている魔道書は、数知れずで名前を挙げるのすら馬鹿らしい。

確か地獄の支配者だったはずなのに、どうしてこのような場所にいたのだろうか？

「アスタロス・・・貴方、どうして魔界にいたの。」

地獄の領地を支配していたんじゃないの？」

「地獄で暮らすのは飽きてきたから、抜け出してきただけだ。」

「え・・・？」

領地も配下も身分も捨てて？」

頭の中を理解不能の4文字が駆け回る。

「そんなモノ、我が輩には必要無いからな。」

天使を止めた理由も、天界での下らない生活に飽きたからだ。」

「・・・魔界を去る理由も、魔界の生活に飽きたからなのね。」

「ホウ、少しは物事をマトモに考えられるようになったのだな。」

その調子で我が輩に見合うような実力を身に付けろ。」

もうアレだ、深く考えないようにする。

考えていたらキリが無い。

「はいはい、分かりましたよ。」

無駄話で時間を食ったけど、此処に『魅魔』が住んでるんだね？」

「ああ、この家に魅魔が住んでいる。」

そこにはお世辞にも、綺麗とは言えない家が建っていた。

屋根は、魔界の植物が根を下ろしており、壁もツタのような植物が覆いつくしている。

「実に魔法使いが住んでそうな家だね。」

魔法使いの私が言うと、ただの皮肉にしかならない気がする。

私が住んでいた掘っ立て小屋よりは、幾分マシだがそれでもボロに代わりは無い。

「ただ薄汚れているだけだろうが。」

この魔神は、もうちょっとオブラートに包んで発言が出来ないのだろうか。

本人が聞いていたら怒るのでは無いか？

「ちよっとソレは失礼じゃないのかい？」

T o B e C o n t i n u e d . . .

34話 魔界突入（後書き）

元ネタ

アスタロス

『Astaroth』＝実在の魔神

イビルゲート

『卑屈な勝手口』＝どこでもドア

アスタロス

『Astaroth』

種族 悪魔（魔神）

性別 不明

年齢 不明

能力 『地獄777ツ能力を扱う程度の能力』
『地獄7ツ兵器を扱う程度の能力』

『地獄7ツ兵器を扱う程度の能力』

アスタロスの見た目は、『脳噛ネウロ』^{のうがみ}そのものです。

変更点は、羽が生えているくらいです。

本格的な出番は、黄金練成編が終了してからだと思われれます。

どうにも筆が進まない。

ネタはあるのに上手く文字に出来ない。

時間がない、本当は毎日更新したいけど、時間が足りない。

早く黄金練成編を終わらせて、別のキャラの過去話とか書きたいぞ
E。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

35話 魅魔

「ちょっとソレは失礼じゃないのかい？」

古ぼけた扉に目をやると、緑色の長髪をした女性が顔を覗かせていた。

その女性は、黄色い太陽が描かれた青色の三角帽を被り、全体的に青色の装飾がされた服装に青いマントを羽織っている。

「相変わらず汚らしい家に住んでいるな。」

「雨風を凌げるのなら、見た目はどうでも良いとは思わないのかしら。」

「ククク、確かにその通りだな。」

「とりあえず立ち話もなんだから、中に入って話しましょうよ。」

「フム、それもそうだな。」

2人は瞬間にに会話を交わし、家の中に消えていった。

私が会話に割り込む隙も無かったんだけど・・・

「どうしたのかしら？」

早く入ってきなさいな。」

「あ、はい・・・。」

再び扉から顔を覗かせた魅魔に声をかけられた。

始めて出会ったはずなのに、その声には何処か懐かしさを感じる。微笑んでいる彼女の顔を見ると、何故か母さんの面影を重ねてしま

う。

私は母さんの顔を見た事が無いのに、どうしてなのだろうか。

家の中は、魔法使いが使う薬品の匂いが漂っている。

薬品を煮詰めるための釜や、大量の魔道書が納められた本棚が所狭しと並んでいて、余計に部屋の圧迫感が増している。

その様子とは対照的に部屋の中央に鎮座している机は、綺麗に片付いていた。

長方形の机の周りには、三つの椅子が並べられており、私は魅魔の正面に座った。

正確には私よりも先に家に取り上がりこんだアスタロスに、魅魔の隣の席を陣取られたからなのだが。

肝心のアスタロスは、何処から取り出したティーセットを使い、勝手に紅茶を飲み始めていた。

何処から取り出したか聞くと『地獄777ツ能力』道具だと言い出した。最早なんでもありなのだろう。

私は軽くため息をつく、話を切り出した。

「お願いがあるのですが」

「『ネクロノミコン』のことに関係してかい？」

お見通しのようだった。

きつと紫が話を通していたのだろう。

「・・・そうです。」

私に『ネクロノミコン』を譲って貰えませんか。
出来る限りのことなら何でもします。」

「そうだねえ・・・。」

魅魔が考え込み始めた。

いきなり家上がりこみ、伝説級の魔道書を譲ってくださいなんて
無謀だったのだろうか。

次第に顔色が曇っていく私の表情を見て、魅魔が会話を再開した。

「私はすでに死んだ身だから、あの魔道書は使いこなせないのよね。
別に必要でもないし、譲ってあげてもいいわよ。」

「本当ですか!!」

「その代わりとっては何だけど、貴女にはしばらく私の下で修行
を積んでもらうよ。」

何か裏があるのかと、勘ぐってしまふ。

此方からすれば、損なんて金輪際こんりんざいも無く今すぐにも承諾の返事を
したいのだが、見ず知らずの相手を信用してもいいのだろうか。

「・・・それじゃ等価交換になりませんよ。」

「折角、格安の条件で目的を達成できるのだ。」

我が輩なら、この条件は飲んだ方がいいと思っぞ?」

アスタロスは軽々しく言ってくれるが、そう簡単にはいかない。
確かに魅魔が、悪い奴では無いのはよく分かる。

悪霊ではあるが、毒気も無く見ず知らずの私を家に招き入れてくれるほどのだからだ。

「私が承諾した瞬間『自分を知れ・・・そんなオイシイ話が・・・あるとおもつのか？おまえのようなヤツに』とか言い出すんでしょ。」

「フフツ、どうして私がオマエに嘘をつかなくちゃいけないんだい？」

「だって初対面だし・・・魔道書を譲ってくれるだけではなく修行をつけてくれるなんて、虫が良すぎると思うし・・・。」

その時アスタロスがボソリと呟いた。

「・・・ン？」

「貴様はコイツと出会った事が無いのか？」

アスタロスが首をかしげている。

「私は何かおかしな事を言ったのだろうか？」

「当たり前じゃない。」

「今まで私は魔界に訪れた事はおろか、他の魔法使いにすら出会った事が無いんだよ。」

「貴様のラストネームは『コルテス』では無いのか？」

「そうだけど・・・それがどうかしたの？」

「我が輩が思うに、先程の貴様の発言は間違っているな。」

ニヤリと歪んだ口元から、鋭利な歯が幾つも覗く。

「どづいうこと?」

「真相は魅魔に語ってもらえ。」

我が輩はそこまでお節介を焼くつもりは無いからな。」

アスタロスは立ち上がると、家から出て行ってしまった。

小さな家の空間には、魅魔と私だけが取り残された。

「そつだねえ。」

とりあえず自己紹介からしておこうかしら。

私の名前は『ミズ魅魔 コルテスCortés』。

貴女の実の母親よ。」

「え」

私の母さんは確か私を生んだ後すぐに死んだ。

そこまでは父さんから聞いた事があるのだが、家には肖像画の一枚も残っておらず、顔をまったく知らなかった。

緑色の瞳と髪をした美しい女性で、青い服がよく映えたと聞かされた事がある程度だ。

確かにその話の通り、魅魔は美しいし何処と無く私と顔つきが似ている気もする。

紫によると父さんと紫は古くからの友人だったらしいし、母さんとも仲が良かったそつだ。

紫が魅魔の居場所を知っていたのも、悪霊なのもそう考えると納得

できる。

それならばどうして父さんは、紫は、この事実を私に教えてくれなかったんだ。

どうして、どうして、どうして、どうして

「ど……て……」

「ん？」

「……どうして魅魔は私の傍にいてくれなかったの？」

今までで心の奥底にしまいこんでいた感情があふれ出した。まるで凍り付いていた本当の気持ちが溶け出したかのように。

「悪霊つてのはね、人間の傍に居ると少なからず悪影響が出るモノなのよ。

私だって貴女に会いたかった。

貴女を抱きかかえてあげたかった。

貴女と沢山、お話をしたかった。

だけどね、それは敵わないことだったの。

もし貴女に会ってしまったら、貴女の体に害を与えてしまうかもしれないから。

本当なら貴女とは、二度と会わないつもりだったのよ。

でも、紫から貴女の話を知っているうちに、会いたくなってきたよ……

私の身勝手に貴女を傷つけてごめんね。」

「……思い出は今から作ればいいよ。

それに過ぎた事を気にしても意味が無いからね。

私は母さんの事を恨んだりなんてしてないよ？」

過程はどうかであるかと、結果的に母さんに生きているうちに会えたのだから、恨む必要なんて皆目無い。

「こんな私をまだ母さんと呼んでくれるの・・・？」

「当たり前じゃない。」

母さんは私に残された唯一の家族なんだから。」

「あ、いや、それは・・・」

母さんが気まずそうな表情をし始めた。

流石に無いとは思うけど、まだ何か隠してたりしないよね？

「もしかしてまだ隠し事があるの？」

「・・・正確にはもう一人、地獄で暢のんき気に暮らしている人がいるのよねえ。」

「もしかして、父さんだったりする？」

「YES！YES！YES！」

母さん、どうして貴女はそんなにテンションが高いのですか。

「・・・はあ。」

父さんが死んだって聞いたとき、内心物凄く落ち込んだのになんだか馬鹿らしくなってきちゃった。」

「ククク、親子の感動的な再開は終わったか？」

何時の間にか帰ってきていたアスタロスが声をかけてきた。母さんのラストネームを知っていたのならば、どうして教えてくれなかったのか。

理由は私をからかう為だろうが、一応聞いておく。

「アスタロス・・・母さんの事、知ってたでしょ？」

「地獄随一の頭脳を持っている我が輩にとって、この程度の推理なんて他愛も無いことだ。」

色々と吹っ切れた私は、

「こッ・・・この悪魔がア・・・」

いいわ、今ココで解体してあげる。」

「ホウ、我が輩を研究しようとするとは、いい度胸ではないか。」

「私の目標は世界を解析することだからね。」

こんなまだまだ序の口だよ。」

「マルティナよ！」

なにゆえ もがき 抗うのか？

滅びこそ 我が輩が喜び。

死にゆく者こそ 美しい。

さあ 我が輩の腕の中で 息絶えるがよい！」

「アンタは大魔王じゃなくて魔神でしょうが。」

おとなしく幻魔王を倒しとけばいいのよ。」

「幻魔王はとつくの昔に滅ぼしてしまったのだが。」

「えー・・・滅ぼすくらいなら体細胞のひとつかけら位、残してくれたらよかったのに。」

「その発言は魔神である我が輩ですら、おかしいと思つのだが。」

「そうかな？」

「少なくともマトモでは無いのは分かる。」

そのような狂った思考を行える奴に、ろくな奴がないのは経験済みだからな。」

アスタロスの真剣な表情が、過去の惨劇を物語っている。

サディストはガラスの心を持っているらしいが、もしかしたら本当かもしれない。

それにしても地上以外の土地を網羅したアスタロスにココまで言われるのだから、私の研究意欲は相当なのだろう。

まったく自覚が無いところが恐ろしい。

そのうちMad 狂気の魔法使い Witchとか言われ始められそうだ。

「・・・この子は貴方に良く似てしまったようね・・・良い意味でも悪い意味でも。」

部屋の隅で、マルティナとアスタロスのやり取りを眺めつつ、魅魔がボソリと呟いていたのであった。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
. . .

35話 魅魔（後書き）

元ネタ

自分を知れ・・・そんなオイシイ話が・・・あるとおもつのか？おまえのようなヤツに「ジヨルノ・ジヨバーナ（ジヨジヨの奇妙な冒険）」

よ！

なにゆえ もがき 生きるのか？

滅びこそ 我が喜び。

死にゆく者こそ 美しい。

さあ 我が腕の中で 息絶えるがよい！「ゾーマ（ドラゴンクエスト）」

大魔王「ゾーマ 幻魔王「デスタムーア 魔神「ダークドレーム

上手く文字に出来なくてモヤモヤする。

2部の物語の構成ばかりが思い浮かんで、執筆が進まない。

GWの間に何とか5話ぐらい書き進めたいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

36話 使い魔

魔界に暮らし始めてある程度の年月が過ぎ、私にはとある変化が起きていた。

私の能力を封印していた結界が解除されたのだ。

正確には解除してもらった、と言った方が正しいのだが。

元から能力に違和感を感じてはいた。

普通なら能力は無意識に自覚しているものらしい。

それなのに私は何年生きてても自覚出来なかった。

そこで私は考えた。

もしかしたら能力を誰かに弄られているのでは無いかと。

魔界にたどり着いてから、私は本格的に能力について探るようになった。

年々、理解できる物事の幅が増えてきている。

それは能力を使いこなせているからなのだろうか、それとも失った力を取り戻し始めているからなのだろうか。

能力は主に3種類に分けられる。

天魔のように、最初は少しずつしか能力を使えないが、成長するにしたがって、操作範囲が増える場合。

アークードやアスタロスのように、最初から強大な力を持っており成長はしないが、劣化もしない場合。

そして元々持っていた能力が、別の能力へと進化する場合。

それでは私の能力はどちらに当てはまるのだろうか。

まず3番目はありえないので考慮しない。

一番有力なのは1つ目なのだが、理解できていない能力が成長する

はずも無い。

残ったのは2つ目なのだが、それだと魔力が増えることに能力が使えるようになるのと辻褄つじつまが合わない。

だとすると残された可能性は、何者かに私の能力を弄られていることになる。

最有力候補は母さんか紫だ。

この2人なら私の体に何か細工も出来るだろう。

これは問い質す必要がありそうだ。

2人を問い詰めたら、あっさり封印を施した事を認めた。

どうやら私が能力の封印に感じいたら、教えるつもりだったらしい。封印した理由は、精神が能力に耐え切れるようになるまで待つためだったそうだ。

私の能力『見聞きしたことを理解し引き出す程度の能力』は、ありとあらゆるものの抗生物質、性能、用途、使用方法、意味といった膨大な情報を理解できる。

逆に言えば、それだけの情報を整理できるほどの精神力が無ければ、精神崩壊を起こす可能性があったそうだ。

能力というモノは精神と深く結びついている。

同系統の能力者、例えば八雲紫の『境界を操る程度の能力』と鈴科天魔の『ありとあらゆるものを入れ替える程度の能力』が戦った場合、勝利するのは紫だ。

生と死の境界を操れば相手を殺す事が出来る紫と、生と死を入れ替えれば相手を殺せる天魔。

こういった場合に勝敗をつけるのは、精神力の差だ。

無論、妖気や経験も多少は絡んでくるが一番響いてくるのは精神力だ。

それほどまでに、精神と能力は強く結ばれている。

そして、強すぎる能力や力により精神を壊す者もこの世界には数多と居る。

美鈴や幽香もその1人だ。

彼女達の場合は、生まれつき強すぎる力を持っていたからなのだが、どうやら私も封印を施されていないければ、危うかったそうさ。

確かに封印されていても、文字や言語の意味を理解できるのたのだから相当なものだ。

この50年余りで、何とか身近な者に対する研究衝動だけは抑えられるようになった私の姿を見て、本人が気がついているのなら封印を解除しようと話し合っていたそうさ。

何と言うか、どうにも掌の上で踊らされていたような気がしてならない。

旅や素材集めがここまで上手く出来たのも、もしかしたら紫や母さんが裏で糸を引いていたからかもしてない。

我が子を思う気持ちから行った行為なのだろうが、私としては不服でたまらない。

今まで古今奮闘して行ってきた行為は、実は他人の引いた道の上を歩いていたに過ぎないからだ。

よくよく考えたら分かることなのに、どうして今まで気がつかなかったのだろうか。

と、憤慨するほど私は短気では無い。

精精せいせいアスタロスと口喧嘩をする程度で、数えるほどしか本気で怒った事は無い。

私は基本的に結果さえ良ければ、過程なんてどうでもいいので、目標のためならプライドなんて物簡単に投げ捨てる事が出来る。

こうして能力を 完 全 開 放 する事が出来たのだが、この能力正直言ってもかなり維持するのが辛い。

見た物を絶対に理解してしまうせいで、頭の中は視界に映る物の情報で埋め尽くされる。

その情報量は分割思考を多重展開しても追いつけないほどだ。

母さんの言っていた修行とはこのことだったのかと、今更実感した私であった。

悪魔であり魔神であり墮天使であるアスタロス。

背中に生える、天使を連想させる漆黒の翼と、悪魔を連想させる純白の翼がその事実を物語っている。

本人曰く、本気を出せば天使の輪や天まで貫くほどの大きさの光り輝く翼を展開することすら出来るらしい。

世間一般の神を遥かに超える戦闘能力と知性を兼ね備えた彼なのだが、今しがた困ったことになっている。

彼の持っている能力『地獄777ツ^{道具}能力を扱う程度の能力』、パツと聞くと訳が分からない能力だ。

用途は多彩。姿を消したり、瞳から光線を放つたり、自らの使い魔を出現させたり、痒い所に手が届く便利な能力だ。

そして彼が地獄の3強と呼ばれる由縁となった能力『地獄7ツ^{能力}兵器を扱う程度の能力』。

曜日を連想させる7種類の兵器は、そのどれもが神の力と同等以上の戦闘力を秘める、正に必殺の力だ。

魔界の月を呼び出し周辺の魂を狂気に染め上げる『イビルムーン残照の満月』
亜光速で移動できる1人用の移動兵器『イビルファイヤー飛んで虫に入る火』
強力な主砲と副砲を備えた大型護身兵器『イビルアクア深海の蒸発』
巨大な樹木を生やし辺りを破壊する『イビルツリー朽ちる世界樹』
切ったという過程を消し飛ばし何でも切り裂く『イビルメタル二次元の刃』
街1つを楽々破壊できる強靱な泥巨人『ゴレム国を喰う土地』
最大威力で開放すれば地獄が消滅するほどの威力の『イビルサン地獄破壊爆弾』
そんな彼が困っていること。
それは

「我が輩は己の能力で地上に行く事が出来ないのだ。」

「その話は何回も聞いたよ。」

私とアスタロスは、母さん魅魔の家で同じ討論を続けている。

計784種の能力を持っている彼だが、実は空間移動系の能力は殆ど存在しないらしい。

行ったことのある場所になら移動することの出来る『イビルウインドウ記憶の回廊』があるのだが、ソロモン王に封印されたときに設定がリセットされたいらしい。

どうやったら魔界から地上にいけるのか考えているときに、偶然道に迷って放浪している私の魔力を探知して、近づいてきたらしい。アスタロスに「我が輩を地上に解き放つてくれるのならば、魅魔の所まで連れて行ってやろう。」と、言われた私は何だかんだでその要求を承諾してしまっただが、今思うと本当にこの魔神を地上に連れて行っていいのだろうか。

こんな強力な魔神を解き放ってしまったら、私の研究対象能力持ちや実験動モルモ物が減ってしまうかもしれない。

だからどうやってこの魔神をおとなしくさせるか考えているのだ。

「それならばどうして我が輩を、地上に連れて行ってくれないのだ？」

「どうしてって・・・アンタみたいな馬鹿げた戦闘能力を保有しているヤツを野放しに出来るわけないでしょ。」

「我が輩からしてみれば、貴様を野放しにしている方が問題だと思うのだがな。」

「私は一度解剖解剖した披見体モルモットを、再び研究する事は無いから大丈夫だよ。」

それに最近は能力の制御もある程度出来るようになってきたから、私と仲良くしていれば実験される事は多分無いから安心してね。」

世間一般では、それを大丈夫とは言わない。

多分の2文字が付属している時点で安心は出来そうに無いな、と内心想うアスタロスであった。

「・・・貴様は我が輩すら解剖した実績があるだろうが。」

長い年月を生きてきた我が輩だが、生きてまま解剖されるなんて初めてだったぞ。」

「涼しい顔で解剖されてたアンタに言われたくないんだけど。」

少しは痛がる態度位見せてくれたっていいんじゃない？」

期待はしていないが、この高圧的な魔神の痛がる姿を見れなくて少し残念だった。

一応弁解しておくけど、私は幽香やアスタロスの同類サディストじゃないからね。

マゾかサディストかと聞かれたら確かにサディストだけど・・・あの2人みたいな真性じゃないのであしからず。
・・・誰に説明しているんだ私は。

「我が輩の肉体に物理的な攻撃は意味を成さないのだから、たとえ肉体を粉微塵にされても、我が輩を殺す事は不可能だ。」

淡々と話しながらアスタロスは、なにやら紙切れを持ってきた。その紙は地上の言語とも魔界の言語とも異なる文字で埋め尽くされていた。

そして背景には複雑な魔法陣が刻まれていた。

「・・・これは？」

それは、何かの契約書のようだった。

「貴様なら読むことも容易いだろう。」

貴様がどうしても我が輩を地上に連れて行くのが嫌なのならば、その契約書にサインをしる。」

紙切れに目を通すと、以下の事が書かれていた。

我が輩は貴様の使い魔として特別に仕えてやろう。

契約期間は、貴様の魂が滅び輪廻転生もしくは冥界送りになるまで。貴様の命令は極力聞いてやるが、肉体の解剖および魔法や新薬の披見体は断らせてもらう。

必要ならば、我が輩の培ってきた知識を貴様に譲渡してやる。その代わり、我が輩は基本的に自由行動を取らせてもらう。

無論、我が輩の力が必要なときは、迅速に貴様の傍に出現するので安心するがいい。

また、我が輩が地上の生物の虐殺を行った場合、貴様のどんな命令でも聞き叶えてやろう。

使い魔契約を解除したいときは、何時でも我が輩に申し出れば解除してやる。

「……………何故この契約書は命令口調で書かれているのだろうか。まあ、アスタロスらしいと言えば、アスタロスらしいが。」

「確かにアンタは悪魔だから使い魔契約も出来ると思うよ。」

それに、使い魔にしたらアンタの情報を常に掴んでいることも可能だね。

「だけど……………私なんかアンタを使いこなせるとは思えないんだけど。」

だが、魔神と契約した魔法使いなんて居たのだろうか。

魔法の一環で召還する事はあるにしても、常時召還し続けるなんてはつきり言って異常である。

「貴様の技量、魔力、能力があれば我が輩を使い魔にすることは不可能では無い。」

「もっと自身を持って、それでも我が輩の主となる魔法使いか？」

「そもそもどうして私の使い魔になろうと思ったの。」

「貴様を気に入ったからだ。」

「過大評価しすぎでしょ。」

素直に私はそう思った。

目の前の魔神や、美鈴、紫と比べると、私の実力はたいした事が無

い。
頑張ったところで、天魔と同等程度だ。

「貴様の潜在能力は、単一の魔法使いに納まる物では無い事を自覚しているのか？」

「貴様の能力は、使い方によっては神の力に迫る物があることには気がついているのだろう。」

「うーん・・・」

「別にいいんじゃないのかい？」

「アスタロスはこう見えて、結構良い奴なんだよ。」

何時の間にか帰ってきていた母さんが、とんでもない発言をした。

「コイツが良いヤツ・・・？」

毎日寝起きにトラップを仕掛けてきたり、ハンデモニウム魔界の食料を食べさせようとしてきたり・・・案外美味しかったのはココだけの話だ。

兎に角、かくこんなサディストが良いヤツのはずが無い。
もしかして・・・

「母さんってマゾだった」「どうしてそうなるんだい？」「」

母さんが手に持っていた、三日月の飾りの付いた杖を突きつけられる。

「何この杖、何で先端の飾りが鋭利なの？」

「と言うか、実の娘にそんなことするか、普通。」

「じよ、冗談だって、母さん。」

ほらアスタロス、契約するからその紙を寄こしなさい。」

「ム、受け取るが良い。」

私は剣で指先を切り裂き、血文字で契約書にサインをする。

なんとも事務的で、召還用の魔法陣も使っていないのに果たして契約なんて出来るのだろうか。

そんな私の不安とは裏腹に、契約はいとも簡単に終わってしまった。室内が一瞬だけ膨大な魔力に包まれたかと思うと、紙切れが燃え尽き消え去った。

もしかしてコレで終わり？余りにもあっけなさ過ぎる……。

もっところ地面からルーンが描かれた石柱は現れるとか、アスタロスが「これが……我が輩の真の姿だ」と言い出したりとかしないのか。

アスタロスの唯一変わった点といえば、手の甲に先程の魔法陣が刻まれただけだ。

「何故残念そうなのだ。

地獄の3強と呼ばれる我が輩を使い魔に出来たのに、何か不服な事があるのか？」

「……別に。」

こうして私は、破天荒な魔神『アスタロス』を使い魔にした。

使い魔は契約した魔法使いと似た性格や性質をした者が多いと聞くが、本当なのだろうか？

To Be Continued . . .

追伸 アスタロスは、以前魔界を彷徨っていた母さんを助けた事があるらしい。

どうやらイツには、気に入ったヤツを助ける趣味があるらしい。

．．．案外、私と似た一面があるのかもしれないと思ってしまった。

36話 使い魔（後書き）

魔界編を終わらすために、かなり手短になりました。
次回は、ようやく空亡^{ルミア}が登場する予定。

タイトルに捻りが無くなって来ているのはご愛嬌。

いっその事タイトル無しでも良い気がしてきました。
残り素材『空亡の髪』

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

37話 空亡の髪？

「はあッ・・・はあッ・・・はあッ・・・」

巨木が生い茂る森林を、1人の男が駆ける。

その男の表情は恐怖で染まりきっている。

全身から垂れ流しになっている体液が、着ている着物を湿らせ肌に張り付かせている。

そんな事はお構い無しに男は走る。

一体彼は、どんな化物から逃げているのだろうか？

「クソッ・・・何なんだ、あの化物は!？」

男の背後を物凄い速さで追いかけてくる漆黒の球体。

男はその姿を目視する事は出来ない。

深夜であるため、その漆黒の闇は天然の迷彩機構として成り立っているからだ。

「ねえ、どうして逃げるのかしら？」

「ヒイツ!？」

一心不乱に男は走る。

例えソレが無駄な努力だとしても、一筋の希望を追い求めあかく事を止めない。

しかし、残念ながら男に希望なんてモノは存在しなかった

「ツッ!!!」

木の根に足を取られ、転んでしまったのだ。
足首を捻り、起き上がり逃げることは敵わない。

「やっと諦める気になったようね。」

羽織っていた闇の衣wが消え去ると、そこには金髪のショートボブに深紅の瞳を携えた、10歳そこそこの少女の姿があった。
見た目こそ10歳程度だが、その酷く歪んだ笑みはとても少女の物とは思えない。

「き、金髪に真紅の瞳・・・まさかお前は・・・」

男は、ふとある妖怪の存在を思い出す。

平安京で、非常に有名になっている妖怪と容姿が一致することに。
その名を『空亡そらなまき』と言う。

空を闇が侵食していく様から何時の間にか、皆がその名で呼ぶようになった。

幼き少女の姿をしていることもあれば、妖艶な女性の姿を取っていることもあると言われる、謎の多い妖怪だ。

「みんな私の事を『空亡』って呼ぶけれど、ちゃんとした名前があるのよ？」

笑っている少女の姿は、長く生え揃った牙さえなければ美しいとも言えるのだろう。

男は必死に後退りするが、逃げられないことに変わりはない。

「う、五月蠅いめんど!!」

僕のそばに近寄るなア!!」

自棄^{やけ}になった男は、落ちていた石ころを空亡に投げつける。
そのまま飛んでいけば、彼女の頭に直撃したのだろうが、

ガオンッ！

奇しくも、石ころは突如現れた暗黒空間に吸い込まれ粉微塵になる。

「ねえ、人間^{ヒューマン}。」

無駄な体力の浪費は止めて、早く私に食べられてくれないかしら。
時には諦めることも大切よ？」

ニヤリと笑う少女の姿は正に、ヒトの皮を被った化物^{モンスター}と呼ぶに相応しい。

口元からチラリと見える酷く尖った歯は、どんな者でも噛み砕くだろう。

「だ、誰か助けてくれ・・・」

男の悲痛な叫びは、空亡以外の耳には届く事は

「ようやく見つけた。」

「上手く力を隠していたようだが、先程の能力行使の際に僅かだが漏れ出していたぞ。」

あつた。

そこには1組の男女が立っていた。

優男の方は、奇妙な配色の髪の色をしている。

中性的な顔立ちをしているが、どこか荒々しい印象を受ける。手前のほうの髪は黒髪なのだが、それ以外の髪は金髪だった。

見たことの無いような青い服を着ており、その姿を眺めるだけで寒気が押し寄せてくる。

女の方は、肩まで伸びる金色の髪に、青い瞳をしている。

顔立ちこそは、日本人とは異なるがかなり整っており美しい。

奇妙な黒を基調にした服を着ており、太股を大きく露出している。

正直エロい。

腰には細身の剣を下げしており、太陽と三日月の装飾が施されている尖った帽子を頭に被っている。

「た、助けてくれ!!」

俺は何とかその2人組みの傍に近寄り、助けを求めた。

只者では無い雰囲気醸し出しているこの2人ならば、あの化物を始末してくれるかもしれない。

男は心の奥底からそう願った。

だが、返ってきた返事は男を絶望のどん底に陥れた。

「助ける・・・?どうして?」

「なッ!？」

この状況が見て分からないのか!!」

男は声を荒上げながら、女を怒鳴りつける。

切羽詰っている男は形振り構えなくなっていた。

迫り寄ってきている、空亡の事を意識の外にまで阻害してしまうほ

どっ。

「我が輩の目からは、一般的な妖怪の食事風景にしか見えないな。」
優男は興味深そうに男と空亡の様子を観察している。

「早く食べられちゃってよ。」

私はそこにいる妖怪のほうに用があるんだから。」

無表情に言い放つ女の瞳は、まるでゴミか虫けらを眺めているかのようだった。

「お、お前たちに情は無いのか!!」

男の叫びを、女は軽く受け流した。

「モルモット実験動物に与える情なんて、持ちあわしているの思っ?」

冷酷な言葉を言い放った女は、男なんて目にもくれずに空亡を見つめている。

元より彼女は、男に金輪際も興味を持ってはいないようだった。

「この化物共が・・・クソッ、他に誰かいなのか。」

誰か・・・誰か助けてくれッ!!」

「そんなことより貴様、もう少し背後も気をつけた方がいいぞ。」

「いただきます」

グチャリと何か引きちぎれる音がする。

「グアアアアアア!?」

引きちぎれたのは男の腕だった。
無意識に噛み付かれるのを、腕で防御してしまったためそのまま腕を持っていかれたのだ。

「ん〜、やっぱり新鮮な人間の肉は美味しいわね。」

片腕を失いながらも、男は空亡から逃げようとしていた。
脳内麻薬の分泌により一時的に痛みを感じなくなった男は、震える体を無理矢理動かしている。
しかし足は満足には動かず、片腕を失った人間の動ける速度なんて高が知れる。

「や、止める・・・止めてくれ・・・僕には家族が居る・・・こんな所で死ぬわけにはいかないんだ!!」

血の海をもがく男の命の灯火は、刻々と弱まっていく。

「そーなのか!」

私には家族なんて居ないから分からないや。」

男の体を、闇の塊が飲み込む。

空亡の操る闇は、ありとあらゆるモノを吸収する。
対象が無機物であろうが有機物であろうがお構いなしだ。
その気になれば、妖気や霊気、神気まで吸収できる。

「あああああああ.....」

男の声が次第に小さくなっていき、最終的に聞こえなくなる。彼は今頃、空亡の腹の中に納まっているのだろう。

「食事は終わったようね。」

空亡……いや、ルーミアr? menと呼んだ方が正解かな?」

どうやらルーミアは食事を終えたようだ。

彼女を探すのには大変苦労した。

自身に封印を行い妖気を隠した上で、夜中に狩を行うからだ。

紫ですらその居場所を掴む事が出来ず、結果的に自分達だけで探す破目になった。

昼間は闇と同化し姿を現さず、私の探索魔法やアスタロスの『イビルト激痛チャラーの翼』を使い搜索をしても今まで見つからなかった。

「貴女……アイツの手先なのか?」

ルーミアはその外見には似つかわしい、大人びた態度をとっている。人外はその外見と実年齢が比例しない事は、よくある事なので気には留めない。

「ククク、貴様の言っているアイツとは誰のことなのだ?」

アマテラスオミカミ天照大神、アポロン、ラーRa、フル・フシャエータHvar? a? ta、当て

はまる相手が多すぎて我が輩には理解できんな。」

何時も通りの高圧的な態度でアスタロスは、ルーミアの神経を苛立

たせる。

揺るがない信念を持っているのは良いことだが、時と場合ぐらいは考えて欲しい。

「……………」

敵意を高めるルーミアは、周囲の漆黒を集め闇で構築された翼を展開し始めている。

更に彼女の身長を遥かに超える伝説の大剣『Stormbringer』^{ストームブリンガー}を構え、此方に明確な殺意を伝わらせてる。

このまま戦闘を行うのは得策では無い。

完璧な賢者の石^{エリクサー}を持って居るのなら歯が立つかもしれないが、今の私の実力では到底対処しきれない。

とりあえず私は、友好的な態度でルーミアに接近する。

「私は別に神の手先じゃないわ。

横に居るコイツも、神の分類には入るけど悪魔の類だから大丈夫だよ。」

「……ふうん。

魔法使いと魔神が私に何の用？」

「貴女の能力を貰いに来たの。」

『闇を操る程度の能力』

文字通り闇と名の付く物を全て支配下に置く能力。

闇とは負の力、言い直せば負の力を操る程度の能力とも言える。

果てしなく単純な能力だが、果てしなく強力な能力でもある。

物理攻撃や精神攻撃、拳句の果てには瞬間移動まで行える自由度の

高い能力である。

神の力にすら匹敵するであろう、正に空を亡き者にすら出来る能力だ。

「私の能力を・・・？」

別にいいわよ。髪でも皮膚でも、好きな部位を持って行きなさい。

「

「どうせ交換条件に物凄い事を要求してくるんでしょ。」

毎回お決まりな等価交換。

今回だけ要求されない訳が無い。

「そんな物凄いことじゃないわ。

ただ、貴女の心の闇を食べさせてもらうだけよ。」

「・・・十分物凄いっての。」

「ククク、貴様も不憫だな。」

横で腹を抱えて笑っている魔神が妬ましくてたまらない。使い魔なら使い魔らしく助けなさいよ。

「大丈夫、一瞬気を失うだけよ。」

コラ、そのルーミア、不敵な笑みを浮かべながら近寄るなア！！逃げようとしても足を闇で固定されてるし・・・コレは詰んだな。意識が薄らぎ、私は眠りに落ちた。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.

37話 空亡の髪？（後書き）

着々と素材集めを進めるよ。

日常編とかは黄金練成編が終わるまでお預け。

後10話以内に黄金練成編は完結する予定。

残り素材 complete!!

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

38話 空亡の髪？

「フム、つまり貴様はこの世に悪意・・・つまり闇が生まれた時に誕生したのだな？」

アスタロスは虚空に腰掛けながら少女と会話している。

一体どういった原理なのかは不明だが、彼には地上の常識は通用しないので考えるだけ無駄だ。

「そーなのだー。」

最近では暴れるのも疲れてきたから引退気味なのよね。

強者として生きるのも疲れてきたし、誰かに封印でも施して貰おうかしら？」

一方ルーミアは、己の能力で作りに出した漆黒の腰掛に座り、両足をパタパタさせていた。

その行動自体は少女そのものだが、口から発せられる言葉の数々は数千年生きた物だけが持つ独特な重みを秘めている。

気を失っているマルティナそっちのけで、勝手に親しくなっている魔王2人組み。

傍から見れば、2枚目な優男と美少女がとてつもなくえげつない話をしているという、とてもシュールな光景に衝撃を隠せないだろう。

2人共、その気を出せば世界を壊すことが出来る実力者だが、それと同時に優れた知性も持っている。

アスタロスは地上で見つけた初めての実力者として、ルーミアは己と同じ闇の世界に身を置いている魔神を見て興味を湧き、こうして談笑している。

肝心の話の内容が、己の犯してきた罪の数々の自慢話やオゾマシイ過去話なので、常人からしてみればとても談笑とは言えないのだがそれはご愛嬌である。

元々、彼等のような神にすら匹敵する力を持つ輩と、マトモに対話できる常人なんて存在しないので当たり前といったら当たり前前なのだが。

1時間ほどして、マルティナの意識が覚醒した。

「よつやく目を醒ましたか。」

「……………」

目覚めたばかりで意識が覚醒しきっていないマルティナは、目を擦りながら周囲を見渡している。

頭がクラクラする……どうして私は眠っていたんだっけ……？
確かルーミアに交渉していたら、足を闇で固定されて……。
逃げ場を失ったと思ったらルーミアに抱きつかれて……。

「心の闇を食べられた感想は？」

マルティナの横に座り込み顔を覗き込むルーミア。
それ相応の少女なら可愛らしい行動だが、ルーミアが行くと捕食しようとしているようにしか見えない。

「……気分が悪くなった。」

マルティナは青ざめた顔をしながら、回復魔法で体調を整えている。ヘホイミ彼女が、髪をくれる約束をしていなければマルティナは今すぐに退グ魔法で、その肉体を焼き尽くそうとしていたかもしれない。せめて心の準備位させてくれたって良かったのに……。と心の中で呟いたマルティナであった。

「フッフ、貴女の心の闇は純粹で、尚且つ量も相当あったわよ。

ご馳走様、おかげで久しぶりに空腹を完全に満たす事が出来たわ。」

「それで……。アンタの髪を貰う約束は……。」

「無論、もう少ししたらくれてあげるわよ。

そっね……。付いてきなさい。」

満足そうな表情を浮かべているルーミアは、ふよふよと飛んでいく。その後を、マルティナとアスタロスが追いかける。

「それで……。こんなところまで連れてきて何をするつもり？」

「今の姿の髪をあげても、貴女は満足しないでしょう？」

だから、特別に力を解放しようと思ったのよ。」

ルーミアは漆黒で構成された翼を開放し、虚空から取り出した剣を

地面に突き立てる。

辺りに闇と同化した妖気が漂い、ありとあらゆる光源が遮断される。果たして私はこれほどの妖気を体感した事があるだろうか。

ルーミアはコレだけの妖気をよく封じ込められていたな、と感心している。と次第に闇が薄らぎ人影が見えてきた。

そこには1人の女性が立っていた。

腰まで伸びた長い金髪は、彼女が今まで生きてきた年月を物語っているのだろうか。

真紅の瞳は血のように赤く染まっており、強者独特の眼光を秘めている。

あふれ出る妖気は、魔界の瘴気のごとくあふれ出ており生半可な妖怪や人間では近寄ることすら敵わない。

正に闇の支配者と呼ぶに相応しい、それだけの実力とカリスマを放っている。

「ホウ、流石は神々と戦い生き抜いてきただけの事はあるようだな。」

腕組みしながらアスタロスは、ルーミアの変貌した姿をまじまじと眺めている。

「なんともまあ・・・どうして少女の姿を取っていたの？」

私は基本的に外見を気にするたちでは無いが、それでも本当に美しいモノは美しいと思うし、醜いモノは醜いと思う。

今のルーミアの姿は、とても美しい。

それは輝夜かくやとは違う別のベクトルの美しさだ。

例えるならば、藍の美しさに近い。

言葉で表すならば、妖艶が一番しっくり来るだろう。

「妖気を封印していたのもあるけれど、この姿、良くも悪くも目立つのよね。」

確かにこんな姿をした妖怪が飛んでいたら、誰もが注目するだろう。東洋の国である日本において、金髪をした人間は余り居らず金髪をしている者は人外か異国の者が殆どだ。

極々まれに、金や銀といった髪をして生まれてくる人間も居るらしいが、大体は鬼の子と言われ捨てられるか迫害される運命にある。人間とは、飛びぬけた実力を持つものや異常な容姿をしている者達を、易々と受け入れられるほど慶大ではない。

それは私も遙か昔・・・領主の娘として暮らしていたときに何度も味わってきたことだ。

「確かに金髪は目立つよね。」

私も街を歩いていたら、陰陽師に襲われたりしたなあ。」

着物を着て歩いていたはずなのに、陰陽師に何度か「おのれ、妖怪風情が都に入り込みおつて!!」などと騒ぎ立てられた事がある。私は妖気を持っておらず、妖怪との戦闘で多少の妖気が体にこびり付いたとしても、獣の槍により自動的に魔力に変換している。

よって私に妖気なんてまったく持って存在しないのだが、ただの一般人や新米の陰陽師にその違いが分かるはずも無く、毎回妖怪と勘違いされる。

アスタロスは自由に姿を変えられるようで、黒髪にして誤魔化しているようだが、私にそんな事が出来るはずが無い。

正確には出来るが、生身の肉体を錬金術で再構築するなんて死んでもしたくない。

『デコグニション 認識阻害』を利用して姿を消す事は出来るのだが・・・それを
行くと厄介な奴らに目をつけられる。
人の身にて人知を超えた天才陰陽師『あへのせいめい 安部清明』や妖怪の見方をす
る魔法使い『ひじりびやくれん 聖白蓮』だ。

清明は私と同類の人種で、物事の考え方を非常に似通っている。
僅か26歳とは思えない程の実力を持っており、私はコイツとの相
性が絶望的に悪い。

所詮同族嫌悪なのだが、マルティナ自身はそのことには気がついて
いないようだ。

白蓮の方は、私が妖怪を掻っ攫って研究やら実験を行っている所に
現れて説得の間もなく戦闘になり、その後も犬猿の仲となっている。
私と同じく、人も妖怪も神も仏も全て同じと言う絶対平等主義者な
のだが、白蓮は聞く耳を持っておらず顔を合わせることに戦闘にな
る。

自分の欲で妖怪を利用していただけだから、私と同じく善人では無い
と思うのだが・・・頭が固い奴はコレだから困る。

都でルーミアを探すためだけに滞在するのは退屈なので、人攫い、
魔法研究、その他もろもろ人道を外れる行為を行っていた結果
都の実力者達に取り囲まれて後一步で、魔界の一部である法界に封
印されそうになってしまった。

知り合いに助けを求めたが、アスタロスは遠くからその様子を見て
ほくそ笑むばかり、紫は冬眠中で呼んでも出てこない。

そこで取り付けた契約が「都の中では許可なくしては魔法は決して
使わず、我々の要求に応じて都の治安維持に協力する」という無茶
苦茶な物だった。

私は涙目になりながら渋々その要求を呑む羽目となった。

私が過去の苦い思い出スミナリトを振り返っていると、何時の間にかルーミアが腰まであった髪を肩の辺りまで切りそろえていた。切り終えた髪を束ねると、私のほうに投げ渡してきた。

「これは・・・」

見れば見るほど、物凄い力を宿しているのが分かる。

世界中の負という負を練り固めたかのようななどす黒い力を感じ取れる。

まったく・・・この世界には化物しか存在しないのだろうか。

マルティナもまた例外では無いのだが、彼女の脳裏にそのような考えは毛頭なかった。

能力により理解できるのは自分以外のすべて、つまり彼女は自己分析の1点においては、常人よりも劣っている。

「これで貴様の作ろうとしている大魔術『アルス・マゲナ黄金練成』の完成に必要な材料がすべて揃ったな。」

「そうだね。」

念願の材料がすべて揃ったのに、マルティナはあまり喜ぶ仕草を見せない。

どうしたのかと気になったアスタロスがマルティナに声をかけた。

「・・・どうしたのだ？」

材料がすべて揃ったのに、あまり嬉しそうでは無いな。」

「アルスⅡマグナが完成したら私はどうなるのかと思ってね。」

「神の領域に踏み込んだ偉大なる魔法使いとして崇められるのでは無いかな？」

この魔人は満面の笑みで、よくそんな根も葉もない事を平然と言ってくれるな。

禁忌をいくつも犯している私が、崇められるはずが無いだろうに。

私のせいで一部の魔女の評価は地にまで落ち、私を殺すために追ホニいフアティウス神父文掛け回す奴まで存在する。

そんな私が他者に認められる？ありえない。

「そういう意味じゃなくて・・・私の生きる目的はアルスⅡマグナの完成。」

そしてその目的を失った後、私はどうなるのかな・・・。」

「そんな事を聞かれても我が輩に貴様がどうなるかなんて予測できないぞ。

未来には無限の可能性がある。

貴様が歩むのを止めなければ、生きる目的は自然と理解できるはずだ。」

「歩みを止めなければ・・・か。」

どうやら私の方が根も葉もない事を考えていたようだ。

深いことなんて考えずに、やりたいことをやればいい。

そんな単純なことにすら私は気が付かなかったのか。

「ねえねえ」

少女の姿に戻ったルーミアが、私の服を引っ張る。
一体どうしたのだろうか。

「どうしたの？」

「私ね、都に行きたいのよ」

「あ、そう。」

「だから連れて行ってくれないかしら？」

「子供じゃないんだから一人で行けるでしょ。」

下手をすれば万単位生きている妖怪だ。

見た目は子供だが、中身は大人をとっくに通り越している。

「……………」

固まったままルーミアは動かない。

「もしかして、一人で行けないの？」

ありえないとは思いつつも、ルーミアに尋ねてみる。

「……………そーなのだ。」

風の吹く音に紛れて、ギリギリ聞き取れる声量でルーミアは呟いた。
顔を赤らめ、モジモジと恥ずかしそうにしている。

「ククク、貴様のような大妖怪が道に迷う訳が無かるう。」

狙ったかのように、強力な太陽神のいる国を転々としていた話は地獄にすら知れ渡っていたぞ。」

「あれは・・・道に迷ってたら何時の間にかたどり着いていただけで・・・別に狙っていたわけでは無いの。」

更に顔を赤らめたルーミアは、その顔色を伺われないように下をうつむいている。

そんな事しても恥ずかしがっている事は丸分かりなのだが、可愛いので黙っておこう。

「そんなに自分を謙遜する事は無いだろう。」

結果的に敗れたとはいえ、過去に何度も世界を闇で包み込んでいるのだ。

その実力は我が輩も一目置いているぞ。」

「それは偶然で・・・うう・・・ちょっと天照とじゃれ合っただけで・・・」

耳まで真っ赤になったルーミア、最早その姿は冒頭のカリスマに溢れた物とは似ても似つかない。

むしろこっちの方が本来の姿なのかもしれない。

人外は外見年齢と精神年齢が一致する場合が多い。

それはルーミアも例外ではなかったようだ。

「別に連れて行ってもいいけど・・・人間は食べないですよ。」

都には人間よりも美味しい物が沢山あるんだから。」

ルーミアの事はどうか誤魔化すとして、人間は食べないで欲しい。これ以上荒事を起こしたら私は都から追い出されてしまう。

せめて彼女が天寿を全うするまでは居座るつもりなので、それだけは困る。

「分かったのだ」

楽しそうに両手を横にピンと伸ばしながら走り回るルーミア。

あれ・・・最初のカリスマが何処かに捨ててしまったのだろうか？

「アンタって・・・そういうキャラだったの？」

「ん？力を隠している時は若干思考力が鈍るのよね。」

若干ってレベルじゃないな、おい。

しかし、可愛いのは正義なので今回は特別に許そう。

・・・私も随分と毒されてるな。

「それじゃ〜早く行こうよ。」

「あ、ちよ、手を引つ張らないで、

というかそっちは都とは逆方向だつてばあああああ・・・」

「ククク、やはり地上は退屈させられないな。

さて、もう少しマルティナとルーミアの寸劇を眺めておくとするか。」

To Be Continued・・・

38話 空亡の髪？（後書き）

パーティーにルーミアが増えたぞ？

今回は特にネタをぶち込むことも無く、平和？に終わりました。

次回はついに彼女が登場。

彼女とは誰か？それは次回を乞うご期待。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

39話 都に根付く死の桜（前書き）

「ほとけには 桜の花を たてまつれ

我が後の世を 人とぶらはば」

「もし私が死んで、弔ってくれる人がいるならば

どうか桜の花を添えて欲しい」

39話 都に根付く死の桜

平安京は、794年（延暦13年）に桓武天皇により定められた日本の首都で、将棋盤の目のように綺麗に並んだ道は陰陽道の術を生させる陣が織り交ぜられている。

風水的にも発展させるために様々な要素を取り入れており、龍脈の上に意図的に都を作らせて擬似的なパワースポットを作り出している。

都市機能も充実しており、強力な陰陽師が守護しているため守りも磐石。

私の母国西ローマ帝国と比べると技術力では劣るが、それでも不便な思いをする事は余り無い。

また、守りに関しては陰陽師が出張っているのもしかしたら私の母国よりも上かもしれない。

魔法使いは基本的に外出する事は少なく、魔法研究に時間を費やしており化物退治はあまり行わないからだ。

都に妖怪自体が住み着いていないわけではないが、悪さを仕出かすと問答無用で退治されるし、強力な妖怪は中に入ることすら許されない、絶対にだ。

共存とは程遠いがこれでもまだ妖怪にとっては、まだ住みやすいほうだ。

私達は東側の門を潜り抜けると、適当な定食屋を探して中に入ることにした。

とある街角の定食屋

昼時を過ぎた店内に客の姿は無く、私達3人で貸切になっている。

「これは何？」

「唐揚げ」

様々な肉を衣に包みカリッと揚げた料理。

現在食べられている鳥の唐揚げのルーツである。

「これは？」

「唐納豆」

納豆の名を冠してはいるが、我々のよく知っている納豆とは似ても似つかない。

唐納豆とは、大豆を煮て大麦を煎った粉を発酵させて塩水で練り、天日干しして乾燥させた保存食だ。

その見た目は真っ黒であまり美味しそうには見えないが、醤油や味噌に近い味をしており酒のつまみに適している。

「唐の料理ばかりなのね。」

「都ではコレが流行なんだからしょうがないんじゃない？」

現在の都では海外の料理が大人気なのだ。

物を食わなくても生活できる私は気にも留めていなかったが、ルミアのために立ち入った定食屋でその事実を初めて知った。

ふと昔みんな食べた事があつたな、と過ぎ去った思い出が脳裏に浮かんだ。

料理の知識は未来の本から会得しているが、それを実行に移すための材料を集めるのが大変で結局は現在の料理に落ち着いてしまう。

その料理のラインナップの1つに唐の料理も含まれていた。私が過去を懐かしんでいると、アスタロスが料理を見ながら感心しているのが目に止まった。

「地上には様々な料理が存在するのだな。

我が輩の住んでいた地獄では、たいした物しか無かったぞ。」

「地獄の料理……どういった物があるのかしら？」

ルーミアは目をキラキラと輝かせながら興味津々に聞いている。どうせアスタロスの生まれた世界の料理なんてろくな物じゃないだろうに……。

「ウム、地獄の料理は基本的に、気を抜くと命を持っていかれる。

他にも理性を持って行かれそうになる料理もあったな。」

私の予想の斜め上に行く発言だ。

命を持っていかれるって何？食虫植物ならぬ食人食物なのか？それは最早料理ではなくて、兵器か何かでは無いのだろうか？

「それ……本当に料理なの？」

この前も何処から取り出してきた未知の食材を食べさせられたりした。

名を悪魔の菓屋パンデモニウム、芋虫に足を継ぎ足し更に崩れた人面を取り付けたような見た目をしている。

味は……案外マトモというか好きな味だったのは、アスタロスには秘密だ。

私もそこまで化物になったつもりは無い……うん、まだ大丈夫、取り返しは付くはず、うん……。

「食後のデザートが自立行動をし始めて、その影響で一国が壊滅しかけたこともあったな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

地獄には色物しか存在しないのだろうか。
一度行ってみたいと思ってしまった自分が妬ましい。

「ねえねえ」

ルーミアが私の服の袖を引っ張る。
背後から膨大な魔力を感じ取る。

何かと思い振り返るとそこには私の天敵が居た。

「貴女という人は、性懲りも無くまたもや妖怪を攫って……。
次は何を企んでいるのですか？」

金髪に紫のグラデーションが入ったロングウェーブを靡かせる女性。
染めているのかと疑いたくなるが、本人曰く地毛らしい。
外見年齢は私と同じ位だが、実際は禁忌である若返りの術を使用している。

人間と妖怪から信仰を集めるこの尼、実のところは魔法使いだ。
と言っても、私とは違い妖術や法術も使いこなすハイブリットなタイプだ。

「そんな人聞きの悪い……私はただこの子にご飯を食べさせてあげただけだよ。」

「そーなのだー」

「そんな見え透いた嘘をつくのですか。」

「良いでしょう、貴女にはキツイ体罰が必要なようですね。」

いざ、南無三　　！！」

エア巻物を空中に展開し、戦闘態勢をとる女性。

お願いだからいい加減人の話を聞いてほしいものだ。

「だあー！！人の話を聞きなさいってばア！！」

とっさに取り出した獣の槍の柄で、女性の頭に渾身の一振りをぶちかます。

今回は着物を着ているため普段着の強化魔法の恩恵を受けられていないが、それでも達人の動きをそっくりそのまま見て理解し、引き出しているこの一撃は正に達人の技と呼べる。

「だアかアらア・・・いい加減に私の話を聞きなさいって言うてるでしょうが。」

そりゃアンタのとこの寺の毘沙門天黄丸星の代理に手を出したのは悪かったけどさ。

もう過ぎたことだし、最近私だって妖怪を自発的には襲ってないよ。」

自発的には襲っていないというのは、都のお偉い貴族さんに命令された場合は少々妖怪を狩りに行っているからだ。

研究にも実験にもならない事するのは正直面倒くさい。

一発の魔法で沈んでしまうヤツが相手では、攻撃魔法の実験対象の意味は持たない。

だが、契約は契約なので守らないと何処からも無くあの陰陽師が現れる。

正に挟み撃ちの形とはこのことだ。

「くウ・・・それならそれで頭を殴らなくても良いでしょうに・・・」

頭を抑えながら蹲る女性。

彼女の名前は『聖白蓮』

伝説の僧侶である命蓮の実の姉であり、彼の後を引き継ぎ寺を守っているそうだ。

本当に仏教徒なのか気になる服装をしており、周囲から奇怪な目で見られていないのが不思議すぎる。

マルティナ自身も普段着は十分奇怪なのは、全く自覚していないようだ。

現在は怪しまれないように和服を着用しているが、金髪なので結局は目立っていることに変わりはない。

そこに気がつかないのは、矢張りどこか抜けているからなのだろう。

「アンタが説得しても攻撃を止めようとしなかったからでしょうが。同業者なんだから、もうちょっと仲良くしようとは思わないの？」

「人間や妖怪達の命を虫けら同然に踏みにじっておきながら、よくもそのような大口を叩けますね。」

「妖怪を利用しているのは、そっちも同じでしょうが。」

「・・・確かにそうですが、貴女と私は根本的に違います。」

「そーなのかー？」

「もしま・・・貴女はこのような幼い妖怪を洗脳したのですか!?!? 先ほどからそーなのかとしか言わないではありませんか!?!?」

「いやいや、白蓮は私の事をどんなヤツだと思ってるのさ。」

「極悪非道、残虐、冷酷、冷血、天然」

「最後のおかしいよね、天然って何? アンタだって十分天然でしょうが。」

「貴女に言われたくはありませんね。」

「・・・若返りの術で若い姿を維持している元ババアくせに。」ポソツ

「ッ!?!?」

「どうしてその事を・・・。」

「これでも私は300年以上魔法使いをやってるんだよ? その程度の魔法、一目見ただけで理解できるわ。」

「フッフ、私よりも年上なのに私の事をババア呼ばわりとは・・・ 良い度胸をしていますね。」

「フン、何? そんなに私に殺されたいの?」

2人の間に火花が散っているかのように見えたとか見えなかったとか。

少なくとも魔力の嵐が発生していたので、店内に一般人がいたら大騒ぎになっているだろう。

「いい加減にしろ、貴様等。」

我が輩からしてみれば、そのような些細な年齢の差など気にもならんぞ。」

見るに見かねてアスタロスが仲裁に入った。

万の時を生きてきた彼からすれば、100年も1000年も同じような物なのだ。

そのような些細なことで喧嘩をしている姿など愚かにしか見えない。

「・・・それもそうね。」

こんなことで時間を費やすのも勿体無いし。」

すでに時間は3時を過ぎており、ルーミアは食事を終え暇そうにしている。

「私とした事が、少々熱くなりすぎたようですね・・・。」

ですが、その妖怪は私が保護させていただきますよ。」

ルーミアに手を伸ばそうとするが、ルーミアはヒラリと身をかわしマルティナの方に近寄る。

「貴女の名は妖怪の間では有名になっているわよ。」

妖怪達を助けている変わり者だとね。

私の名前はルーミア・・・空亡ソラナキと言った方が分かりやすいかしら？」

先程まで黙々と食事をしていた少女とはとても思えないような、威カリスマ

敵を秘めた声が店内に響く。

長き時を生きた者にのみ、この威敵^{カリスマ}を出す事が出来る。

「貴女が・・・空亡・・・？」

ですが殆ど妖気を感じ取れませんよ。」

白蓮は戸惑いながらルーミアを見つめている。

今のルーミアは力を抑えており、その妖気の量はそこらへんにいる雑魚妖怪となんら変わりの無い物だからだ。

「長い年月を生きていれば、妖気の隠し方ぐらい嫌でも覚えられるわよ。」

「では先程の幼き少女のような立ち振る舞いは演技だったのですか？」

突如ルーミアの顔が暗くなったのが分かる。

こんな事を言われたくないのなら、威敵なんて出さなければいいのに・・・と思つた私であつた。

「それは・・・・・・・・・・。」

その後も、しつこく尋ねられたルーミアは最終的に涙目になつていった。

その姿が凄く可愛くて・・・いけないいけない、私に変な属性が追加されるどころだつたわ。

白蓮をどうにか納得させて定食屋を後にした私達は、都の外れにある屋敷に来ていた。

入念に手入れされた庭には、一本の大きな桜の木が植わっている。

ココが私の仮住まいであり、友人の家でもある。

この屋敷に住んでいる者は、当主の娘と庭師の剣士の2人だけだ。

「ただいま。」

「今日は遅めに帰ってきたでござるな。」

銀髪の少年は、素振りをしていた手を止め此方を振り向いた。

彼の名は『魂魄こんぱく 妖忌ようき』

庭師と門番を兼用している剣士だ。

彼の傍らには、白い球体……まるで魂魄のような物体が宙に浮かんでいる。

浮いている魂魄のようなモノは、文字通り魂魄である。

彼は半人半霊という独特な種族で、寿命は1000年を優に超える。

剣の腕は未だに半人前ではあるが、後数十年もすれば一端の剣士になれるだろう。

「まあね。」

「……其方の少女は、何方どなたでござるか？」

「空亡、本名はルーミアって言うからこれからはそう呼んであげてね。」

「これからって……屋敷に住まわせるつもりでござるか？」

「さあ？」

住むか住まないかはルーミアが決まることだし私に聞かれても分からないよ。」

「そんな適当な……。」

妖忌は呆れ果てて、投げかける言葉すら見つからない様子だ。それを気にも留めずに、マルティナは話を続ける。

「別に住まわせるつもりは無いけど、一晩位は泊まらせるつもりだよ。」

折角連れ出せたんだから、少し位は解析させてもらわないとね。」

「今回はやけに親切だと思ったら、貴様にはそういう下心があったのか。」

「別にいいじゃない。」

能力で肉体の構成とかを見るだけなんだから。

ねえ、ルーミア……。」

あれ、ルーミアは何処に行ったの？」

「拙者は何も見ておらぬでござるが……。」

妖忌も見えていないようだ。

まあ私達と話していたのだから仕方が無い話なのだが……本当に何処に行ったのだろうか？

「我が輩の記憶が確かなら、例の桜の木へと向かって行っていたな。」

「んなッ!？」

どうして止めなかったでござるか!！」

「我が輩はマルティナに、ルーミアを例の桜の木に近づけるなどは

命令されていなかった。

それにアイツは闇を司る妖怪だ。

あの桜に命を持っていかれる事は無いだろう。」

どう考えてもアスタロスは「止めない方が面白くなりそうだ」と思
って止めなかったのだろう。

全く・・・捻くれているというか、扱いづらいというか、破天荒と
いうか・・・。

一体誰に似たらこんな滅茶苦茶な性格になれるのか不思議でたまら
ないわ。

「はあ・・・ルーミアを探してくる。

妖忌は夕飯の用意でも始めておいて頂戴。

そろそろ冬眠してたアイツが目を醒ましてくると思うから。」

「了解したでござる。」

屋敷の中に妖忌が入っていったのを確認すると、私は例の桜を拝み
に向かった。

例の桜・・・その名を西行妖さいぎょうあやかしと言う。

この妖怪桜が生まれたきつかけは、この屋敷の現在の主である『西さい
行寺幽々子いぎやうしゆうしゆうこ』の父、『西行法師』が桜の下で天寿を全うした事から
始まる。

彼がこの桜の元で死んだ後、彼を慕っていた者達が相次いで桜の下
で死のうとした。

そして桜は死のうとした者達の生気を吸い取り、妖怪となっ
てしま

ただそれだけなら私にも手に負える代物だったのだが・・・皮肉な
ことにも町を発展させる為に敷かれた龍脈と、咲くたびに人を死に

誘う西行妖が結びついてしまったのだ。

おかげで単純な封印は不可能。
禁忌の魔法を利用すれば封印できないことも無いが、それ相応の犠牲を払う羽目になるので却下。

封印しなければ都にまで被害が出るのだが、紫や清明ですら一筋縄ではいなくて困っているのだ。

西行妖にたどり着くと、そこには幽々子とルーミアの姿があった。
2人とも花の咲いていない桜を眺めているようだ。

「はあ・・・勝手に出歩かないでよ、探したじゃない。」

「この桜・・・危ないわね。」

「そんなこと分かりきってるって。
だから早く屋敷の中に戻ってよ。」

「持って次の満開の時までのようね。」

「・・・仮の結界が持つまでの時間のこと？」

今現在、この桜は私と紫、ついでにアスタロスによる多重結界によって封印されている。
と言っても、龍脈とのパイプラインを完全に封印する事は不可能なので、持つてもこの春までだ。
それは私も重々承知だ。

「それもあるけど」

ルーミアが喋ろうとした時、黙りこくっていた幽々子が口を挟んだ。

「この結界が破れたら、この桜の溜め込んできた死を誘う能力が都に広がるらしいのよ……。」

それは幽々子には黙っていた事実だ。

本人に教えたなら更に思い詰めてしまつかもしれないので、隠していた事実だったのだが……こんな形でバレルとは想定外だった。

いや、幽々子は賢い、もしかするとルーミアが教えたのはきっかけに過ぎず、実は最初から感じていたのかもしれない。

「確かにこのまま結界が壊れたら平安京には未曾有の事態が発生する。」

「だけど私と紫がどうにかするから安心しといてよ。」

「……分かったわ。」

私は彼女を助けてあげなくてはならない。

それはただの自己満足かもしれないけど……それでも私は彼女を助きたい。

彼女と私は、似たような境遇を持っているのだから。

T o B e C o n t i n u e d . . .

39話 都に根付く死の桜（後書き）

西行妖は実は龍脈と繋がっていたんだよ!!

くな、なんだってー

普通すぎたらあれなので、ちよいと捻ってみました。
無茶苦茶な設定に定評のある作者です。

なんだか最近暗い話が多かったから、明るめに作ろうと思った。
結局最後の方が暗くなってしもうたんですけどね。

次回から伏線っぽいのか、自己解釈とか沢山入る予感。

50話までに終わればいいんですが・・・終わるかなこれ。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

40話 完全なる墨染の桜（前書き）

「身のうさを 思ひしらでや やみなまし

そむくならひの なき世なりせば」

『もし、出家する慣習がこの世に存在していなかったとしたら、

自分の業を知る事が無いまま死んでしまってい

ただろっ」

40話 完全なる墨染の桜

西行寺幽々子さいぎょうじゆうけいこは能力持ちだ。

最初は微弱な能力だった。

『死霊を操る程度の能力』を生まれながらにしてその身に宿していた。

それでも偉大さいぎょうほふしな父のお陰もあり迫害されることも無く暮らしていた。

しかし、その脆い天秤はあつという間に崩壊してしまう。

彼女の父が桜の木の元で天寿を全うした日から、彼女は変わってしまった。

明るかった性格は暗くなり、マトモに他人とも話さなくなった。

父の死だけなら、彼女はすぐに以前の明るい姿を取り戻しただろう。

だが、悲劇は連鎖するモノだ。

負の連鎖は脆い人の精神をいとも容易たやすくぶち壊してしまう。

妖怪となった桜に影響を受け、彼女の能力が変質する。

『死霊を操る程度の能力』は『死を操る程度の能力』に、それは皮肉にも彼女を西行妖と同じく死を誘うだけの存在にしまった。

こうして彼女は人の身にありて、人ならざるものになってしまった。

私と彼女が初めて出会ったのは、西行妖が初めて満開になった日だった。

都で半分お尋ね者になりかけていた私は、住んでいた長屋を追い出され都の外れを歩いていた。

「魔法の研究も打ち止めだし住処も無いし、これからどうしようかな。」

この際、都の外に家を建ててもいいかも、と考えていると1人の少女の歌声が耳に入った。

その歌声は美しく、悲しげで・・・そして何故か死を連想させる。

「呪言の一種・・・？」

私の魔法の中にも、言葉で人を殺められる様なモノが幾つか存在する。

だが、この歌は私の使えるどの呪言よりも強力なのは一目瞭然だった。

「確かこの屋敷は・・・。」

都には様々な噂話が広がっている。

実は安部清明は人間じゃないとか、都には人を浚う金髪の角無し鬼がいるとか・・・何時の間にか私も噂になっているのは気にしないでね。

それで、その噂の1つに興味深いモノがあつたのを私は思い出した。

西行法師の最後を見届けた桜には、人間を死に誘う呪いがかかっている。

都の外れにある屋敷の娘は、言葉を放つだけで人を殺す。

単なる噂話だと思っではいたが、興味が湧いてきた。

私は歌声が聞こえてくる屋敷に忍び込んだ。

なにやら陰陽道により強力な結界が張られたが、もしかしたら安部アイツも絡んでいるのだろうか？

そんな事を考えつつ、私は丁重に手入れされた庭に足を踏み入れた。

「さあて、噂話は本当かな・・・ッ!？」

絶句した。

これは本当にこの世のモノなのだろうか。

満開の桜は美しく咲き誇っている。

辺りを漂う桜の香りは私を死へと誘つ。しなな

マルチタスク分割思考の1つが影響を受ける。

魔法障壁で桜の影響を断ち切りながら私は考える。

本気で洒落にならないぞ、コレは・・・。

パツと見ただけで桜の力が異常なのは見て分かる。

人間の生気を吸っただけではこうはならない。

きつと何か他の栄養源を持っているのだろう・・・例えば龍脈とかね。

結界で外にまではあまり漏れていないようだが、コレは都を滅ぼせるだけの力がある。

だから安部清明が態々このような結界を用意したのか。

「・・・その貴女、その桜を眺めてて大丈夫なの？」

死へと誘う桜の横に立っでいて平気な人間は限られてくる。

霊力を殆ど持たないこの少女が大丈夫とはとても思えないのだが・・・

・まあ、大体予想はつく。

「・・・私は・・・呪われているから。」

歌うのを止めた少女は、消えかかりそうな声で喋り始めた。呪われている・・・か。

「へえ、呪われているんだ。」

確かにココまで強力だと、呪いと思ってもなんらおかしくは無い。

こんな強力な能力を持った人間はあまり居ないからだ。

私知知っている中では、ボニファティウス神父か阿部清明ぐらいだ。と言っても2人とも人間を止めたり止めかけたりしているので、厳密には人間では無いのかもしれないが。

「貴女も早く出て行かないと・・・死んじゃうわよ・・・。」

泣きそうな顔をしながら少女は答える。

ああ、もう、そんな悲しそうな顔しなくてもいいじゃない。

「私はそう簡単には死なないよ？」

こんな姿でも300年以上生きてきた化物なんだよ。」

「バケ・・・モノ・・・？」

虚を突かれた少女は目を見開き驚いている様子だった。

「貴女は・・・私の傍にいても・・・死なないの？」

「当たり前じゃない。」

「・・・それで貴女の名前は？」

「え？」

「私は貴女に興味が湧いたの。
だから、名前を教えて頂戴よ。」

「でも……。」

「私の名前はマルティナ・コルテス。
マルティナと呼んでくれたらいいよ。」

「……幽々子……私の名前は……西行寺幽々子。」

途切れ途切れだが、しつかりと力強く幽々子は自身の名前を答える。
その顔には笑みが浮かんでいた。

その日から幽々子は少しだけ……ほんの少しだけだが笑顔を取り
戻した。

私達の出会いは偶然だった。

けれどもそれは必然だったかもしれない。
強すぎる力を持ったがゆえに俗世から切り離され、父に守られ生き
抜いてきた。

少なくとも共通点を持つ私達は、すぐに仲良くなった。

そして紫もまた幽々子と仲良くなっていた。

最初は幽々子と友達になれそうなヤツを探していたのだが、人間の

知り合いに碌^{ろく}なヤツがないので、仕方が無く妖怪らしくない妖怪である紫を紹介した。

紫は親身に幽々子の悩みの相談に乗っていた。

変質した能力をどう使いこなすかは気の保ちようだとか、そのような内容だったと記憶している。

紫は暇を見つけたら必ず幽々子に会いに来ていた。

幻想月面戦争の下準備も大詰めに差し掛かっておりあまり暇は無いはずなのだが……。

どうにも紫は私以上に幽々子に入れ込んでいるようだ。

私が幽々子に入れ込んでいる理由は境遇が似ているのもあるのだが、紫の場合はどうなのだろうか？

単なる善意で会いにきているのか、それとも何か裏があるのか。

八雲紫という妖怪は基本的に他者のために動く。

自分の欲のために動く事はまず無いが、他者のために動いている時は様々な人物を利用する。

もしかしたら今回もその一環なのだろうか？

「……紫、幽々子の能力をどうにかする事は出来ないの？」

「私としても幽々子を助けてあげたいわ。

「ただ幽々子の能力は封印すら死なせてしまうのよ。」

『死を操る能力』は概念すらも死なせてしまう強力な能力だ。能力が暴走している今では、生半可な封印ではすぐに壊されてしまう。

「封印するのは不可能……か。」

力をコントロールできるのならまだ可能性はあるんだけどねえ。

「分かっていいるとは思っけど、あの忌々しい桜西行妖の影響で能力が暴走しているのよ。」

「・・・やっぱりあの桜を封印するしかないのかな。」

「あの桜を封印するには人身御供ひたみいけが必要になるわよ。それも、相当の力を持った者の魂がね。」

紫は机の上に置かれた一冊の魔道書を、目を細めながら見つめていた。

私の持つ魔道書『Necronomicon』ネクロノミコンには、様々な魔道の奥義が記されている。

その奥義の1つに『究極封印術』と呼ばれるモノがある。

対象を概念的に世界から切り離し、内部からは決して解除されない封印だ。

発動条件は厳しく、対象を封印するためには相性の良い魂を見繕ってくる必要がある。

対象の力量が大きくなるほどに必要な等価は大きくなる。

「私の知っている中で封印に利用できそうな適合者は居ないけど・・・。」

いや、正確には1人だけ居る・・・だけど彼女を使うわけにはいかない。」

私の頭には1人の少女の事が思い浮かんでいた。

しかし、それでは本末転倒ではないか。

そんな事をしてまで西行妖を封じても、何の意味も無い。

「だからこそ打開策を考えているんじゃない。」

私達が頭を捻らしている時に、1人の少女がその様子を覗き見していたのに私達は気が付けなかった。

もし気がついていたらのなら、結果は変わっていたかもしれない。だが、運命の歯車は刻々と廻り続ける。

西行妖、満開の日

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は所持している魔道書を多重展開しながら西行妖に封印を仕掛ける。

魔力を惜しみなく注ぎ込み、出来るだけ能力の飛散を押さえ替えたが、もう結界を維持するのは困難だろう。

だが、まだ桜の封印を失敗したわけでは無い。

真の『失敗』とは、開拓の心を忘れ困難に挑戦する事に無縁のところにいる者たちの事をいうのだ。

コレとはある書物に記された格言だ。

私は困難に挑戦する事を諦めていない。

そしてそれは紫も同じだ。

紫もまた妖気を惜しみなく使い、境界を操作している。それでも限界は刻々と近づいてくる。

「クツ……。」

飛びかける意識をどうにか立て直す。

一週間もこんな馬鹿げた境界を維持するのは相当厳しい。

私は睡眠をとらなくても活動できるが、魔力は寝なければ補給されない。

魔力の残量は10%程度、究極封印術を行うための最終ラインに近い。

「マルティナ……もう無駄なのは分かっているのだろう。」

諦めたらどうだ？」

私の傍らで佇む^{かたわ}アスタロスは、先ほどからずっとこんな調子だ。

本来なら彼の力も借りたいのだが、使い魔となっているアスタロスは実力の5%程度しか能力を使えない。

地上では瘴気が無いため魔力の補給が出来ないので、実力を出し切れていないのだ。

更に残った彼の魔力も殆どが私へと流れ込んでおり、彼自身は立っているのでやっとなのだ。

「私の辞書に……『諦め』の2文字は存在しないよ……。」

私だって頭の中では、こんな事をしてても無駄なこと位分かっている。それでも……絶望に染まったこの少女を救ってやりたい。

その一身上私は体を動かしていた。

「そうか……貴様がそこまで言うのなら我輩はこれ以上は何も言

わん。」

アスタロスの姿が歪んだかと思うと、陽炎のように姿を晦ました。きつと彼も体力の限界が近かったのだらう。

いくら魔神とはいえ、彼にも疲れを感じる事はある。

「はぁ・・・私に出来る事は無いのかしらねえ。」

マルティナの背後で浮いている女性は漆黒の翼を携え、屈強な男ですら片手で持ち上げる事は困難であろう魂喰らいの大剣『ストームプリンガー』を片手で支えている。

空を亡き者にしてきた永遠にも等しい時を生きる大妖怪、ルーミアは真の力を解放させていた。

ルーミアはあの日から屋敷に住み着いている。

本人曰く、居座る理由は美味しい料理を食べられるからだそうだ。食事を出す代わりに、ルーミアには幽々子の心の闇を食べてもらっていた。

「ルーミアは・・・万が一の時のために準備しておいて。」

相手は龍脈の力を源に成長を続ける妖怪桜だ。

もしかしたら私達の度肝を抜く攻撃をしてくるかもしれない。

ルーミアはその時のための保険だ。

「りょーかい。」

「ふう・・・紫は大丈夫・・・？」

「何とか大丈夫よ。」

後もう少しだけ粘ればこの桜の花は散る・・・そうすれば後1年の期間を稼げるわ。」

「そうね・・・ッ!？」

屋敷の空気が重くなったのが肌を通して感じられる。

西行妖が最後の悪あがきに出たのだ。

「ま、不味わよッ!！」

紫が顔を真っ青にしながら冷や汗を流している。

このままでは結界が維持出来ずに、西行妖の力が都に飛散してしまう。

どうしよう・・・頭を捻ね、考えるんだ・・・。
今使わずにして何時今まで習得してきた魔法の業しごを使うんだ。
意識を集中させつつ西行妖に有効な封印魔法を脳内の目録インデックスから探し出す。

が、しかし見つかった封印魔法は1つ、究極封印術のみだった。

完全に手詰まりだ。

これ以上はどうしようもない。

「クソッ!！」

私は地面に突っ伏し、拳を握り締めた。

肉に爪が食い込み、拳からは血は流れ出る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

紫もまた考え込んでいた。

無間の底や北斗七星が北極星を食うまでの時間を、一瞬で求められる演算能力を持つ紫は瞬く間に必要な答えを導き出す。

西行妖を封じるには、私の能力では強力すぎると。

本気を出してしまえば龍脈までも封印してしまうと。

確かに紫の能力は神にも匹敵する能力だ。

だが、強大すぎる力は時に小回りが聞かないものである。

紫もまた苦虫をかみ締めるような表情をしながら地面に座り込んだ。私はあの頃から何も変わっていない・・・圧倒的な力を持っていないから、目の前のたった一人の友人すら救えない。

その時だった。

庭に敷き詰められた砂利を踏みしめる音が聞こえた。

マルティナと紫は振り返る。

そこには・・・瞳に大粒の涙を浮かべた幽々子の姿があった。

「ゆ、幽々子・・・・・・・・。」

幽々子の手には、一振りの刀が握られている。

2人の脳裏には嫌な想像が過ぎる。

「幽々子・・・まさか・・・・・・・・。」

マルティナはその後に続く言葉が出てこなかった。

幽々子の瞳に宿る決して揺るがない意思を見てしまったから。

「みんな・・・今までありがとう、こんな私の下らない人生に付き合ってくれて。」

刀の鞘を捨て去り、首元に近づける。

「止めなさい、幽々子ッ!!」

「止めないわ、紫。

私が人身御供となれば、都のみんなは助かる。

それが一番、理に適った答えなのよ。」

「もしかして私達の話・・・。」

「悪いけど盗み聞きさせて貰ったわ。

貴方達がどれほど私の事を想っていてくれたかもね。」

「幽々子ッ!!」

貴女はまだ引き返せるのよッ!!

人を止めていない貴女ならッ!!

再び普通の少女のような生活を送れるッ!!」

紫もまた涙を流しながら大声で叫んでいた。

これほどまでに感情的に、自分の心を露わあらにした紫の姿は初めてだ。

「紫、もういいのよ。」

幽々子は微笑んでいた。

はかな儂く、美しく、桜のように今にも散り逝きそうな、なんともいえない表情をしていた。

「妖忌・・・マルティナ・・・紫・・・」

貴方達のおかげで、私は束の間^{つか}だけど、今までに無い楽しい生活を過ごせた。

それだけで、私は満足なのよ。」

マルティナも紫も動けなかった。

もう、幽々子は覚悟を決めている。

幽々子が自分でその道を選んだのなら、私達にその想いを邪魔する資格は無い。

「みんな・・・さようなら。」

こうして西行寺幽々子は、16年という短い人生に幕を閉じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は気を保てなかった。

友人の死を目の前で目の当たりにしたからだ。
300年生きてきてこの様とは情けないな。

「気をしっかり持ちなさい。」

貴女には貴女の成すべき事があるでしょう。」

眼を擦りながら紫が此方にやってきた。

アంతタも人の事を言えないくせによく言うよ、まったく。

「・・・分かってるよ。」

幽々子の喉元を貫かれた刀を抜き捨て、回復魔法を施す。

体温以外は生前となんら変わりの無い姿となった幽々子を、西行妖の前まで運び出す。

「参照するのは我が所持するネクロノミコンの断片。

究極封印術の一行を呼び出せ。」

眩い光とともに細かなルーンが数多と刻まれた魔法陣がいくつも出現する。

魔法陣に取り囲まれた西行妖は、瞬く間に妖気を失い満開となった桜が一気に散り去った。

「これで・・・全ては終わったのね。」

「紫、まだ終わってないよ。」

「・・・どういふことかしら?」

「まあ・・・見てたら分かるよ。」

西行妖の根元に1つの魂魄が浮かんでいる。

その魂魄は、瞬く間に人の姿をなして

「　　幽々子ッ!？」

究極封印術が究極と呼ばれるのには理由がある。

この術は決して内部からは破られない。
では外部の守りはどうなるのだろうか？
その答えが今起きている現象だ。

「これは幽々子の魂魄。」

生前の記憶は無いけれど、容姿も性格も能力もどれも生きていた頃の幽々子そのものはずだよ。」

生贄に使った魂をそのまま封印を守護する番人にしてしまう恐ろしい禁忌。

それが究極封印術の正体だ。

「……………此処は何処かしら？」

辺りをキョロキョロと見回す幽々子。

声も仕草も服装も、生きていた頃と寸分の狂いも無い。

唯一の違いといえば、彼女の周りを浮かぶ無数の靈魂達だろうか。

「貴女達は誰なのかしら？」

どうやらすっかり記憶は無くなっているようだ。

だからといって、困る事は無いだろう。

友好関係なら、再び一から積み重ねていけばいいのだから。

「私の名前はマルティナ・コルテス。」

「私の名前は八雲紫。」

「私の名前は西行寺幽々子。」

ねえ、私とお友達になってくれないかしら？」

「ええ、喜んで。」

T O B E C o n t i n u e d . . .

オマケ

妖忌「幽々子様ア！！」

マルティナ「あ、居たんだ」

妖忌「拙者は幽々子様と別れの挨拶をしてから、ずっと屋敷の中で事終わるのを」

幽々子「そんなことより、お腹が減ったわ。」

紫「それじゃあ私が腕によりをかけて美味しい手料理をご馳走してあげようかしらね。」

幽々子「本当？」

紫「フッフ、本当よ。」

「さあ、外は冷えるし早く屋敷の中に戻りましょう。」

アスタロス「折角だから我輩の手料理も食わせてやるう。」

マルティナ「いや、それは止めて。」

「幽々子がおかしくなったらどうするの。」

アスタロス「ム、ならばパンデモニウムでも良いのだが。」

マルティナ「それは・・・やっぱ駄目でしょ。」

ルーミア「はあ・・・気合を入れてスタンバイしてた私はなんなのよ。」

紫「何だかんだで丸く収まったのだから良いじゃない?」

ルーミア「・・・それもそうね。」

こうして一同は屋敷に帰っていったのであった。

妖忌「・・・・・・・・・・・・・・・・拙者の扱い酷くないでござるか?」

40話 完全なる墨染の桜（後書き）

妖忌さんの出番が少なすぎた。

なんというか割り込めるスキマが無かったのだ。

いつか出番が来るでしょう・・・本当にいつかですが。

後、PVが5万を突破しました。

このまま10万PVを目指して頑張りたいです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

41話 冥界の屋敷(前書き)

妖忌さんのキャラが変な方向にズンズン進んでおります。

41話 冥界の屋敷

「西行妖を移転させる？」

首を傾げながら、銀髪の少年　妖忌は“拙者には、まるで意味が分からないでござる”と思っていた。
屋敷の一部屋には、マルティナ、紫、アスタロス、妖忌、ルーミアの5名が集まっている。

「貴方アナタつて本当に剣術にしか能がないのね。」

ハアとため息をつきながら、今にも吸い込まれそうな闇の翼を携えた金髪の女性　ルーミアは呟く。

「ば、馬鹿にしないで欲しいでござるッ!」

妖忌は右手側に置いてあった二振りの刀の一方、幽霊十匹分の殺傷力を持つ長刀『楼観剣ろうかんけん』を手に取り切りかかった。
ルーミアは顔色一つ変えずに、ほとんどあらゆるものを切り裂く魂喰らいの剣『Stormbringerストームプリンガー』で受け止めた。

実のところ、この二人はあまり仲が宜しくない。
生真面目な性格をした妖忌と、のらりくらりとした性格のルーミア。お互いがお互いの行動に反発しあい、すぐに喧嘩になるのだ。
ルーミアは長い時を生きてきただけあって気が長く、自分から手を出すことは皆無なのだ……。

問題は妖忌だ。彼は何かあるとすぐに切りかかるうとする。
実際、今ここに集まっているメンバーの中で、妖忌に切りかかられ

たことの無い者は居ない。

「落ち着きなさい、妖忌。」

そんなんだから何時まで経っても、半人前と呼ばれるんだよ。

それにあんまり暴れてたら、寝ている幽々子が目を覚ましちゃうでしょ。」

先端が尖がった奇妙な帽子を被っている金髪の女性 マルティ

ナは魔道書を読みながら呆れていた。

やはり妖忌は誘わない方がよかつたかな。

だけど誘わないと後で五月蠅ひんじゅ いし・・・嗚呼、面倒くさい。

心の中で結構ひどい事を考えていたマルティナであった。

「クツ・・・分かつたでござる。」

渋々引き下がった妖忌は、楼観剣を鞘に収め再び右手側に置いた。

「・・・話を再開しても良いかしら？」

紫を基調とした異国情緒あふれる服を着ている金髪の女性・・・八雲紫は開いていた扇子をパチンと閉じると、懐にしまいこんだ。

「今現在、西行妖の状態は安定しているわ。」

開かれた障子の向こうには、あれほど咲き誇っていた花が全て散り、枝を哀れに晒した西行妖の姿がある。

封印が施されたことにより、微塵も妖気を感じられない妖怪桜。

傍から見れば、何の害もないように見えるのだが・・・。

「貴様の封印術は見事だった。

だが、この土地に封印を施した西行妖を放置するのは得策ではないぞ。」

一人だけ机の前には座らず天井に足をつけている、この世の常識を無視した男性――アスタロスは、腕組みをしながら呟く。

彼の言うとおり、この土地は封印を維持させるには立地条件が悪すぎる。

都を貫くように流れる竜脈、網の目のように張り巡らされた陰陽道の術。

強力なそれらの力は、究極封印術によって封印された西行妖に悪影響を与えてしまう。

そこで計画しているのが、西行妖の移転計画だ。

「移転先は幻想郷、冥界への入り口にこの屋敷ごと転送する。

・・・それで良いんだよね？」

マルティナは念のために集まっている者たちに確認を取る。

その問いかけに皆、無言で頷いた。

「それにしても・・・冥界の入り口にこんな物騒な物を転送して大丈夫なのかしら？」

ルーミアは首を傾げながら、障子の向こう側の桜を眺めている。

確かにルーミアの言っていることは正しい。

普通は冥界の入り口にこんなものを配置して良い筈が無いからだ。

「心配しなくても大丈夫よ。」

とある死神の知り合いから許可を貰っているのよ。」

そのとある死神とは私の父さんの事だろう。

一体、冥界で何をしているのだろうか？

父さんが死んでから250年程度しか経っていない筈なのに、話を聞く限りではかなり高い地位にまで上り詰めているようだ。

まあ、父さんの能力『話し合うことが出来る程度の能力』なら、閻魔を丸め込んで色々出来るだろう。

私は父さんを尊敬している。

多少親馬鹿な所があったり、どこか抜けている所があったりするが、それを含めて父さんを尊敬している。

父さんは、頭が良い。きつと私よりも頭が良いだろう。

幼い頃から父さんの手腕の良さを見て来た私には良く分かる。

「では、拙者は幽々子様のお供を……。」

「だが断る。」

「は？」

「このルーミアが最も好きな事のひとは

自分が強いと思ってるやつに『いいえ』と断ってやる事よ。」

妖忌の額に青筋が浮かぶ。

「きッ……きッ……。」

「「「「き？」「」」」

「切り捨ててくれるッ!!」

「ごくかいけん ひゃくゆじゅん いっせん 獄界剣『二百由旬の一閃』」

「あーもー、落ち着きなさいって言うてるでしょうがアー!!」

「貴方が幻想郷に行くには、もっと力をつけてからの方がいいのよ。」

「むう……。」

魔法で痺れさせ、境界操作で身動きを取れなくされ、イレルチェーン地獄の拷問鎖

で体を拘束された妖忌を、畳に転がし話を続ける私達。

妖忌が可哀想？短気は損気という名セリフを知らないのかよ。

「幻想郷には強力な妖怪・・・例えば、山の四天王や天魔、悟り姉妹が住んでいるのよ？」

「アナタ如きが生き残れるとは思えないのよねえ。」

冷酷にも真実を口にする紫。

妖忌もようやく頭を冷やしたようで、冷静さを取り戻し己の実力を見つめ直しているようだ。

「少なくとも中級妖怪を問題なく追い払えるようになるまでは来ないっつ。」

幻想郷は貴方が思っているほど甘くは無いのよ？」

「・・・・・・・・・・」

「たまには私が幽々子に合わせに連れて行ってあげるから、納得してくれないかしら。」

「分かったでござる。」

妖忌は嫌そうな顔はしていたが、返す言葉も見つからず大人しく引き下がってくれた。

こうして幽々子が寝ている間に西行妖は、冥界の入り口に急遽建築された（私が錬金術で作った、大変だった）白玉楼はくぎょくろうに移転されたのであった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

41話 冥界の屋敷（後書き）

元ネタ

「だが断る。」の件Ⅱ 岸边露伴（ジヨジヨの奇妙な冒険）

この話を含めて3話の背景が春です。

ただ、それだけです。

今回は短めです。

筆が進めなかったのもありますが、いい加減月に連れて行かせたい
のがあります。

一段落ついたら1話から順に手直しを加えようと思ってます。
手直しできる時間があればいいのですが・・・。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

42話 幻想月面戦争？

西暦1050年

幻想郷のとある湖に魑魅魍魎ちみぎょうりょう達が集まっていた。

妖精の湖と呼ばれる場所ははるか昔、太古の時代から存在すると言われている。

計り知れないほどの大昔から月を臨のぞんできた湖を、取り囲むように妖怪達が犇ひしめき合っていた。

妖怪の種としての存亡のために命をかける者・・・むしろ、ただ単に暴れたいがために参加している者の方が多いかもしれないが、それでもこれほどの数の妖怪を集めてこれたのは、主導者が優れているからだろう。

その肝心の主導者は、何故か浮かない表情をしていた。

その理由が、主導者である八雲紫の隣で白くて丸いものを口の中に押し込んでいる。

白くて丸いもの・・・我々の生きる現代でも食べられている『団子』の原型だ。

今夜は満月、つまりお月見と呼ばれるアレだ。

「1つ聞いてもよろしくて？」

「モグモグ・・・どうしたの？紫。」

「どうして幽々子はこんな時に月見をされているのかしら。」

「お腹が減ったら戦は出来ないって言うじゃないの。」

豊富な胸をえっへんと張りつつ、山積みの団子を頬張る幽々子。亡霊なのにこの食いつぶり、生前は小食だったのがまるで嘘のようだ。

「・・・・・・・・・・はあく。」

紫の口から特大のため息が漏れる。

「どうしたの？」

そんなに大きなため息について。

「あ、おなか減ってるんでしょ。」

あくまで能気な幽々子、それが彼女の良い所であり、悪いところでもあるのだが・・・まあ、時と場合は守って欲しい。

「あのね、幽々子。」

あまりにも紫が哀れなので私がフォローに入ることにした。私もおせっかい焼きになったものだ。

「なあに？」

紫の様子は露知らず、あれほどあった団子の山を食べ終えた幽々子はお茶を啜っている。

「それどこから持ってきたの？」

「ああ、急須とセットで白玉楼はくわくろうから持ってきたのか。

「・・・・・・・・私もため息をつきたくなってきたよ、まったく。」

「幽々子は私達と一緒に来るんでしょ？」

「ええ。」

私達が月面戦争を起こすと聞いた幽々子は、行きたいと駄々をこねていたのだ。

いくら断つても諦めずに、終いには「化けて出てやる」とか「この裏切り者オオオツ！」とか言い出す始末だった。

流石の私達も根負けして、絶対に前線には出ずに傍観者に徹する事を条件についてくる事を許可した。

「なら、もうちょっと気を引き締めてくれない？」

紫も私も失敗できない大切な時だからさ。」

「分かってるわよ。」

・・・本当に分かってるのかな？

幽々子のお頭つむは決して悪くは無い、悪くは無いのだがその掴みどころの無い性格のお陰で、全体的に少々頭が弱いように見られる事が多い。

私とて、それは重々承知なんだけど・・・やっぱり心配になるよね。

そうこうしながら月が完全な満月になるのを待っていると、一際ついで大きな妖気が近づいて来るのを感じ取れた。

その移動速度は、風より速く、音より速く、雷より早い、正に幻想郷最速と言っても過言では無いだろう。

単純な移動速度だけでは、私の誇る空間加速魔法メイド・イン・ヘブンと同等のレベルにまで引き上げられていた。

いやはや、ちよつと会わなかっただけでこんなに成長しているとは

思わなかったね。

嬉しいのやら悲しいのやら複雑な気持ちだよ、まったく……。

「このピリピリと張り詰めた空気ってのは心地イイモンだな。

なア、マルティナア？」

鬼神にも迫る力を秘めた、妖怪の山の天狗の元締めをやっている大妖怪『鈴科すずしな天魔てんま』はスタリと降り立った。

私の古くからの友……むしろ腐れ縁と呼んだ方がいいかもしれないが、それでも彼は私の数少ない大切な友の1人だ。

「……何をしに来たの？」

「こんなに面白そな戦があるつてのに、この俺が指をくわえて見ている訳がねエだろオが。」

ニタリと笑った天魔は広げた羽根を折りたたむと、私の傍に近寄ってきた。

いや、来るなつて私言わなかったっけ？

何で来ちゃうのかな、この世はアホだらけなのかな、腐れド低脳しかないのかな。

……友の顔を久しぶりに見れて嬉しかったけどね。

「アンタってヤツは全く……賢いのか馬鹿なのか分からないよ。」

照れ隠しに乱暴な言葉を天魔に投げかけるマルティナだが、他の連中にそのそっけない態度が照れ隠しだとばれているのはご愛嬌だ。

「俺は自分を偽らずに生きてるからな。」

それにしても、てめエも相変わらずだなア。」

相変わらず・・・かあ。

確かに天魔の言う通りかも知れないね。

「はいはい、どうせ私は吹っ切れきれてませんよーだ。」

「確かにその通りですね。

貴女の本心はあの頃から全く変わっていませんよ。」

物陰からゆらりと現れた女性。

鈴の音のような美しい声に、私は聞き覚えがあった。

一切の気配を纏わず、私の探知魔法から逃れられるヤツなんて、私の知っている連中には1人しか存在しない。

夕日のように紅く染まった長髪をした女性に、私は見覚えがあった。

もう200年以上顔を合わせていなかったが、決して彼女の事を忘れる事は無かった。

私の始めての友であり、もっとも信頼していた・・・いや、今でも信頼している優しく強い女性。

「め・・・美鈴・・・？」

どうして美鈴がココに・・・そもそも美鈴は月面戦争には参加しないと言っていたじゃないか。

「お久しぶりですね、元気にしてましたか？」

「いや、元気だけど・・・どうして美鈴がいるの・・・？」

「もちろん、月面戦争に参加するためですよ。」

ニコリと微笑んだ美鈴の姿は、ピリピリと張り詰めた空気で包まれているこの場所には不釣り合いだった。

「おい、その女。」

妖気を全然感じられねエが、本当に戦えるのかア？」

「少なくともアンタよりは強いよ。」

「……てめエは言うのなら本当だろオナ。」

ま、俺の獲物までは取らないでくれよオ。」

「……何を言っているんですか？」

私は戦いませんよ？」

「「へっ？」」

虚を突かれた私と天魔は、思わずマヌケな声を出してしまった。戦わない？なら、どうして月面戦争に参加するのだろうか。

「私はあくまで保険ですし、そもそもこの戦争に勝とうとは思っていません。」

「まるで意味がわかりませんよオ。」

戦わないのにこの戦に参加する意味があるんですかア？」

「それはまあ……私にも諸事情という物があるんですよ。」

美鈴は隠し事をあまり出来ないタイプだ。

同時にいくつも隠し事を作ると、いつかボロが出てきてしまう。そして今回の場合も、何か隠し事をしているのは分かった。・・・分かったが、私達に話したくないのなら無理に聞く必要は無いだろう。

「それで紫、役者は全員揃ったの？」

「ええ、舞台の役者は全員揃ったわよ。

それでは・・・穢れ無き民の住まう幻想の都へ勇敢な妖怪達を誘いましょう。」

水面に写る月が歪む。

紫が境界を操作し、夜空に浮かぶ月と水面に浮かぶ月を繋げたのだろう。

つくづく反則的な能力だ。

本気を出せば世界を創ることも出来るんじゃないのかな？

「穢れ無き月に穢れた者達が進行するとは・・・矢張り地上に来て正解だったな。」

「魔界にいてはこれほど面白い見世物は見れなかったぞ。」

「全く・・・アンタにも後で参加してもらうかも知れないから、覚悟しておいてよ？」

「せいれんせん聖輦船に乗った気持ちで我輩に任せろ。」

「何そのブラックジョーク。」

「ククク、早くしなければ乗り遅れるぞ？」

「分かつてるよ。」

次々と水面に生まれた隙間へと飛び込んでいく魑魅魍魎達に紛れて私達もスキマに潜り込む。

さて、一世一代の大実験に付き合ってもらおうよ、月に住まう穢れを嫌う敗者達。

「妖怪達は月へと向かったようね。」

湖から離れた場所で魑魅魍魎の進行を眺める2つの人影があつた。

長い銀髪を三つ編みにしている、青と赤のツートンカラーの服を着た女性。

月の頭脳こと『八意永琳』やじころえいりん

そして、真っ直ぐに長い黒髪に手足の先まで隠す和風の美的要素を含んだ服を着た少女。

永遠と須臾の罪人こと『蓬莱山輝夜』ほうらいさんかくや

月の使者からの逃亡生活を続けている2人は、妖怪達が月に攻め入るとの噂を聞きつけ様子を見に来たようだ。

「ねえ永琳、アレ止めなくてもいいの？」

「問題ありませんよ、姫様。」

月にはあの子達がいいますから、普通の妖怪なら蹴散らせますよ。」

「……マルティナはどうなるのかしら。」

「彼女は賢いですから大丈夫でしょう。
どうやら強力な助っ人もついていたから。」

「それにしても、妖怪って何を考えているのか分からないわよね。
月の技術を盗み取った所で、有効活用出来るほどの知能を持った
妖怪は少ないはずなのに。」

「………成程。」

「どうしたの、永琳？」

「1つ思い当たる節がありました。
きっと八雲紫はその目的のためにこの戦争を起こしたのでしょう。
どちらがメインプランかは分かりませんが、この戦争には2つの
思惑が交差しているようです。」

「え、何それ、ぼかさずに教えてくれたっていいじゃん。」

「いえいえ、これは私の想像上のことなので……さあ、竹林に帰
りましょうか。」

「む。」

「今日は姫様の好きな料理をお作りいたしますよ。」

「食べ物で釣られる私じゃ……。」

グウ……

「ッ！！」

顔を赤く染め上げる輝夜。

その様子をニコニコしながら眺める永琳。
実にシユールな光景です、はい。

「どつやら体は素直なようですねえ。」

「えーりんの馬鹿ア！！」

「フッフ、姫様は今宵も可愛いですねえ。」

2人の姿は夜の闇の中へと溶けていった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

42話 幻想月面戦争？（後書き）

背景の色を変えるのにはまってきたこの日この頃。

ついに月面戦争に入ります。

東方儚月抄に出てくる綿月姉妹が登場する予定です。
永琳が言っていたあの子達とは綿月姉妹のことです。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

43話 幻想月面戦争？

月とは地球から38万4400km離れた場所に位置する地球の衛星の名前である。

その衛星は地球の周りを一定の速度で周回している。

そして、地上からは決して見えない部分が存在する。

そこにははるか昔に地上を捨て、月へと移り住んだ者達が都を築いている。

超高層建造物の森を抜けつつ、私達は大魔術の前座である魔術を発動させるために下準備を行っている。

私はこの日の為に準備してきた魔法の1つ、『デコグニション認識阻害』を使い私

アスタロスも姿を消せる『イビルブラインド無気力な幻灯機』を使えるらしいので、下準備に協力してもらっている。

「十分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない・・・か。」

どこの誰が言った言葉だっただろうか。

確かにコレは魔法と見分けがつかないな、ハハハ。

膨大な数の文献の中で読んだ記憶がある一説を、マルティナは何時の間にか口から漏らしていた。

「貴様に渡された支柱は設置し終えたぞ。」

「こつちも終わったよ。」

『支柱』とは、武神の御柱とノアの方舟を現金術で加工して作られた、魔法陣を生成する際に使う補助道具の一種だ。

長さは1m程度で材質は木、先端には『境界の境目』と『天魔の羽根』を錬金術で混ぜ合わせた特製の魔布を取り付けてある。この魔布には、魔法陣の境界を強化する能力が宿っている。合計10本の支柱を用意しており、それを街を取り囲むように突き立てることで巨大な五芒星の魔法陣Pentagramを生成する。

「フム、ならば今すぐにも魔術を発動させた方が良いな。妖怪共が前線を維持している今なら、此方からの注意が削がれているだろう。」

「そうだね。」

「それでは我輩は・・・一足先に前線に帰還しておく。」

「頑張つてね。」

私も賢者の石を完成させたらそっちに向かうから。」

私は懐から拳大程度の妖しく光る赤石を取り出す。何の力も感じられないこの石はただの入れ物。入れるモノは穢れ無き魂、数は一定量を集めれば十分だ。

この石の名前は『賢者の石』エリクサー魔法使いの到達点であり、術者の望む願望を実現する魔術。

そして私の望んだ願望は膨大な魔力だ。

膨大な靈気を司る『神祖の骨』

膨大な妖気を司る『空亡の髪』

膨大な神気を司る『虹龍の鱗』

賢者の石には、3種類の気を司る素材を礎として作られた魔力を溜め込む機構を内蔵している。

取り込んだ魂を魔力に変換する際には、賢者の石自体にもそれ相応の耐久度が必要となる。

そのために、魔力以外の力で押さえつける必要性が生まれた。

更に安定性を高めるために、不尽の力を宿す『不尽の煙』を安定剤として投入している。

これにより、決して尽きることの無い魔力が暴走することの無いようにする。

そして魂を吸収するための重要な要が『優曇華』『海竜の牙』『純粹な吸血鬼の血』だ。

この3つに共通する点、それは数多の魂を吸収することで生きてきたという点だ。

他者の魂を集めながら生きてきた者の肉体は、他者の魂により馴染みやすくなる。

最後に必要だったのが、魔法陣により抜き出した魂を集める方法。それを解決するのが『伊吹の角』だ。

この角には『密と疎を操る程度の能力』が含まれている。

この力を魔法い取り込み、実行することで賢者の石に魂を封入する事が出来る。

取り込んだ魂は、賢者の石の内部の独自機構を通り魔力に変換される。

変換時に発生するロスは無く、魔力は減ることなく増えていく。

これを繰り返すことにより、賢者の石は魔力を増やし続ける永久機関となる。

これが賢者の石・・・もとい無限の魔製の作り方だ。

私は魔法空間からネクロノミコンを取り出し、記されている禁忌を起動する。

術式の内容は、魔法陣の中にいる生命体の魂を肉体から引き剥がすモノ。

本来なら、自縛紳などの邪神や悪魔を呼び出す際に使用される術である。

「拘束制御術式参式開放。」

感情の一欠けらも込められていない声が、穢れ無き民の街へと響く。

一方その頃

「コイツはやべエな・・・どオすっかな。」

戦場の最前線で一介の天狗がボソリと呟く。

光学兵器が飛び交っている中、彼には一切の攻撃が届いていなかった。

否、跳ね返った攻撃が兵器を使用している玉兎達ぎよくとの方に飛んで行き、無様にも自縛している。

「ギャアアアアアアアア」

また一匹、玉兎の放った月の最新兵器の一撃を受けた妖怪が沈んで

いく。

妖怪側の軍勢は当初の半分程度の数にまで減っていた。

「防戦一方で全然攻められねエなア。

敵地でこんな状況に陥ったら負け戦確定だぜ、紫さんよオ。」

「・・・分かってるわよ。」

紫はスキマから弾幕を放射させつつ、玉兎や強化外骨格パワードアーマーの軍勢を蹴散らしていた。

だがその行為も焼け石に水、妖怪側の10倍以上の軍勢を持つ月の民に効果は薄かった。

押され始めている妖怪の軍勢の様子を眺めながら、紫は歯軋りしていた。

「せめて・・・せめて後1時間でいいから粘れたら・・・。」

「粘ったところで負けるモンに変わりはねエだろオが。

それとも何か？あの軍勢の親玉を黙らせてくれるのかア？」

「・・・ええ、私には切り札が2つあるわ。」

「切り札ねエ、、アーカードの旦那や鬼共でも連れてきたのかア？」

馬鹿にしたように肩をすくめながらおどけた態度で天魔はありえない話をする。

鬼達は何か裏がある紫の話に賛同してはくれなかった。

アーカードは「無駄な行為に力を浪費させる気にはならない」と速

攻で断られてしまい、見事に撃沈した。

彼女は妖怪らしくはない。

人を喰らったり、殺したりはしない。

妖怪達からは変わり者呼ばわりされており妖怪の中では非常に浮いている。

それゆえ、彼女と仲の良い妖怪はあまりいない。

天魔ですら彼女からしてみれば仲の良い部類に入る。

「残念だけど、彼等は来れないわよ。」

飛来してきた筒状の爆弾をスキマにねじ込みながら、紫は天魔の問いに答える。

「別に期待なんてしてねエよ。」

空を飛ぶ船に底に手をつけた天魔は、船の表と裏を入れ替えた。

内側からメキメキと音を立てつつ崩れていく空飛ぶ船を眺めながら、素っ気無く話を続ける天魔。

「あら、お上手。」

「似たよオなことなら、ためエにだって出来るだろオが。」

「地上に帰るために力を温存しているのよ。」

「天魔さんは惜しみ無く能力全開で敵を倒しているんですがア、
労いの言葉の1つも無いんですかねエ？」

「はいはい、よそ見をせずに前を見なさい。」

手に持った傘で天魔が突き飛ばされる。
それから数秒もせず、巨大な神気の砲弾が天魔の飛んでいた位置に飛来した。

「ッ!？」

「避けましたか。」

「仕留められたと思ったのですが。」

女の声が戦場に響く。

天魔が声のした方向に目をやると、薄紫色の長髪を黄色のリボンでポニーテールにした、赤を基調とした洋服を着た女が刀を構えていた。

その女の背後には神が立っていた。

彼女の名前は綿月依姫わたつきよりひめ、月の頭脳である八意永琳やじころえいりんの弟子だ。

彼女の能力は『神霊の依代となる程度の能力』。

八百万やまひゃくすずの神を自分の体に宿らせ、使役することができる。

いわば、八百万の能力を持っていると言っても過言では無い。

「さっきの一撃はてめエは放ったのかア？」

「ええ、先程呼び出したのは『天照大神』アマテラスオオミカミ」

「貴方のような天狗でも名は聞いた事があるでしょう。」

「……妖怪ごときにそんなすげエ神を呼び出してイイのかア？」

「無論、貴方のために呼び出したわけではありません。」

依姫の目線の先には1人の男が飛んでいた。
金色と黒色の髪が混ざり合った特徴的な毛色をした男。
魔神でありマルティナの使い魔である悪魔『アスタロス』だ。

「我輩が来ていたのに気がついていただけか。」

空中に立ちながらアスタロスは依姫を見据える。
ソレに答えるように依姫もまたアスタロスを睨む。

「貴方のような大物を見逃すはずがありません。

……『天照大神』よ！

圧倒的な光でこの世から悪しき神を追い払え。」

腰に下げた長刀物干し竿を構えると再び依姫の背後に、先程、浄化の光を撃ち放った天照大神の姿が浮かび上がる。

「……地獄777ツ道具『イビルチェインソー 伐採前歯』」

アスタロスもまた自身の能力を発動させる。

右手の姿がメキメキと変形し、歯が回転する掘削機のようになった。

ガキンツ

二人の獲物がぶつかり合う。

夜空を飛び交う太陽神の浄化の光の合間を抜けつつ、目にも止まらぬ戦闘が繰り広げられる。

時折、刃と刃が火花を散らしているのが遠くから見てもよく分かる。

「アイツ、結構やるじゃねエか。」

「コレならあの女を倒せるかもな、紫イ。」

「……紫？」

返答が無い紫を不審に思いあたりを見渡すが、何処にも紫の姿が見当たらない。

ついさつきまで天魔の横でいたのでは？

そうとなれば答えは一つしかない。

「あのアマ……逃げやがった　　ッ!？」

その時だった。

ズンと月全体の空気が重くなった。

夜中のはずなのに異常に明るい光が天魔たちを包み込む。

「一体なんなんですか、これは!？」

「ようやく発動させたか。」

つばぜり合いをしていた二人も戦いを一時中断し上空まで伸びた、青白い光の集合体を眺めていた。

その光は月面都市第四居住区、主に玉兎達の住まう地域から飛び出しているのが分かる。

「姉さんに街の警備は任せていたのだけど……大丈夫よね……ッ!？」

「ククク……ハハハハ。」

我輩の体に膨大な魔力が流れ込んでくるのが分かるぞ!！」

アスタロスの周りから漆黒の魔力が滝のように放出され始める。その影響か、地面に生え残っていた桃の木が消し飛ばされていく。

アスタロスの背中に隠されていた白銀と漆黒の羽が出現した。
その姿は禍々しくもどことなく神聖な、天使と悪魔の両方の要素が
内包されているように見える。

「その力は……。」

「小娘よ、かかって来い。」

我輩の本当の力を思い知らせてやる。」

「ッ!!!」

T o B e C o n t i n u e d . . .

『アルス・マギナ
黄金練成』

拘束制御術式参式開放により賢者エリクサーの石への魂の充填が完了。

拘束制御術式弐式開放

拘束制御術式弑式開放

拘束制御術式零式開放

43話 幻想月面戦争？（後書き）

書くのに時間がかかった割には文字数は少ない。

そして無理矢理臭いまとめ方が多すぎる。

それでも問題なく続けるよ！！

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

44話 幻想月面戦争？

「地獄7ツ兵器『イビルアックア深海の蒸発』」

ドンツッ！という音が荒れ果てた月の街の郊外に響き渡る。
アスタロスの呼び出した地獄の大型護身用兵器『イビルアックア深海の蒸発』が火を噴いたのだ。

超圧倒的な魔力量を持った魔弾が主砲の射出口から絶え間なく打ち出され、飛散した魔力の残照が火の粉のように辺りを燃やし尽くす。それでも8割ほどの性能なのが恐ろしい。

「（かわしきれない・・・ならば・・・）」

『いしじらめのみこと石凝姥命』よ

三種の神器の一つ

やたのがみ八咫鏡の靈威れいゐを今再び見せよ！

長刀を垂直に構え力を込める。

すると依姫の背後から鏡を手に持った女性その姿が浮かび上がった。鏡へと吸い込まれるように飛んでいった魔弾は、まるで反射されたかのように軌道を変えあさつての方向へと飛んでいく。

「三種の神器の一つ、八咫鏡か。

厄介な物を持ち出してきたな。」

小さく舌打ちをしながらアスタロスは、依姫の背後に現れた忌々しき八百万の神の1柱を睨みつける。

「これで貴方の使う兵器は意味を成さなくなりました。」

次はどのような能力兵器を見せてくれるのですか？」

「貴様はこの程度で勝ったつもりでいるのか。」

「我輩はまだ副砲を使っていないのだぞ。」

右手を空中へと突きたてるとイビルアクアの砲台が動きを変えた。

「ッ!？」

イビルアクアの周囲を浮上している6つの副砲の照準が、依姫に合
わさりマシンガンのように魔弾が掃射される。

主砲による圧倒的な質量と副砲による圧倒的な物量による、線では
なく面で攻撃する戦法をアスタロスはとり始めたのだ。

如何なる攻撃いかを反射しつくす八咫鏡といえど、1度に反射できる攻
撃は1発のみ。

天魔のように攻撃の概念自体を反射する事は出来ない。

そうなる**と**必然的にこの魔弾の嵐の隙間を縫ぬうように進むわけにな
るのだが、避けることを前提に作られたスペルカードとは違い、深イ
海ビルアクアの蒸発は敵を完膚なきまでに討ち滅ぼすことを目的とされている
兵器能力だ。

この兵器の織り成す弾幕に避ける隙間など端はなから存在しない。

「フン!逃れることはできんッ!貴様はチェスや将棋でいう『詰み』チエックメイト
にはまったのだッ!」

手に持っていた長刀を腰に納める依姫。

その表情は追い詰められている割には余裕のようだった。

「大御神はお隠れになった

夜の支配する世界は決して浄土になり得ない

『あまのうすめのみこと 天宇受売命』よ！

我が身に降り立ち夜の侵食を食い止める舞を見せよ」

先程とは異なる言葉の羅列をつらつらと発すると、依姫の背後に新たな神が降り立つ。

依姫の体が膨大な神気に包まれ発光し始めた。

舞うように進む依姫の体の周りをチリチリと音を立てながら、魔弾が軌道を逸らしていく。

「飛び道具は当たらないというわけだな。」

「その通りです。」

八百万の神の加護を受けている私に、そのような下種な能力は通用しません。」

「言ってくれるでは無いか。」

東の果ての田舎者の力なんぞたかが知れていることを、その身にしかと刻んでやろう。」

「笑止千万、出来る物ならやって見なさい！！」

「……………さてと。」

マルティナの右手には小瓶が握られている。

握っている手は小刻みに震え、冷や汗がポタリと地面に流れ落ちる。左手には小さなお守りが握られている。

封はすでに切られており中に入っていた鬼の白毛が、マルティナの周囲を舞う。

「大丈夫・・・大丈夫・・・今の私は絶頂なんだ、この世で最も幸運なんだ。」

念仏のようにブツブツと独り言を呟く。

マルティナの持っているお守りには「人間を幸運にする程度の能力」^{生物}が込められていた。

一時間だけだが、世界中のどんな生物よりも幸運になれるのだ。

幸運と不幸は表裏一体、不幸があるから幸運も存在する。

魔法においてもその概念は高い位置に置かれている。

結局のところ、魔法にしる魔術にしる運が一番重要となる。

そこで成功率を飛躍させるために、因幡てゐから幸運を借り受けたのだ。

「南無三ツ!!!」

かつて魔界に封印された腐れ縁^{ライバル}の魔法使いの口癖を借りて覚悟を決める。

小瓶の中に詰まった無色の液体『蓬萊の薬』を一気に口の中に押し込む。

良薬口に苦しとは言いが、この薬は苦いのレベルを超えていた。

口に含んだ瞬間、全身に激しい苦痛が走る。

バランスを崩したマルティナが地面に倒れこみのた打ち回る。

「クウツ・・・」

蓬萊の薬とは服用者を不老不死にする薬。

身体ではなく魂に重点を置くように、肉体および魂の構造を改変する。

その際に、肉体と魂にはとてつもない負担がかかる。元より月の民の軒並み外れた種族的な性能をあてにした薬なので、地上の民は人間であろうと妖怪であろうと余程運がよくない限り強い副作用に見舞われる。

肉体的な損傷には慣れっこだったマルティナも、魂の痛みは体験した事は無い。

魔法使いゆえ精神汚染には強い耐性を持っているが、この薬の前にはそんな耐性は意味を成さない。

妹紅のときと同じく薬の副作用で、頭髪のメラニン色素が抜け落ち始まる。

瞳の色までは変化を起こさなかったが、体毛は完全な白色へと変貌した。

かつての友、藤原妹紅と同じ現象であり、八意永琳から聞かされていた副作用の一つだった。

「ハア・・・ハア・・・」

ヨロヨロと立ち上がると、手に持った槍を杖代わりにしながら歩を進める。

黄金練成の絶対条件の一つ『尽きることの無い肉体と魔力』を得ることに成功したマルティナは計画を次のステップへと押し上げる。

「ツ・・・アストロインハンド天体制御』起動　。」

手をかざすと虚空から一冊の古ぼけた本が出現した。

その本の題名は『アラマンダルAlmandal』、魔法使いなら知らない者は存在しないほど有名な魔道書である。

四方の天使の召喚方法が記されており、その最終奥義こそ今発動させようとしているアストロインハンドだ。

アストロインハンドとはその名の通り、宇宙に存在する全ての天体の動きを制御する大魔術の一つ。

天体を任意の位置に瞬間移動させたり、自転や公転の速度を任意の数値に設定することすら可能な、別名『世界を終わらせる力』とも言われる魔術だ。

この魔術の欠点は魔力消費量がありえないほど多く、賢者の石エリクサーのサポート無しでは起動すらマトモに出来ない所だ。

故にアラマンダルの著者『アルベルトウス・マグヌス』ですらこの大魔術を実行に移せなかった。

本来は四方の天使を完全召還するための術式なのだが、今回は本来の用途とは異なる使い方をしている。

「天体の動きを掌握。」

手に持った魔道書の特定のページを開き、

「天体座標位置変更点を入力。」

賢者の石から漏れ出した不尽の魔力が、

「星座の魔術発動準備完了。」

青白い光を帯びながらアラマンダルに吸収され、

「拘束制御術式式開放。」

宇宙に点在する天体の位置情報が書き換えられる。

「フフフツ・・・ハハハツ・・・アハハハハハハハハハハ！」

月面都市第四居住区に、一人の女の笑い声が木霊する。こだま
夜空には空一面を覆い尽くすほどの精密な魔法陣が浮かんでいた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

『アルス・マゲナ
黄金練成』

拘束制御術式参式開放により『賢者の石』エリクサーへの魂の充填が完了了。

拘束制御術式式開放により『天体制御』アストロインハンドを発動し超巨大魔法陣を生成。

拘束制御術式壱式開放

拘束制御術式零式開放

44話 幻想月面戦争？（後書き）

久しぶりの元ネタ解説

アストロインハンド
『天体制御』²とある魔術の禁書目録

効果はおおよそ同じ、というか全く同じ。

四方の天使の一人、ガブリエルが使っていた大魔術。

いよいよ大詰めなのにあまり筆がすすまに；

そして物干し竿で思い出してけどヤイバにそんな妖刀があったよね。
よきによきと刀身が伸びるやつ、え？聞いてない？

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

45話 幻想月面戦争？

「消える、妖怪イレギュラー!!」

紅い強化外骨格バワードアーマーに身を包んだ男の罵声が、拡声器を通して戦場に響く。

あれほどの数の妖怪も殆どが殺されてしまい、周辺は死屍累々となつている。

「てめエの軟弱な攻撃なんて通用しねエぜ。」

傷はおるか返り血一つ付いていない天魔は、自慢の飛行速度と鉄壁の防御能力を利用し何とか善戦をしている・・・ように見える。

はたから見ればいい勝負を繰り広げているように見えるが、天魔の妖気はあまり残されていなかった。

ありとあらゆるものを入れ替えれると言っても、入れ替えるときに妖気は消費する。

相手に触れてしまえば表と裏を入れ替えて裏返してぶち殺したりも出来るのだが、絶え間なく打ち込まれるパルスライフルの弾丸の嵐を反射するので精一杯で、近寄りたくても近寄れない。

(俺は長期戦に向いてねエつてのに・・・質量と距離がありすぎて得意の強制転移も使えねエし・・・どオすつかないア。)

「妖怪イレギュラーは・・・排除する。」

左肩に装備されたミサイル砲が火を噴きミサイルを乱射する。

音速の数十倍の速度で飛来するミサイルを回避する手立ての無い妖怪達は、無残にも爆風の餌食となり爆ぜてゆく。

機体に装備されているレーダーに、先程までは存在しなかった反応が表示されていたのだ。

機体に取り付けられているカメラで声のする方向を確認するとそこには一人の女が何かを脇腹に抱えながら宙に浮いている。

白い髪に黒い服、対照的な配色をした女は背から翼を生やした少年を抱えていた。

「様子を見に来て正解だったよ。」

「・・・マルティナなのか？」

抱きかかえられながらも鼻先をちらつく白い髪。

たしかマルティナは金髪だったはずだ。

「そーだよ。」

「ま、私にも色々あるからね。」

釈然としない答えだったが、敵が目の前で出張っている今は事細かに説明している暇は無い。

仕方が無く納得した天魔は、服に付いた埃を払いながら小さな声で呟いた。

「そオか・・・それでどオして助けた。」

「よく分からないことを聞くね。」

手の届くところで命を落とそうとしている友人を助けられないほど、私は狂っては無いよ？」

「てめエは例の魔術とやらを俺に見せてくれるンだろオが。」

「こんな所で油売ってンじゃねーよ。」

マルティナに顔を合わせず、そっぽを向きながら強がる天魔。素直に「助けてくれてありがとオ」と言えない彼はこんな素っ気無い態度しか取れなかった。

「大丈夫だよ。」

もう黄金練成アルス・マゲナは最終段階に入ってるから。」

そう言いながら空を見上げたマルティナにつられ、天魔も上空に目をやるとそこにはこの世の物とは思えない光景が広がっていた。

「な、なんなんだこれはア!?!」

上空に広がるのは、数多の線によって構成された超が付くほど巨大な魔法陣だった。

見たことの無い文字や幾何学模様によって構成された魔法陣は、とてつもなく複雑でマトモな魔法使いでは意味すら理解できない代物だった。

今の今まで気がつかなかったことから、先程現れたのだろうと推測する天魔に、マルティナが声をかけてきた。

「とりあえず、黄金練成の最終段階に入るから離れといてね。」

そついうと天魔を抱えていた手を話し、腰に下げたあったレイピアを構えるとマルティナの雰囲気急変した。

「防衛術式『グリモア・クウオート魔書引用』起動」

それと同時に紅い強化外骨格に身を包んだ男が、兵器を射出するた

めに構えを取る。

「死ぬシネシネシねシネシネ死ぬエエエエエ!!!」

射出口から発射された30余りのミサイルがマルティナに雨のように降り注ぐ。

だがマルティナは、それに全く怯むことなくその光景を眺めている

「警告、敵対勢力が高エネルギー体を射出。

構成を解析……圧縮したN2原子を爆薬として利用した熱探知式誘導ミサイルと判明。」

無機質な口調で、まるで人が変わってしまったかのように機械的に喋るマルティナ。

そう、今のマルティナは文字通り人格が変わっているのだ。

グリモアックウオート

『魔書引用』とは、術者の身に襲い掛かる脅威を自動的に解析し、最も効率的な迎撃手段を術者の知識から検索し反撃する自動防御術式だ。

その間、術者は何も考えなくてすむので他の事に集中する事が出来るという寸法で、マルティナ自身は裏で『天体制御』アストロインハンドにより生み出した魔法陣を使い何かをしている。

これがマルティナがこの日の為に作り出した、正真正銘最後の魔術である。

「対抗魔法を検索中……163件の中から最も成功率の高い魔法を選択。」

リアクティブゾーン
『炸裂結界』発動

マルティナの30mほど前に半透明の薄い、半円状の結界のような

物が展開される。

それを物ともせずミサイルは突き進む。
そしてミサイルが炸裂結界に触れた時

「なアツ!？」

結界はいとも容易く碎け散った。

「クク、クハハハハハハハ、この程度か妖怪イレギュラー!!」

男は狂ったように高笑いしながら勝利を確信した。
世の中、そう上手くはいかないというのに。

「第一の発言に対する回答ですが私は妖怪イレギュラーではありません、魔法使バケモいのです。」

「ツ!？」

碎け散り宙を舞っていた結界の破片が動きを止め、そして次の瞬間、
結界の破片がミサイルに向けて動き始める。
破片によってミサイルは撃墜され、残ったのは立ち込める煙だけと
なった。

「敵対勢力の個体の心情を解析。
……肉親またはそれ同等の友好度を持った者を賢者エリクサーの石
の素材とされたことによる狂気によるものと断定。」

「ま……さ……か……ツ、お前がツ……お前があの子を殺した
のかアアアア!!」

弾薬が尽きたのか、強化外骨格に備え付けられたロケットブースターを吹かしながら飛び込んでくる男。
その瞳には目の仇である忌々しき敵イレキユラーしか写っていない。

「迎撃手段を検索中………36件の中から最も適正の高い魔法を選択。」

「うおおおおおおおおおッ！」

音すら追い越す速度で特攻を仕掛けようとする男。
だが、その攻撃が届く事は無かった。

「対象の速度上昇に合わせ、対象魔法の第一、第二詠唱を破棄。

極大消滅魔法『メドロア』」

よもや片手で数えられる程度の者のみしか生き残っていない戦場に、漆黒の光が通り抜ける。

そして、男の乗った紅き強化外骨格を飲み込む。

「……あの時の俺の読みは当たってやがったな。

今のコイツに勝てるヤツは、少なくともこの場所には存在しねエ。」

離れた場所からぼんやりとその様子を眺める天魔。

辺りを見渡すと、乗り込んだ当時は美しく広がっていた桃源郷ユートピアは、見るも無残な姿へと変貌していた。

地面はえぐれ、桃の木はほぼ全てが消失し消えうせ、少し離れた場所からは虎視眈々こしたんたんと銃を手に持った玉兎や月の民が銃口を向けている。

攻撃を仕掛けてこないのは依姫が、アスタロスと戦っているからだ

ろう。

妖怪達が戦争を吹っかけてから、まだ20分ほどしか経っていないとは思えないほどの惨状だ。

「敵対勢力を索敵・・・戦闘要員数1万と判明。

特攻隊^{五完}の残量はほぼ0と断定。

今後の方針は自己防衛に専念することに決定されました。」

ブツブツと無表情で喋っているマルティナのそばに天魔が近寄る。特に何の反応も無いことから仲間として認識されているようだ。

「・・・おい、その妙な喋り方はなんなんだア？」

「防衛術式による人工的な思考です。

と、マルティナは友人リストにラインナップされていた天魔に、渋々ながら丁寧に説明してあげました。」

「おい、どこが人工的なんだア！？」

さっきの無表情はどオした、普通に表情も感情も豊かじゃねエか
！！」

「第一思考から第四思考まではただ今、世界の構成情報を解析しており表層意識にまで出てくる事が出来ません。

そこで私が代役および肉体の保護を勤めているのです。

と、マルティナは妖気も体力も途切れ途切れな黒モヤシに対して、嫌々ながらも丁寧に私の存在を説明してあげました。」

その言葉通り、マルティナはあからさまに嫌そうな表情をしている。そして「俺の発言を見事にスルーしてんじゃねエよ」と心の中で悪態を付く天魔であった。

「なんなんですかア、その妙な上から目線。
ツーか、その解析とやらはどれくらいで終わるんだ？」

怒っても仕方が無い、というか怒るだけの体力も残されていない天魔は、何時マルティナが元に戻るのか聞いてみた。

「後1分25秒です。」

と、マルティナは足元のおぼつかない天魔に回復魔法ヘホマを施しながら、どや顔で報告します。「

「こオいう所だけは無駄に気が利きやがる……。
というか、えらく早く終わるんだな。」

「先程、黒モヤシを回収する1分ほど前まで解析を行っていたのですが、妖怪側がピンチだと第一思考に報告し、特別に助けに来てやった訳なのです。」

と、マルティナは天魔のことをわざと黒モヤシと呼びながら颯爽とアスタロスの所にまで向かいます。「

「て、てめエツ、この腹黒がア!!」

「腹黒ではありません、口が悪いだけです。」

と、マルティナは頭が悪い天魔の発言に訂正を入れます。「

「(ぜってー後で泣かせてやる……。)」

2人の人影が戦場を駆ける。

僅か一晩で終幕を迎える戦争も、終盤に差し掛かっていた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

『アルス・マゲナ
黄金練成』

拘束制御術式参式開放により『エリクサー
賢者の石』への魂の充填が完了。

拘束制御術式式式開放により『アストロインハンド
天体制御』を発動し超巨大魔法陣を生成。

拘束制御術式式式開放により超巨大魔法陣を利用し世界の構成情報を解析。

拘束制御術式零式開放

45話 幻想月面戦争？（後書き）

元ネタ

紅い強化外骨格グリモアニインボールハネのペン（アーマードコア）

魔書引用ヨハネのペンニ自動書記ヨハネのペン（とある魔術の禁書目録）

N2原子を爆薬として利用ニN2爆弾（新世紀エヴァンゲリオン）

なんとというか禁書ネタのオンパレードみたいになってしまった。

元ネタの分からない人はとても意味不明になりそうだ。

男の人は賢者の石を製作する際に、魂を吸収された玉兔の家族が彼氏。

どう見ても善人側、狂っちゃってましたが。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

46話 幻想月面戦争？

わたつきよりひめ
綿月依姫は焦っていた。

妖怪が戦争を起こす事は予測が付いていたのだが、問題は進軍してきた連中の中に妖怪以外の者が幾らばかりか混ざっていたのだ。

月の民の定義する妖怪とは、人妖戦争の時代から存在する鬼や天狗、河童といった東洋の妖怪達のことをさす。

アスタロスのような悪魔や、魔力を行使する元人間のマルティナ、吸血鬼のアーカードのような存在は、本来妖怪とは言わない。

利便上しようがなく地上の民達の呼び方に合わせてはいるが、本来の妖怪とは『妖気を行使する物の怪』のことなのだ。

だからこそ依姫は焦っていた。

今まで見たことの無い異常な存在に対して。

(なんなのよ、このあり得ないほどの実力は……)

更に彼女には幾つもの不安要素が残されている。

月面都市第四居住区で起きた玉兎の大量死亡事件と、それと同時に起こった謎の光。

軍部関係者の暴走による試作品の強化外骨格パワーアーマーの身勝手な持ち出し。宇宙全体における天体座標の改変。

今現在上空に刻まれている幾何学模様。

月面都市の首都とも呼べる第一居住区を守護している実の姉『綿月わたつき豊姫』の安否。

最も気になるのは、軍部最高責任者『月夜見つぐよみ』からの連絡が全く入っていないことだ。

(月夜見め……お師匠様を暗殺しようとした次は、こんな危険時に雲隠なんて余程私に切り裂かれたいのかしら。)

怒涛の勢いで攻め込んでくるアスタロスの攻撃を防ぎながら思考を深める依姫。

軍の者は下からせており見方を守る必要の無い依姫は、思う存分戦えている。

「『ほのいかづちのかみ火雷神』よ

七柱ななしゅうの兄弟を従え

この地に来たことを後悔させよ！」

龍の姿を模した七つの尾を生やした炎の塊がアスタロスを飲み込む。

「地上にはこれほど熱い炎はほとんど無いわよ。

流星の悪魔もこれで消し炭になりましたね。」

仮にもこれは神の業火だ。

並大抵なみだいぢの生き物が耐えられるわけが無い。

「温いな、灼熱地獄のほうはまだマシだぞ？」

しかし、アスタロスは並大抵なみだいぢでも生き物でもなかった。

涼しい顔をしながら炎の龍から抜け出してきたアスタロスには、火傷はおるか焦げ目の一つもついていなかった。

「クツ……。」

「我輩に炎で挑んだのが間違いだっとな。

我輩は1億度まで耐えられる……太陽の上でピクニックをする事すらお茶の子さいさいなのだ。」

「1億度の炎など存在しません。それほどの温度になってしまったら、それは炎ではなくプラスマと呼びます。」

「地獄には常識は通用しない。今度観光に来るといい、地獄の名産品パンデモニウムを食わせてやる。」

「折角ですがお断りさせていただきます。何ゆえ私はまだまだ死ぬつもりは無いので。」

「そうか、残念だ。フム……そろそろ時が満ちる頃か。」

展開されていた地獄の道具や兵器が収納され、地獄に迷い込んでしまったのでは無いかと勘違いしてしまいそうになっていた様子が元に戻る。

それと同時にアスタロスは両手をプラプラさせながら、敵意はもうありませんよとアピールしている。

「時が……満ちる……？」

敵意を失ったアスタロスを不審に思いながら、首をかしげながら依姫は考える。

どうして展開していた能力を解除したのだろうか？

時が満ちるとはということなのだろうか？

今現在、月で起きている非常事態に関連することなのだろうか？

頭の中をクエスチョンマークがグルグルと渦巻くものの、謎は深まるばかり。

依姫が必死に頭を捻りながら考えていると、何者かがこちらに近寄

ついているとの通信が超小型インカムを通して軍部より入る。
指定された方角に目をやると、そこには白髪の女と天狗の少年が、
こちらに近寄ってくるのが目に止まった。

（あの天狗、確か最初にあの悪魔と一緒にいた奴だったわね。

白髪の女の方はよく分からないけど・・・本能的にどうにも手を
出してはいけない気がするけど・・・。）

依姫は身構えつつ二人がどう動くかを見極める。

敵意があるようならこのまま切り裂き、無いようなら捕縛して月の
現状を説明させればいい。

「その二人、歩みを止め私の前に立ち止まりなさい。」

着々と縮まる三人の距離。

それでも歩む速度を緩めない二つの人影。

そしてついにその距離は0になり二人は、

「つまり天魔は何時まで経っても向こう見ずな大馬鹿野郎ってこと
ね。」

「ああン！？どオしてそオなるンだア！！」

「だってさ、自分の体力管理も出来ないのはありえないでしょ。」

「それはだなア、頼りねエ見方のために頑張ってたただけであって俺
が馬鹿なわけでは・・・。」

などと他愛も無い会話を交わしつつ、依姫の存在を完璧にスルーし
ていた。

アスタロス、悪魔だ、悪魔か。

「・・・・・・・・・・。」

依姫は手に持った刀を地面に突き立てる。

すると瞬く間に、三人の周囲の地面から無数の刀の刀身が地面から突き出した。

一人一人を取り囲むように現れた刀身には神の力が宿っており、その身に軽く触れるだけで裂傷を与える。

「女神を閉じ込める祇園ぎおん様の力。」

「もしかして・・・戦う気なの？」

「無論、貴女達が月に何をしたのか吐かないのであれば戦闘を行います。」

「止めとけ、どオせてめエじゃ今のコイツには勝てねエよ。」

開いていた翼を折りたたみ、ペタリと地面に座り込んだ天魔がボソリと呟く。

「そのようなハツタリ、私には通用しません。」

天魔の声に耳をは傾けずに、好戦的な態度を崩さない依姫。

依姫は八百万の神によって守護されており、その力を打ち破るには神の力が、神に匹敵する力が必要となる。

単純な力押しや低級せうきの能力持ちでは歯が立たない代物なのだ。

「はぁ・・・引ひつひ込こめ。」

ため息混じりにマルティナが呟くと、地面から突き出た刀身が姿を隠した。
魔術を唱えるそぶりも見せず、先程呟いて言葉にも特別な意味は全く無い。
ただ一言『引つ込め』と呟いただけで、祇園様の刀はその靈威を失い元の刀へと戻った。

「ッ!？」

驚きを隠しきれない様子の依姫は、追撃を仕掛けるため地面に突き刺さっていた長刀を引き抜くとマルティナの首元に刀身を突きつける。

一方のマルティナはというと、顔色一つ変えずに玉兔の軍勢の様子を眺めながらうわ言をボソリと呟く。

「手ごろな物が無いしアレでいいかな。」

「何を言っているのですか。」

下手に動いたら貴女の頭と体が泣き別れになりますよ?」

「それは無理だよ、アンタは動けない。」

マルティナは鼻で笑いながら右手を突き出し、拳銃を構えるような手の形を作る。

しかしその手には何も握られてはいない。

「動くなと言ったはず・・・ッ!？」

長刀を振り切ろうとした瞬間、依姫は我が身に起きた異変に気がつ

く。

(そんな・・・体が動かないッ!?)

気がついた時にはすでに手遅れ。

依姫は首から下の身動きが取れなくなり、頭と口を動かすので精一杯になつていた。

「さつきアンタの仲間が使つてたN2爆薬ミサイルだったっけ？

あれ、お返しするよ。」

「何を言つて・・・。」

「ミサイルを生成、弾頭はN2爆薬、用途は対地爆撃、数は100基」

一連の言葉を言い終わるとそこには月の最先端科学技術が使われたミサイルが、まるでずっと空中に存在したかのように浮いている。ブースター部分からゴオオオオオ!!と音が出ているのが聞き取れる。

本来は専用の射出装置が必要なはずだし、そもそもコンピューター制御されていなければロックオンすら行えないのだが、どういうわけかそれらの過程を無視し発射準備を終えている。

「・・・え?」

依姫は驚きのあまり放心状態に陥っていた。

いきなり現れたミサイルの群れ。

月の民が途轍とてつもなく長い年月をかけて積み上げてきた物理法則を、ことごとく無視している存在。

彼女の思考速度ではとても追いつけないほどの、目まぐるしい速さで物事は進んでいた。

「ミサイル本来の機能に改変を行い、玉兎の軍隊を爆撃するために同時射出を開始せよ。」

高らかに号令がかけられた瞬間、待機していたミサイルの軍団がブースターから火を噴き、物凄い勢いで射出されていく。迎撃ミサイルの嵐を避けながら突き進んだミサイルは、瞬く間に数千匹の玉兎たちをなぎ払う。

その様子を眺めていた天魔が、驚きを通り越して飽きた様に独り言をぼやき始める。

「本当にありえねエよなア、黄金練成つてのはよオ。
どオやったらこんな事を出来るのか、俺には理解できねエぜ。」

それに答えるようにアスタロスが呟く。

「黄金練成は全ての魔術の行き着く先なのだ。
ありとあらゆる行為を単独で成し遂げる、いわば世界に干渉することの出来る唯一の魔術とも言えるだろう。」

能力という希有な才能を持った者だからこそ成し遂げられた、魔術の完成形とも言える。
今のマルチテナに勝つには、少なくとも世界そのものに干渉できる者でなくてはならない。」

「成程、よく分かんが解説役お疲れさん。」

「そうか、我輩の遊びに付き合ってくれるのか。」

「と、とつても分かりやすい説明をありがとございましたア、ア
スタロス先生エ!!!」

などといつも通りの漫才を繰り広げている二名を無視しつつ、依姫
はマルティナを睨みつけていた。

「よくもツ・・・よくも罪の無い者達を殺したわねツ!!!」

「フッフ、アハハハハハハハハハハ。」

「何がそんなに可笑しいのツ!!!」

「寿命という結果を捨て去り、過程を永遠に過ごすためにこんな所
にまで逃げてきた歩み^{敗者}を止めた者達に罪が無い？

笑わさないで欲しいね。

生命つてのはいつか終わりが来るものなんだよ。

私は永遠という幻想に囚われた哀れなウサギ達を、解き放つてあ
げただけなのにそんな言い方は無いでしょ。」

「この下種^{ゲス}が・・・・・・・・。」

「好きなだけ言えばいいさ、私は私のために他者の命を利用する。

それが魔法の発展に繋がるのなら、私はどんなえげつない行為で
もやっつてのけるよ。」

「せめて体さえ動いたらこんなヤツ・・・。」

「さあて、月の民の肉体構造を調べさせてもらつよ?」

チャキリと構えられた様々なルーンが刻み込まれたサーベルを依姫の喉元に突きつけながらマルティナはほくそ笑む。

実際は能力を利用することで、相手を見るだけで遺伝子構成などの人体構造を理解出来るのだが、この時のマルティナは黄金練成アルス・マギナが完成したことにより、最高にハイになっていた。

つまり、

「……………」

迫り来る死の恐怖に依姫は怯えていた。

連絡の付かない姉さん豊姫ももしかしたら他の妖怪に殺されてしまったのだろうか。

私はこのまま殺されてしまうのだろうか。

せめて……せめて最後に一目でいいから八意様に会いたかった。そんな考えが頭の中でグルグル廻る。

その時だった。

「まあ待てマルティナ、そこまでする必要はねえだろ。」

ピタリとレイピアの切っ先の動きが止まる。

聞こえてきた声は男性のものだった。

声のするほうに視線を移すとそこには、酷く不釣り合いな黒い死装束に身を包んだ金髪の男性が立っていた。

大鎌を肩に携え歩み寄ってくる男性は、マルティナの良く知る者だった。

最後に会ったのは今から380年前、だが今まで一度もその男性のことを忘れた事は無い。

「……………父さん!？」

彼の名前は『エルナン Hernan Cortes』、マルティナの実の父親にして、冥界で閻魔の補佐を勤める男。
数多の妖怪と口先一つで交渉し、世界中を放浪してきた『話し合うことが出来る程度の能力』を保有する異世界人だ。

To Be Continued . . .

『アルス・マゲナ 黄金練成』

拘束制御術式参式開放により『エリクサー 賢者の石』への魂の充填が完了了。

拘束制御術式式開放により『アストロインハンド 天体制御』を発動し超巨大魔法陣を生成。

拘束制御術式壱式開放により超巨大魔法陣を利用し世界の構成情報を解析。

拘束制御術式零式開放により『アルス・マゲナ 黄金練成』完全起動。

4 6話 幻想月面戦争？（後書き）

今まで超が付くほど空気だったコルテス父さん。

この人ストーリーでは表立っては出てきてないけど、裏から物凄く手を引いてたりします。

そろそろ大詰めの幻想月面戦争、多分後一話で終わるかな？

伏線回収が全然出来ていませんが。

『アルス・マゲナ黄金練成』についての説明。

思いのままに世界を歪める大魔術。

燃費の悪さと、発動用魔法陣の問題と、必要知識の問題をクリアしたとき初めて使えます。

威力は絶大で死ねと思ったら相手は死に、消えろと思ったら相手は消えます。

暴発するリスクを抑えるために、基本的には口から言葉を発したとき、それがトリガーとなって効果を発揮します。

情景描写不足なのは、強すぎるのと文章力の無さと話数的な問題と気力的な問題です。

折角のクライマックスなのに盛り上がらなくて御免なさい。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

47話 幻想月面戦争？

「ほらほら、てめえもそんなに睨むんじゃねえよ。」

俺達は意味の無くなつた争いを止めに来てやつたんだぞ？」

ロングコートを羽織り葉巻を吸っている方がお見合いな、金髪のオールバックが特徴的な目つきの悪い三十代の死神風の男性。コルテスを一言で表すとそうなる。

腰の辺りまで伸びている金髪ストレートに、街でアンケートを取れば百人中百人が「コイツ一般人^{カタキ}じゃねえな」と思うほどの目つきの悪さ。

それに加えて口も悪く彼に泣かされた者は後を絶たない。実際にコルテスは死神をやっているのだが、着込んでいる死装束があまりにも似合つて無さ過ぎて、まるでそこらへんのギャングがコスプレをしているような風貌になってしまっている。

「元はといえば貴方達地上の民が引き起こした戦争でしょう。」

拳を握り締めながらコルテスを睨みつける依姫。

依姫はどうにも納得できないという表情をしている。

突然現れた男が「戦争終わったから戦うの止める」と言つても信憑性が無いし、そもそも戦犯者の態度には思えないからだ。

「結果は俺ら妖怪側は完全敗北、てめえら月人側は数千の玉兔の犠牲のみで勝利。」

ま、表向きにはそんな感じで知れ渡るだろうな。

俺らは本当の目的も果たせたことだし、俺は妖怪共の魂を回収したらとつと地上に帰るさ。

そつちも穢れた魂を放置されたら後始末に困るだろ？」

「本当の目的・・・？」

しばらく考え事をしていたマルティナが口を挟む。

マルティナはこの日までずっと気にかかっていた事があった。

それは『八雲紫が月面戦争を引き起こす理由』。

紫は月の民の科学技術を奪い取るためと言っていたが、月の技術はどれもこれも穢れの無い月だからこそ作動する代物だ。

地球の六分の一の重力しかない月で稼働させることを前提に作られた技術を、果たして地上で転用する事は出来るのだろうか？

それ以前にそれほど高度な技術を何の問題もなく利用できる妖怪は、私の知る中では片手で数えるほどしかない。

失敗する可能性の大きすぎるこの計画を、紫はどのようにして実行に移したのだろうか？

マルティナの目的は勝利を収めることではなく、黄金練成を完成させること。

故にそれほど深く言及しようとは思っていなかったが、黄金練成を完成させ精神的に余裕の出来たマルティナは、頭の片隅に追いやっていた疑問が再び気になり始めたのだ。

「あーそうだな、てめえらには教えておいてやるつか。

どうして紫が月面戦争を起こしたのかを」

コルテスが説明を始めようとしたとき、複数の女性の声がこの場に響き渡った。

「ちょっと待ちなよ、まさか私達が来る前に説明しようとしてたのかい？」

呆れながらスキマから飛び出てくる緑髪の魔法使い魅魔^{みま}。

「そうですね、足止めまでしてあげていたのに勝手に話を進めるなんて酷いじゃないですか。」

「あー依姫だ、無事だった？」

その後が続いて飛び出てくるのは赤髪の自称妖怪の龍神紅美鈴^{ほんめいりん}と、桃を頬張りつつのん気な声を出しながら現れた綿月豊姫^{わたつきとよひめ}。

「まったく、貴方は昔からせっかちなのよ、もう少し忍耐力をつけたらどう?」

月面戦争の首謀者でありコルテスのことを最もよく知るスキマ妖怪^{やくもゆかり}八雲紫。

「……………相変わらずだねコルテスも。」

そして紫に連れられスキマから現れたマルティナの見知らぬ女性。黒髪の短髪に帽子を被り、白黒のモノトーンを基調とした着物を着ている女性は、懐かしそうに、そして若干涙声になりながらコルテスに話しかけている。

「そうね、コルテスは相変わらずね。」

最後に現れたのは、どこから取り出したのか分からないが酒瓶を片手に団子を食べている亡霊姫西行寺幽々子^{さいぎょうじゆうけい}。

「すまねえな。」

紫に言われて争いを止めに入ったのはいいが、お前らが遅いから

勝手に話を始めるところだったぜ。

そして久しぶりだな蓮子^{れんこ}、お前の体感時間だと3000年ぶりぐらいか。

俺は相変わらずのん気に勝手にやってるぜ。ちと寿命が足りなくて死んじまったがな。

あと幽々子、さり気無く話に紛れ込むな。」

目を細めつつ蓮子のほうに振り向き目を細めつつ答えるコルテス。

親しい喋り方から見覚えの無い女性は父さんの友人か何かかと思っ
たマルティナだが、3000年ぶりとの言葉が引つかかる。

父さんは人間をやっていた頃とあわせても450年ほどしか存在し
ていないはずだ。

そうなると3000年とは一体どういうことなのだろうか？

考えていても埒^{らち}があかないのでマルティナは、しばらく黙ってコル
テスの話を聞くことにした。

「亡霊式のジョークよ、ジョーク。」

「そうか。で、どうして団子を食ってんだ？」

「月を見ながら食べるのもいいけれど、月で食べる団子も美味しい
ものよ。」

「てめえはもしかして団子を食うために月に着たのか。」

「それ以外に理由があるとでも？」

「ハア・・・団子なんて何所^{いそ}で食っても変わらねえだろうが。」

ため息混じりに幽々子の下らぬ発言を切り捨てる。

コルテスは幽々子が冥界に来た頃からの顔見知りで、彼女がどれほどマイペースで食道楽くわんたうらくなのかは知っている。

今更これぐらいのことで怒るほど浅い関係では無い。

「仲良くお話ししているところに割り込むが、これはどオいうことだア。」

俺はてめエが月に来てるなんて聞いてねエし、何で見たことの無いやつが二人も紛れ込んでやがるんだ。」

完全に空気になっていた天魔が会話に割り込む。

「ああ、お前もいたのか。」

天魔の身長は165?、一方のコルテスの身長はというと185?もある。

生粋のヨーロッパ人であるコルテスは、普通の身長の実験と比べても明らかに背が高い。

「アレか?俺が小さくて見えなかったのか?てめエは確かにデカイが俺はそんなにチビじゃねエぞ?」

機関銃のようにまくし立てながら天魔は、割と本気で怒っていた。きつと久しぶりの再開だというのに一言も声をかけられていなかったのが、気に入らなかったのだろうと思ったコルテスは、穏やかな口調で天魔に語りかける。

「冗談だつっの、そんなに騒ぐな。」

俺と最後に会ったときよりも結構でかくなつたじゃねえか。」

「ケツ、アレから何年経ったと思ってやがるんだ。」

「ハツハツハ、それもそうだな。」

天魔の頭をポンポンと優しく叩きつつコルテスは目線を皆の方に戻し、再び中断していた話を再開させた。

「それで、俺達が月人に戦争を吹っかけた理由なんだが・・・まあ、とある人物を取り戻しに来たって所か。」

「それがそこに居る蓮子という女か。」

黙りこくっていたアスタロスが口を開く。

「どうやらアスタロスもまたマルティナと同じく、先程まで月面戦争も矛盾点について考えていたようだ。」

「そうだ、1000点満点だぜ、アスタロス。」

俺と紫、それに美鈴は蓮子と古くからの友人だ。

特に俺と紫は元々いた世界からの友人でもある。」

父さんは異世界人だ。

今の時代の千年以上先に行く科学力を持った世界からやって来た所までは私も知っている。

逆に言えばそれ以外の事は全くと言っていいほど知らない。

元々の世界で何の仕事をしていたのか、家族構成はどうなっていたのか、この世界に来た理由は本当に偶然だったのか、並べていくと限が無い。

実の父親なのに何も知らないとなると情けない話だが、私は別に他人の過去を詮索する様な性質では無いのでどうでも良い。

「それでは我輩達は貴様等の涙ぐましい救出劇に利用されたというわけか。」

「言ってくれるじゃねえか。」

「そっちだつて紫を騙して魔術を完成させようとしただろ？」

「いわばギブアンドテイク、持ちつ持たれつの関係だつたつてことだ。」

「フム、確かにそうなるな。」

「マルティナが黄金練成アルス・マゲナを完成させるのも、俺の計算の内だった。

「最初はお前の夢を叶えさせるために紫に連れて行って貰うつもりだつたんだが、予想外にお前が強くなつてて計画を変更したつてことところだ。」

「まあ予想はしてたけど、私は父さんの掌の上で弄ばれていたつてことなんだね。」

「前々から思つてたんだよ。」

「紫が素直に私の願いを聞きつけた時から、事が上手く行き過ぎてるつてね。」

「それは違う。」

「確かに俺はきつかけを作つたがそれはあくまで始まりに過ぎねえ。」

「素材の在り処の捜査を紫に頼んだのは事実だが、黄金練成を完成させたのはお前の実力だ。」

「だが・・・そのために支払つてきた犠牲も忘れるなよ。」

「鋭い眼光をマルティナに向けながら、懐から取り出した一本の葉巻に火をつけるコルテス。」

「その口調は重々しくは無いが軽くも無い、心に直接語りかけてくる」

ような独特な感覚だった。

「私に説教をしたい訳なの？」

「そういつつもりじゃねえ。

どんな物事にも多少の犠牲がつきものなのは俺だって百も承知だ。俺が言いてえのはなあ、その犠牲をどう繋いでいくかだ。

マルティナ、お前は黄金錬成アルス・マゲナが完成した後、何がしたいか決めていたか？」

「……………」

予想だにしなかった質問に言葉を詰まらせる。

言われてみたら私は黄金錬成アルス・マゲナを完成させるといふ結果に固執していた。

結果の更に先、未確定な未来に関して私は何も考えていなかった。

もしかしたら私はいずれは訪れる目的を失った未来から、目を逸らしていたのかもしれない。

ハハハ、何をやってたんだろうね、私は……………」

「ほらな、答えられねえだろ。

生きがいが無理して作れとは言わねえ、その生き方を変えろとも言わねえ。

そんな事はお前自身が決めることだ。

だからこそ父親として……………同じ道を歩んできた先輩として、お前にアドバイスしてやる。

生きる目的なんて友と共に過ごしていたら、何時の間にか出来るもんだぜ？

体験者は語るってやつだ、信憑性は結構高いと思うがなあ。」

腕組みをしつつコルテスは独り言のように喋り続ける。

素っ気無い態度をとっているが実のところを言つと、彼もまたマルティナの行く末を心配していた者の一人なのだ。

その度合いはというと、紫から悪い知らせがある度に卒倒しそうになったり、マルティナのぶっ飛んだ行動に腰を抜かしたりと、何かある度に頭を悩ませるぐらいだ。

「・・・分かった。」

小さく頷いたマルティナはチラリと美鈴の方に目をやる。

それに気がつきニコリと微笑み返す美鈴。

そそくさと目を逸らしたマルティナだが、その表情はどこか嬉しそうだった。

「さあて・・・綿月姉妹、そろそろためえらともお別れだな。」

口に銜^{くわ}えていた葉巻を地面に捨てたコルテスは、懐から懐中時計を取り出し時刻を確認する。

その時刻は深夜1時手前を指している。

「そうね、そろそろ地上との行き来が出来なくなる時間が近づいているわ。」

私の境界操作でもこの時間帯を逃すと、帰れるのは次の満月の日ね。」

地上と月の裏側は満月の日しか移動できないように、強力な結界で守護されており普通の方法では出入りできない。

そしてその結界が閉じるタイムリミットが迫っていた。

「待ちなさい。」

今逃げたところで、すぐにも貴方達を追いかけて使者が地上に降りてきますよ。

それでも貴女達は逃げるつもりなのかしら。」

「あん？そんな事気にする必要はねえよ。

てめえらは、此処であつた事を綺麗サツパリ忘れちまうんだからなあー！」

コルテスは地面に突き刺していた大鎌を引き抜き、地面に落とした葉巻を踏み潰す。

「……どうということなのですか？」

「……どうということなの？」

手に持っていた桃を食べ終えた豊姫が会話に加わる。

「というか今まで会話に割り込もうと思つても割り込めなかっただけだ。」

「私達が無策でここまでやってきたと思つているの？」

「魅魔にお願いして精神干渉の魔術を月に施させてもらつていたのよ。」

紫が左後ろへ下がると

「YES、I AM！チツ　チツ　」

待つてましたといわんばかりに魅魔が、魔道書を展開させながら飛び出してきた。

会話に加わる事はおろか出番すらほとんど無かつたのか無駄にハイテンションだ。

「へえ・・・金枝篇きんしへんね。」

展開されている魔道書『金枝篇』は全13巻からなる。

13という数字は魔術的にとても重要で大体の魔術に関わっており、遡ると北欧神話やキリスト教神話にまで絡んでくるが、途轍もなく長くなる割愛させてもらう。

「その通りよ。」

この13冊の金枝篇は全てがオリジナル。

これを使ってこの戦争に関わった者の記憶を改変させてもらうわ。

「

「つまり記憶を都合のイイよオに書き換えて、月人がためエらのお友達を攫さらいに来ない様にするってことかア。」

「実に合理的で理想的な作戦だろ？」

ちなみに教えておいてやるがこの後の流れは、月面戦争は妖怪側の大敗で泣く泣く逃げ帰ったが、月人達はお情けで逃がしてやったって感じだから、そこんところよろしく頼むぜ。」

「発動準備はコルテスが喋ってる間に終わったし、サッサとこんなつまらない場所からはオサラバさせて貰おうかしらね。」

魔道書に魔力を込めながら魅魔は、魔術の発動を開始した。

「ま、待ちなさいッ!!」

「ハハハハハ、それではお別れだ。」

次に会ったとしても俺の事は覚えてねえだろうがな。」

高らかに笑いながらコルテス達は紫の作り出したスキマの中に飲み込まれてゆく。

「なッ

」

依姫が次なる言葉を発する前に、月は魅魔の魔術に包まれ月人達と玉兎達の記憶が改変された。

この改変は記憶だけではなく、嫦娥という存在を別の誰かに移し変える呪いに近い性質も持っていた。

データ上に残った嫦娥の情報も此処にいる連中は認識できず、嫦娥の変わりに幽閉された人物は永遠に出る事は適わない。

嫦娥が居なくなつた事に誰も気がつかず、玉兎達は薬を搗き続ける。普通の生活は今までと変わらずに廻り続ける。

こうして妖怪達と月の民の、一晩だけの短い戦争は終結を迎えた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

47話 幻想月面戦争？（後書き）

広げた風呂敷を畳みきれなかった結果がこれだよ！！

今回の登場人物はコルテス、マルティナ、アスタロス、天魔、魅魔、紫、幽々子、豊姫、依姫、美鈴、蓮子の総勢11名でした。

多すぎてほとんど喋れていないキャラが多すぎた（＾o＾）／

ついでにキャラ説明

『エルナン Hernan Cortes』コルテス

身長：185？ 外見年齢：30歳前半 特技：話術 職業：死神

能力『話し合うことが出来る程度の能力』

名前は史実の人物と同姓同名だが、特に関係はナッシング。

非常に強面、見た目はクロコダイル（ONE PIECE）から顔の傷を消して髪を金髪にして、黒い死装束を着させた感じ。

口は悪いが、基本的に女子供や弱者には優しく義理人情持っており常識も兼ね備えている常識人である。

最近の悩みはサボリ癖のある同僚を連れ戻すこと。

次回、感動の黄金練成編終幕！？アルスマグナ

感動の結末を迎えるのぜ！！（うそです）

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

48話 プロローグ

父さんの言う通り幻想月面戦争は、表向きには妖怪側の大敗として伝えられた。

それから数年後、八雲紫^{やくもむかり}、宇佐美蓮子^{うさみれんし}、エルナン・コルテス、ミマ・コルテスの4名は妖怪達の理想郷を作るために他方に働きかけている。

紫は妖怪達に計画の立案を行い多少なりの信頼は得ているようだ。その名は『妖怪補完計画』、どうやら月面戦争時の謳い文句^{うた}を妖怪の中では異端とされている紫だったが、『鈴科天魔^{すずしなてんま}』、『スカーレット・アーカード』、『伊吹萃香^{いぶきすいいか}』、『風見幽香^{かぜみゆうか}』等の有名な大妖怪達が賛同したのをきっかけに、次第と信頼する者が増えていき計画も起動に乗り出した。

正面から堂々と言う事は出来ないが私も影ながら応援している。なお、紫の最近の悩みは、忙しすぎて睡眠時間が足りないらしく、よく父さんや蓮子に愚痴^{うち}ってるらしい。

蓮子は人間と妖怪達の架け橋となるべく尽力しているようだ。

彼女は私や紫の治療により不完全な蓬莱の薬の効力は消え去り、今では普通の人間として生きている。

いや、普通と呼ぶのはいささか間違いか。

長い年月を生きてきた彼女には、それ相応の霊力が蓄えられていた。それを武器に使い、幻想郷の人間と妖怪の関係を円滑にするために巫女の真似事を始めたらしい。

人間も妖怪も同様に優しく接することから、人間や妖怪からは博愛に富んだ麗しい人間という意味の『博麗』と言う言葉を与えられた。巫女の職業と合わせて『博麗の巫女』と呼ばれ始めているそうだ。

父さんは妖怪の理想郷を作るために、輪廻転生のコネクションをどうにか組み込んでやると張り切っている。

元から死神になった理由は紫の『妖怪補完計画』のためらしく、この世に未練があったわけでは無いらしい。

現在は閻魔の手伝いをしながら人事管理や魂魄の回収、新兵器の開発などを手がけているそうだ。

母さんは魔界で世界創造について調べている。

結界関係は紫がどうにかできるらしいので、その他の問題点の解決方法を模索しているようだ。

魔界の神である神綺しんきに話を聞いたり、時には地獄にまで乗り出したりしているそうだ。

最近父さんに「あまり無茶をするんじゃないねえ、お前が怪我したらどうするんだ。」といわれておとなしくなったらしい。

とりあえず父さんも母さんも元気にやっているので私は満足だ。

他の仲間達も元気にやっている。

美鈴は旅を再開したようだし、天魔は妖怪の山で鬼と仲良く喧嘩してるし、幽香は何だかんだで幻想郷に住み着いてるし、幽々子は閻魔から正式に冥界の管理を命じられたし藍は隠居生活をしているそうだし、永琳と輝夜はそろそろ定住できる場所を探しているらしいし、妹紅も……妹紅も元気に過ごしているようだ。私はどうにも会う気になれない。

臆病で身勝手で卑怯なのは分かっているが、私にはあんな別れ方をした妹紅に合わせる顔が無い。

妹紅は強い、きつと一人でも生きていけるだろう。

もしもの事があつたら紫に頼んで幻想郷に住まわしてもらうつもりだ。

今の私にはその程度のことしか出来ない、それ以上のことを行う勇氣が無い。

多分私は妹紅に面と向かって拒絶されたくないのだろう。
だから会えない。

子供染みた浅はかな考えだが私はそれでいいんだ。

妹紅も・・・そのうち私のことなんて忘れてしまっだろう。

それでお前はとうしたのかだって？

私は何だかんだでアーカードと結んだ契約を守ることにした。

現在は、アーカード直属の部下として紅魔館の地下図書館で魔法の研究を進めている。

究極の魔術である黄金錬成アルス・マゲナを完成させても魔道を極めたとは言えない。

あの魔術は魔力変換効率が悪すぎるし、発動に時間がかかりすぎるし、世界を歪めるのに若干のタイムラグがある。

それでは究極の魔法とは言えない。

だからこそ私は魔法理論を現行の物から更に発展させ、魔道の歴史に新たな1ページを刻む。

私は歩みを止めない、努力を怠らない、失敗を恐れない、決して諦めない、新たな夢を追い求める限り。

「・・・・・・・・・・はあ。」

10万冊以上の本を並べることの出来る大図書館の一角で、机につ伏せになりながらマルティナが大きなため息を吐く。

その声を聞きつけ何所からともなく現れたアスタロスが紅茶を片手にマルティナの傍に近寄る。

「どうしたのだ、貴様がため息なんて珍しいではないか。」

「だってさあ・・・こんな空気の悪い地下に何ヶ月の籠ってたら気が滅入って仕方が無いじゃん。」

不満そうに書きかけの魔道書を片付けながら呟くマルティナ。

本来魔法使いとは何ヶ月も自室に籠り研究を行っているような生き物なのだが、マルティナは違う。

行動派のマルティナは、新しい魔法が完成するたびに何所からか人間や妖怪をつれ攫ってきて実験するようなやつなのだ。

流石に最近は分別がついてきたようで、凶悪な妖怪や犯罪者を好んで連れ攫ってきているようだが、最近は外出が出来ていない。

「マルティナ、頭脳がミジンコ以下にまで退化したのか？」

元とはいえ貴様が大暴れしたせいだろう。」

「むー」

頬を膨らませながら、ジト目でアスタロスを睨みつけるマルティナ。

「そのような態度をとったところで我輩はなんとも思わん。」

中々に可愛らしい行動だが、アスタロスに可愛らしいという感情が沸き起こるはずも無く、即効で切り捨てられる。

「意地悪。」

「文句ならアーカードに言え。」

それ以前に貴様は様々な人間から狙われているでは無いか。」

「教皇暗殺、神祖の骨の盗掘、大量殺人、大量破壊、魔道書の強奪程度しかやってないじゃん。」

それなのになんかいらぬ罪まで増えてるんだけど。」

机の上に並べられていたのはマルティナの手配書。

上記の罪状と似顔絵、そして現代の金額に直すと3億円程の賞金額が記載されている。

似顔絵は本人とはあまり似ておらず頭髪の色も不明となっており、記載されている特長は黒い服と帽子を被っている点だけだった。

最近はその特徴を逆に利用し、マルティナの犯行に偽装し悪さを行う魔法使い崩れや人間も居るらしく、おかげで子供ですら知っている有名人になってしまっている。

「一度捕まって容姿を晒せば偽者も減るだろう。」

「へえ・・・つまりアスタロスは私に十字架に貼り付けられて、火あぶりされて欲しいんだ。」

「我輩的にはそのような下種な行為よりも、服を脱がされて馬で町中を引きずり回されたりされる方がそそのめるのだが。」

アスタロスはこれを満面の笑みで言うのだからたまったもんじゃない。い。

紅魔館には碌なヤツは居ないのだろうか。

「アンタの変態染みた性癖は聞いてないよ。」

「フム、そう冷静に切り返されては我輩も答えようが無いな。」

「いつものことでしょうが。」

壁に立てかけられたレイピアと獣の槍に手をかけるマルティナ。
400年近く生を共にしてきた帽子を深く被ると、^ル転移魔法の詠唱
を始める。

「出かけるのか？」

「ちょっと幻想郷に行つて来るよ。」

鬼達の宴会に強制参加させられることになつちやつてね。

どうせ紫と幽々子の差し金だろうけど、あの子鬼には悪いことし
ちやつたしからね。

いつかは謝ろうと思つてたんだよ。」

「貴様も変わつたな。」

ボソリとマルティナが聞き取れないほどの声量で呟くアスタロス。

「え？」

「いや、なんでも無い。」

「そう？」

それじゃあ、行つて来るね。」

マルティナの体が青白い魔力を帯びた光に包まれ姿を消す。

魔力の残照が消えうせるのを確認したアスタロスは、先程までマル
ティナが腰掛けていた椅子に腰掛け、先程運んできた紅茶をたしな
み始めた。

T
h
e
E
n
d
.
.
?
?

48話 プロローグ(後書き)

終わったよ・・・パトラッシュ・・・。

そんなわけでマルチナの冒険はひとまず一段落。

だがまだまだ続くんじゃないよ。

では、引き続き『東方妖魔伝』をお楽しみください。

後書き&お知らせ

どうも、車道です。

この度は東方妖魔伝をお読みいただきありがとうございました。

どうにも中途半端な終わり方ですが、マルティナの冒険はまだまだ続くのでご安心を。

東方妖魔伝は四部構成となる予定です。

第一部はマルティナが黄金練成を完成させるまでの物語。

第二部はコルテスが東方世界にやって来た理由と魅魔との出会い。

第三部は紫の過去と幻想郷を作るまでに至った理由。

第四部は博麗大結界の完成、そして現代までの幻想郷の話。

構想上はそのようにまとまっております。

この小説のゴールは月面戦争にする、と連載当初から決めていました。

月面戦争が引き起こされた理由、紫Ⅱメリー説、嫦娥Ⅱ蓮子説、美鈴Ⅱ龍神説、他にも様々な二次創作ネタをぶち込んだ結果、このよ
うな作品が出来上がりました。

ここまで読み進んでくれた皆様、本当にありがとうございました。

そしてお知らせもあります。

この度、黄金練成【A r s M a g n a】編をリメイクしたいと思います。
ついでに。

理由としてはストーリーの矛盾、余計な話の除去、マルチイナの性格が安定していなかった、誤字脱字や表現描写の修正、魔法名の改定、伏線の修正と追加、などが大きな点です。

大まかなストーリーの流れは変わらない予定ですが、あまり必要の無い素材は存在が抹消されるかもしれません。

上記の内容を含めた上で今までの話を全て修正し、書き溜めたうえで投稿したいと思っています。

なので投稿は最低でも1ヶ月以上先になる恐れがあります。

お知らせは以上です。

それでは皆さんリメイク版が完成する日までサヨナラー。

リメイク版プロローグ（仮）（前書き）

生存報告&投下実験です

リメイクの進行があまりにも遅すぎるので仮投下

大まかな流れは決まりましたが、執筆がほとんど進んでません（
^o^） /

プロローグは3人称ですが、本編は1人称で書きたいです・・・書
けたらですが。

リメイク版プロローグ（仮）

魔法使い。

それは魔法に魅入られ魔道を突き進む者。

それは既に魔力が体の原動力となった者。

それは魔法の研究を生業とし、生きる目的となっている者。

この物語は、悪名高き一介の魔法使いの手がけた魔法の完成への道程^{みちのり}である。

少女が魔法に魅入られたのは何時頃^{いつ頃}だっただろうか。

物心ついた頃には、少女は屋敷に保管されていた書物を読み始めていた。

少女の知らない未知の言語で書かれた本もあったが少女には関係無かった。

それは、少女に特別な才能があったからだ。

【見聞きしたことを理解する程度の能力】

見聞きしたこの意味を必ず理解できる不思議な才能。

幼い頃から少女はこの才能を独りひとでに理解していた。

人間、妖怪、神、動物、物、何にでも宿る可能性を秘めている才能を、この世界では【〜程度の能力】と呼んでいる。

【〜程度の能力】が遺伝するのは未だに不明だが、少なくとも少女の父親と母親が能力持ちなのは間違い無い。

少女の父親は【話し合いを行う程度の能力】を保有している。

その能力は絶大で種族も使用する言語、意思すら無視して強制的に会話を交わす事が出来る能力。

少女の母親は【魔法を使う程度の能力】を保有していた。

その力は強力で、世界を支配することすら出来るかもしれないと噂されていたほどだったらしい。

未知の言語が理解できるのは父親の能力に、魔法の才能があったのは母親の能力に。

その二つの能力と少女の能力には少なからずの類似点が存在した。

それ故、少女はその能力に振り回されることになってしまう。

ヨーロッパの片田舎の領主をしていた男の一人娘の少女は、あまり屋外に出してもらえずに暇を持て余していた。

そのため、少女は毎日のように書庫に入り浸っていた。

能力があるため理解できない事は少なく、もしあったとしても父親に聞けばすぐに教えてもらえた。

少女にとって当時の生活は充実していた。

その最中さなかに、少女はある部屋を見つけるとなる。

もしかしたら、少女はあの部屋を見つけなかった方が良かったのかもしれない。

その部屋は、少女が魔法使いとしての第一歩を歩み出す切っ掛けきかけとなったからだ。

ある日、暇を持て余して屋敷を探索していた少女は一つの部屋が目にとまる。

子供独特の感だったのか、母さんから受け継いだ魔法の才能からなのかは分からないが、少女はその部屋が非常に気になった。

好奇心に負けた少女は吸い込まれるようにその部屋に入り込む。

その部屋は少女の母親が魔法を研究するために使用していた部屋だった。

机の上に並べられたよく分からない薬品の入ったビンや、投げ出されたかのように放置されていた分厚い本の中に、一冊の本が開かれたまま置かれていた。

積もった埃を払いながら、少女はその本を手取る。

『黄金練成《アルス・マグナ》』と記された本の著者の欄には、父親から物心つく前に死んだと聞かされていた母親の名が記されていた。

それを見たとき少女は悟る。

ここにある本は母親が集めた魔道書なのだ。

それが少女が魔法に魅入られた切っ掛けだった。

少女が魔法を覚えたいと尋ねたら、父親は少女に好きにしろと答えた。

それからというものの少女は、今は亡き母親の部屋に眠っていた魔道書を読み漁り始める。

そして使用人に覚えた魔法を披露するのが日課となっていた。

最初の内は大した魔法も使えなかったのも、使用人達は手品を見るような感覚で少女の魔法を褒めていた。

褒められるのはとても嬉しい。

他人との関わりが薄かった少女は、魔法を通してみんなと仲良くなれたような気がしていた。

一ヶ月、三ヶ月、半年、一年と時が経つごとに少女は魔法使いとしての頭角を現し始めることとなる。

最初は藁に火をつける事がやっとだった魔法は、人を一瞬で焼き殺せる程にまで成長していた。

その時の少女は純粹にすごい魔法を使えるようになれば、みんなが褒めてくれると思込んでいた。

だが理想と現実は違う。

使用人達は何時の間にか少女を避けるようになっていた。

理由は単純明快に、少女の事を恐れていたからだ。

たとえ相手が己の仕える者の実子だとしても、バケモノ異能の力を振るう者が恐ろしくないはずが無い。

少女はみんなと仲良くなりたかったただけなのに、認めてもらいたか

っただけなのに。

純粹だった少女はもつと魔法を極めたら、もつと強くなればみんなが認めてくれると信じていた。

だから少女は努力した。

それでも結果は変わらなかった。

少女はみんなを傷つけるつもりなんて無かったが、使用人達は少女が努力する理由には目もくれず、一強力な魔法が使える事実《結果》を優先してどんどんと距離を取っていく。

少女はみんなと仲良くなれたような気がしていただけだったのだ。

そして少女が十歳になった頃、使用人達のとある陰口を聞くこととなる。

「それにしてもさ、領主様の娘っておっかねえよな。」

「この前なんて魔法で竜巻を作って大木を粉々にしたそうですよ。」

「マジかよ……。」

「領主様はどうしてアイツを捨てたりしないんですかね？」

「そりゃアレだろ、戦争の道具にするためだろ。」

「ですが領主様は穩健派で戦いは嫌っているって聞きましたけど。」

「偽善者ぶってるヤツほど、裏ではヤバイ事を考えてるもんだ。」

「そうなんですかねえ？」

「私が言うんだ、間違いない。」

使用人達にとっては他愛の無い陰口の一つに過ぎなかったのだろうが、幼い少女の心には彼等の言葉が鋭利なナイフのように深く突き刺さった。

その陰口を皮切りに少女は次第に他人を信用しなくなっけてゆく。

アイツ等は裏で何を考えているのか分からない。

上辺うわへだけの言葉なんて幾らでも誤魔化せる。

それならば、私は何が何でも私という存在を認めさせる。

みんなが私のことを恐れるのならば、恐れる気すら無くすほどの強大な力を手に入れればいい。

例えば神話に出てくる神のような圧倒的な力を持っていれば、人間達は私を恐れる気なんて無くすだろう。

神と同等の力を得る方法。

そんなモノは存在しない？

いや、それは確かに存在する。

少女の母親が研究していたアルス・マゲナ黄金錬成は世界の全てを魔法とすること
で行使可能となる魔法の到達点。

神や悪魔を含む『世界の全て』を己の手足として使役する事ができ
るようになる、神話の神と同等の力を振るうことの出来る強大な魔
法。

基本理論は既に少女の母親が完成させていた。

後は少女の知識で補強するだけだった。

少女は今まで以上に魔法の研究にのめりこんでいく事となる。

純粹だった少女の心は強大な魔法に魅入られた事により次第に歪ん
でゆく。

少女は人の身でありながら、生きとし生けるものをモルモット実験動物として
見ていた。

A・D・670年『ヨーロッパの片田舎』

「本当に行くんだな。」

短く切り揃えられた金髪をオールバックにした男が、葉巻に火を点しながら少女に話しかける。

「もう決心したから。」

よく手入れされた金色の長髪をなびかせながら、やや露出度の高めの黒を基調とした洋服に身を包んだ齡十五程の少女。

その目つきは燐としており、少女の決意がひしひしと伝わってくる。

「お前が決めたことなら俺は何も言わねえが、少なくとも俺はお前の味方だ。」

旅に疲れたらいつでも戻って来い。」

「戻ってくる時には母さんを超える魔法使いになってるから安心しててよ。」

「クハハハハ、そりゃ頼もしいじゃねえか。」

なら俺は草葉の陰で応援させて貰っておくとするかあ。」

少女の頭を優しく撫でながら男は一個の帽子を戸棚から取り出す。

先っぽが尖がっている、童話の中の魔女が好んでかぶりそうな真っ黒な帽子には、太陽と三日月を連想させる金色の飾りがつけられていた。

「この帽子は俺からの餞別だ。」

お前の母さんもこれに良く似た帽子を好んで使ってたなあ。

ま、お守りのような物だと思ってくれればいい。」

「ありがとう、父さん。」

少女はその帽子を深くかぶると男を見上げながらニコリと微笑む。

他人が嫌いな少女にも嫌いでは無い者は存在する。

それが少女の父親だ。

国王に与えられた土地で領主を勤めている少女の父親は、非常に多忙だった。

それでも父親は少女に様々な話を聞かせるための時間を割く。

男はその昔、【とある探し者】を見つげるために世界中を旅した。

その旅の最中に出会った一癖も二癖もあるような大妖怪変わり者達。

生ける伝説と呼ばれた魔法使い。

魂を吸い取る吸血鬼。

密度を操る若き鬼。

万物を入れ替える天狗。

かつて虹龍と呼ばれていた妖怪。

住み付いた国を滅亡へと導く九尾の狐。

目に映る者を殺戮し尽す妖怪。

空を亡き者にする最古の妖怪。

あらゆる境界を操る妖怪。

どの話も少女にとって魅力的で神秘的で刺激的な内容だった。

不器用ながらも少女に孤独をあじあわせないように必死に時間を作っていたことを少女は知っている。

父親が自分に寂しい思いをして欲しくないことも、本当に愛されていることも少女は知っていた。

だからこそ少女はまだ人間を止めていない。

この世には魔法使いを魔法使いと至らしめる魔法が二つ存在する。

一つは『捨食じやしやくの魔法』

肉体の動力源を完全に魔力に切り替え、食事を取らなくても生命活動を維持できるように体を作り変える魔法。

二つは『捨虫じやちゆうの魔法』

老化現象を停止させ術者を不老長寿の肉体に変化させる魔法。

この二つの魔法は非常に難易度が高く、特に捨虫の魔法を覚えるに

は普通なら六十年以上かかる代物だ。

更に失敗すれば命すら失う可能性が非常に高く、あまり研究が進んでいないのもあり今現在この魔法を行おうとする魔法使いは少ない。

それ故、魔法使いには地力を積み死への恐怖が薄れてきた老爺おじいちゃんや老婆おばあちゃんが必然的に多くなる。

その難易度の高さは生ける伝説と呼ばれていた少女の母親ですら、完璧に使えるようになるまでに二十年近くの歳月を要しているほどと説明すれば理解できるだろうか。

通常、魔道書の内容を読み解くためには魔法使いのしでの地力が必要となってくる。

しかし魔法使いの常識を覆す才能が少女の魂には宿っていた。

あらかじめ引かれた線をなぞる様に簡単に魔道書の内容を読み取れる少女は、生ける伝説と呼ばれていた母親を凌ぐ勢いで魔法の知識を習得していた。

とはいえ流石さすがに『地獄の業火』《ハーデス》『ヘルフレア』や『気候操作』《ウエザー》『プロセス』といった奥義と称されている魔法には手が届かないのだが、それでも技量的には一人前の魔法使いと同等の力は持っている。

つまり少女は先ほど述べた『捨食の魔法』と『捨虫の魔法』を、何の問題も無く使用する事は出来る。

それなのに二つの魔法を使用しない理由。

それは少女に人間を止める決心がつかなかったからだ。

二つの秘術を使用した時点で少女の肉体は人間とは完全に異なる存在となる。

少女は人外バケモノになってしまったら、唯一の肉親である父親との繋がりが無くなってしまふのを恐れていたのだ。

「それともう一つ、俺からの餞別があつてなあ……行つちまう前に俺からお前に伝えたい事がある。」

男は腰を落としながら少女と同色の蒼い瞳で目線を合わせる。

「俺はお前が何をやるうとしていいるかは知らねえが、それを止めようとはしねえ。」

お前がやりたい事はお前自身が決める。

たとえそれが人の法に触れることだったとしても、お前が本心からやりたいことなら心の底から応援してやる。

だがな……全てを疑つてかかろうとはするな。

この世に完璧な黒色も白色も存在しない。

世界は灰色だ、何にも染まることの無い白と黒の混ざり合った灰色なんだぜ？」

男の人生の半分は研究で、そして残りの半分は自己満足のために費やされている。

その際に男は世界を歩き回り、この世の善と悪を自らの目で確認し

その後姿が見えなくなるまで男はその方角を見続けた。

マルティナがどう変わっていくのかを考えながら……。

「で、私にお守りを頼むのね。」

相変わらずエルナンは過保護というか……親馬鹿というか……。

「うっせえ、どうせ俺は顔に似合わず甘い男ですよーだ。」

「私は貴方のそういう所が好きなのよ？
恋愛的な意味ではなく家族愛的な意味で。」

「そんな事、百も承知だっつーの。
っーか俺は既婚者だし、それ以前にお前を恋愛的に好きにはなれ
ねえよ。」

「あらら、振られちゃったわね。」

「なあ、顔を合わすたびにこんな寸劇をやるのは止めようぜ、紫^{ゆかり}。」

「えー、これでもちよっとは楽しかったのよ。」

「……………相変わらずだな、お前も俺も。」

煌びやかな客間で紅茶を啜る二人組み。

片一方は男、もう片方は女。

男の名前は『エルナン・コルテス』。

女の名前は『八雲紫』。

人間と妖怪という奇妙な組み合わせだが、この二人は複雑に絡み合った因縁……いや、運命で結ばれていた。

エルナンは手に取っていたティーカップを机の上に戻すと、険しそうな表情をしながら口を動かし始める。

「じゃれてねえで真面目に話をするぞ。」

マルティナが完成させようとしている魔法は、教会から危険視されている行為だ。

『黄金練成《アルスIIマグナ》』を完成させるためには、魔法が何かで人間を越えた肉体を手に入れなければならぬと気がつくだろう。

「『グノーシス主義』ね。」

確か、魔術師シモン・マグスが最初に唱えた教義だったかしら？

【グノーシス主義】とは人間に理解できないならば、人間を超えた肉体を手に入れれば良いという教義だ。

『人間は精製途中の神であり、己を鍛えあげる事で神の肉体を手に入れ神の業を自在に操る事ができる』と謳い、十二使徒ヨハネさえも危険視した十字教最初の異端宗派として知られている。

魔法使いが捨食や捨虫の魔法を使つたとしても、筋力や強度は人間のそれとは大差ない。

強力な魔法を行使した場合、その魔法の反動により身を滅ぼす可能性があつたのだ。

それならば単純に肉体を強化すれば良い。

不老不死になる魔法『賢者の石』《エリクシール」ストーン》『や、その肉体を吸血鬼とする魔法の道具』石仮面《ファントム」ブラッド》『等といった、グノーシス主義者の考えた禁忌が幾つもの世に存在する。

「その通りだ。

どうやらこの世界でも、その辺りは新約聖書の通りになってるらしいな。」

「ええ、そのようね。

細かい年代はずれている様だけど、基本的に大差は無いわ。それにしても、やっぱり紅茶と甘い物って合うわね。」

紫は空になったティーカップに新しい紅茶を注ぎながら、どこからか取り出してきた茶菓子を頬張っている。

白い何かで塗り固められ、紅い果実が飾り付けられているそれは、

本来その時代には存在しないものだった。

「おまつ、ショートケーキなんてどこで手に入れやがった!？」

「最近ペルシアの辺りで、サトウキビを発酵させない砂糖の精糖法が考案されたのよ。」

それをほんの少しだけだけ砂糖を拝借してきたのですわ。」

「そつえばお前、料理好きだったな。」

「ええ」

「ところで俺のケーキは？」

「そんなものあるわけ」

エルナンの瞳が紫をジトリと睨みつける。

二人の関係を知らない者が見たら、美女を睨みつけているヤクザといった印象を感じるだろう。

エルナンはそれほどまでに人相が悪い。

細く鋭いその瞳に加え、髪型がオールバックなのが人相の悪さに拍車をかけている。

オマケに190cm程ある高身長で更には口も悪く、常に葉巻を吸っているヘビースモーカーと、まるで映画の中に出てくる悪役をそのまま引きずり出してきたような存在なのだ。

傍から見れば「貴方、何処の組織のボスですか？」と言われるほどの雰囲気醸し出している。と言うか実際に何度か言われた事がある。

そんなわけで普通の女子供や、下手したら大の男ですらこのように凄まれたら泣き出しそうなものなのだが。

「私にそのような脅しは通じなくてよ。」

流石は大妖怪『八雲紫』といったものか。

エルナンの脅し（と言いかただ睨みつけてるだけ）を軽く受け流し、苺のショートケーキを口の中に放り込みながら幽雅に佇んでいる。

「なら口喧嘩で勝負でもするかあ？」

「あ・・・いや、それは勘弁。」

「ちゃんと貴方のケーキも用意してあるわよ。」

紫は手に持っていたフォークを皿の上に置くと、右手で宙を切る。

すると手で切った先の空間がクパリと裂け、そのスキマから無数の眼球や道路標識が顔を覗かす。

「毎回思うがそのスキマの中の風景ってどうなってるんだ？」

「さあ？私にもよく分からないわ。」

「多分、私の精神状態が反映されているのだと思うけど。」

「・・・もしかしてまだ未練があるのか？」

「そんなもの、とつくの昔に何処かに捨ててきたわ。
今の私は成すべきことの為に生きているのよ?」

「そうだったな、それなら心配は無用だ。

困った事があれば何時でも相談に乗ってやるぜ。」

「あら、それはありがたいですわね。」

スキマの中から取り出された紅い苺の乗ったショートケーキは、常温よりも低い環境で保管されていたようだ。

エルナンは召使に持って来させた銀のフォークを使い、ひんやり冷えた未来の菓子の味を堪能する。

「ん、まあまあだな。」

「それは良かったわ。

さて、そろそろ私も出かけるとするわね。」

「ああ、元気だな。」

ティーカップの中に残されていた紅茶を飲み干した紫は、すぐ傍に立てかけてあった傘を手に取ると、突如出現したスキマに吸い込まれてゆく。

その様子をやや目を細めながら見送ったエルナンは、ため息をつきながら天井を見上げる。

その表情はなにやら悟ったような、諦めたような、そんな顔をして

いた。

「情けねえなあ・・・俺ってヤツは。」

紫の時も、魅魔の時も、マルティナの時も、俺は何も出来てねえ。
自分一人じゃ何も救えねえ俺が憎くてたまらねえぜ、クソが。」

懐から取り出した葉巻に火を点しながら呟かれた独り言は、何者にも聞かれること無く部屋の中を木霊こだまするだけだった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

リメイク版プロローグ（仮）（後書き）

総文字数は大体7500文字ぐらいです

リメイクと言うかキャラ名が同じなだけの別物になってる感が否めません

変更点としてはマルチナの能力の弱体化（と言ってもほとんど変化無し）や伏線の増加、書き方の変更などです

リメイク投下

<http://ncode.syosetu.com/n1707x/>

リメイク版を投稿しました

そのためこちらは更新を停止いたします。

リメイク版はこちらとは設定の変化や変更点が数多く存在します、ご了承ください。

これから下は文字埋めと裏話なので読み飛ばしてくれて結構です。

ゼーんぜん書き溜め出来なかった&モチベーションアップのために書き書けなのに投稿してしまった。

プロットは出来るからそこはよろしこ。

あと裏設定的な何か

ジャンル 東方二次創作 ダークファンタジー

説明 自分の思い描いている東方の世界観に、他の作品の要素を混ぜ込んだ小説です。

八雲紫が月の民を相手に戦いを挑んだ理由は何故か。

その理由を紐解いていくのがこの小説の目的です。

登場するサブキャラクターの大半は、読者の方が見た目を想像しやすい様に、ある程度の知名度を持った漫画や小説のキャラクターを起用しています。

また性格や喋り方も基本的には元の作品を参考に執筆しています。

参考資料 東方求聞史紀、東方儚月抄 ｝ Silent Sinner in Blue、東方儚月抄 ｝ Cage in Lunatic Runagate、東方茨歌仙、その他元ネタ作品

第一章『黄金練成《アルスIIマグナ》』

説明 全二十話で完結する予定の話。

諸悪の根源のように語られる大魔法使い『マルティナ・コルテス』の半生を、本人の心理描写を交えながら一人称で展開されていきます。

黄金練成とは、とある魔術の禁書目録に出てくる錬金術師が使用した詠唱に数百年かかる大魔術です。

効力は絶大で、術者の認識通りに世界を改変することの出来る所謂チート魔法です。

その代わり、制約が異常に多く使いづらいデメリットをどうやって克服して発動させるかが、第一章の大きな目的です。

第二章『無力な男の儂き幻想』

説明 全十話から二十話で完結する予定の話。

とある事件により東京から京都に首都が移り変わった近未来を生きる科学者は、妹と友人を救うために過去の世界へと旅立ちます。

魑魅魍魎が闊歩する世界に驚愕しながらも妹の手がかりを探す旅を始めることとなります。

この第二章の世界観は、東方を含めた複数の世界観が融合しています。

基本的には作者の趣味で出来ており、学園都市が解体されていたり、ロシア領がZONEになっていたり、犯罪都市ロアナプラが実在してたり、リバティースティータやサンアンドレアス州、シヤドーモセス島があったりと、中々訳が分からない世界になっています。

そんな裏設定込みこみの濃い世界観となっております。

第三章『人間と妖怪の境界』

説明 全十話から二十話で完結する予定の話。

能力の暴走により過去の世界へと飛ばされてしまった少女は、共に飛ばされた友人を探すために一人で過酷な世界を渡り歩く。その旅で少女は何を見て何を思うのか。

第四章『幻想月面戦争』

説明 タイトルのとおり、月面戦争の内容を垂れ流すのみです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2515r/>

東方妖魔伝/黄金練成【Ars Magna】編/

2011年10月3日09時17分発行